序

串島遺跡は，電源開発株式会社の松島火力発電所建設工事に先立ち，昭和51年８月，長崎県教育庁の埋蔵文化財分布調査によって発見されたものであります。

串島は，西彼杵郡大瀬戸町の西方約１kmの海上に浮かぶ松島の北方に隣接し，干潮時には松島より徒渉できる位置に所在しております。

遺跡は，満潮時には，海面下に没するいわゆる海底遺跡であったため，昭和52年７月から８月にかけての約40日間に及ぶ発掘作業は，真夏の災天下，水中ポンプで排水をしながら調査を行うという難作業でありました。

それだけに，今回その成果がこのように立派に取りまとめられ，郷土に対する認識と理解を深めるためのよすがとして，また古代先人の足跡を偲ぶ有意義な文献として，後世末永く活かされることは私の最も喜びとするところであります。

また，今後共文化財の保護につきましては，細心の注意をもって対拠していきたいと考えております。

最後に酷暑にもめげず終始熱心に調査を続けられ貴重な遺産の収集に全力をつくされた長崎県教育庁文化課，長崎大学医学部並びに長崎北高校の関係各位に対し深甚なる謝意を表わすものであります。

昭和55年３月

電源開発株式会社
松島火力建設所所長　中　村　睦　明

序

近年の経済発展に伴い，各地域の開発事業が増加しておりますが，そこにはたえず開発か文化財保護かという，必然的で二律背反する重要な調整課題が介在してまいります。

ここに報告する串島遺跡は，本県西彼杵郡大瀬戸町松島に計画された松島火力発発電所建設に際して事前に発掘調査を実施したもので，この結果，縄文～弥生期にかけての貝塚と，古墳末～奈良期に属する生活址との，時期を異にする２ケ所の遺跡よりなっていることを確認いたしました。このうち，貝塚部分は保存が不可能であったために記録保存の処置をとりましたが，後者の区域につきましては，現状保存の了解を得ることができました。この時期の遺跡は，現在まで当該地附近では他に例をみないものであり，この面では当町の古代史に新たな事実をつけ加えたわけであります。

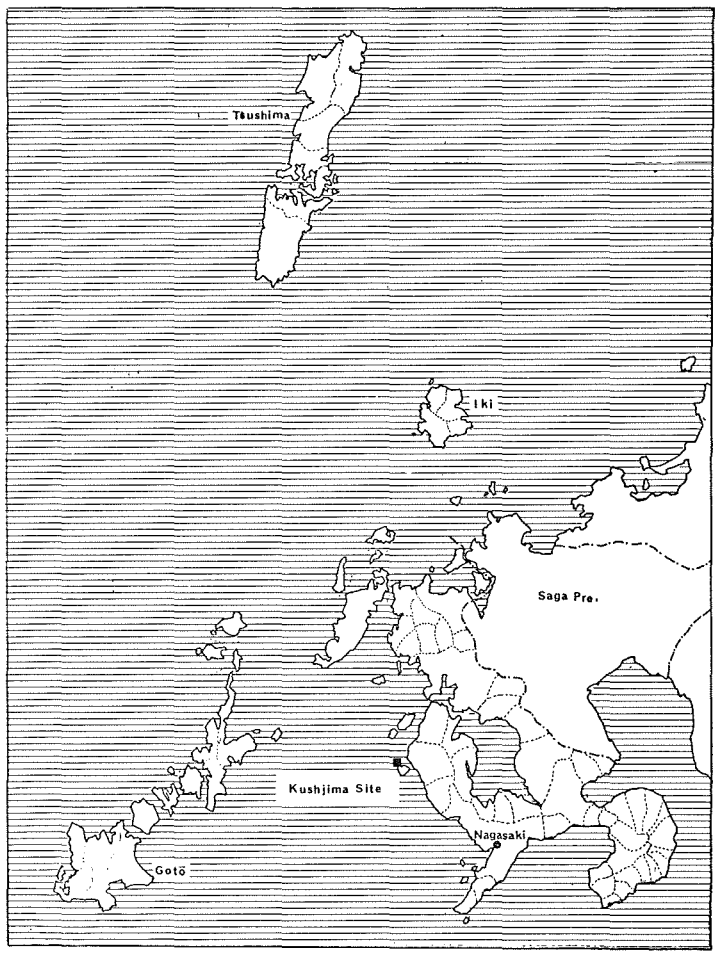
保存について，深い御理解を賜りました電源開発株式会社並びに関係各位に対し，深甚の謝意を表するものであります。

最後に，本書が学術，教育，文化財保護の資料として広く一般の活用に供することができれば望外の幸せであります。

昭和55年３月

長崎県教育長　三　村　長　年

串島遺跡



例　　言

一、本書は長崎県西彼杵郡大瀬戸町に計画された松島火力発電所建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。

二、調査は電源開発株式会社との間に取り交した「発掘調査委託契約」に基づき長崎県文化課が実施した。

三、本書は分担執筆し，各項の執筆者は本文目次の項に記したが，遺物に関しては，土器を宮崎，石器を田川・高野，骨角器を高野が担当した。なお，一部の土器の拓本並びに実測については横山巳貴子の助力を得た。

四、人骨及び動物遺体の解説については，人骨を松下孝幸・分部哲秋，貝種は山本愛三，獣魚骨は木村幾多郎の諸氏よりそれぞれ玉稿を頂戴した。

五、出土遺物中，岩石の鑑定は長崎大学教養学部教授鎌田泰彦氏による。

六、調査時の写真撮影は高野・宮崎が行ったが，本書掲載の遺物写真は人骨を除き，他は宮崎の撮影による。

七、本書の編集は宮崎の助力を得て高野が行った。

八、本書関係遺物は，現在全て長崎県教育委員会が保管の任に当っている。

本　文　目　次

頁　執筆者名

第１章　序　　説

一、調査に至るまで……1（高野　晋司）

二、調査経過……2（　〃　）

三、遺跡の地理的歴史的環境……4（　〃　）

第２章　遺跡の調査

一、貝塚の調査

１．Ｃ・Ｄ区

①　層　　位……11（　〃　）

②　出土土器……12（宮崎　貴夫）

２．Ｃ区

①　層　　位……13（高野　晋司）

②　出土遺物

ａ．土器……17（宮崎　貴夫）

ｂ．石器，礫器……24（高野　晋司）

その他の石器……38（　〃　）

剝片石器……45（田川　肇）

３．Ｎ区

①　層　　位……49（高野　晋司）

②　出土土器……49（宮崎　貴夫）

二、砂丘部の調査

１．Ａ区……51（高野　晋司）

２．Ｂ区……51（　〃　）

３．Ｅ区……51（　〃　）

４．Ｆ区……52（　〃　）

５．Ｇ区……53（　〃　）

６．Ｈ区……54（　〃　）

①　層　　位……54（　〃　）

②　出土土器……54（宮崎　貴夫）

７．Ｊ区……59（高野　晋司）

①　層　　位……59（　〃　）

８．Ｋ区……62（　〃　）

① 層　　位……62（高野　晋司）
9．L区……63（　〃　）
① 層　　位……63（　〃　）
② 出土土器……63（宮崎　貴夫）
③ 獣魚骨出土状況……72（高野　晋司）
④ 骨角器……72（　〃　）
10．M区……78（　〃　）
① 層位と遺構……78（　〃　）
② 出土土器……78（宮崎　貴夫）
11．その他の遺物……81（横山巳貴子）
三、第2地点の調査
1．遺物出土状況……81（高野　晋司）
2．出土遺物……82（宮崎　貴夫）
第3章　考　　察
一、礫器について……83（高野　晋司）
二、出土土器について……94（宮崎　貴夫）
三、まとめ……104（高野　晋司）
付、土器観察表……107（宮崎　貴夫）
附章　人骨及び動物遺体
一、串島遺跡出土の人骨……133（松下　孝幸）
（分部　哲秋）
二、串島貝塚の貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元……137（山本　愛三）
三、串島遺跡出土の動物遺存体……147（木村幾多郎）

挿 図 目 次

頁

Fig. 1　遺跡位置図……5
Fig. 2　遺跡附近図（第１座標系）……6
Fig. 3　調査区配置図……9
Fig. 4　C，D区土層壁面図（１／40）……12
Fig. 5　C，D区出土土器実測図①（１／４）……12
Fig. 6　〃　〃　②（１／３）……13
Fig. 7　C，D区出土叩き目文・布目痕土師器（１／２）……13
Fig. 8　貝層範囲推定図（宮崎作製）……14
Fig. 9　C区土層壁面図（１／60）……15
Fig.10　C区出土土器実測図①（１／３）……18
Fig.11　〃　〃　②（　〃　）……19
Fig.12　〃　〃　③（１／４）……20
Fig.13　〃　〃　④（１／３）……20
Fig.14　〃　〃　⑤（１／４）……23
Fig.15　〃　〃　⑥（１／３）……23
Fig.16　Ⅰ区出土土器実測図（１／３）……24
Fig.17　礫器実測図①Ⅰａ類（１／３）……25
Fig.18　〃　②Ⅰｂ類（１／３）……27
Fig.19　〃　③Ⅱａ類（１／３）……31
Fig.20　〃　④Ⅱｂ類（１／３）……35
Fig.21　〃　⑤Ⅱｂ類（１／３）……37
Fig.22　〃　⑥Ⅲ・Ⅳ類（１／３）……39
Fig.23　〃　⑦（１／３）……41
Fig.24　石器実測図（１／３）……42
Fig.25　〃　（１／３）……44
Fig.26　〃　（１／２）……45
Fig.27　剥片石器　（１／２）……46
Fig.28　剥片石器　（１／２）……47
Fig.29　N区土層壁面図（１／60）……49
Fig.30　N区出土土器実測図①（１／４）……49
Fig.31　〃　〃　②（１／３）……50

Fig.32　N区出土叩き目文・布目痕土師器（1 / 2）……50
Fig.33　A区附近出土土器実測図（1 / 3）……51
Fig.34　E区出土土器実測図（1 / 3）……52
Fig.35　F区出土土器実測図（1 / 3）……52
Fig.36　F区出土叩き目文・布目痕土師器（1 / 2）……52
Fig.37　G区出土土器実測図（1 / 3）……53
Fig.38　G区出土須恵器叩き目文拓影（1 / 2）……54
Fig.39　H区土層壁面図（1 /60）……55
Fig.40　H区出土土器実測図①（1 / 3）……56
Fig.41　H区出土土器実測図②（1 / 3）……57
Fig.42　H区出土須恵器叩き目文拓影（1 / 2）……58
Fig.43　H区出土叩き目文・布目痕土師器（1 / 2）……59
Fig.44　J区土層壁面図（1 /60）……60
Fig.45　J区出土土器実測図（1 / 3）……60
Fig.46　J区出土須恵器叩き目文拓影（1 / 2）……61
Fig.47　J区出土叩き目文・布目痕土師器（1 / 2）……62
Fig.48　K区土層壁面図（1 /60）……62
Fig.49　K区出土土器実測図（1 / 3）……63
Fig.50　L区土層壁面図（1 /60）……63
Fig.51　L区遺物分布図①土器（1 /40）……65
Fig.52　L区出土土器実測図①（1 / 3）……67
Fig.53　〃　〃　②（1 / 3）……68
Fig.54　〃　〃　③（1 / 4）……69
Fig.55　L区出土須恵器叩き目文拓影（1 / 2）……70
Fig.56　L区出土叩き目文・布目痕土師器（1 / 2）……71
Fig.57　L区出土土器組成グラフ……71
Fig.58　L区遺物分布図②獣魚骨（1 /40）……73
Fig.59　骨角器実測図①（1/ 2）……75
Fig.60　骨角器実測図②（1 / 2）……76
Fig.61　M区遺構出土状況（1 /40）……78
Fig.62　M区出土土器実測図（1 / 3）……79
Fig.63　M区出土須恵器叩き目文拓影（1 / 2）……79
Fig.64　古銭拓影（2 / 3）……81
Fig.65　第2地点出土土器実測図（1 / 3）……82

Fig.66　礫器出土遺跡分布図……84
Fig.67　時期別礫器出土遺跡数……86
Fig.68　礫器計測図……89
Fig.69　Ⅰ類礫器計測グラフ……89
Fig.70　Ⅱ類礫器計測グラフ……89
Fig.71　礫器完形残存率グラフ……90
Fig.72　砂丘部出土土器組成グラフ……95
Fig.73　砂丘部須恵器・土師器編年表……99
Fig.74　串島遺跡範囲図…… 104
Fig.75　串島貝塚（長崎県西彼杵郡大瀬戸町松島内郷）…… 137
Fig.76　串島貝塚周辺図…… 137
Fig.77　串島貝塚実測図（1／500）…… 138
Fig.78　C－11区壁面図（高野・宮崎〔1980〕による）…… 139
Fig.79　串島周辺海域図…… 146

表　目　次

頁

Tab. 1　周辺遺跡地名表…… 7
Tab. 2　貝塚部各地区・層別出土土器数量表…… 21
Tab. 3　L区出土土器接合関係表…… 64
Tab. 4　骨角器計測表…… 72
Tab. 5　砂丘部出土土器数量表…… 80
Tab. 6　古銭計測表…… 81
Tab. 7　礫器出土地名表…… 85
Tab. 8　礫器計測表…… 87
Tab. 9　礫器計測平均値…… 89
Tab.10　カマド・叩き目文・布目痕土器出土一覧表…… 101
Tab.11　橈骨計測値…… 135
Tab.12　串島貝塚の貝類を中心とする分析表…… 141
Tab.13　串島海岸の現生貝を中心とする常在度表…… 142
Tab.14　串島貝塚で出土するが現在の串島海域で未確認の貝…… 143
Tab.15　現在串島周辺で発見されるが串島貝塚で未確認の貝…… 144
Tab.16　生態群より見た遺跡と現生の貝の比較…… 144
Tab.17　マダイ地区別出土個体数…… 148
Tab.18　マハタ地区別出土個体数…… 148
Tab.19　イシダイ地区別出土個体数…… 148
Tab.20　アカウミガメ地区別出土個体数…… 149
Tab.21　イノシシ地区別出土個体数…… 150
Tab.22　イノシシ歯牙…… 151
Tab.23　シカ地区別出土個体数…… 151
Tab.24　シカ歯牙…… 151

図　版　目　次

PL. 1　串島遠景
PL. 2　串島遺跡近景
PL. 3　干潮時の遺跡C区・満潮時の遺跡
PL. 4　C・D区調査状況（第1次調査）
PL. 5　C・D区西壁・C・D区遺物出土状況（第1次調査）
PL. 6　C・D区遺物出土状況（第1次調査）
PL. 7　A区調査状況・H区西壁（第1次調査）
PL. 8　調査風景
PL. 9　調査風景
PL.10　C－1区北壁・C－3区北壁
PL.11　遺物出土状況（C－1区Ⅳ B層）
PL.12　C－5区北壁・C－4区西壁
PL.13　C－6区北壁・遺物出土状況（C－6区Ⅳ B層）
PL.14　遺物出土状況（C－11区）・遺物出土状況（C－10区Ⅳ A層）
PL.15　調査状況（C－11区）・調査状況（N区）
PL.16　L区遺物出土状況・L区西壁
PL.17　獣骨出土状況（L区）・骨角器出土状況（L区）
PL.18　M区炉址・M区西壁
PL.19　炉址出土状況・炉址附近の遺物
PL.20　第2地点遺物出土状況
PL.21　礫器①（1／2）
PL.22　礫器②（1／2）
PL.23　礫器③（1／2）
PL.24　礫器④（1／2）
PL.25　礫器⑤（1／2）
PL.26　礫器⑥（1／2）
PL.27　(上)礫器⑦（下)その他の石器（1／2）
PL.28　その他の石器（1／2）・石鏃（1／1）
PL.29　剥片石器（1／2）
PL.30　C・D区出土土器①（1／2）
PL.31　C・D区出土土器②（1／1）
PL.32　C区出土土器①
PL.33　C区出土土器②
PL.34　C区出土土器③（1／2）

PL.35　N区出土土器（1／2）
PL.36　Ⅰ区・A区附近出土土器（1／2）
PL.37　E・F・G区出土土器
PL.38　H・K区出土土器①
PL.39　H区出土土器②（1／2）
PL.40　H区出土土器③（1／1）
PL.41　H区出土土器④（1／1）
PL.42　J区出土土器
PL.43　L区出土土器①（1／3）
PL.44　L区出土土器②（1／3）
PL.45　L区出土土器③
PL.46　L区出土土器④（1／1）
PL.47　M区出土土器
PL.48　須恵器叩き目文（G区)(1／1）
PL.49　須恵器叩き目文（J区①)(1／1）
PL.50　須恵器叩き目文（J区②)(1／1）
PL.51　須恵器叩き目文（H区①)(1／1）
PL.52　須恵器叩き目文（H区②)(1／1）
PL.53　須恵器叩き目文（L区①)(1／1）
PL.54　須恵器叩き目文（L区②)(1／1）
PL.55　古銭(1／1)，第2地点出土土器（1／2）
PL.56　骨角器①（1／2）
PL.57　骨角器②（1／1）
PL.58　人　　骨
PL.59　貝類①
PL.60　貝類②
PL.61　貝類③
PL.62　貝類④
PL.63　貝類⑤
PL.64　魚骨①
PL.65　ウミガメ
PL.66　海獣骨②
PL.67　獣骨①
PL.68　獣骨②
PL.69　建設が進む火力発電所・保存された砂丘部

第1章　序　　説

一、調査に至るまで

電源開発株式会社は，かねてより本県西彼杵郡大瀬戸町松島に，石炭燃焼による大規模な火力発電所建設の構想を持っていたが，昭和51年６月，その旨の具体的な計画が県企画振興課を通じてなされることになった。

計画の内容は，松島と串島との間に発電所を設置し，ここで作る100万Kwの電力を佐賀県伊万里市まで総延長65kmにわたって送電するというものであった。

当該計画地には明確な周知の遺跡は知られていなかったが，計画がかなり広域に及ぶ事から，とりあえず文化課としては発電所建設用地，建設に附随して新たに開発される地区，及び送電線の鉄塔敷部分について詳細な分布調査を実施して，文化財の有無を確認することにした。

分布調査は昭和51年８月酷暑の中６日間にわたって実施した。

この内，特に急峻な山中に建設を予定された数十ケ所の鉄塔敷はそれぞれの１スパンが谷筋をへだてていた為その移動には困難を極めた。

ともあれ，調査の結果，まず，発電所本体設置区域の海岸部の転礫の間より人為的剝離の痕跡を持つ玄武岩の剝片と縄文中期～弥生前期の土器数十点が採集され，当該地及びその周囲に遺跡がある可能性が指摘された。特に米俵大の転礫が多く散乱・集積する部分は，満潮時には海面下に没する所謂海底遺跡[註1]の様相を示していた。

次に送電鉄塔建設予定地内に，黒曜石の原産地を含む場所が確認された。南面するなだらかな傾斜地で人頭大から拳大の黒曜石が多く散乱し，明瞭な黒曜石原産地として認識すること[註2]にした。

この他，数ケ所に於いて石器剝片の散布が見られたが，立地条件，遺物の出土状況，土層の堆積，露出状況等により，何れも遺物包蔵地として認められなかった。

調査結果は上述の趣旨で関係各機関に文書回答を行い，以後，遺跡の保存について協議がもたれることになった。

なお，以下の文中で呼称する遺跡とは串島遺跡のみに限定する。

註１　西北九州に多く，特に縄文前期曽畑式土器を出土する遺跡に多い。

註２　原石散布面積は凡そ６万m^2に及ぶものと思われる。後日，設計変更不可能な40m^2の建物敷地について昭和52年６月緊急調査を行い，縄文晩期末の土器片と共に多くの原石及び石核，石器剝片を発掘した。その報文については別に用意があるので，本報告書では触れない。

二、調査経過

遺跡の取り扱いについての，数回の会社側との話し合いの中で，その判断資料となるべき遺跡の範囲，性格をつかむ必要が生じてきた。

この為，それらの資料を得るべく試掘調査を実施し，しかる後，改めて協議を行うことにした。調査は昭和51年10月１日～10月18日まで行われた。(第１次調査)

調査は主に砂丘部分を中心としＡ－Ｉ区まで８ケ所にトレンチを設定し精査を行った。この内Ｃ・Ｄ区，Ｉ区は満潮時には海面下に没し（Fig. 3），海水の浸入で壁の崩壊が早く難渋した。

調査の内容については各区の中で後述するが①砂丘部の東側部分（Ａ・Ｂトレンチ）からは遺物の出土は全く見られないが，西側の標高4～5m以上の区域からは多量の須恵器・土師器・獣魚骨が出土する。そしてその範囲は約1,800㎡程度に拡がる。②海面下，標高３m以下については，貝塚の形成がみられ，その時期は縄文～弥生にまたがる。又，その面積は約300㎡程度と思われる。以上，時期の異なる２つの遺跡の存在が確認される事となった。

早速この資料をもとに再度保存の為の協議がもたれ，その結果①砂丘部分については若干の設計変更を行えば現状保存が可能であるのでそのように処置する。②しかし，貝塚部分は，発電所本体の設置中心区域にあたり，しかも地質的要因からその移動場所が他に無い為設計変更は不可能である。との判断が会社から示された。このような経過を経て，貝塚部分については，本格調査の実施が余儀なくされる事となった。

本格調査はその費用を電源開発株式会社が負担する事となり文化課との間に300万円の委託契約書が交され，翌年昭和52年７月18日～８月25日まで実施した。(第２次調査)

この内容については後述するが，調査中，別の地点（第２地点と呼ぶ）からも土器片の出土があり，合わせて記録処置を取った。

以上，発電所計画の協議から，調査に至り，更に本報文をまとめるまで長い時間と多くの関係者の深い善意と理解があった。再度記して衷心より御礼を申しあげたい。

調査関係者

第１次調査

調査総括	北島　靖	長崎県教育委員会教育長	
	辻村一義	長崎県教育庁文化課課長	
	田中幸義	同	課長補佐
	田上哲夫	同	副参事兼調査係長
	川島一夫	同	総務係長
	杉内純一	同	主事
調査担当	田川　肇	同	文化財保護主事

調査担当　高野晋司　　長崎県教育庁文化課文化財保護主事

第２次調査

調査総括　三村長年　　長崎県教育委員会教育長

平野宏太　　長崎県教育庁文化課課長

塩谷安則　　同　　課長補佐

田上哲夫　　同　　副参事兼調査係長

川島一夫　　同　　総務係長

城田美津子　　同　　主事

前田光次　　同　　同

調査担当　高野晋司　　同　　文化財保護主事

宮崎貴夫　　同　　同

調査指導　坂田邦洋　　長崎大学医学部助手（現別府大学助教授）

山本愛三　　長崎県立北高等学校教諭

調査協力　長崎県企業振興課・大瀬戸町教育委員会

近衛昭賢　　電源開発株式会社松島立地事務所長

中村睦明　　同　　松島火力建設所長

加藤　格　　同　　用地課長

尾身幹治　　同　　同

田中雄二　　同　　同

吉塚　剛　　同　　同課長代理

土居通彦　　同　　同

大森元紀　　同　　用地課

吉野　隆　　同　　同

宇佐見朱悟　　同　　同

立野智巳　　同　　同

鷲田多喜男　　同　　同

福島　宏　　同　　同

浦口てい子　　同　　同

川下アキヱ　　同　　同

津田俊幸　　同　　同

他電源開発株式会社の用地課及び技術課員

内業協力　永松実，中村和正，町田利幸，村川逸朗，中田敦之，横山巳貴子

整理内業　溝口美津代，魚下雅子，江川利子，望月泰子

三、遺跡及びその周辺の地理的歴史的環境

西海の角力灘に浮かぶ串島は，松島の北西部に隣接し，好天時には西方海上遥か五島列島を遠望する気候温暖な景勝地である。

島は，東西約550ｍ，南北約300ｍ，周囲僅か1.8㎞の小島で，最高所60mの小丘を中心とし，全体的に海蝕による切りたった断崖が連なるが，僅かに波，風の影響の少ない南側部分に小さな砂丘が発達している。砂丘部分は標高４～７ｍ，広さは約3,000㎡程度であるがこの区以外に人間が住めそうな場所は島内には無い。湧水は２ケ所知られ，内１ケ所はこの砂丘部近くに在る。

島の基盤は古第３紀漸新世に属する砂岩と頁岩が互層となっているらしく[註1]，島内至る所で砂岩の露出がみられる。

又，一部に石炭層もあるらしいが，規模が小さい為か，今まで殆ど採掘された事実は無い。隣接の松島と合わせても抗道の無い唯一の地区であるらしい。なお，遺跡の北方30～40m付近には，北西－南東に延びる南側落ちの落差61mの干切断層が確認されている。

潮位は，大潮平均高潮面が＋2.87m，大潮平均低潮面は＋0.45m，平均水面は1.66m[註2]である。従って，表面が標高２～2.5ｍに位置する貝塚部は満潮時にはその表土までが確実に海面下に没し，干潮時においても発掘面は常時海水の浸入に侵される事になる。又，松島と串島の距離は直線にして僅か80m前後，干潮時には徒歩でその往来は容易であり，かつては１つのつながった島であったものと思われる。

松島と串島の歴史はそのまま石炭の歴史でもある。前述の如く，串島自体には計画的な採掘の事実は無いが，それでも天明六年（1781年）始めて串島が調査され，石炭が掘り出されたとある[註3]。

その後，松島は石炭の島として知られ，その産出量も漸次増え，安政３年（1856）には売上数量6,178万斤，売上金額77,225貫文との隆盛を迎える。遺跡表層から４枚の寛永通宝が出土しているが往時のものであろう。

以後，幾多の盛衰を経て最近に至るまで採炭が続けられたが，現在は全て廃抗と帰している。

周辺に目を転じよう。

現在，附近で知られている遺跡もしくはその参考地は，串島を含め21ケ所にのぼるが，時期・内容共に明確なのは，ある程度輪郭が判っている後述の石鍋工房址を除くと皆無に等しい。僅かに寺の下遺跡で縄文～弥生の土器片が若干出土しているらしいが[註4]，これとて実体というには程遠く，又他は全て散布地として把握をされているにすぎない（Tab.１）。

松島を含む大瀬戸町は，最近まで極めて交通の便にめぐまれず陸の孤島と呼ばれていた程である。これは西彼杵半島を縦断する険粗な山嶺が著るしい交通の障壁になっている為であり，古代にあってはその感はひとしおであったろうと思われる。又，西彼杵半島そのものが他の地

Fig. 1　遺跡位置図

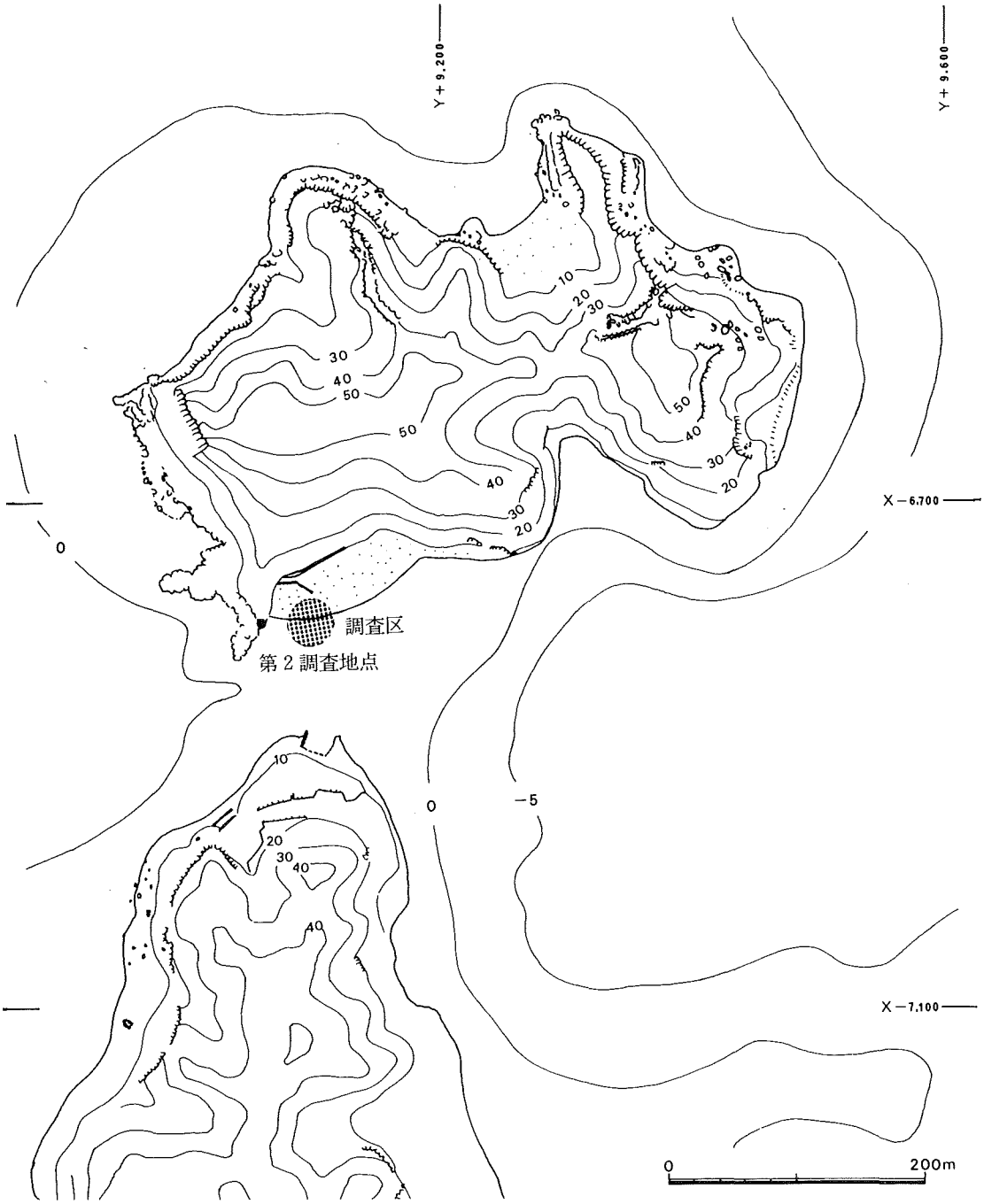


Fig. 2　遺跡附近図（第Ⅰ座標系）

Tab. 1　周辺遺跡地名表

図番号	遺跡名	所在地	時期	遺跡の種類
1	串島	西彼杵郡大瀬戸町松島内郷串島	縄文中～奈良	貝塚・包蔵地
2	野崎	〃〃〃野崎	不明	散布地
3	瀬戸畑	〃〃〃瀬戸畑	不明	散布地
4	広平	〃〃多比良外郷広平	不明	散布地
5	奉還	〃〃奉還	不明	散布地
6	平倉	〃〃多比良外郷平倉	不明	散布地
7	西別当	〃〃瀬戸樫浦郷西別当	不明	散布地
8	夏焼	〃〃瀬戸板浦郷夏焼	不明	散布地
9	西浜	〃〃瀬戸西浜郷	不明	砂丘遺跡
10	提脇	〃〃〃提脇	不明	散布地
11	大屋岩	〃〃〃大屋岩	平安～	石鍋工房址
12	ホゲット	〃〃奥浦郷ホゲット	平安～	石鍋工房址
13	岩崎	〃〃雪浦岩崎	不明	散布地
14	雪の浦	〃〃雪浦上郷小田	不明	貝塚
15	寺の下	〃〃〃寺の下	縄文後	包蔵地
16	小松郷	〃〃〃小松郷	不明	散布地
17	メヒトツボ	〃〃河通郷メヒトツボ	平安～	石鍋工房址
18	河通	〃〃雪浦可通郷	不明	洞窟
19	駄馬	〃〃雪浦可通郷	平安～	石鍋工房址
20	万助山	〃〃久良木郷万助山	平安～	石鍋工房址
21	飯盛牧場	〃〃飯盛牧場内	平安～	石鍋工房址

域とは隔絶された位置にある事もあって，文献上，和名抄の郷名にもその名は見当らず，延喜式の駅路からも遠くかけ離れている事実は，少なく共平安中頃までは，この地域はまさしく辺境の地であったろうと思われるのである。

このような状況にあって，特筆すべきは滑石製石鍋工房址の存在である。石鍋の素材である滑石は，長崎半島から西彼杵半島までその中央部を南北に細長く延びる山中の蛇紋岩中に産し，至る所にその露頭がみられるが，大瀬戸町では工房址として7ヶ所[註5]が確認されている。周知の如く，滑石の利用は縄文前期の曽畑式土器や，中期の阿高系土器の胎土に粉末として多く含まれているのを初現とし，以後弥生，古墳，歴史時代を通じて装身具，祭祀具等その他使用範囲は多岐にわたっている。

石鍋そのものの性格や時期などについてはすでに先学の研究によって輪郭が明らかにされているので[註6]，詳細には触れないが，文中でも一部述べられている如く，工房址で削りとられた半製品は，雪の浦川及びその支流を利用して下流に搬出され更に海上路によって需要地へと運搬された事は確実であろう。そういう意識で追っていけば将来雪の浦川下流域で，石鍋の出荷港たるべき遺跡の存在が発見されるかも知れない。

串島遺跡でも1片の石鍋片と思われる滑石製品が出土した。表土層からの出土でその時期を云々する事は出来ないが，産地を間近に控えた位置を考慮すれば何ら不思議はない。

註1　以下の地質，潮位の項は，電源開発株式会社の環境に関する調査資料を参考とした。

註2　五島列島・福江湾ではその平均は1,598ｍ，東京湾では1.62mであり（坂田邦洋1973「江湖貝塚」）それらの値よりそれぞれ6cm，4cm高いことになる。

註3　松島炭鉱株式会社　1962「五十年史」

註4　正林護氏教示，遺物は現在長崎大学医学部で保管している。

註5　正林護氏教示

註6　下川達彌1973「滑石製石鍋考」長崎県立美術博物館　研究紀要第2号他

中央が串島

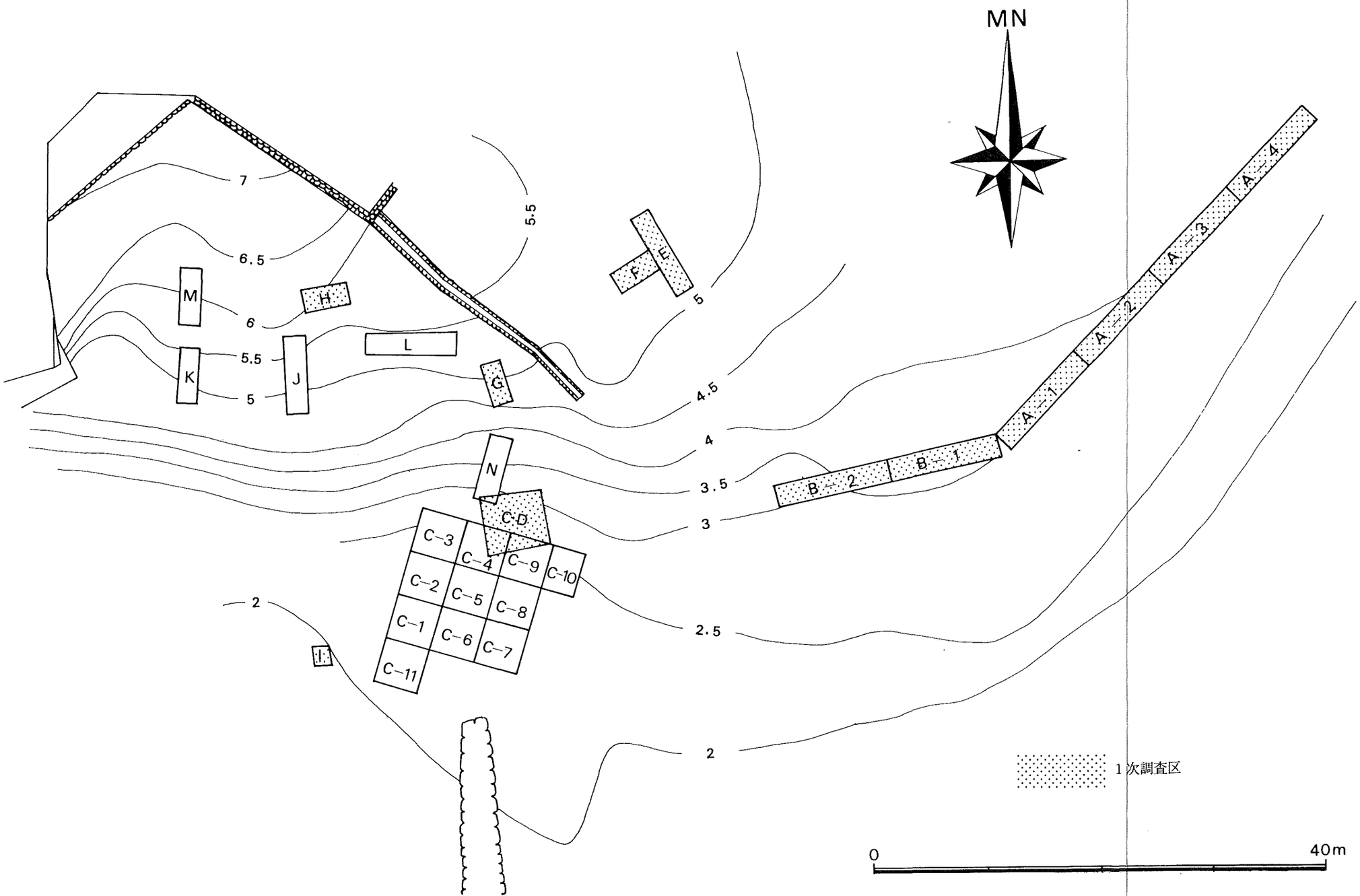

MN
7
6.5
6
5.5
5
4.5
4
3.5
3
2.5
2
M
H
K
J
L
G
F
E
N
C-D
C-3
C-4
C-9
C-10
C-2
C-5
C-8
C-1
C-6
C-7
C-11
I
A-1
A-2
A-3
A-4
B-2
B-1
1次調査区
0
40m

Fig. 3　調査区配置図

第2章　遺跡の調査

一、貝塚の調査

発掘した4区の貝塚部分の内，C・D区とI区は第1次の試掘調査時に，C区とN区は第2次に実施したものである。第1次調査のC・D区と称したものは当初のCトレンチ・Dトレンチと別々に隣接して掘っていたものが，海水の浸入で壁が崩壊しその区別がつかなくなった為である(Fig. 3)。I区は，貝層の有無を確める為掘った1㎡足らずの小試掘壙で深度も30cm程度しか掘っていない。ここでは破砕された混貝砂層(?)から縄文後期の土器片を2片採集した(Fig. 16)。

C区はまず12m平方の大きなグリッドを設定し，その中をそれぞれ4m平方で区切り，南西の方から北西へC－1～C－3と進み千鳥式に区の呼称を行った。後調査の進展に合わせ，C－10，C－11を（Fig. 3）更に貝塚の上限（北限）をみるべく，N区を追加設定した。

貝塚部には調査経過でも述べた如く，米俵大の転礫が散乱，第1次調査ではその除去に大変な労力を要したが，第2次調査では事前に会社側の好意によって400㎡程度の発掘空間をあけてもらい，更にその周囲には土砂，及び海水流入防止用の土嚢まで築いてもらった。

このような中で調査は開始されたが，満潮時には貝塚部の調査は勿論不可能であった。ある程度潮が引いた時から，又，ある程度潮が満ちてくるまで1日にして平均3～4時間が作業の限度であり，その時間帯はさながら戦場と化した。又，干潮時であっても掘り下げると同時に海水の浸入が始まり，その完全なる排水は無理であった。最低位のC－11ⅣB層下面のレベルは＋80cmで大潮平均低潮面の＋45cmよりは若干高いがそれにしても海水の浸入に伴う壁面の崩壊は早く，かろうじて図面をとるのがせい一杯であった。この為層位の観察と写真撮影の十分な時間が無い結果におわってしまった。かえすがえすも残念である。

以下，各調査区の説明を行いたい。

1．C・D区（Fig. 3）

① 層位（Fig. 4）

地表面は全体的に北→南へ傾斜する。そして北側ほど背後に砂丘を控える為，その流れ込みによる砂層の堆積は厚い。しかし貝層上面レベルはほぼフラットである。地表下約70cm程度でⅡ層混貝砂層に至り，更にその下にⅣB層の混砂貝層へと続く。この下には無遺物層のⅤ層淡灰色砂層があらわれるがその上面レベルは約＋60cm前後である。

遺物はI層は別として主にⅡ，ⅣB層から出土し，弥生前期の土器が圧倒的である。しかし最下層のⅣB層から土師器が2片出土している。調査時の流れ込みであろう。

② 出土土器

(Fig. 5～7, PL.30～31)

出土土器は，Ⅰ，Ⅱ，ⅣB層から出土し，その点数はTab.2に示す。このうち実測図化できたのは19点である。

縄文土器 (Fig. 6—⑤)

椀状の精製小形鉢と思われる。横位のヘラミガキで研磨される。縄文後期後半に属するものであろう。

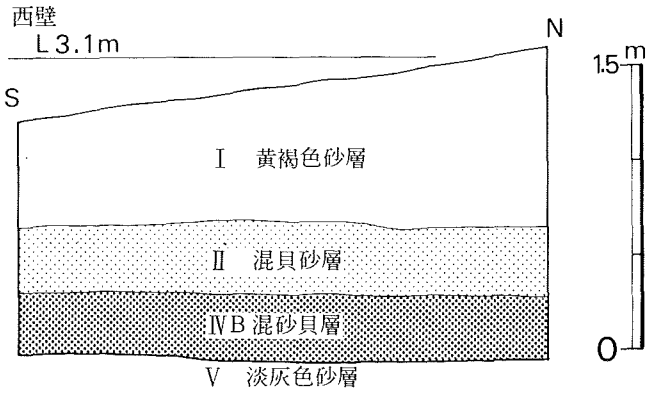


Fig. 4 C・D区土層壁面図 (1/40)

弥生土器 (Fig. 5, 6—⑥～⑪)

Fig. 5—③, 6—⑦は前期板付Ⅱ式で，⑦は無頸壺状の鉢か。④⑥⑨⑪は中期初頭頃，②⑪は中期前半頃であろう。①⑧は後期。

土師器 (Fig. 6—⑫⑬, 7)

⑫は甕の把手。⑬はやや厚味もつ盌で，金雲母を多く混在する。Fig. 7—①～③は叩きを有する小形甕片で，①②は細かな格子目叩き，③はナデ消す。内面は②③が細かな平行条線の当て板痕，①はナデ消している。④は内面に極細の布目痕を有する小形甕片で，外面はナデ仕上げか。

須恵器 (Fig. 6—⑭⑮)

⑭は有高台杯で，高台は小さくふんばる。⑮は長胴になる壺の底部片。

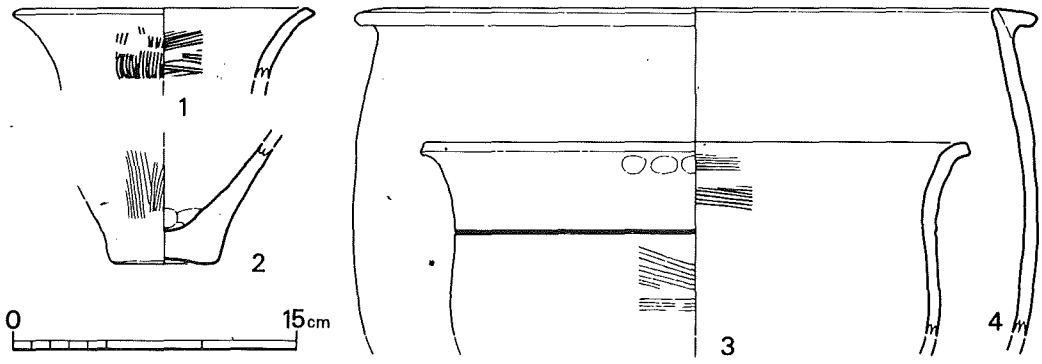


Fig. 5 C・D区出土土器実測図① (1/4)

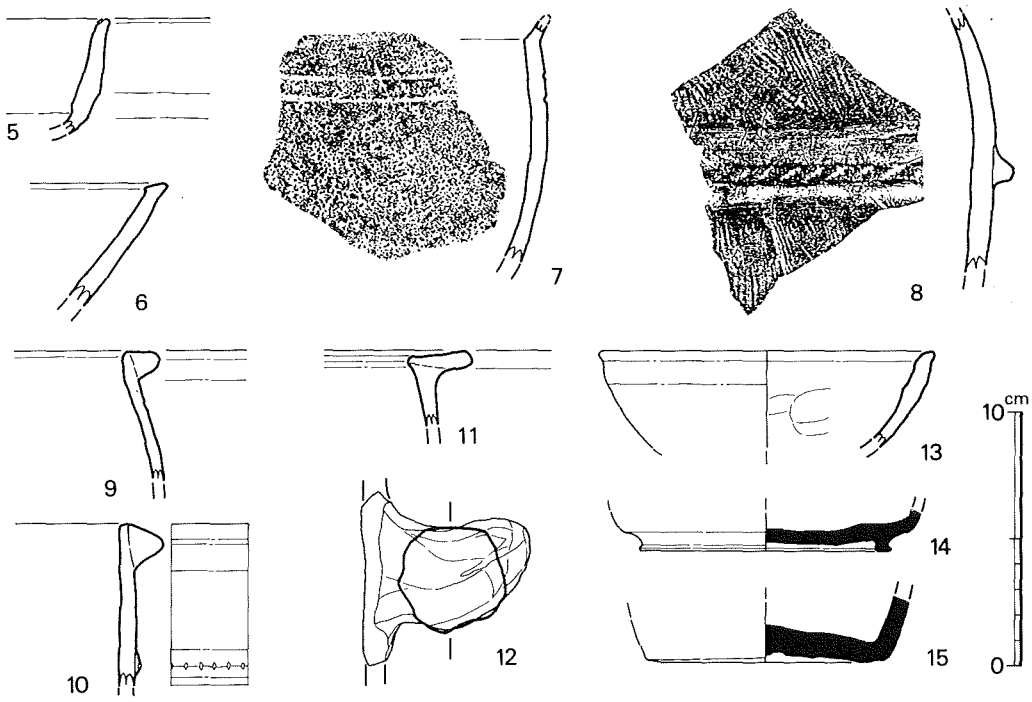


Fig. 6　C・D区出土土器実測図②（1/3）

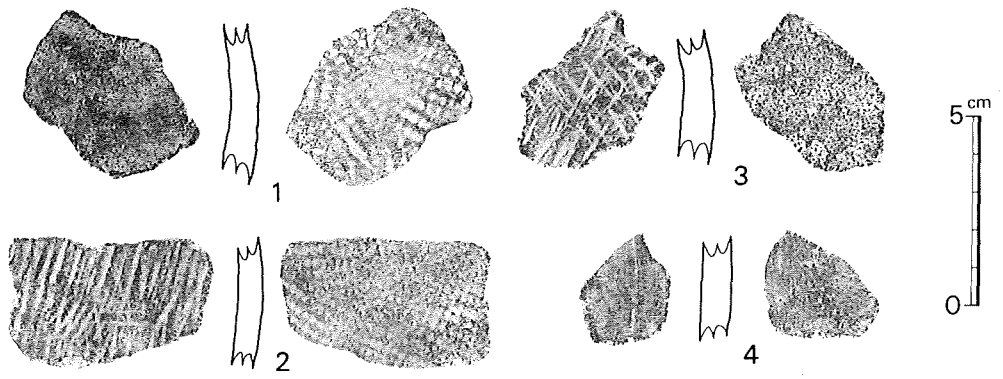


Fig. 7　C・D区出土叩き目文・布目痕土師器（1/2）

2．C区（Fig. 3）

①　層位（Fig. 9）

貝塚地表面の南北は北→南へ傾斜する事は先述したとおりでありが東西は大旨平坦である。一方貝層は南北・東西とも大概平坦であり僅かに南側が低くなっているにすぎない。

層位はⅠ～Ⅳ層に分かれⅤ層の淡灰色砂層にはすでに遺物は含まれない。この内，Ⅱ層とⅣ層はそれぞれⅡA・ⅡB・ⅣA・ⅥB層とに分けられるがこれは整理の段階で矛盾を避ける為につけた呼称である。掘り上げた区の壁は漸次崩壊していく事と，又壁面実測そのものが壁面

崩壊を気にしながらのものであった為，各区相互の層位の比較が現場で容易に出来なかった事による弊害である。しかし，大旨層序は上述の如く大きくⅣ層に分かれる。そして各層序の広がりはFig. 8 の如く平面的にとらえられる。つまり，表土のⅠ層は別として，Ⅱ層は貝塚の大部分に広がりを見せるが，Ⅲ層はほゞ西半分に限定される。

同時にこのレベルでは東半分にⅣA層があらわれる。そして最下層のⅣB層は貝塚の西半分を覆うものとみて大過あるまい（Fig. 8）。

なお，このC区の各層の出土貝類を任意抽出してC－14の測定を日本アイソトープ協会に委託した結果下記の値を得た。

N－3549　C－1 ⅣBアワビ　2950±80yBP（2860±80yBP）
N－3550　C－1 ⅣBアワビ　2950±85yBP（2900±80yBP）
N－3551　C－7 Ⅱハマグリ　2650±90yBP（2570±85yBP）
N－3552　C－11 ⅣBアワビ　2610±80yBP（2530±80yBP）

測定資料は，C－1区ⅣB層2個C－7区Ⅱ層そしてC－11区ⅣB層のもので，これでみると何れも縄文晩期に属する[註1]事になる。

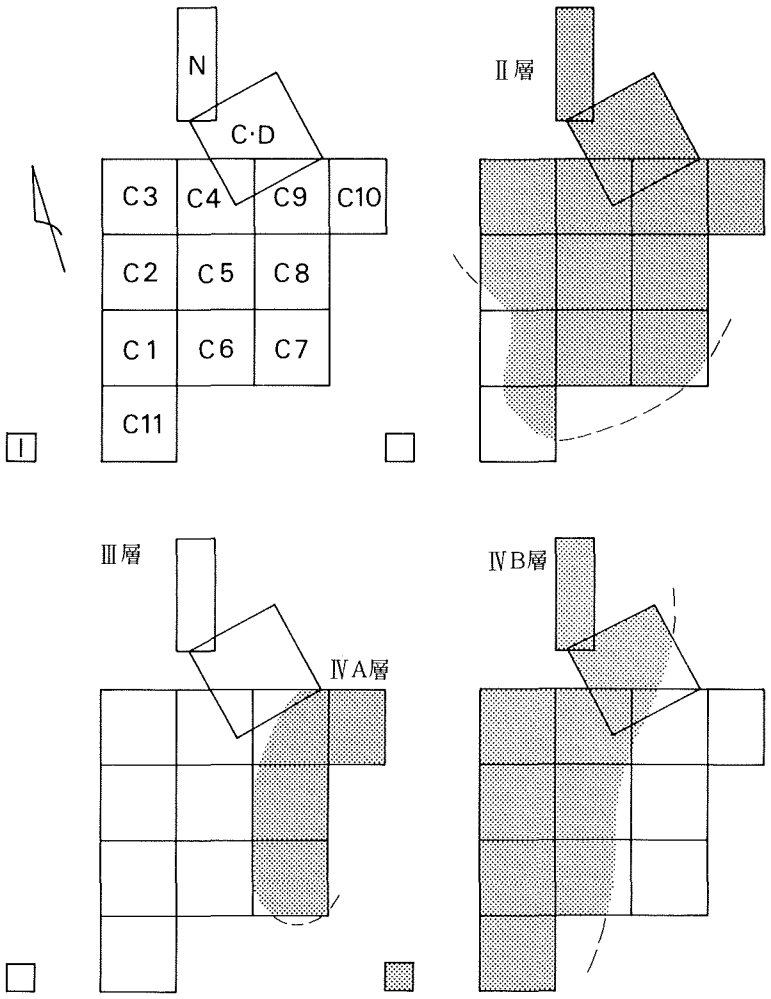


Fig. 8　貝層範囲推定図（宮崎製作）

註1　坂田邦洋　1979「14C年代からみた九州地方縄文時代の編年」別付大学考古学研究室報告第2冊。

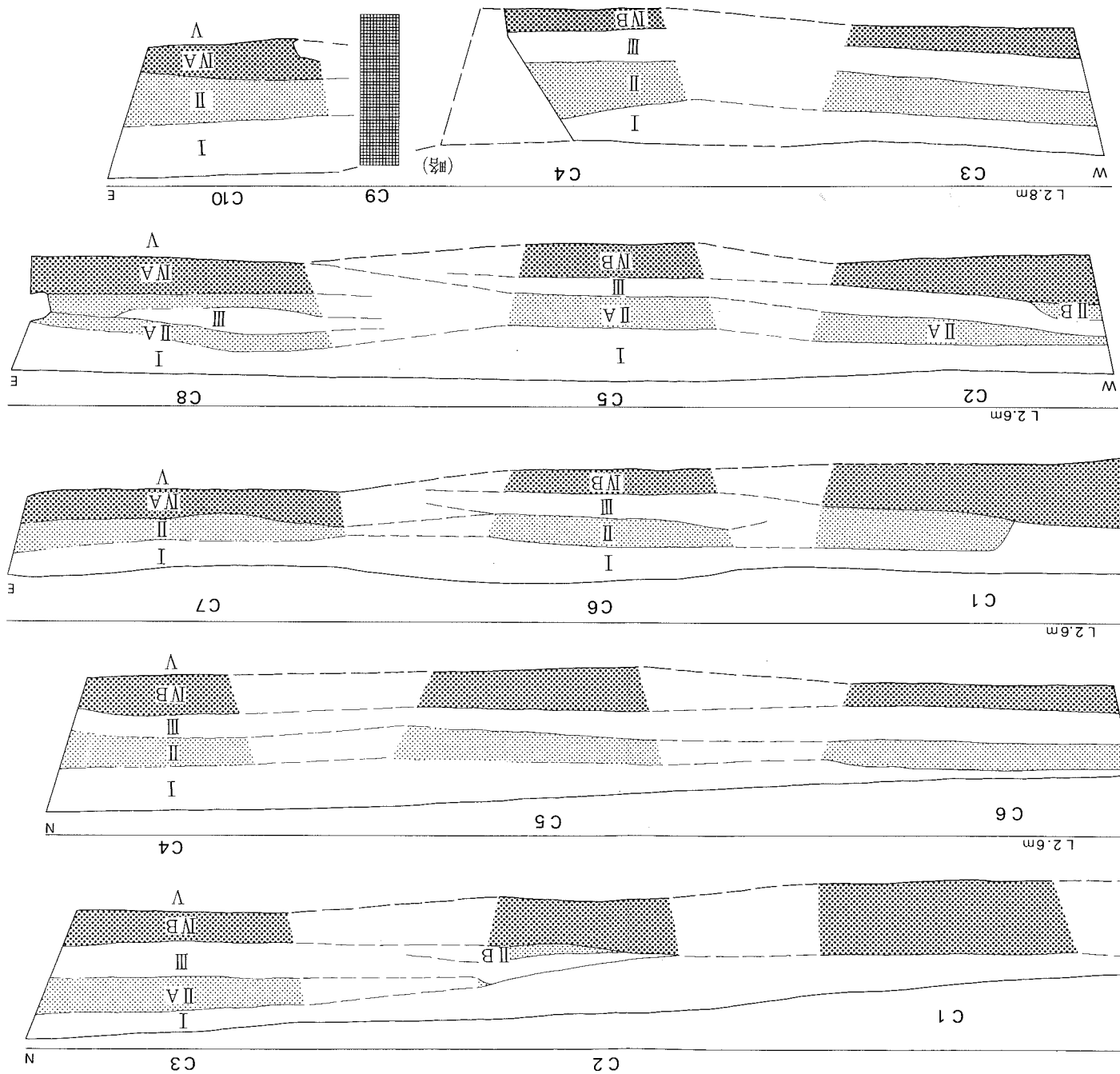


Fig. 9 C区出土層壁面図 (1/60)

② 出土遺物

（a）出土土器（Fig.10～15，PL.32～34）

570点出土し，その内訳はTab.2に各グリット層別に示した。それによれば，貝層であるⅣ層に須恵器・土師器が伴出しているが，海底貝塚であるため調査時混入の可能性が強い。

縄文土器（Fig.10～13）

縄文土器は，ⅣB層を中心として，とくにC1・11区に集中してみられる。ⅣB層の下部がその主体となる包含層と考えたい。器形をほぼ復原できるのは1個体のみで，他は破片資料である。特徴からⅠ～Ⅴ類と底部に分類できた。

Ⅰ類（Fig.10—①～④）

滑石を多量に混入する一群で，凹点文・凹線文を施した中期阿高式系のもの。4点とも口縁付近の破片資料で，口縁部文様帯の他は無文のようだ。

Ⅱ類（Fig.10—⑤⑥）

後期の精製土器をあげた。この他にC6区ⅣB層から黒色研磨の浅鉢状破片資料があったが図示できなかった(PL.13)。⑤は下半が横位の貝殻条痕のままである。⑤⑥とも後期後半の資料であろう。

Ⅲ類（Fig.10—⑦）

晩期突帯文期の資料で，胴部突帯以下の破片。刻目はわりと太く，胴外面は横位のヘラケズりのままである。

Ⅳ類（Fig.10—⑧～⑮，Fig.11—⑯⑰㉓）

粗製深鉢で貝殻条痕文系の一群。胎土に結晶片岩を含むのが特徴。⑧⑮はわりと細かい条痕，他は粗い条痕を施す。⑰㉓は条痕のあとナデ仕上げしたもの。⑯は外面を，⑫は内面をナデ消す。内面をヘラケズリ調整するもの⑧⑨もある。

Ⅴ類（Fig.11—⑱～㉒㉔㉕，12）

粗製深鉢で胎土に貝殻細片を含み，器面はナデ調整するのが特徴。平滑にナデ仕上げするもの⑱⑲，ヘラ状器具によるナデ調整㉑，やや粗いナデ仕上げのものなどがある。Fig.12には器形が復原できる唯一の例で，体部はややふくらみ気味にのび，口縁はわずかに外弯する。Fig.13—㉙のような底部がつくと思われる。

底部（Fig.13）

㉗㉘はナデ仕上げ。㉙は外面をヘラ状器具で上位にケズリ状のナデ調整を施し，内面はナデ仕上げ。下底面は全て平坦。Ⅴ類に属する。

以上のⅣ・Ⅴ類は後期後半の時期に包括されると思われ，Ⅰ区（Fig.16）ではⅤ類と西平式が共伴している。

弥生土器は，Ⅰ～ⅣB層にわたって出土する。㉜は前期，㉚㉝㉞㊱㊲は中期初頭，㉛は中期前半，㉟㊳は後期。㊳はC・D区出土のもの（Fig.6—⑧）と同一個体と考えられる。

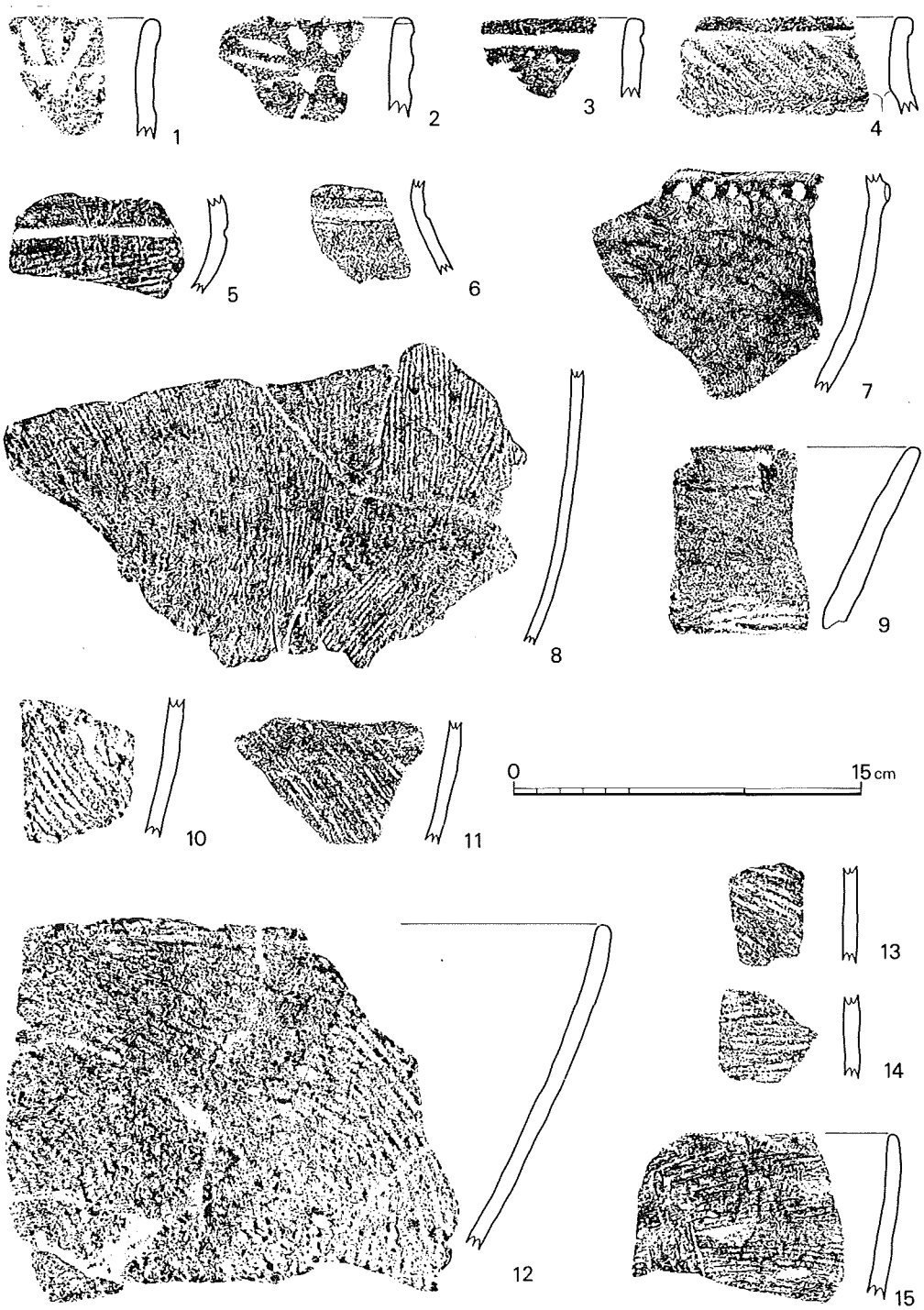


Fig. 10　C区出土土器実測図① (1/3)

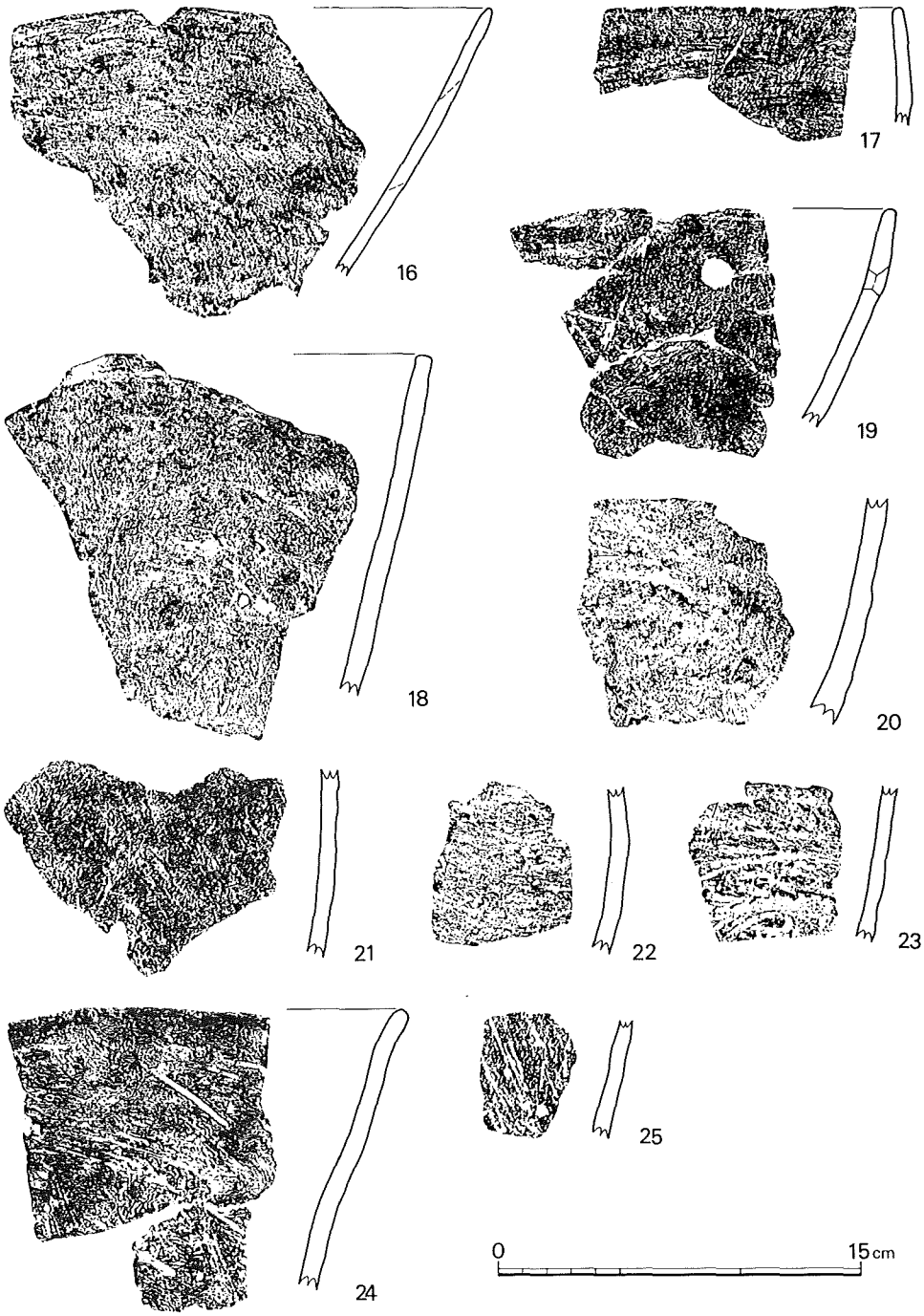


Fig. 11　C区出土土器実測図②（1/3）

土師器（Fig. 15—㊴～㊸，㊼）

㊴～㊸は古式土師器資料で，㊴は複合口縁壺，㊷㊸は高杯。㊷は脚部との接合がソケット式の杁部破片，㊸は脚部資料で，筒部は細長い柱状，裾部は強く屈折する。㊵㊶は古墳時代後期以降の甕破片と把手。㊼は竈焚口左側の庇最下端部にあたると思われる。体部との接合面から剥離している。

須恵器（Fig. 15—㊹～㊻）

㊹は扁平な釦状のつまみの杯蓋片。㊺は高台が小さくふんばり，㊻は小さい高台の杯身。

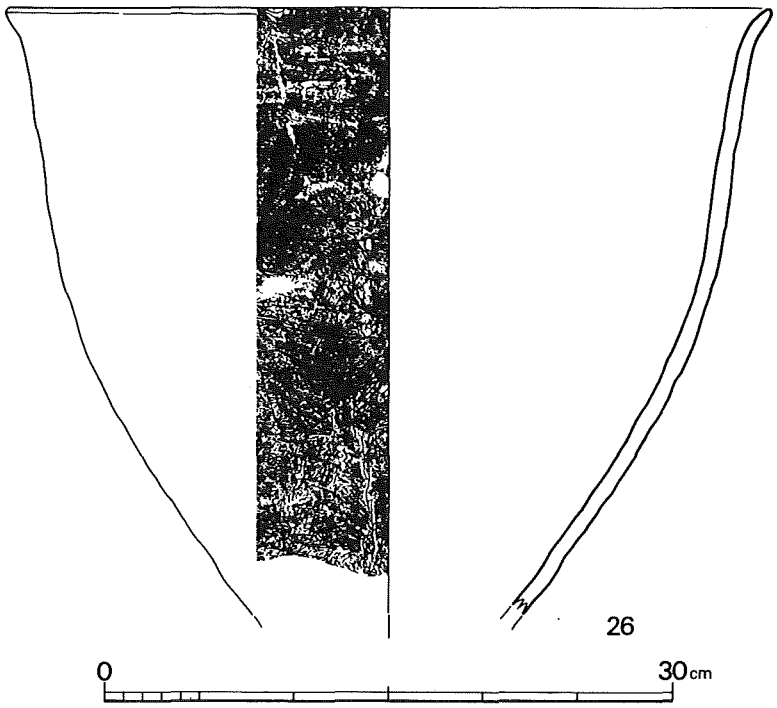


Fig. 12　C区出土土器実測図③（1/4）

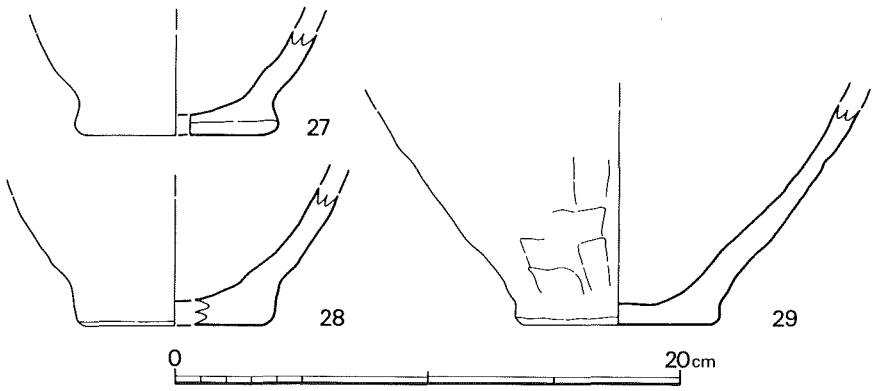


Fig. 13　C区出土土器実測図④（1/3）

Tab. 2　貝塚部各地区層別出土土器数量表（破片点数）

※層位不明とC地区表採

層＼区	C・D	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	C 6	C 7	C 8	C 10	C 11	C表採	I	N	総計
※0層	弥生 1 土師 2 不明 7		縄文 3 弥生 9		縄文 2 弥生 7 須恵 2 不明 2				弥生 1			縄文 4 弥生 16 須恵 17 土師 18 不明 14		弥生 2 須恵 11 土師 79 不明 5	
Ⅰ層	縄文 24 弥生 60 須恵 35 土師 284 不明 77	縄文 1 弥生 19 土師 1 不明 3	縄文 3 弥生 9	縄文 9 弥生 5 須恵 2 土師 5 不明 5	縄文 1 弥生 5 須恵 3 土師 10 不明 2 縄文 1 須恵 1 土師 2 不明 1	縄文 4 弥生 2 土師 1 不明 6	縄文 5 弥生 6 不明 2	縄文 8 弥生 2 須恵 2 土師 8 不明 5	縄文 2 弥生 3 土師 4 不明 6	弥生 8 須恵 3 土師 9	縄文 1			縄文 1 弥生 4 土師 18 不明 2	
Ⅱ層	縄文 1 弥生 12 不明 25	縄文 1		縄文 2 弥生 27 不明 4	縄文 3 弥生 3	縄文 10 弥生 1 (Ⅱ・ⅣB層)	弥生 2 縄文 7 弥生 9 須恵 1 土師 1 不明 8	縄文 2 弥生 21 縄文 2 弥生 7 須恵 1 土師 5 不明 7 (Ⅱ・ⅥA層)	縄文 1 弥生 9 不明 4 (Ⅱ・ⅣA層)	弥生 1 須恵 2 土師 4 不明 2				弥生 25 須恵 1	
Ⅲ層															
ⅣA層									縄文 6 弥生 4 土師 3 不明 2 陶器 1	縄文 1 弥生 9 須恵 1 土師 2 不明 4				縄文 弥生 土師	
ⅣB層	弥生 50 土師 2	縄文 28 弥生 2 須恵 2 不明 15	縄文 1	縄文 7 弥生 1	弥生 2		縄文 1				縄文 61 弥生 1		縄文 8 弥生 1	縄文 1 弥生 17 土師 2	
計	縄文 25 弥生 123 須恵 35 土師 288 不明 109	縄文 30 弥生 21 須恵 2 土師 1 不明 18	縄文 7 弥生 18	縄文 18 弥生 33 須恵 2 土師 5 不明 9	縄文 7 弥生 17 須恵 6 土師 12 不明 5	縄文 14 弥生 3 土師 1 不明 6	縄文 13 弥生 17 須恵 1 土師 1 不明 10	縄文 12 弥生 30 須恵 3 土師 13 不明 12	縄文 9 弥生 16 土師 7 不明 12 陶器 1	縄文 1 弥生 18 須恵 6 土師 15 不明 6	縄文 62 弥生 1	縄文 4 弥生 16 須恵 17 土師 18 不明 14	縄文 8 弥生 1	縄文 2 弥生 48 須恵 12 土師 99 不明 7	縄文 212 弥生 362 須恵 84 土師 460 不明 208 陶器 1
															1,327

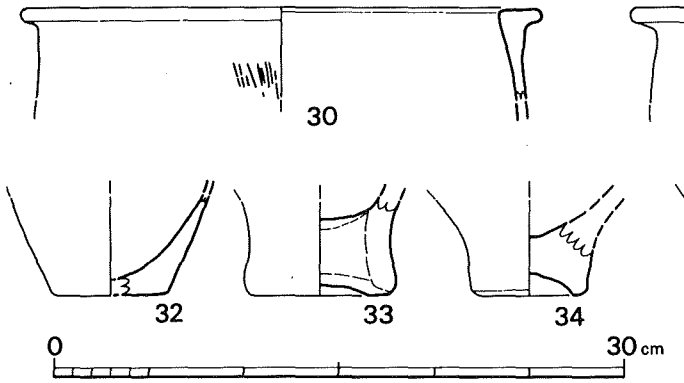


Fig. 14　C区出土土器実測図⑤ (1/4)

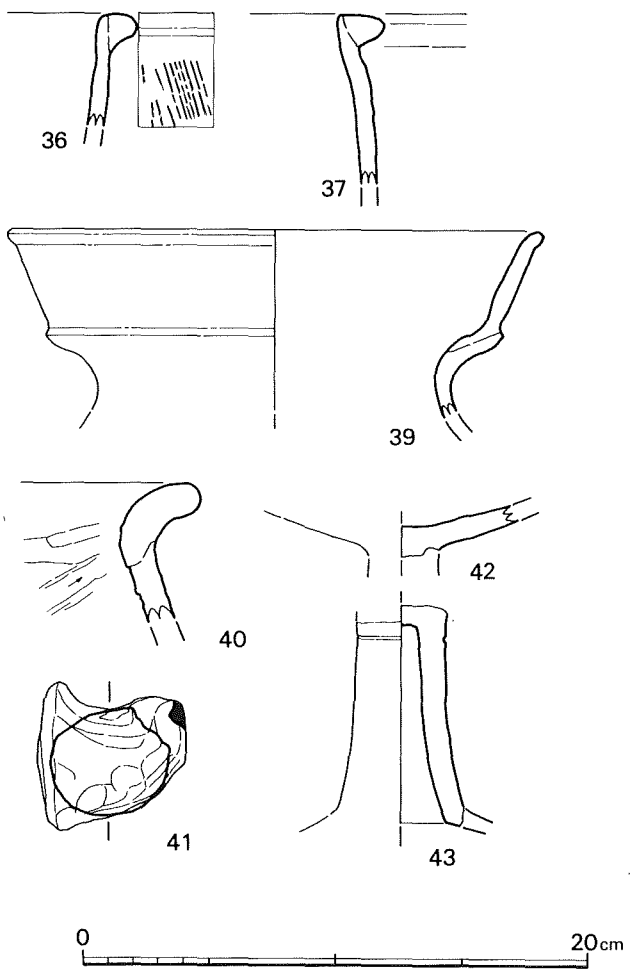


Fig. 15　C区出土土器実測図⑥ (1/3)

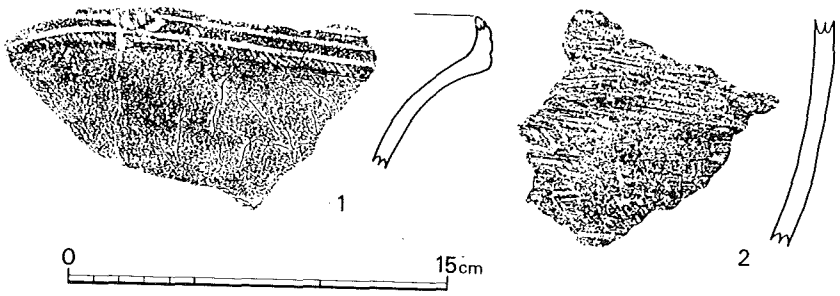


Fig. 16　I区出土土器実測図（1/3）

Ⅰ区出土土器（Fig. 15, PL. 36）

出土土器は9点で，そのうち1点は弥生土器小片，2点図示した。①は西平式の精製深鉢で，波状口縁の頂部付近にあたる。口縁部には3条の沈線と1箇所(・)状の文様を付し，下端には縄文が残り他は磨消している。②は貝殻細片を含む条痕文土器で，内面は横位のケズリ調整のあとナデ仕上げか。他に貝殻を含むものは3片ある。

（b）石　器

礫　器（Fig. 17～23, PL. 21～27）

貝塚部のC区より50個の礫器が出土した。その大部分が表採もしくはⅠ層中よりの出土である為時間的な限定がしにくい憾みがあるが，何れも手頃な礫に，その素材を最大限に生かしながら簡単な打欠を加えて刃部を作り出す共通した特徴を持っている。又，この為殆どの場合自然面は大きく残ることになる。

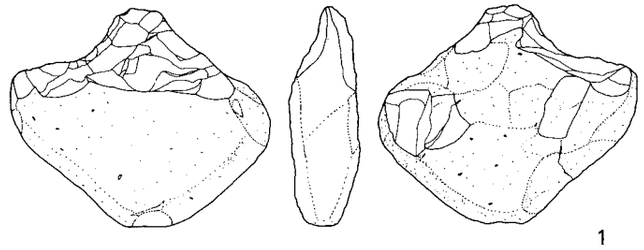
ここでは形態，特に使用部位と目される部分を中心とし下記のⅣ類に分類しておく。

Ⅰ類（Fig. 17, 18）

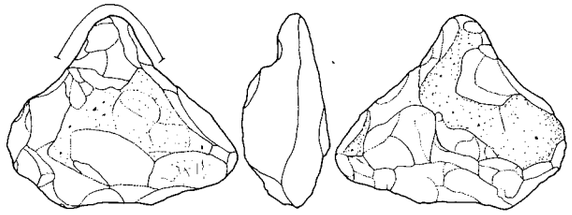
従来尖頭状礫器と呼ばれているもので，礫のほゞ中央部に1ケ所の尖頭部を持つ。主に粗い打欠はその尖頭部を作り出す為集中的に行われるが，一部には形を整える為の調整剝離もみられる。尖頭部を作り出す為の剝離は殆どの場合両面より行われるが稀に片面からの例もある(8, 16)。材には手頃な円礫を使用するものと，(Ia) 薄い扁平礫を用いるもの（Ib）があるがその比率はほゞ等しい。使用部位は殆ど全て尖頭部に集中する。16個出土しているが全て玄武岩である。

Ⅱ類（Fig. 19, 20, 21）

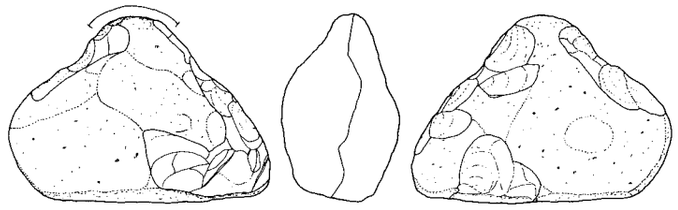
2ケ所以上に尖頭部を持ち，同時に尖頭部に狭まれた凹形の弯曲した刃部をもつもので，22個出土し出土数の4割強を占める。Ⅰ類と同様調整剝離は尖頭部と刃部作り出しに集中し，他の部分には加工を施さないが整形の為かそれが全周に及ぶ例もある。使用痕と思われる磨滅と敲打痕は尖頭部ばかりで無く弯曲した凹底部にもみられる事は，使用に際し，この弯曲のカーブを意識的に利用した可能性が強い。素材には円礫と扁平礫がある事はⅠ類と同じであるが，その比率は若干異なり円礫（Ⅱa）4に対して扁平礫（Ⅱb）7の割合である。又石質は全て玄



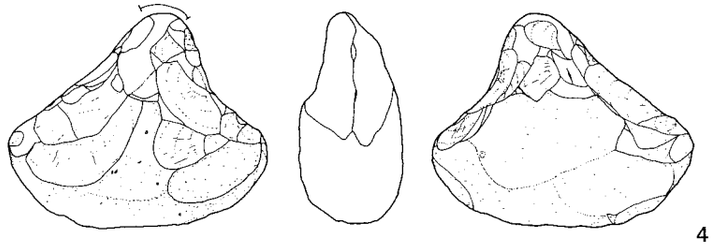
1



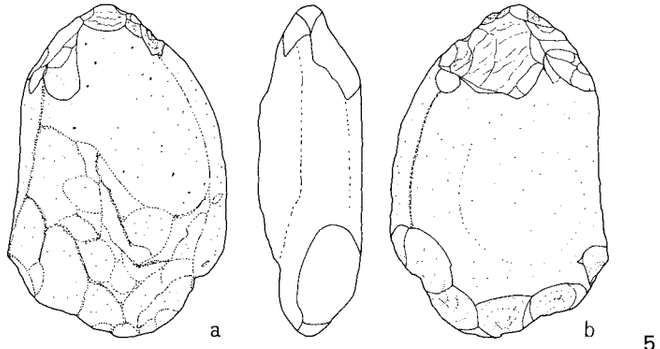
2



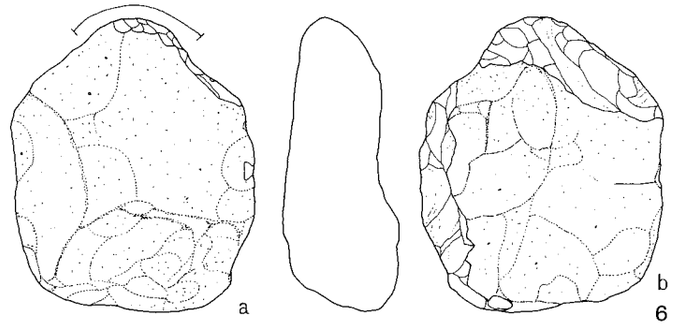
3



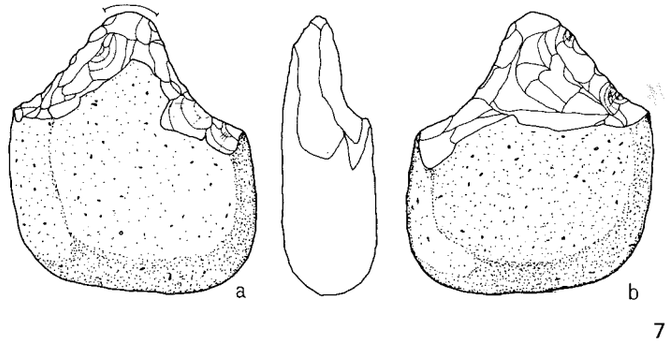
4



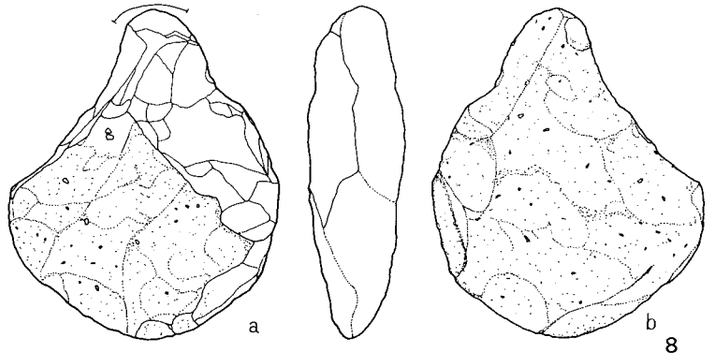
5



6



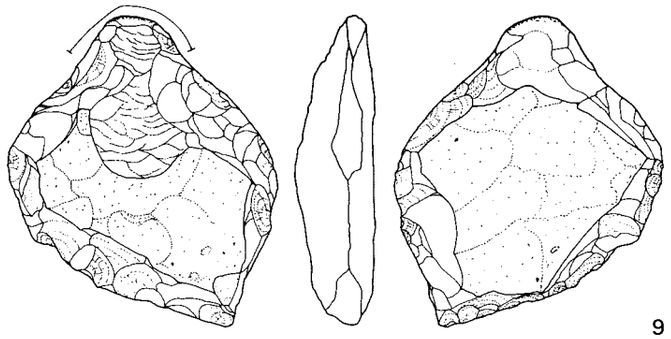
7



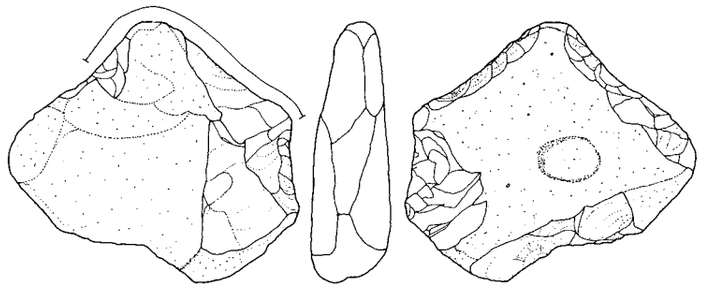
8

0 15cm

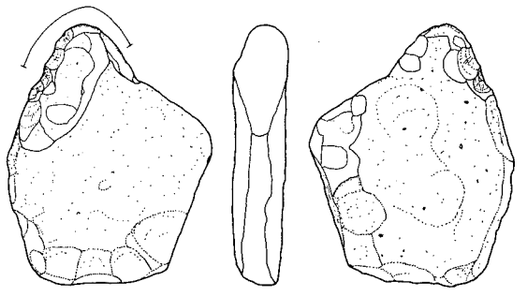
Fig. 17　礫器実測図①Ia類 (1/3)



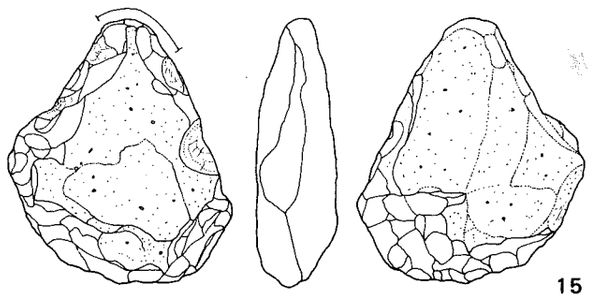
9



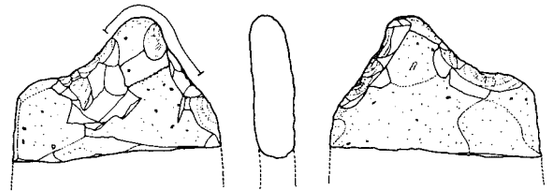
11



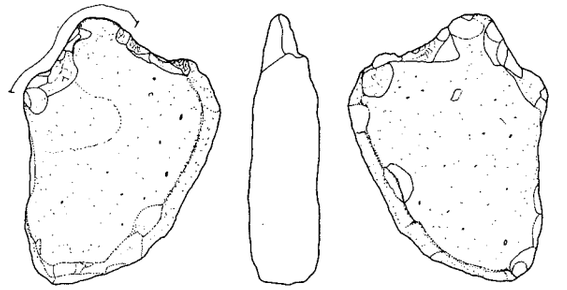
13



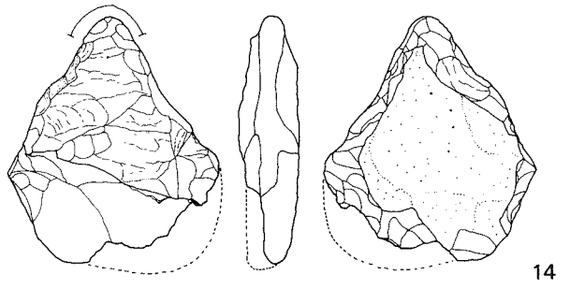
15



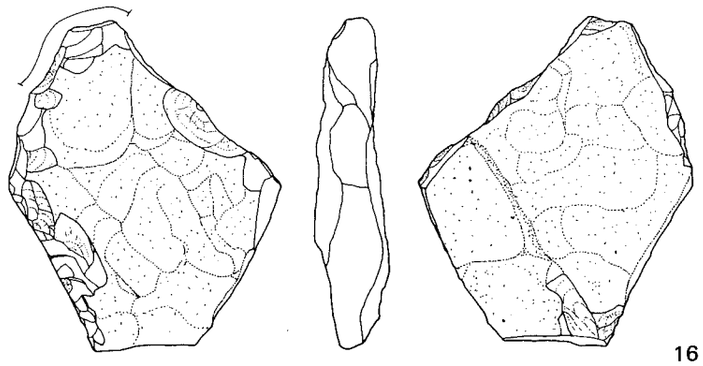
10



12



14



16

Fig. 18 礫器実測図②Ib類(1/3)

武岩である。

Ⅲ類（Fig.22，39—44）

調整剝離による尖頭部の作り出しが明瞭でなく，又，刃部にも弯曲がみられない直線刃状のものをⅢ類とした。剝離の為の打欠は殆どの場合全周に及ばず刃部の作り出し部分にのみ集中的に行われている。素材の大きさはⅠ・Ⅱ類に比して一様である。又，全て玄武岩製で6個出土した。

Ⅳ類（Fig.22，45～46）

手頃な円礫に片面，あるいは両面から簡単な打欠を行って刃部を作り出す。所謂chopper，chopping-tool 状のものでそれぞれ1個づつ出土している。

この他，その主要部分を欠損している為に型が不明のものが4点出土している(Fig.23)。何れも玄武岩製のものである。

以下各礫器の特徴を記しておく。

1．菱形に近い素材を利用し，その1片のみに剝離を集中させて無駄無く尖頭部を作り出している。同様な剝離面の風化状況から尖頭部の先端が折損した段階で遺棄されたものと思われる。なお打欠は両面より行われ入念である。

2．全体がローリングしているが$\frac{1}{4}$程度に自然面を残すのみで全周にわたって調整剝離を施こし，片手で掴り易い大きさに作りあげている。尖頭部は両面よりの入念な剝離によって作り出されている。

3．全体が磨耗がひどく稜線もおぼろげである。短い尖頭部は，やはり両面からの粗い打欠によって作られているが$\frac{2}{3}$以上は自然面が残る。

4．C－8区Ⅲ層より出土した。全体的にローリングの為稜線の鋭さは無い。全周の$\frac{1}{2}$は尖頭部作り出しの為に入念に剝離されている。使用痕は尖頭部に顕著で磨滅が認められる。

5．特にはっきりした尖頭部の作り出しはないが先端部にのみ使用の痕跡があることからⅠ類に含めた。基部には整形の為の大きな剝離が認められ，元来大きめの礫である。なお，b面中央には明瞭な磨痕があり，且っては磨石として使用されたものであろう。

6．方形の大きめの礫を片面から粗い打欠によって巾広の尖頭部を作り出している。又，更にb面の左側辺にも数回の打剝を施こし亀甲形に整形している。全体的にローリングの為，線がぼんやりしているが尖頭部には小さな敲打痕らしきものが観察される。

7．素材の$\frac{2}{3}$は自然面を残すが，刃部作り出しには入念な調整を施こす。特にa面からの打欠は強く，しかる後両面から細部を二次加工し礫の厚さの$\frac{1}{2}$程度の比較的薄い尖頭部に仕上げている。鋭さの残る剝離面と異なり尖頭部に磨滅痕が顕著なのはこの部位が使用の中心であった事を伺わせる。C－3区ⅢA層よりの出土。

8．永い間，直接海中にあった模様で礫表面の一部には貝殻の附着をみる。手頃な隅丸形の一辺の角をそのまま利用し，その左右に片面からのみ粗い打欠を行っている。従って，礫の大

部分は自然面である。

9．大型の扁平礫に中央部を除いた全周にわたって剝離を行い整形している。尖頭部は，両面からの打剝によって作り出され，使用の為にかなり磨滅している。基部にはまずa面からの剝離の後b面からの大きな打剝によって鋭いエッヂが作られている。単に礫の整形ばかりで無く，あるいはこの部分も使用されたかも知れない。

10．かなり薄い扁平礫を利用する。その下半は折損しているが1ケ所の尖頭部を持つⅠ類であることは間違いあるまい。細い尖頭部は両面よりの細かい入念な剝離によって仕上げられている。その際の調整剝離は尖頭部附近にのみ集中され，他は自然面として残っている。使用痕は尖頭部から右肩部にかけてみられる。

11．8と同じく元来方形の礫を素材とし，その一角を利用して，周辺に両側より剝離を行い尖頭部を作り出している。そして基部には片面からの大きな剝離によって形を整え握り易いようにしている。礫の大部分に自然面が残る。使用痕としてはやはり尖頭部分及びその側辺に磨滅が観察される。

12．扁平礫の自然な一角を利用し，その周囲に両面より僅かな打剝を行って小さい尖頭部を作り出している。この部分以外は全て自然面を残している。使用痕は左側辺から僅かな弯曲部を含み尖頭部にまで及んでいるが直下ではなく斜めに使用すればⅡ類と同様な型になる可能性もある。

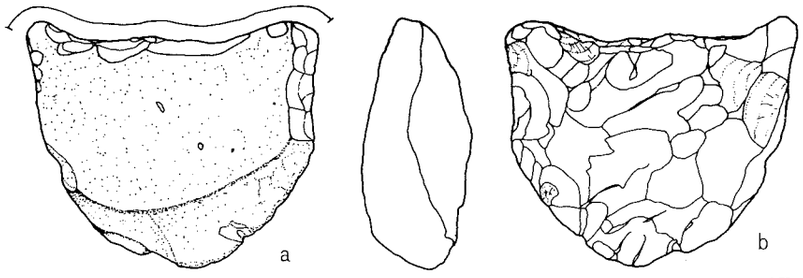
13．ほとんど加工を施していない扁平な礫器で尖頭部もそのまま自然面を利用し，僅かに周辺に両面から簡単な調整剝離を行っている。その為尖頭部の位置は僅かに片方に偏している。薄いが大きさも手頃で指のかかりもよく片手で握ってもその大部分は手中に隠れる。使用部位は尖頭部のみである。

14．礫に両側より剝離を加えて細長い尖頭部を作る。片面は全部位にわたって剝離が行われているが，他面は大部分自然面である。使用部位は尖頭部から，かすかな右弯曲部に及んでいるがあるいは，これはⅡ類に属するもので，弯曲部を利用しての使用時に下部を欠損したものかも知れない。

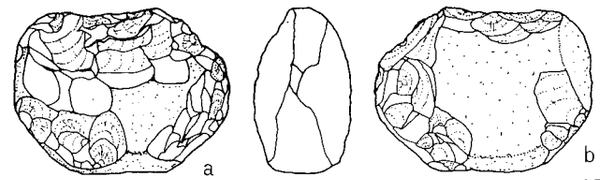
15．従来靴形石斧と呼称されているものに似る。扁平な礫のほゞ全周にわたって剝離を行っている。特に基部には両面よりの剝離によってにぶい刃部らしき面もみられるが，むしろこちらの方が先端部より厚いため単なる整形用の調整剝離として理解しておきたい。薄い尖頭部は片面からの粗い打剝によって作り出され磨滅痕が顕著である。

16．扁平な角礫を利用しているが，素材の自然面がそのまま生かされ$\frac{2}{3}$程度に及ぶ調整剝離も主に鋭い角をとる為に片面からのみ簡単に施こされているのみである。又，尖頭部も同様で数回の打欠のみで形ばかりの調整を行っているにすぎない。しかし尖頭部の磨滅痕は認められる。

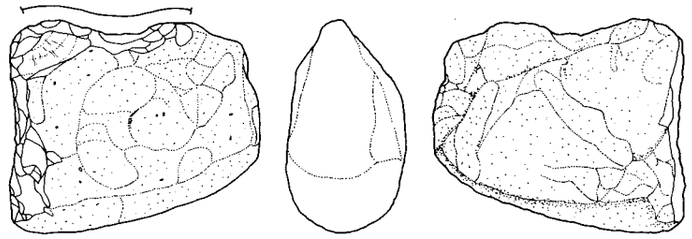
17．2個の細い突起状の尖頭部で，その間の浅い弯曲部とより成る。a面は殆ど自然面を残す



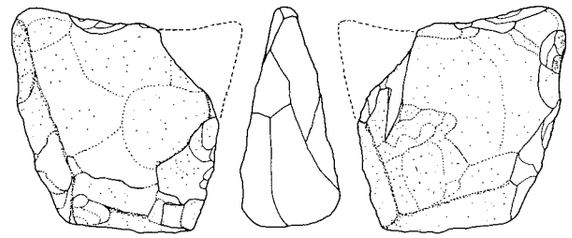
17



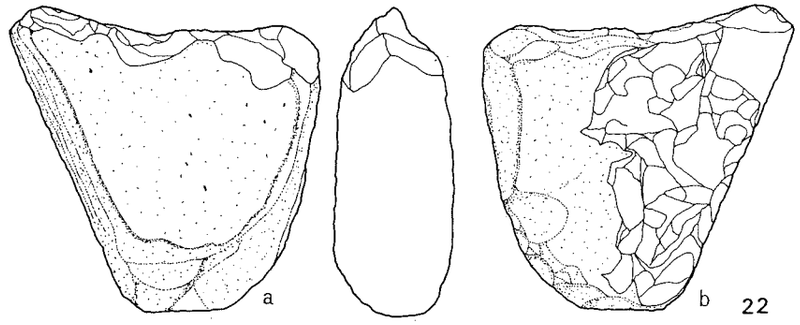
18



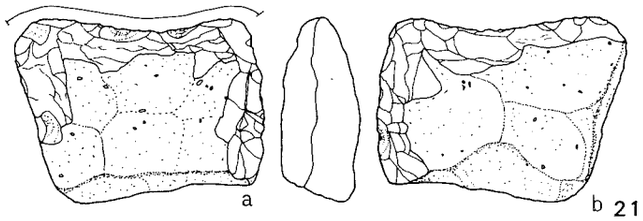
19



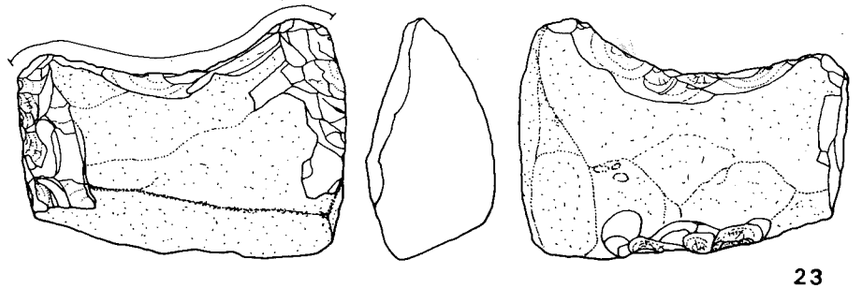
20



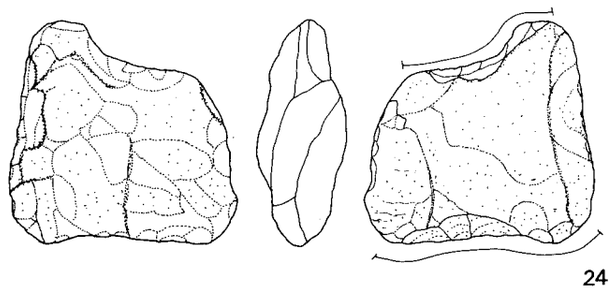
22



21



23



24

Fig. 19　礫器実測図③IIa 類 (1/3)

が，b面は全面にわたって粗い剝離を行う。しかし入念な剝離は尖頭部と弯曲部に限られている。使用痕も同様にこの部分に認められるがローリングを受けている為にさほど明瞭では無い。

18. 小さい円礫を利用しa面ではほゞ全面にわたって剝離を行うが，b面は刃部周辺部のみに限られる。尖頭部の1つは欠損し，又，他方のもあまり明瞭ではないが，弯曲部のカーブの延長を考えるとⅡ類に属してよいものと思える。

19. 方形の礫の素材をそのまま生かし，調整剝離は最少にとどめる。僅かに片面から打欠を行って浅い弯曲部と低い尖頭部を作り出している。C－11区表採品。

20. 断面が細長い三角形の礫を利用し刃部の作り出しには素材をそのまま生かし，剝離調整も最少限にとどめている。一部尖頭部の折損時に同時に遺棄されたものと思われその後の新しい調整剝離痕はみられない。なお刃部に比して基部が特に厚いこのタイプは非常に持ち易い。

21. 方形の礫の2片に両面より打欠を加えて刃部を作り出す。尖頭部は低く，従って弯曲のカーブはゆるいが，使用痕は顕著で，特に弯曲部には明瞭な敲打痕が観察される。一方a面右側辺部には両面からの剝離によって鋭いエッヂが認められるが使用に供したと思われる跡は無い。単なる整形の為の打欠であろうか。

22. Ⅱ類としては23と共に最大部類に入る。全体的にローリングを受けて丸味を帯びる。刃部の作り出しにはa面では刃部のみに剝離を行うがb面ではむしろ刃部とは関係の無い面に粗い打欠を多く加えている。なお使用痕は明瞭でない。

23. 大きく重い礫を素材とし両面より入念な剝離を行い，2ケ所の尖頭部と深い弯曲部とを作り出している。又，a面左側辺部は適当な長さにする為に数回の粗い打欠を加えて形を整えている。使用痕は特に弯曲した凹底部に顕著でエッヂが大部分磨滅している。敲打痕と思われる。又，この形は重量はあるが掘り易く，打ち欠きの用途に適していよう。C－b区の表採品。

24. 風化の為自然面と剝離面との見分けが容易でない。しかし明白に刃部は両端に2ケ所認められ，又共にその部分の作り出しには両面よりの剝離が行われている。

25. 扁平礫に両面より剝離を加え2ケ所の尖頭部と深い弯曲部を作り出す。尖頭部は，内，1つが特に強調され更に側面部に整形の為の大きな打欠がある為その形はピストル型の特異な形となる。尖頭部と，弯曲する凹底部には顕著な敲打痕が観察される。

26. 薄い角礫の一辺に両面より剝離を施こし尖頭部と浅く弯曲する刃部を作っているがもう1ケ所の尖頭部と基部は大きく欠損している。使用痕は特に認められない。刃部は鋭さを残す。

27. 全体がひどくローリングを受けている為に剝離面と自然面の見分けはつかない。しかし刃部の形成にあたっては，僅かながら両面より剝離を行った痕跡がある。又，基部にも一部打欠がみられるが調整痕か折損面なのかの断はつけ難い。

28. 扁平な礫の一辺に両面より剝離調整を行い２ケ所の尖頭部と浅く弯曲した刃部をつくり出す。下半部は大きく欠損しその旧形は伺えない。使用部位はやはり尖頭部分と凹底部にある。

29. 扁平でハート形を成す。３ケ所に尖頭部が認められるが下方部分には，その為の調整剝離は認められないので，基部として理解する。上端，２ケ所の尖頭部と深い弯曲部は両面からの打剝によって作り出される。全体的に磨耗著るしい為使用痕は不明瞭であるが，先の尖頭部と凹底部が使用部位である事は間違いあるまい。なお，調整剝離は，a面で全面にわたるその痕跡があるがb面でははっきりしない。

30. 扁平な角礫の一辺に粗い打欠を加え２ケ所の尖頭部と深く弯曲した刃部を作り出す。その際の加工は最少限にとどめられ礫の90%は自然面をそのまま残す。使用部はこの類の特徴である尖頭部分と弯曲した凹底部であると思われ，そこに磨滅痕がみられる。

31. 薄い円盤状を呈し，全周にわたって両面よりの簡単な剝離が加えられ，基部は更に丸味をおびる。刃部にはやはり両面から粗い剝離がみられるが入念さはなくその為鋭さに欠け，むしろ平坦気味である。なお，素材の礫は扁平であるが表面には若干の凸凹がみられ，丁度その不規則な部分に尖頭部がつくられた為に側面よりみると２ケ所の尖頭部は位置がづれて重ならない。使用にあたってはやはり凹底部と尖頭部を利用している。

32. 手頃な薄い角礫の上端に両面より剝離して劣頭部と弯曲する刃部をつくっている。他の部分には全く調整痕がみられず極めて無駄の無い作りである。尖頭部と凹底部に使用の為の磨滅が観察されるが１つの尖頭部は一部折損している。C－２区Ⅳ B 層から出土している。

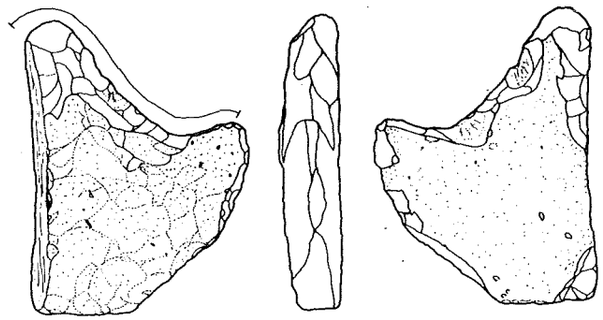
33. 扁平礫の両端に凹部を２ケ所作り出している。又，側辺は，１片が厚く，他方は薄く仕上げられる。２ケ所の凹部は何れも使用されたらしく磨耗しており，この両端を緊縛した可能性もある。しかし尖頭部にも顕著な使用痕が残り，これが石錘のような用途に使われたものでは無いことを示している。

34. 比較的扁平な素材の礫の全周にわたって両面から剝離を行っている。半分程度を欠損するが，Ⅱ類のタイプである事は間違いない。出土礫器中最も小型に属する。使用痕はあまり明瞭ではないがやはり尖頭部と弯曲する凹底部にみられる。

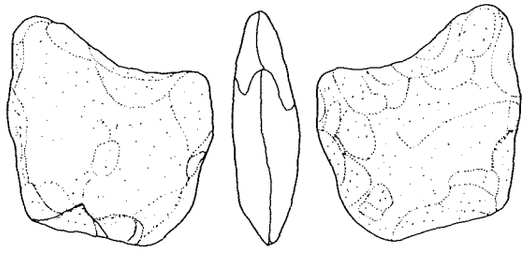
35. やはり扁平な小型の角礫を利用したものと思われるが半分以上を欠損する。調整剝離は刃部のみに集中させて弯曲させるが，特に尖頭部の作り出しを行った形跡はみられない。従ってⅡ類の典型とは言えないが使用部があくまで弯曲する凹底の刃部にあることからⅡ類に含めておいた。刃部は鋭く一種スクレーパー的な用途があるのかも知れない。

36. ハート形をした小型の礫器である。手頃で比較的薄い礫に全周にわたって両面より剝離し尖頭部と弯曲する刃部を作り出している。又，この礫の場合，基部にも両面からの粗い打欠による尖頭部を持つ。しかし全体的に磨耗がみられる為に使用痕は明瞭でない。

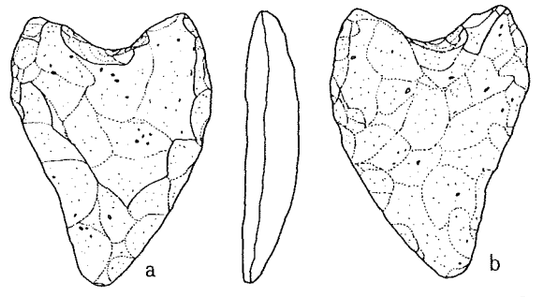
37. 扁平礫に両面より剝離を加えて尖頭部と弯曲する刃部を作り出すが特に刃部は作り出しが入念で，鋭い。基部は片面より大きな打欠を加えて形を調整する。ローリングが殆どなく他の



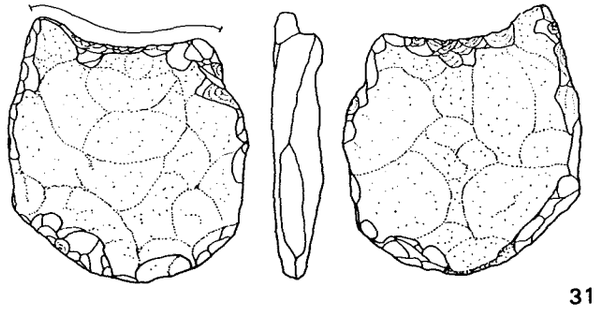
25



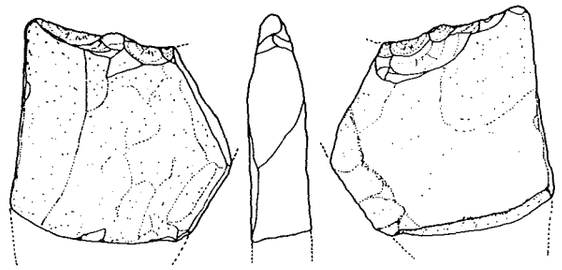
27



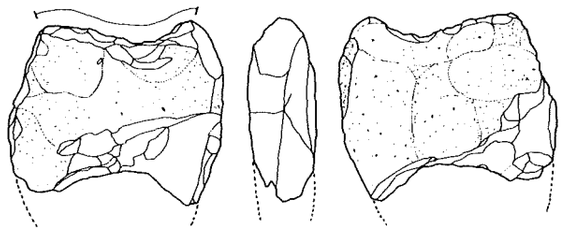
29



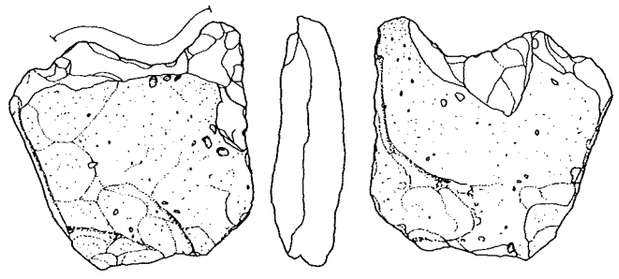
31



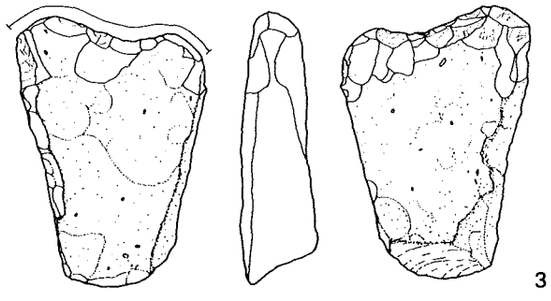
26



28



30



32

Fig. 20　礫器実測図④IIb 類 (1/3)

礫器に比して稜線が明瞭である。半分程度欠損するが，35と同じくスクレーパー的な用途も考えられる。

38. 手頃な素材の1辺に片面からの打剝を行い浅いカーブの刃部を作り出すが尖頭部の先端と他方の尖頭部は折損している。調整剝離は全体的に粗く，尖頭部が特に強調されてはいない。

39. やゝ扁平で手頃な礫の一辺にのみ，片面から簡単な打欠を行い直線の刃部を作り出したものである。一部端を欠損するが刃部には敲打痕と思われる磨滅が観察される。

40. 片面は全て自然面を残し，基部と刃部の一部を欠損する。直線的な刃部の作り出しは片面からのみ行い基部には調整用の粗い打欠がみられる。全体的にローリングしている為稜線が

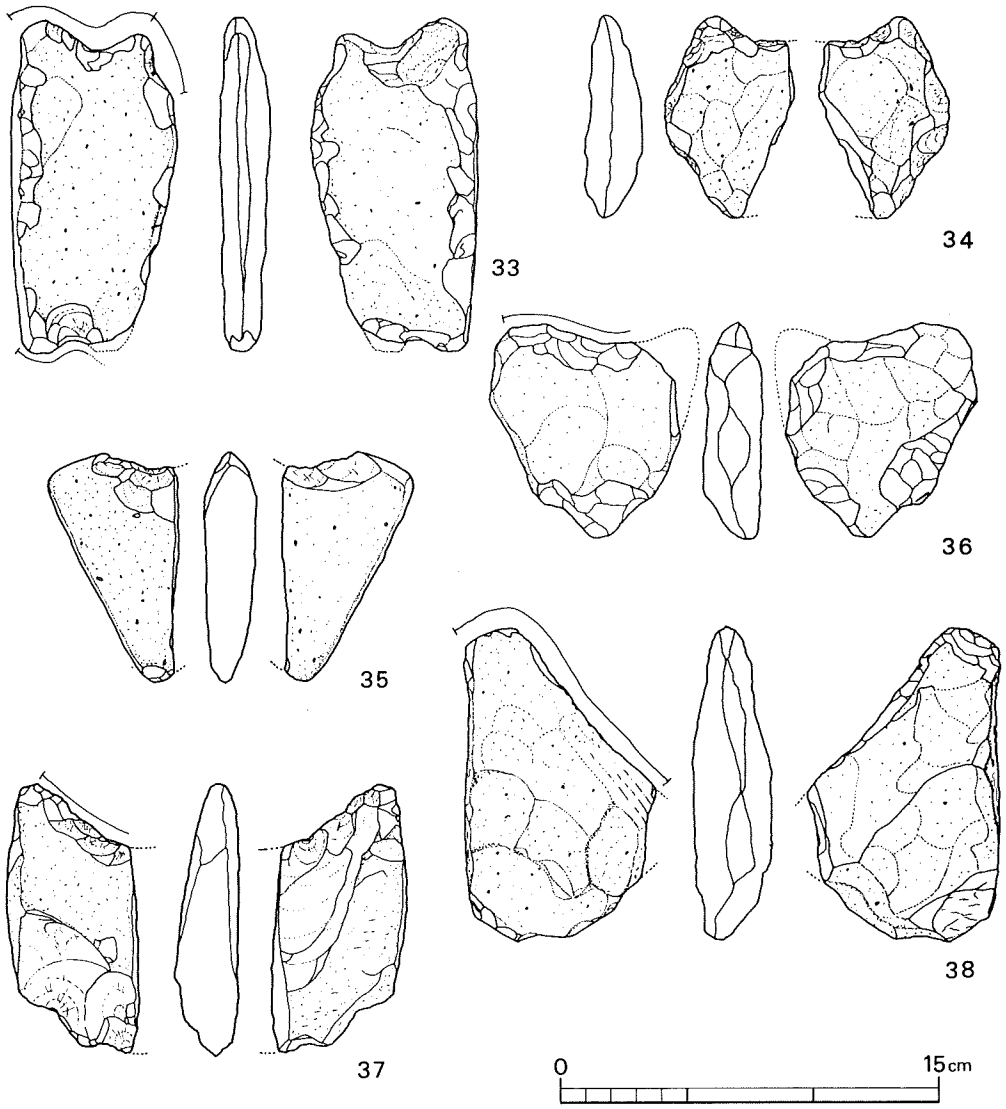


Fig. 21　礫器実測図⑤IIb 類 (1/3)

はっきりしない。

41. 台形の丸みをおびた礫の一辺にのみ両面からの不規則ではあるが多くの細かい剝離を加えて直線的な刃部を作り出し，その他の部分は自然のまま放置する。刃部は鋭くスクレーパー的な用途も考えられる。

42. 細長い角礫の一辺にのみ両面より簡単な剝離を行い刃部を作る。その際素材の最も薄い部分を利用している為刃部は特に鋭くなる。左右の不自然な欠損面は刃部の剝離面と風化度が等しい為，整形の為の切断か使用の時の折損か明確でない。

43. 厚さの等しい三角形の扁平礫の一辺に片面より簡単な打剝を行って直線的な刃部を作り出す。なお，全周にわたって片面のみに調整剝離を行って形を整えるが本来の礫の形を変えるまでには至っていない。全体的に磨耗がみられ，使用痕などは顕著ではない。側面のゆるやかなカーブは片手で持つ場合重量も手頃で，よく手になじみ，持ち易い。

44. いびつな四辺形の素材に，その形にそって両面より剝離を行い結果的に直線的な刃部が2個作り出されている。使用に際しては，この刃部と上面先端部を利用したらしく使用痕が残る。又，礫の大部分は自然面が残る。尖頭部の使用でⅢ類の典型例ではないが直線的な刃部が強調されたものと解しこの型に含めておく。

45. 四辺形の扁平な礫の角の部分に両面より粗い大きな打欠を加えて鋭い刃部を作り出した所謂chopping-tool である。使用に供したかは不明瞭である。他の礫器が全て玄武岩を使用しているのに比して，この例は珪岩を用いている。

46. 楕円形の小礫の一端に片面より数回の簡単な打剝を加えて刃部を作っているが，弯曲を意識しての入念な剝離は無い。

47，48，49は何れも薄い扁平な素材に両面より調整剝離を加えているが，その大半を欠損する為どの型に属するか不明である。なお49には刃部と思われる部分に磨滅がみられる。

50. 素材の剝片を利用し粗い打剝を加えている。一辺に薄い刃部らしきものがみられるが磨耗の為明瞭でない。

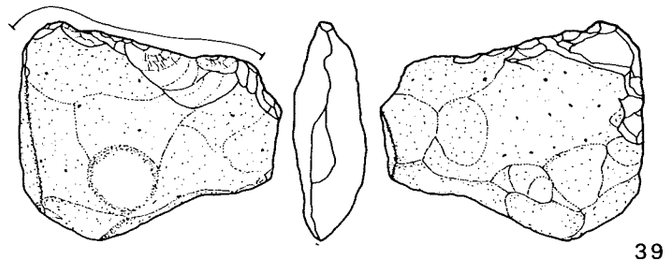
その他の石器（Fig.24～26，PL.27～28）

51. 凹石で径12cm，厚さ4cmでほゞ円形に近い。両側に使用部の凹みがあり，その深さは何れも1cm程度である。C－6区の表土より出土した。雲母質砂岩で重量は830gである。

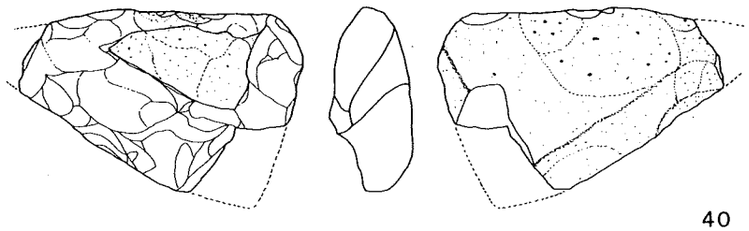
52. 手頃な円礫を用い両側を簡単に打ち欠き抉りをつける。緊縛部と思われる部分には僅かに磨耗痕がみられる。海緑石砂岩で184g を計る。C区の表採品である。

53. 厚めの手頃な円礫を利用し，短径の両側面に抉りを入れる。しかしその抉り部には深く鋭い切口が顕著で何か金属器の使用を思わせるものがある。緑色片岩で380g。

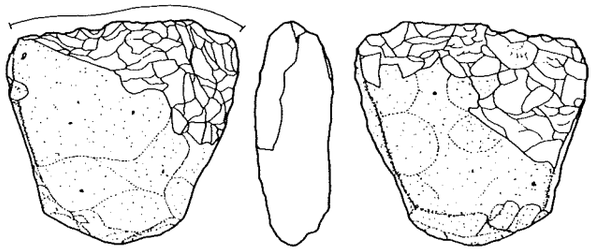
54. 遺跡附近一帯に露出する砂岩を用い，抉り部は，他のものと異なり側面に1条の溝を走らせている。半分以上は欠損し現存重量は320gである。M区Ⅲ層より出土している。



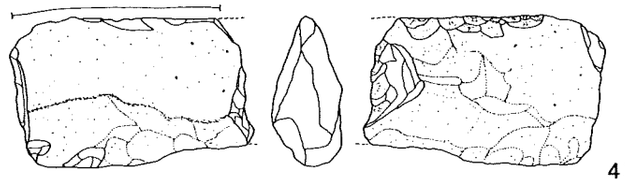
39



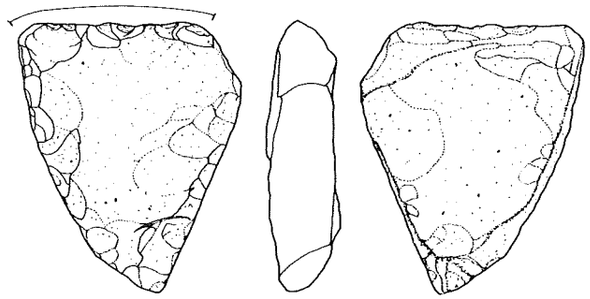
40



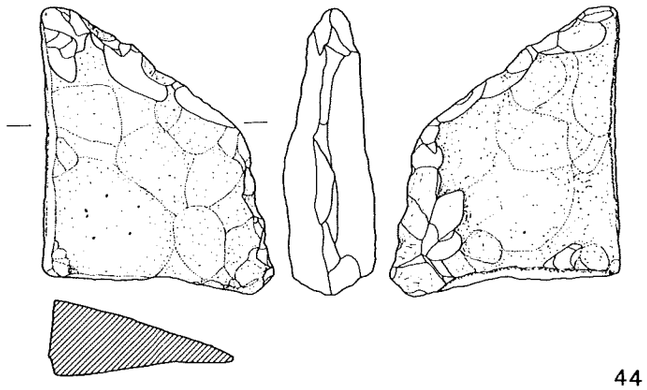
41



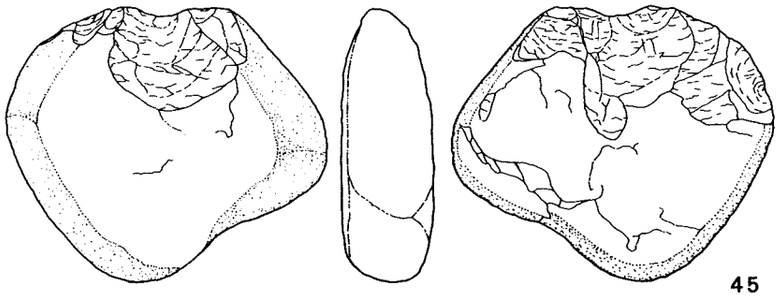
42



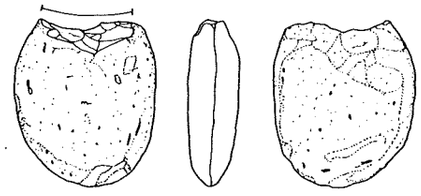
43



44



45



46

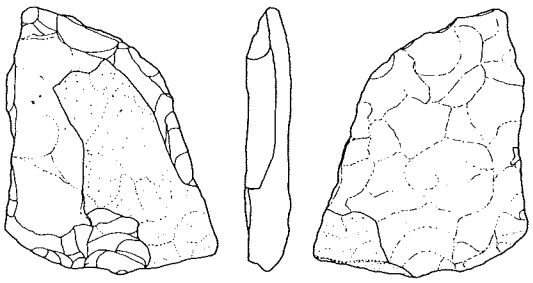
0 15cm

Fig. 22　礫器実測図⑥ⅢⅣ類 (1/3)

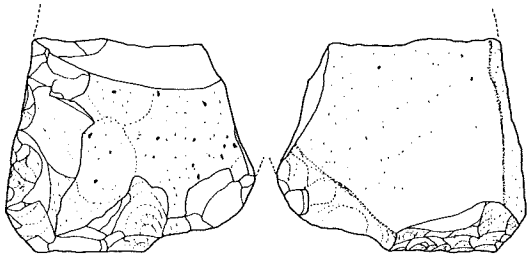
55. 手頃な薄い円礫の両端に粗い打欠を加え抉りを入れる。緑色片岩で190g。C区表採品である。

56. 薄い扁平な円礫の両側に粗い打剝を加えて抉りを作る。玄武岩製で210gを計る。これら5個の石錘の内，52，55，56と53 54とは若干趣を異にする。54は，出土層に全くの攪乱や，調査時の混入が無ければ，古墳～奈良期に属するものと思われるが，よく似た形状の石錘が附近の真珠養殖場で使用されている事から速断出来ない面がある。52は抉りに金属器の使用が考えられるなど，52～56のものと比して後出の感じが強い。それにしても何れの石錘も全て180gを越す大型のもので，少なく共網漁用に限定すれば縄文～弥生的ではない。[註1]

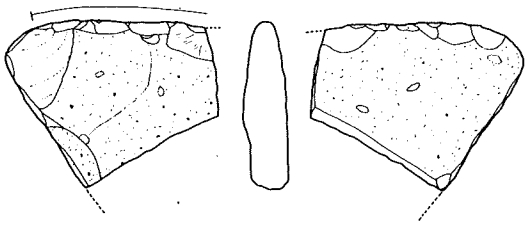
57. 敲石である。C－6区のⅡ層より出土



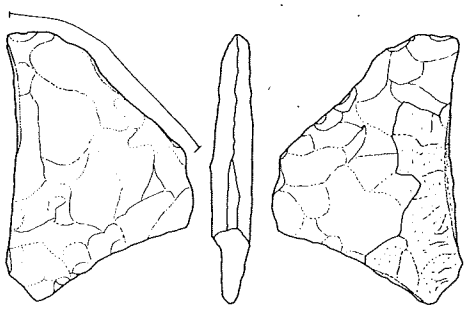
47



48



49



50

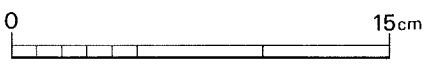


Fig. 23　礫器実測図⑦ (1/3)

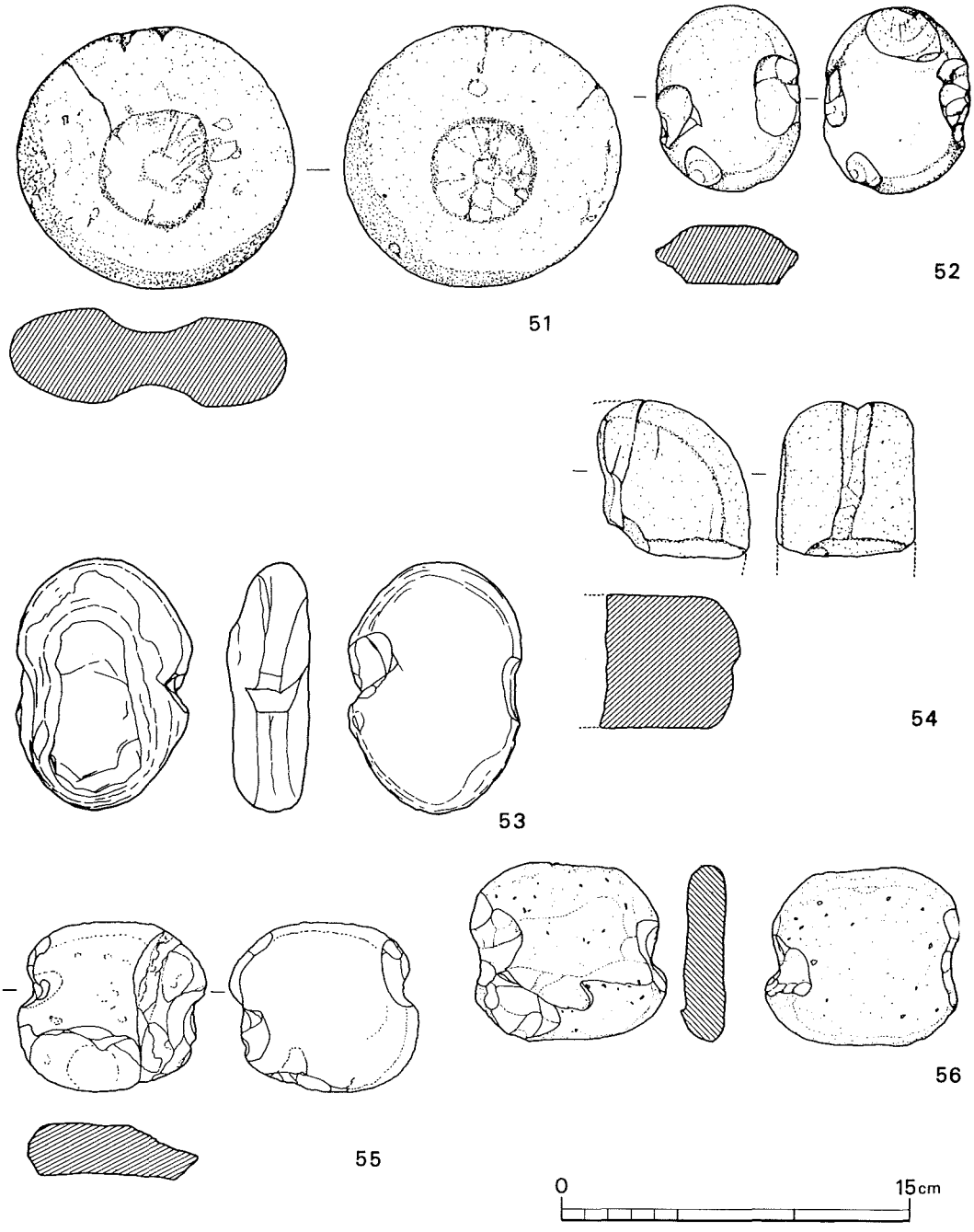


Fig. 24　石器実測図 (1/3)

した。半分位を欠損するが両端に敲打痕が顕著である。長さは長径13cmで現存重量は470ｇ。玄武岩製である。

58. 磨石である。Ｃ区の表採，完成品で長さ15cm・巾12.5cm厚さ4.5㎝・重量1,410ｇの玄武岩製である。上端に一部僅かな敲打痕が観察される。本来はもう少し中央部が厚いものと思われるが両面共に使用痕である磨滅が顕著で平坦になっている。

59. 敲石。Ｃ区表採で玄武岩製。径は長さ10cm・巾6.8㎝・重量は340ｇ。楕円形で片手で握るのに手頃である。両端に打痕がみられるが特に上面に著しく，使用時の剝離痕もみられる。

60. Ｃ－区Ⅵ Ｂ層より出土した。ホルンフェルス製の磨製石斧で長さ12.3cm・巾5㎝・厚さ2.4㎝・重量は215ｇを計る。相当使用されたらしく偏刃となっている。刃部のみでなく全面にわたって研磨が施された模様であるが未だ打製面も残っている。全体的に磨耗がみられ稜線は丸味をおびる。

61. 小型磨製石斧である。玄武岩で長さ8.5㎝巾は刃部がほぼ最大部で3.6㎝・基部は1㎝前後・重量は僅か70ｇである。Ｃ区の表採で永く海中にあったせいか貝殻が附着し，剝離痕は不明瞭である。60と同じく少し偏刃となっている。以上磨製石斧は2点出土した。

62. 剝片鏃である。漆黒の良質の黒曜石で薄い縦長剝片を利用する。基部は打面の方向に両側より抉りが入れられている。鋭利な先端と共に左右のエッヂは鋭く，その部分には小さな傷が観察される。使用痕であろう。断面は三角形で長さ3.5㎝・重量は1.4ｇである。

63. 良質の黒曜石を使用する。二等辺三角形でやはり打面の方向にやゝ深いＵ字形の抉りを入れる。二次加工は主要剝離面では全面に施すが，離面では周縁と抉り部だけにとどめる。断面は薄い台形で長さは2.5㎝・重量は0.7ｇである。以上2点の石鏃は62が表採，63はＬ区の表土中より出土している。これらに使用された黒曜石は，遺跡附近の原産地[註2]のものとは異なるようで肉眼観察の限りでは佐賀県伊万里市の腰岳産のものに近いように思える。

64. 刃部を除いて大半を欠損するが柱状片刃石斧である。径の全容は不明であるが巾3.3㎝・厚さ3.8㎝，上面と刃部のなす角は45度である。全体的に研磨は丁寧である。玄武岩製。

65. 石ノミ型石器である。刃部の一部を打損するが，ほゞ完成品で長さ5.5㎝・巾2.3㎝厚さは基部の方が厚く1.2㎝，やゝ中凹みで薄い部分で0.8㎝・重量は32ｇである。頁岩製。以上の2点は何れもＣ－4区より出土し，64はⅠ層，65はⅡ層中のものである。弥生時代に属するものであろう。

註1　渡辺誠，1973「縄文時代の漁業」考古学選書7，雄山閣
それによると縄文時代の網漁用の錘具は平均10～70ｇ前後で時代が新しくなるにつれて重量を増すとある。

註2　例えば，現在知られている黒曜石原産地は遺跡を中心として半径50kmで円を描けば殆どその円内に入ってしまう。この場合，腰岳は最も遠方にあたる。ちなみに半径50km以内の黒曜石原産

地は下記の８ケ所である。

１．佐賀県伊万里市腰岳

２．長崎県松浦市御厨町星鹿半島

２．長崎県佐世保市東浜

４．長崎県佐世保市針尾，古里

５．長崎県佐世保市針尾，人崎

６．長崎県東彼杵郡大崎半島

７．長崎県西彼杵郡西彼町亀岳

８．長崎県西彼杵郡西海町大串

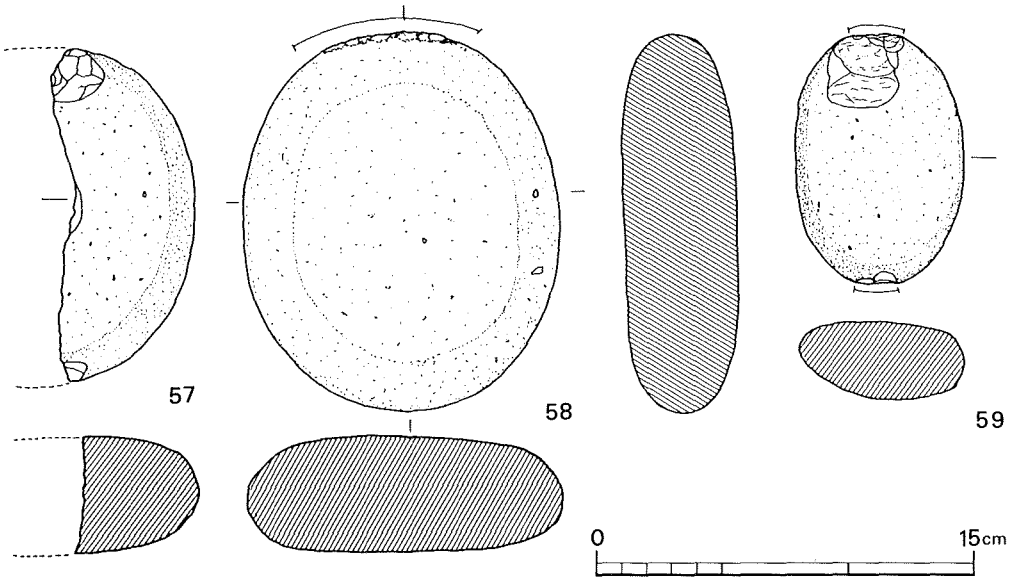


Fig. 25　石器実測図（1/3）

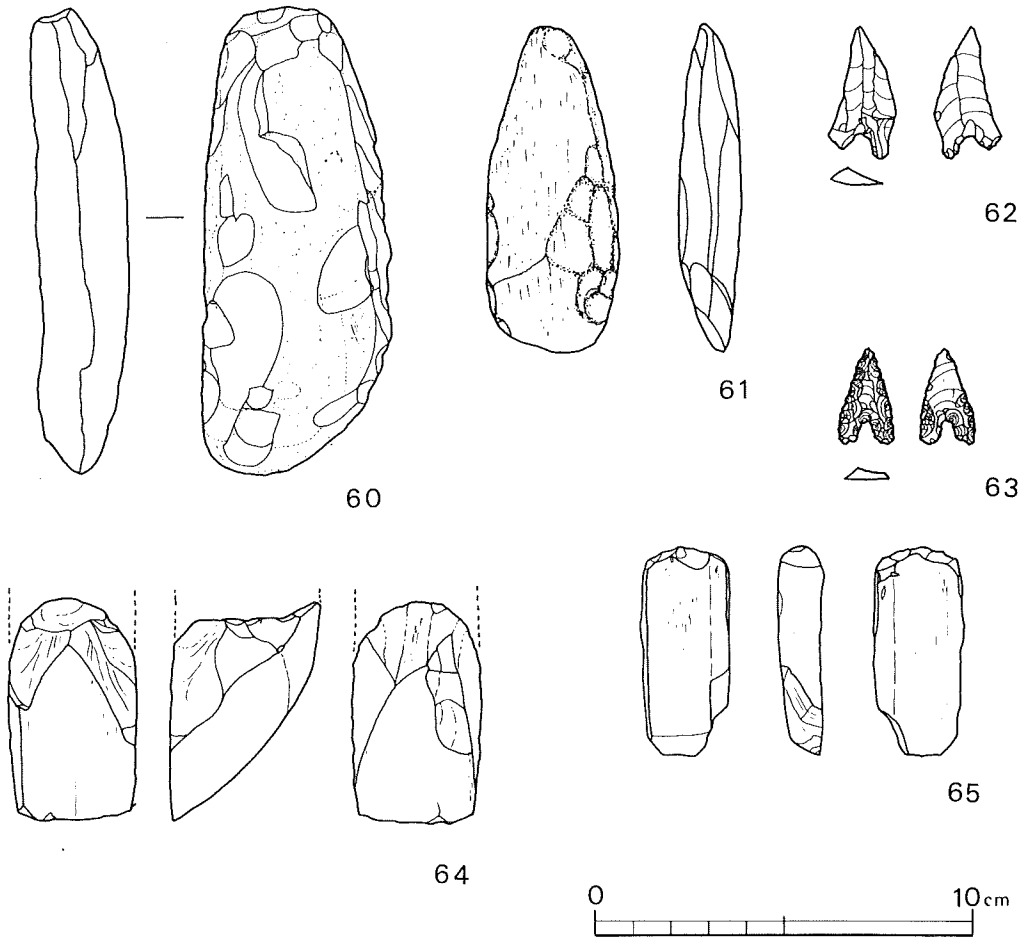


Fig. 26　石器実測図（1/2）

剥片石器（Fig. 27, 28, PL. 29）

串島遺跡出土の剥片石器類は，礫器の豊富な出土量に対し量的に少なく，また，その組成も貧弱である。利用されている石材をみると，安山岩がその主体をなし黒耀石は少ない。安山岩を使用している剥片石器類は概して大形であり，黒耀石は小さい石器類に使用されている。このことは，単に器種の選別に限られるのではなく供給地との関連を示すものかも知れない。

安山岩製掻器（Fig. 27－4，Fig. 28－7～11）

比較的大形のものが多い中で，4は縦3.6cm，横6.0cmと小さい。断面がクサビ形を呈する扁平な剥片を利用し，刃部は主要剥離面側から調整剥離を行い形成されている。打撃面を残す。

7・8ともに拳大の母岩から剥ぎとられた縦長の剥片を利用したサイド・スクレイパーである。7の主要剥離面側右側辺部には細かいチッピングが施されているが，摩耗が著しく観察が困難である。打撃面には自然面を残し打撃点が集中する。8の刃部は比較的良好に残存する。

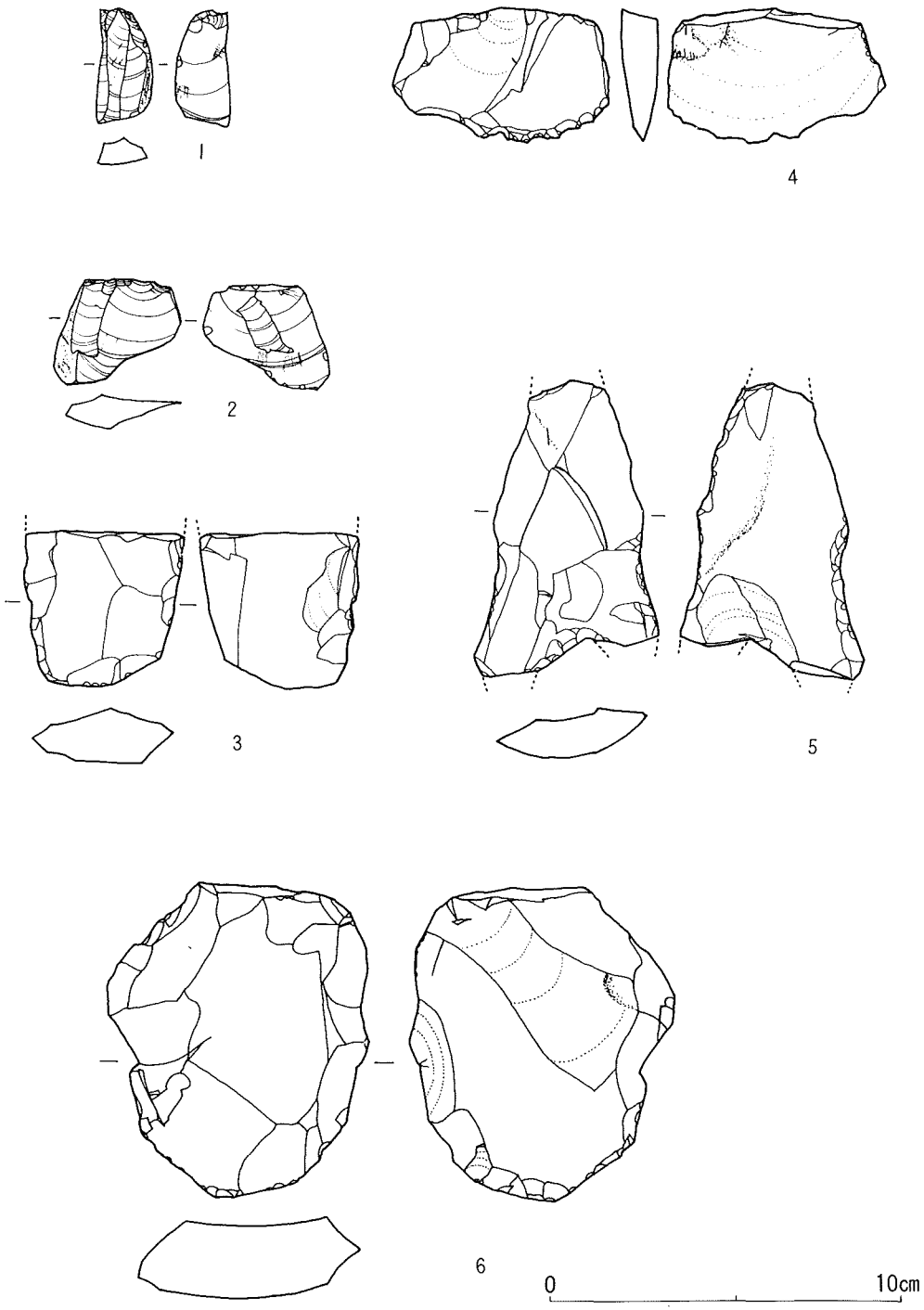


Fig. 27　剝片石器 (1/2)

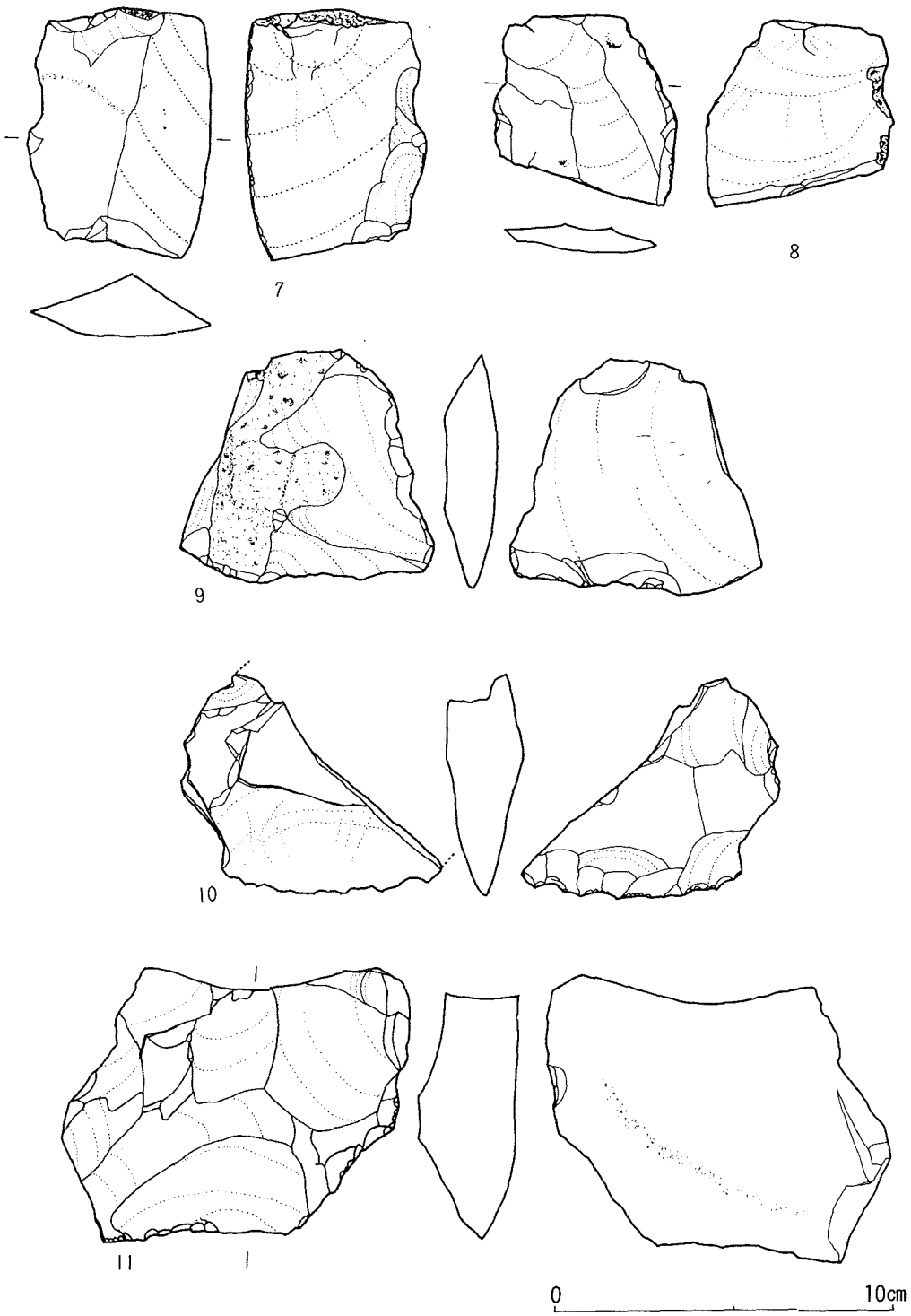


Fig. 28　剝片石器 (1/2)

主要剥離面からの調整剥離による刃部形成である。やはり打撃面を残す。

9は4と同じく断面がレンズ状の扁平な剥片を利用している。自然面を残し，刃部は主要剥離面からの調整剥離による。刃部の反対側は打撃面ではなく折損部である。

10は両面加工されており，片面は比較的入念な鱗状剥離が加えられ，更に細かい調整剥離が施されているにもかかわらず，裏面の剥離は粗く，石材の質によるものか，板状に剥離された部分もある。折損している。

11は縦7.7cm，横9.6cmを計測し，大形である。裏面は主要剥離面だけを残し，ほとんど何も行っていないが，片面は入念な鱗状剥離を施し，刃部には細かい調整剥離を加えている。また，ピック状に形成された部分の尖端部がつぶれており，掌中にすっぽりおさまることなどからして，機能的には礫器のそれと同じ様な使用法もあったのではないかと考えられる。

安山岩製両面加工石器（Fig.27－3，6）

6は全体的に入念な鱗状剥離を施しているが，両面ともに主要剥離面を残している。側辺部に調整剥離を加え刃部を形成している。打撃面を残す。尖端部が非常につぶれており，11同様ピック的な使用が考えられる。

3も同様に入念な調整剥離が加えられているが，他に1点出土している同種のものと併せて考えると打製石斧の破片かも知れない。

石槍（Fig.27－5）

安山岩製である。えぐり込みを持っており形態は石鏃に類似する。尖頭部と両脚部を欠損しており，現長8.0cm，幅4.0cm，厚1.0cmを計測する。扁平で大形であるが弯曲する。剥離は大まかで細部の二次剥離は少なく，全体的に粗である。刃部は一次剥離のエッジをそのまま利用している。中央部から下方両側辺にかけ緊縛用と考えられるブランティング加工痕を残す。

黒耀石製石核

図示していないが4点ある。いずれも3～4cmと小さく，打撃面の調整を行っていない不定形の石核と打撃面の調整を行って剥離した石核と2種類ある。

黒耀石剥片（Fig.27－1，2）

黒耀石の剥片は30点足らずである。産出地各地のものが混在するが，地理的条件からか針尾島産出のものが主体をなし，他に佐賀県腰岳，西彼半島亀岳産のものがこれにつぐ。

1は比較的形が整った縦長で両側辺部に細かい使用痕を有する剥片で，打撃方向が一定しており打撃点を残す。主要剥離の際ヒンジを起し小さな剥片となってしまっている。

2は不定形な剥片で，やはり同一方向からの打撃が加えられ打撃面を残す。また，主要剥離面にはバルブを残す。良質の黒耀石である。

以上の観察結果から剥片石器の殆んどは不定形大形で，単に刃部のみの作出というパターンは石器製作技術の幼稚さだけでなく，漁撈経済を中心とする串島遺跡の一面と考えられる。

3．N　区

①　層位（Fig.29）

貝塚の北限をみる為設定したトレンチである。地表部は標高3mを越す。Ⅰ層の砂層は1m～2mあまりも厚く堆積するが，やはり下方から貝層が現われ，少なく共この区の南側部分は，貝塚の範囲に入る事が判った。しかし北側部分には砂層中に大きな礫が含まれ，且つ壁の崩壊が著るしい為危険を感じ掘り下げを中止することにした。断言は出来ないが恐らくこの附近が貝塚の北限であろうと思う。その最下層レベルは＋100cm前後である。

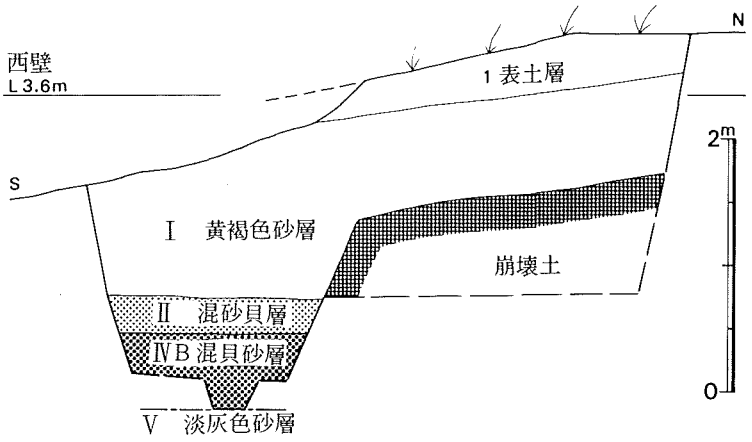


Fig.29　N区土層壁面図（1/60）

②　出土土器（Fig.30・31，PL.35）

出土土器は168点で，Ⅱ，ⅣB層に弥生土器が多く出土する（Tab.2）。この点はC・D区についても同様なことが指摘でき，C・D・N区付近のとくにⅣB層に集中する。

縄文土器（Fig.31—①）

縄文土器は2点みられ，1点図示した。滑石を多量に含む阿高式系土器で，凹線を組合せた文様がはいる。

弥生土器（Fig.30，31—③～⑧）

①⑤は前期板付Ⅱ式甕，⑥は中期初頭，③④⑦は中期前半，⑧は終末～古式土師器にかけての資料と思われる。

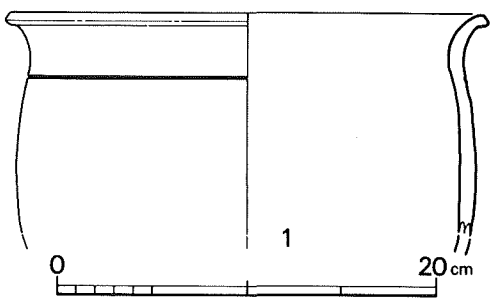


Fig.30　N区出土土器実測図①（1/4）

土師器（Fig.31—⑩・⑪，32）

⑩はヘラ切りされた底部から丸味をもってたちあがる杯片で，体内面にヘラ記号がはいる。⑪は竈の庇片ではないかと思われるもので，アミ部分は二次的な火の影響のためか黒ずんでいるが黒斑のようにもみえる。Fig.32の①は長方形格子目文にみえるが，平行条線文叩きが重複したもの。内面も細かい平行条線文の当て板痕が重複したものと思われる。②は超極細の布目痕が内面につくもので，外面は指頭による整形で指紋がついている。

須恵器（Fig.31—⑨）

小さい身受けかえりを有する杯蓋で，7世紀中頃以降の資料である。

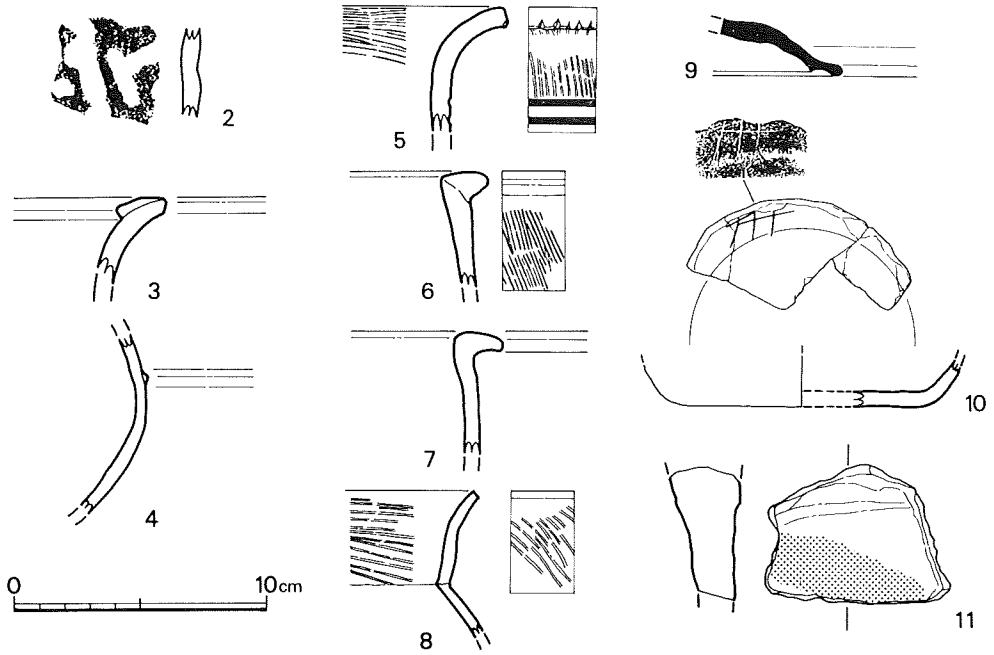


Fig. 31　N区出土土器実測図②（1/3）

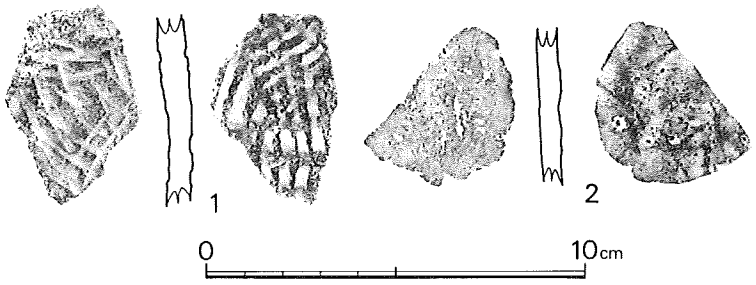


Fig. 32　N区出土叩き目文・布目痕土師器（1/2）

二、砂丘部の調査

発掘区の内C・D区を除くA～Hが第1次，J～M区が2次調査分である（Fig. 3）。

第一次調査の結果，砂丘部は保存するとの合意で，二次調査では当初発掘予定にはなかったが，発電所本体の建設予定地の都合上，更に遺跡の範囲を詳しく知りたいとの要望で，急拠行ったものである。

調査は満潮時の，貝塚部分の発掘が出来ない時，つまり潮の干満の合い間をぬって行う事にした。

1．A　区（Fig. 3）

2×40mのトレンチで更に4区に区切り，南の方から1～4と呼称した。この内実際に掘ったのはA-2，A-4区である。何れも，攪乱が深部にまで及び，又，古代の遺物も全く出土せず更に下方から湧水が始った為，その面で発掘を打ち切った。無遺物，無遺構地区と思われる。

①　出土土器（Fig.33，PL.36）

接合面から剝落した庇の最上部付近の破片で，下面は二次的な火の影響か赤味をおびる。器面は風化し荒れているがナデによる仕上げ。表採資料。

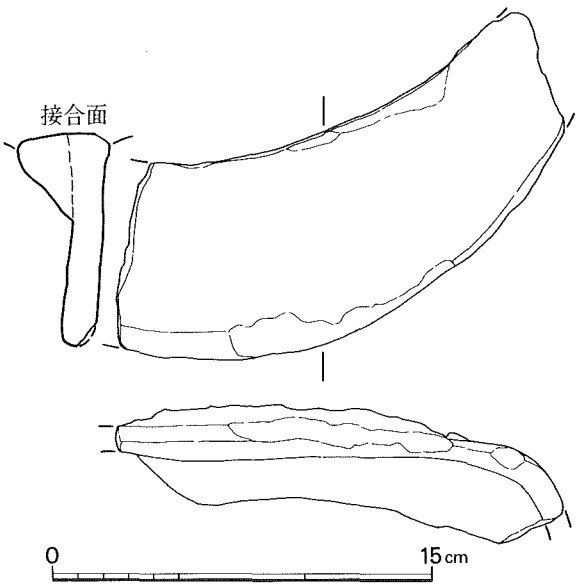


Fig. 33　A区付近出土土器実測図（1/3）

2．B　区（Fig. 3）

2m×20mのトレンチで2つに区切り，東側よりB-1，B-2と呼称した。B-1区を掘った結果は，A区と全く同様であり攪乱が深部まで及ぶ。又，遺物も全く出土しない為，地表下 1.2m で掘るのを打ち切った。やはり無遺構地区。

3．E　区（Fig. 3）

標高5m前後，砂丘の平坦部分に入れた2×5mのトレンチである。表面下全て砂層が続く。

遺物は時折散見する程度で確とした包含層は見当らず，地表下約2m 30cmの深さまで若干の須恵・土師器片が出土したにすぎない。

出土土器（Fig.34，PL.37）

48点の出土がみられ，そのうち5点と土錘を図示した。

土師器（Fig.34—③④）

③④は弥生終末～古式土師器にかけての資料で，③は朝顔形に開く口縁部，④は丸底になる底部付近破片である。内面はナデ仕上げされる。

須恵器(Fig.34－①⑥)

①は小さく高台のふんばる杯破片。高台接地面は平坦。⑥は甕体上部破片で，外面は平行条線叩き，内面は青海波文当て板痕を，それぞれ回転ナデ調整を施しているが文様は残る。

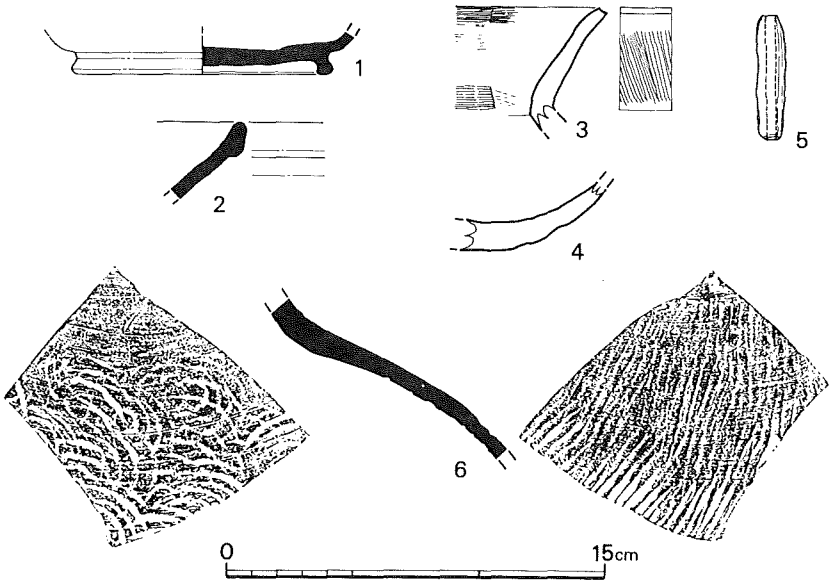


Fig. 34　E区出土土器実測図（1/3）

瓦質鉢（Fig.34－②）

②は須恵器系の瓦質鉢口縁片で玉縁状をなす。玉縁外方は暗灰色，他は灰白色を呈する。中世期頃のものか。

土　錘（Fig.34－⑤）

重量5.8ｇの小形の管状土錘。指整形で土師質。

4．F　区（Fig. 3）

E区に直交した2×4ｍのトレンチである。層位はE区に準じ，遺物の出土状況もあまり良好とは言えない。深さ2ｍまで掘ってみたが若干の土師片と磁器が出土したにすぎなかった。

出土土器（Fig.36・37，PL.37）

38点の出土をみた。図示したのは3点。

土師器（Fig.35－①，36）

①は外弯し端部を尖り気味におさめる甕口縁片。Fig.36はミミズの躰のような節状の筋がはいる連節状平行条線文叩きで，内面は平行条線文の当て板痕をナデ消したものか。

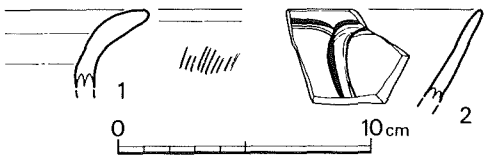


Fig. 35　F区出土土器実測図（1/3）

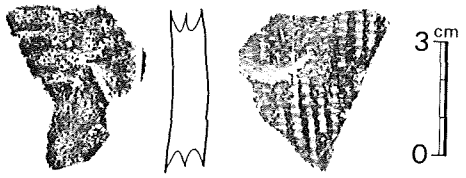


Fig. 36　F区出土叩き目文・布目痕土師器（1/2）

青磁椀（Fig.35—②）

体内面に五区画をなすと思われる篦描文がはいる青磁椀片で，内外面とも貫入が著しい。いわゆる竜泉窯系のもので平安時代末期から鎌倉時代にかけての時期が考えられる。

5．G　区（Fig.3）

標高5m前後やゝ傾斜する砂丘地点に南北に2×4m設定した。遺物は表土層及びその下の砂層から土師・須恵器片が出土するが同時に多くの近世の遺物も混るなど攪乱がひどく，更に地表下1mの深度からは河原石等の礫の堆積がみられた。又，礫と礫の間には空間が認められその無雑作な礫の堆積状況と合わせて，後世の攪乱が相当下部まで及んでいる事が推察された為にその面で発掘を打ち切ることにした。

①出土土器（Fig.37・38，PL.37）

35点出土したが，土師器甕など大形破片があった。

土師器（Fig.37—④～⑥）

⑤⑥は後述の須恵器と共伴する甕で，⑤は口縁が強く外弯し，⑥は口縁が「く」の字状に外反する資料である。④は土鍋に類似しあるいは中世期のものか。

須恵器（Fig.37—①～③，38）

①は扁平な釦状つまみの杯蓋で，中央はわずかに突起し，稜はややシャープ。②③は小さな

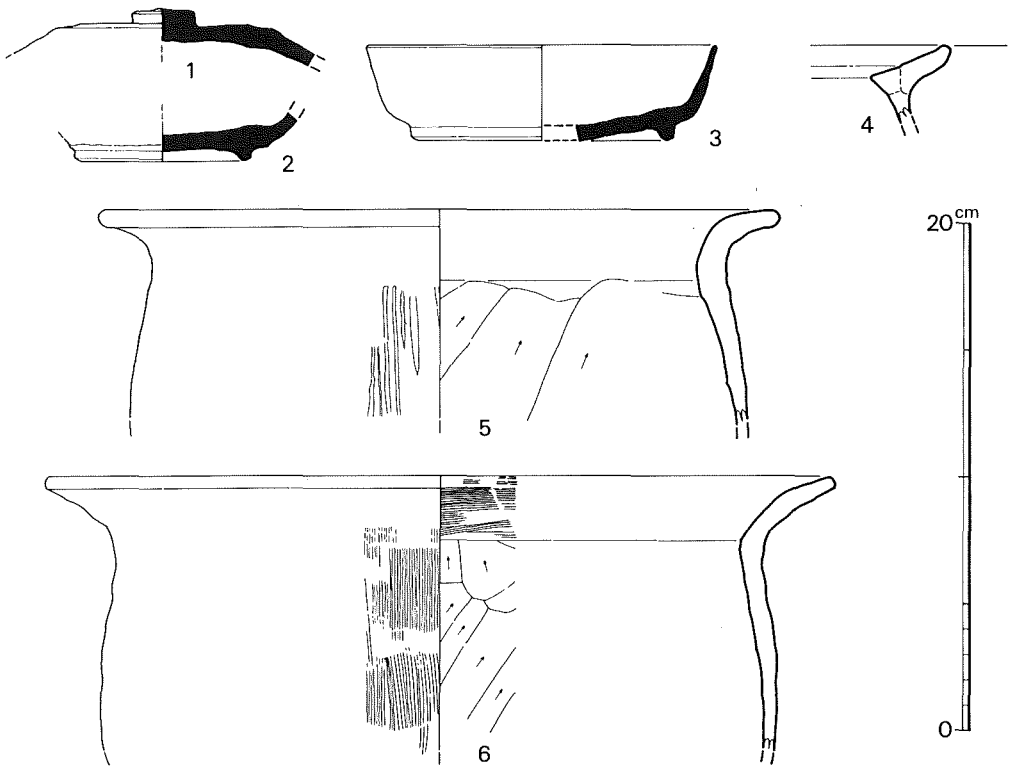


Fig.37　G区出土土器実測図（1/3）

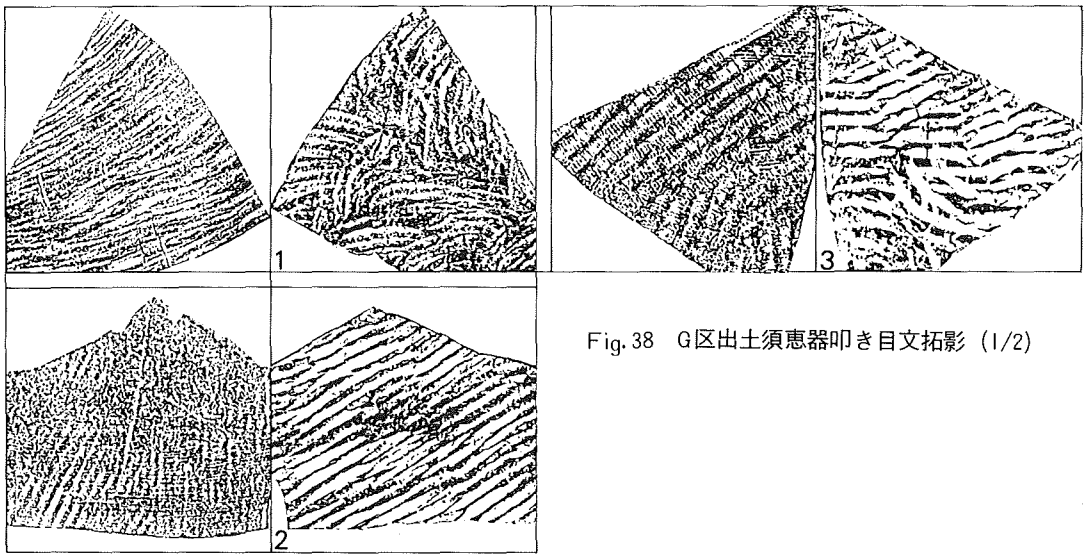


Fig. 38　G区出土須恵器叩き目文拓影（1/2）

高台の有高台杯。③は口径のわりに背が低く，底部から体部にかけての移行は丸く曲線的。Fig. 38の①～③は甕胴部片。①は外面が細かい平行条線文叩き，内面は細かい青海波文当て板痕。②は外面は平行条線文叩きのあとカキ目調整，内面は平行条線文当て板痕。③は外面が連節状平行条線文叩き。内面は青海波文当て板痕を，平行条線叩きで消しているようにみえる。

6．H　区（Fig. 3）

標高6m前後，砂丘の奥部に設定した2×4mのトレンチで，この地点には表面に若干の遺物の散布があった。

①　層位（Fig. 39）

層序はほゞ平行で5層に分けられる。一般にこの20cmで2層黄褐色砂層に変る。一般にこの遺跡での砂丘部の層位はほぼどこの区も同様な層序を示すが，この2層も全体的に若干の遺物の出土は見られるが同時に攪乱気味である。3層は長さ40cmの堆積で暗褐色を呈する。多量の遺物は殆どこの層に集中する所謂遺物包含層である。3層以下は黄色砂層に変り，この層がこのまま厚く堆積している。なおこの区の場合は4層中に軽石が混じる間層がレンズ状にみられた。しかし4・5層共無遺物層である。

②　出土土器（Fig. 40～43，PL. 38～41）

389点の出土があり，土師器301点，須恵器88点にわかれる。個々の器種別点数はTab. 5 に示した。表の「杯等」という項目は，杯・高台杯・皿・蓋などの食器類についての点数で，ほかに甕を除いて壺などを「他」の項目とした。

土師器（Fig. 40—⑧，41，43）

⑧は深みのある杯身で，底部を欠失する。後述する土師器・須恵器に共伴する資料ではなく時期的に溯るものであろう。⑪～⑬は竈と考えられる資料。⑪は焚口右側体部破片で，庇がつく。⑫は体部との接合面から剝落した付庇の最上部付近の破片と思われる。上面端部から5cm

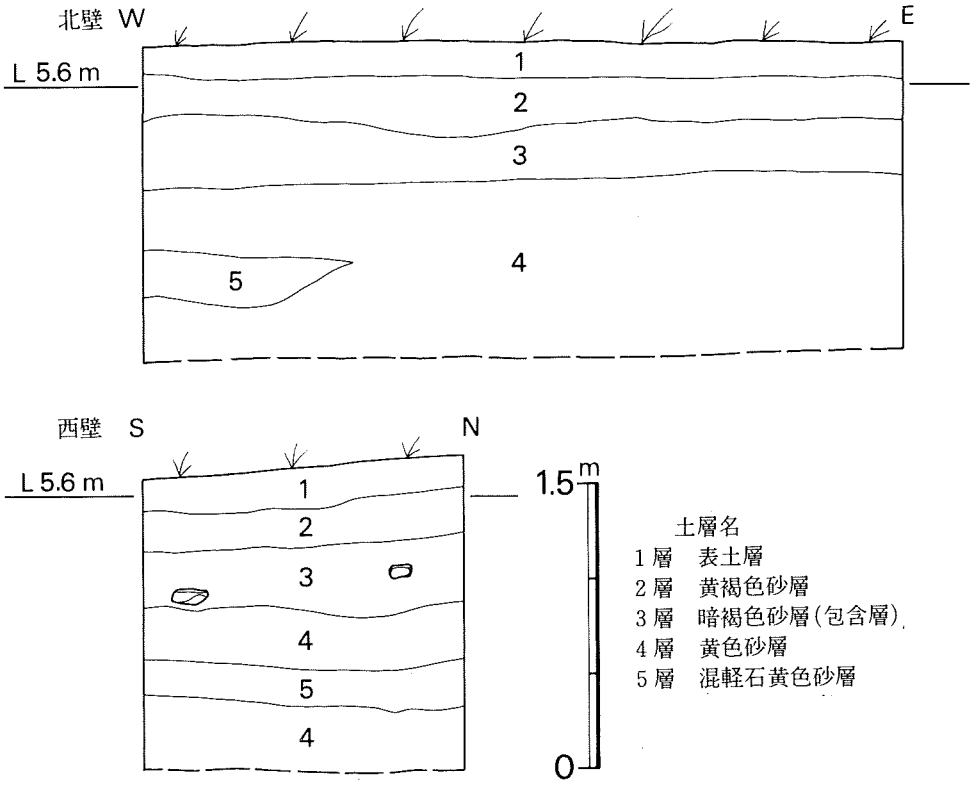


Fig. 39 H区土層壁面図 (1/40)

幅ぐらいに丹塗りにもみえる赤い化粧土がうすくかかる。⑪と同一個体か。⑬は体最上部破片と考えられる。Fig. 43—①～⑧は叩きを有する小形甕細片。外面は①②が太めの平行条線文叩き，③④⑥～⑧は連節状平行条線文叩き，⑤は叩きをナデ消している。内面は①～⑤が細かい平行条線の当て板痕，⑥～⑧は細かい青海波文状の当て板痕。①と②，③と④，⑥～⑧はそれぞれ同一個体であろう。⑨⑩は内面に極細糸の布目痕がつくもので，外面は指頭整形・ナデ仕上げ。

須恵器（Fig. 40—①～⑦，42）

①～③は杯蓋資料。①は扁平な擬宝珠形つまみを有し，形状から身受けかえりをもつものであろう。②③は口縁を折り曲げ嘴状につくるもので，③は鈍角に折れる。④～⑦は有高台杯。④は小形品で下底面にヘラ記号がはいる。⑤⑥はわりとつくりが丁寧。底部から体部への移行は丸く曲線的で，高台はやや長く下方に凹線がはいりつま先立ちのような形状を呈する。⑤の下底面にはヘラ記号がはいる。⑦は底部と体部との境界が強く屈折するため稜を有し，体部は直線的に開く。高台は小さく，接地面に凹線がはいる。⑤は肩部に凹線がはいる壺で，体下端

は手持ちのヘラケズリを施す。⑩は鉄鉢形の鉢で，口縁付近に丹が付着している。つくりは丁寧。①～⑧は甕胴部片の叩き目文の集成である。①～③は同一個体の破片資料で，外面は連節状平行条線文叩き，内面は青海波文当て板痕を同心円状の連節が浮き出る平行条線文の叩きで消したものか。③の内面下端は手の腹でナデ押えたようだ。④は単純な平行条線文叩き，内面は青海波文当て板痕を格子目文叩きで一部消したものか。⑤～⑧は格子目文叩きで，⑤は下端をカキ目調整している。内面は⑦⑧が単純な太めの平行条線文当て板痕。⑤は青海波文当て板痕。⑥は青海波文当て板痕を，同心円文が浮きでる連節状平行条線文叩きで消している。①～③と同じ手法。

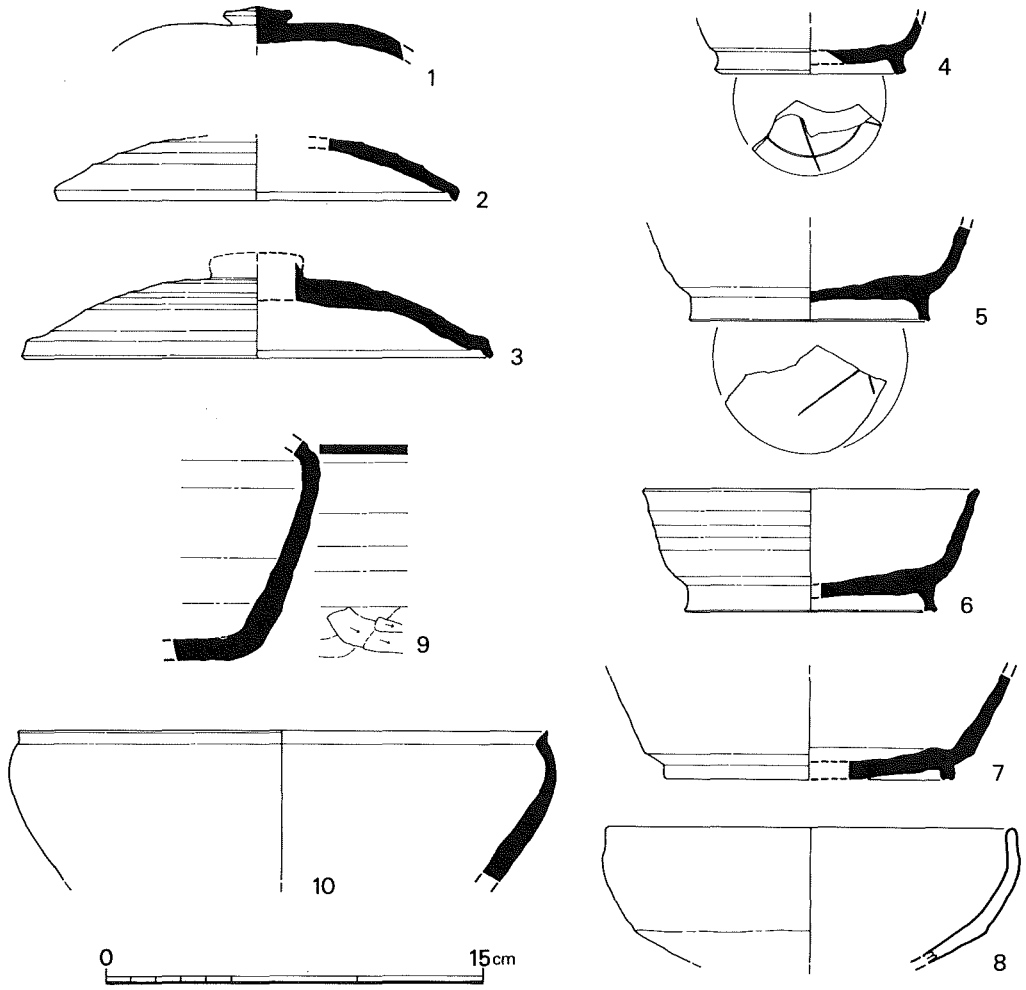


Fig. 40　H区出土土器実測図① (1/3)

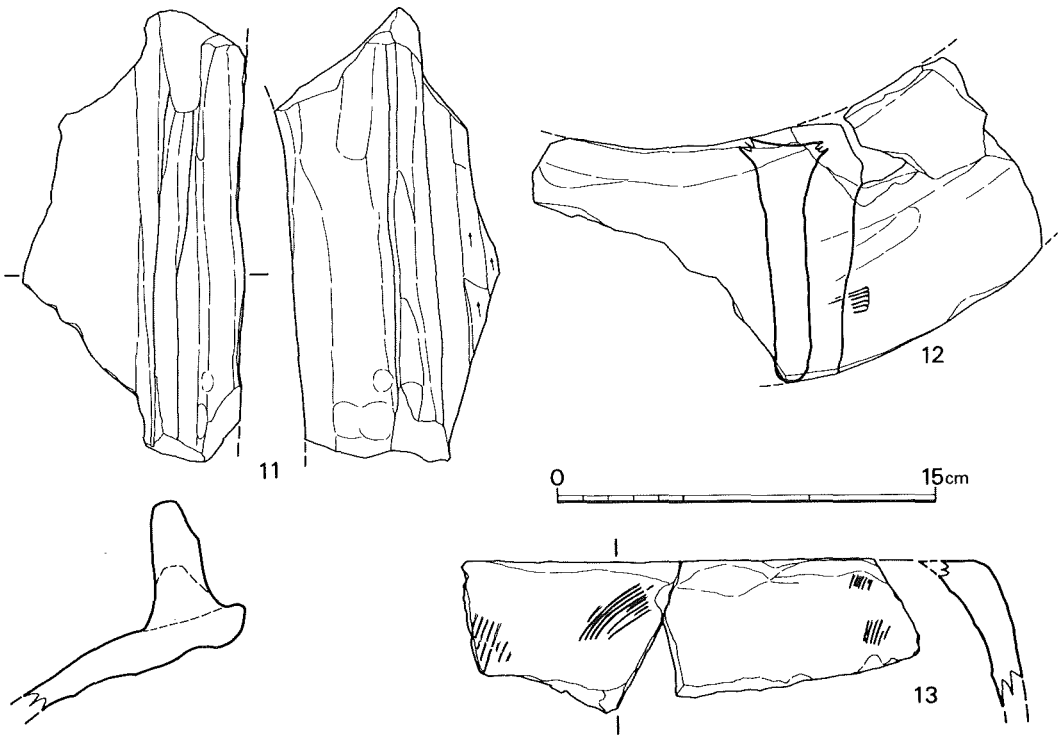


Fig. 41　H区出土土器実測図②（1/3）

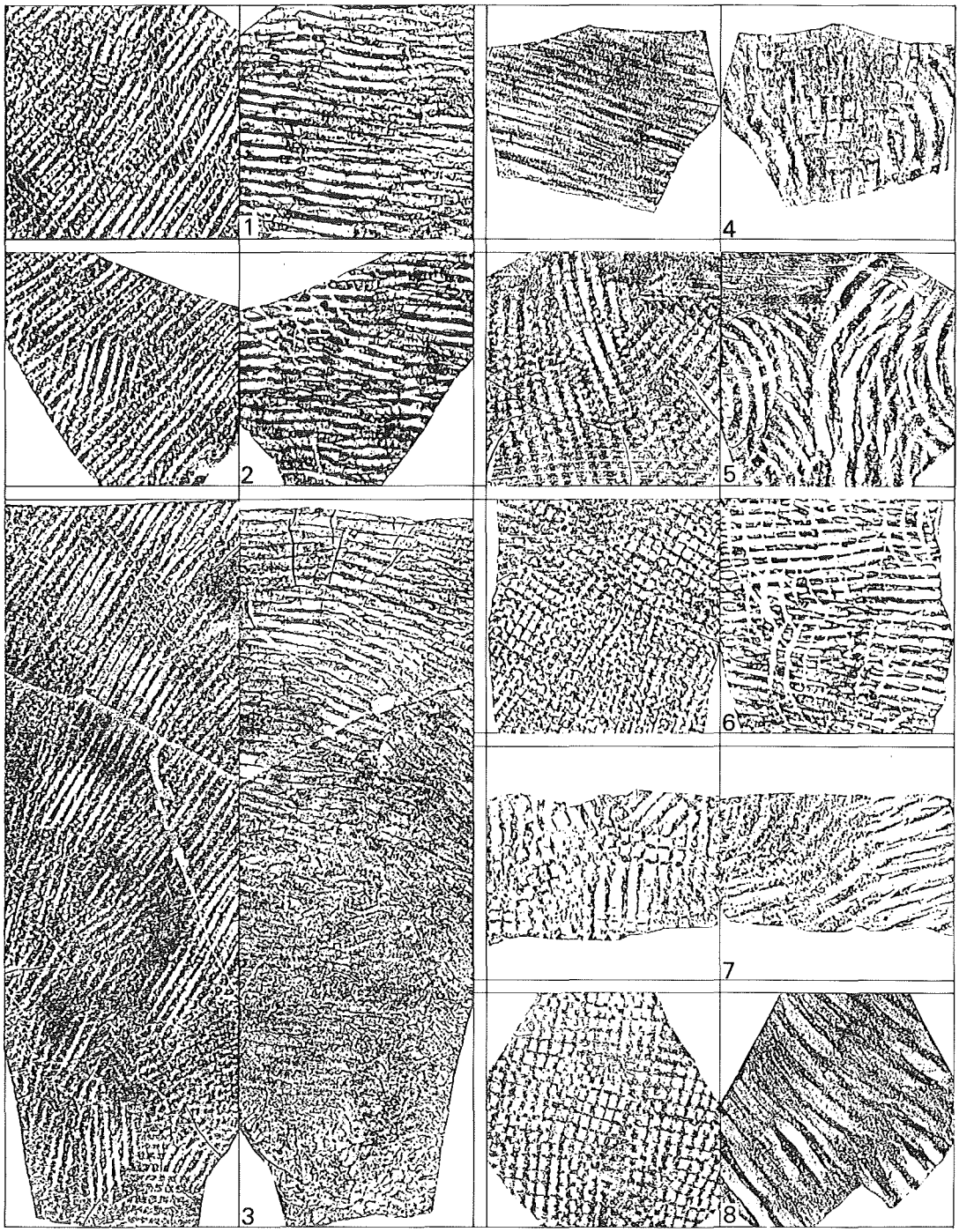


Fig. 42　H区出土須恵器叩き目文拓影（1/2）

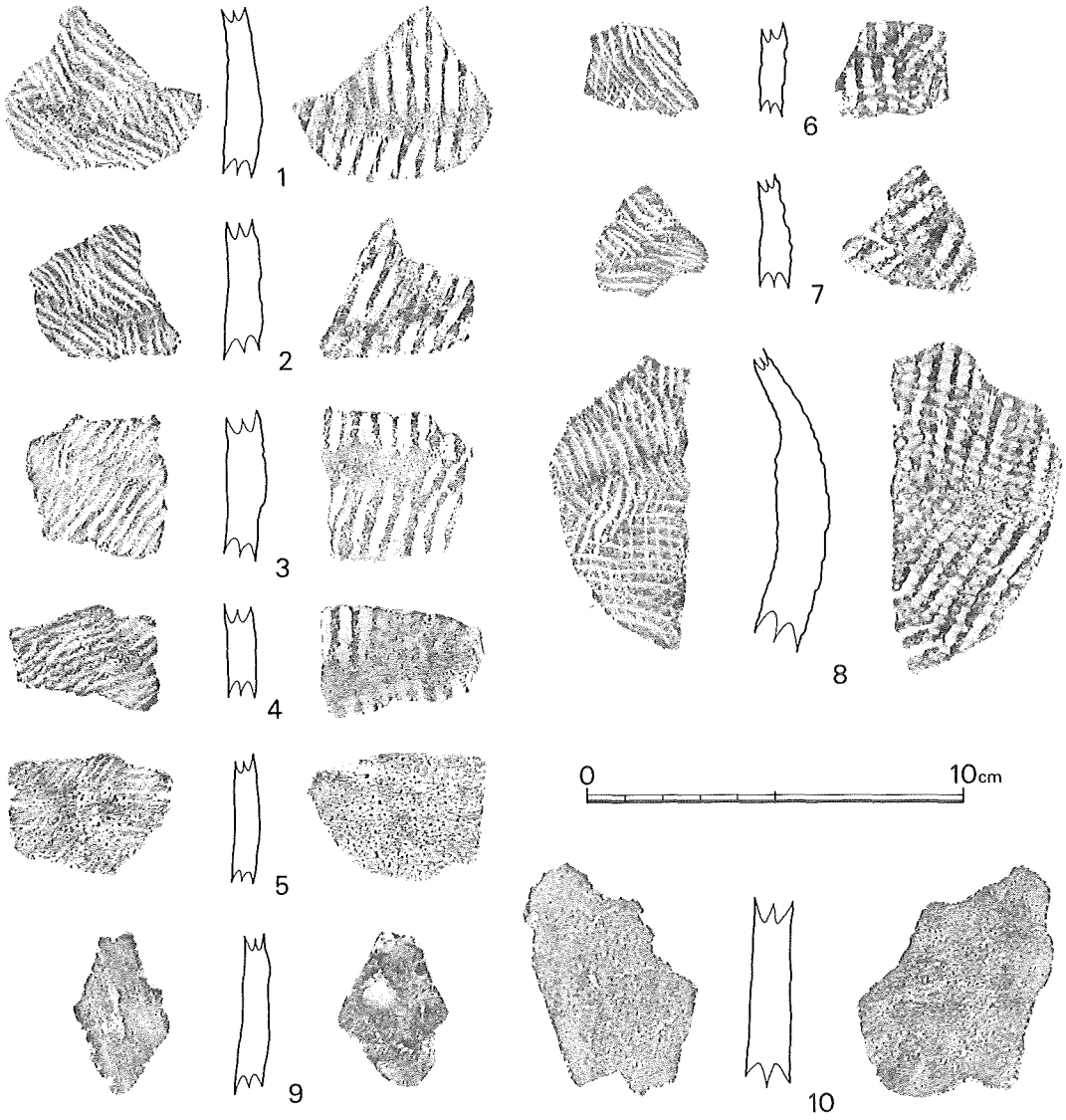


Fig. 43　H区出土叩き目文・布目痕土師器（1/2）

7．J区（Fig. 3）

砂丘部の遺跡の南限をみる為のトレンチで南北に細長く設定した地表面の傾斜は北側でゆるやかであるが，南側は急になる。

①　層　位（Fig. 44）

4層に分かれる。区の南半は表土下にすぐ黄褐色砂層があらわれ以下1m以上にわたって堆積する。区の北半には一部遺物包含層が姿を見せている。従来，この層は黄褐色砂層の下部にみられるものであるが，この区では直接表土直下にあらわれる。この事実は，L区でも認められ，砂丘部の東半と西半とに砂層の堆積の相違が感じられる。しかしその堆積状況は出土遺物

の相違という面からはとらえられないようである。

なお4層として軽石を含む黄褐色砂層がレンズ状にみられるがH区と同様，この中から遺物は出土しない。

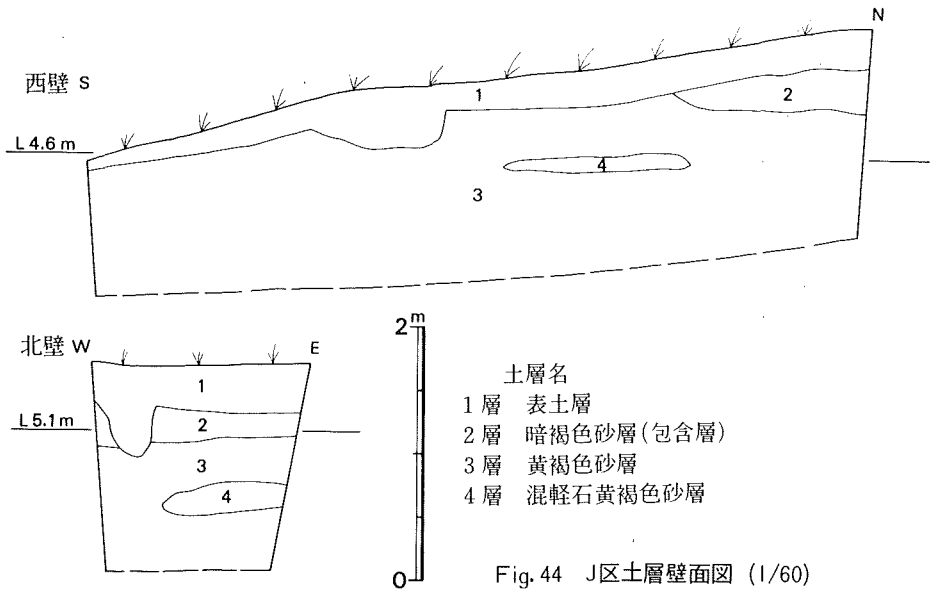


Fig. 44　J区土層壁面図（1/60）

② 出土土器（Fig. 45～47, PL. 42）

157点の出土がみられ，そのうち154点が1層から出土した。

土 師 器（Fig. 45—⑦⑧⑩, 47）

⑦は丁寧なナデ仕上げの杯片で，内底面と体外面にヘラ記号がはいる。⑧は高台杯で，下底面はヘラ切りされる。体部は回転ヘラケズリ，内底面は回転ナデのあと静止ナデのようだ。⑩

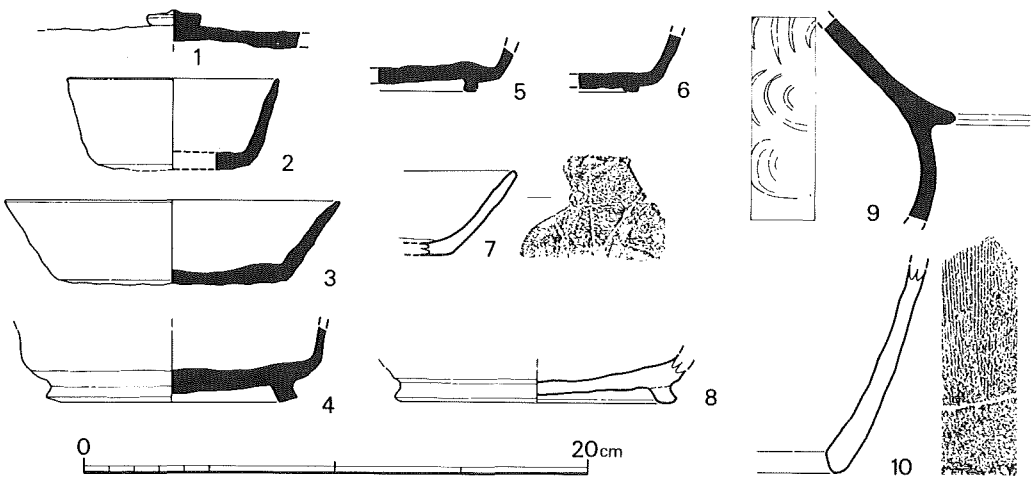


Fig. 45　J区出土土器実測図（1/3）

は甑体下半部片で，穿孔部付近はわりと丁寧なヨコナデ仕上げ。Fig.47は外面に連節状の平行条線文叩きを施すもので，①②とも内面は平行条線文当て板をナデ消している。

須恵器（Fig.45—①～⑥⑨，46）

①は擬宝珠状というより扁平な釦状に近いつまみで，中央部がやや突起する。稜は角がとれ丸味もつ。②③は杯身。②は口径のわりに背の低い小形品。③はヘラ切りされた平坦な底部から体部が直線的に開くもの。やや薄手のつくり。④～⑥は有高台杯。④はふんばりをもつ高台で，外方は鋭い稜がつく。灰黄色で，体部と色が異なる。⑤⑥は小さく低い高台で，底部内側に貼りつけられる。⑨は体部に突帯を有する壺で，8世紀末～9世紀の時期に位置ずけられる。Fig.46は甕胴部の叩き文拓影で，①②は細かい平行条線文叩き，内面は青海波文当て板痕が残

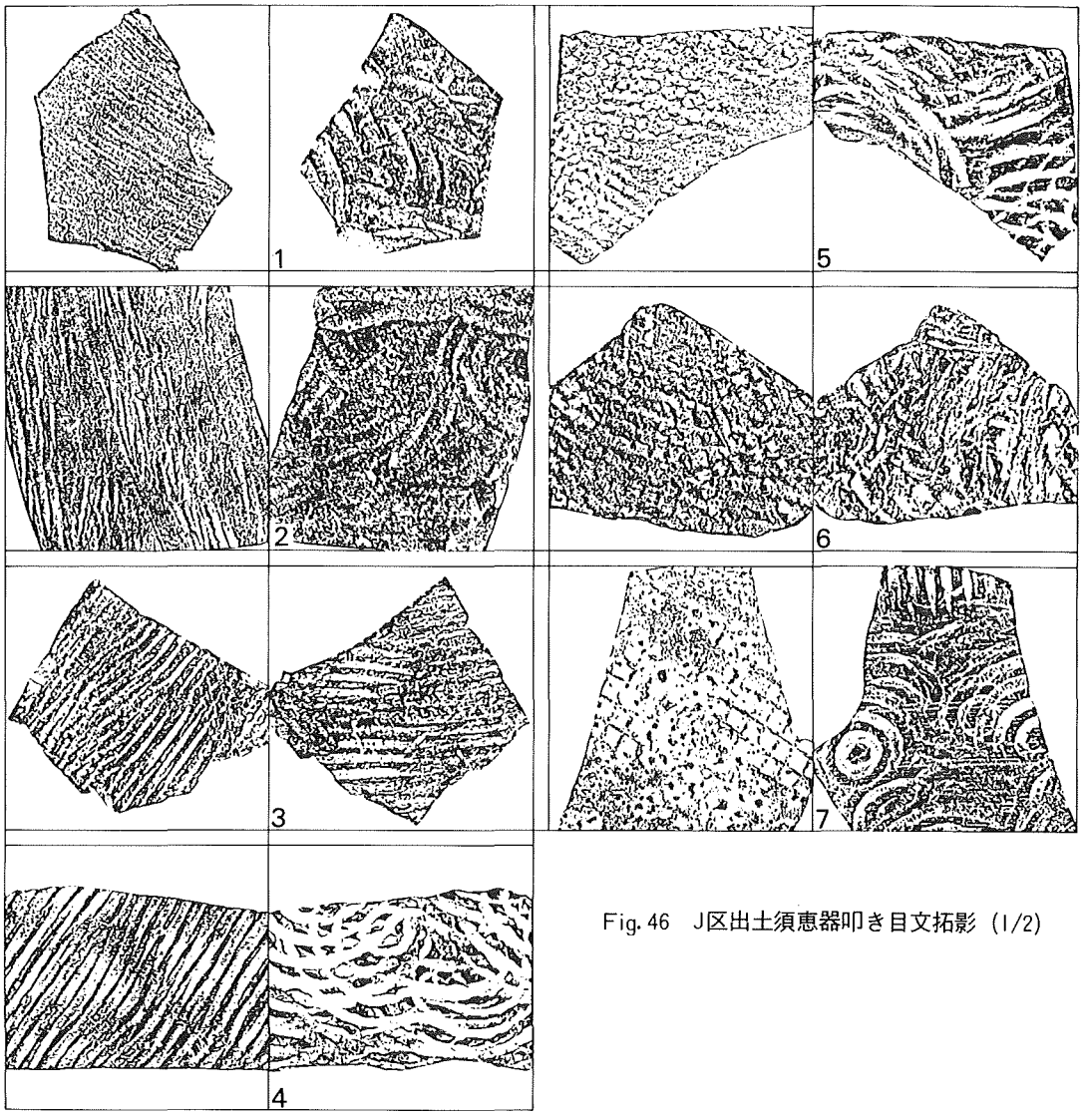


Fig.46　J区出土須恵器叩き目文拓影（1/2）

り，②はナデ消す。③は細かい連節状平行条線文叩き，内面は連節状平行条線文当て板痕。④は太めの平行条線文叩き，内面は同心円文当て板痕。⑤～⑥の外面は格子目文叩き，内面は⑤⑥が青海波文当て板痕が残り，⑥はさらにナデ調整している。⑦は同心円文当て板痕を上端部は平行条線叩きを施しているようだ。

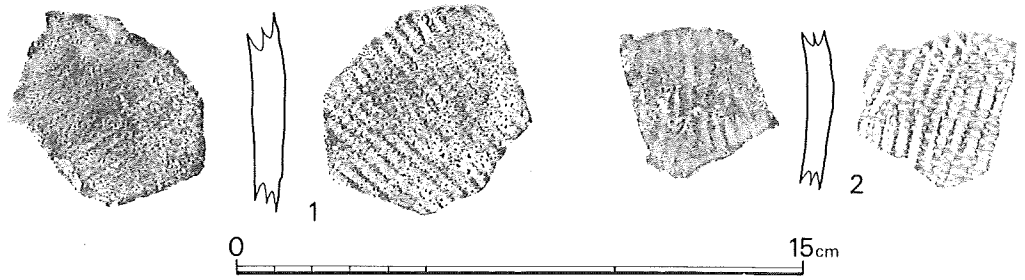


Fig. 47　J区出土叩き目文・布目痕土師器（1/2）

8．K　区（Fig. 3）

J区と同様，砂丘部遺跡の南限をみる為設定した。地表部の傾斜は強い。

①　層　位（Fig. 48）

層は4層に分かれる。表土下は2層として黄褐色砂層があらわれ，そのまま80cm程度の堆積をみる。3層には褐色砂層が帯状に20cm程みられるがその中に遺物は含まない。4層は黄色砂層で他区同様無遺物層で以下深部にまで及ぶ。

この区では1層及び2層の攪乱層から若干の須恵器片と管状土錘が出土している。流れ込みの所産であろう。

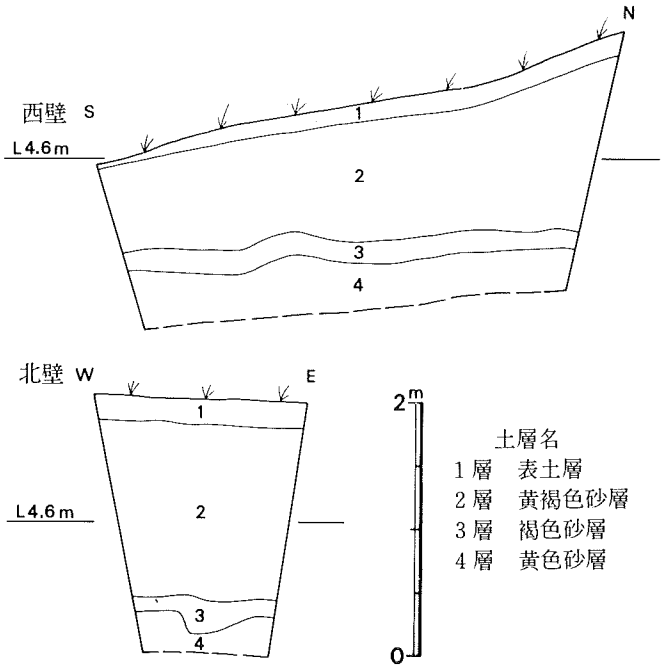


Fig. 48　K区土層壁面図（1/60）

②出土土器(Fig. 49，PL. 38)

26点の出土があり，その内訳は1層から土師器11，須恵器5，弥生土器2，2層から土師器4，須恵器1，弥生土器2，排土中から弥生土器1が出土。他区にくらべ弥生土器5点と多い。

須恵器（Fig. 49—①～③）

①はわりと厚味もつ杯身。下底面はヘラ切リされ平坦で，底部から体部への境は丸く曲線的で，体部は直線的にのびる。②は小形の高台杯，高台

は小さく低くふるばる。③は比較的小形の甕で，つくりは丁寧。口縁端部下方に鋭い稜がはいる。

土　錘（Fig. 49—④）

中位がやや張りだした管状土錘で，29.4g を測る。1層から出土した。

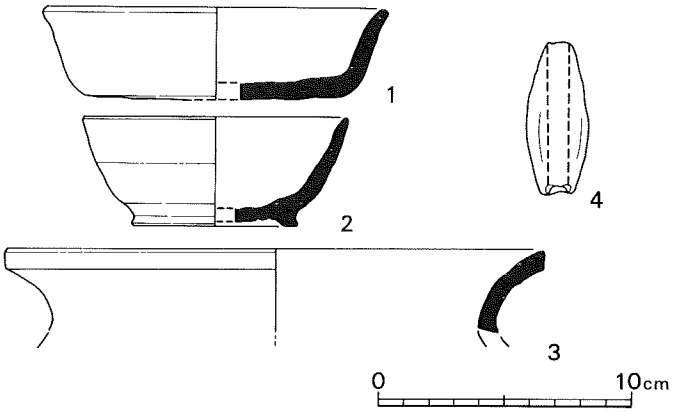


Fig. 49　K区出土土器実測図（1/3）

9．L　区（Fig. 3）

砂丘の平坦部分，標高5.5m前後に等高線に平行に入れた細長いトレンチで，この区からは最も多量の須恵器，土師器，獣魚骨が出土した。

①　層　位（Fig. 50）

5層に分けられる。表土下30cmで次層があらわれるが，東側部には2層黄褐色砂層が薄く堆積し，西半には同レベルで3層の暗褐色砂層をみる。この3層は遺物包含層で約40～50cmの厚みを持つ。その下層には黄色砂層が拡がり，下端に僅かに5層褐色砂層があらわれている。この4，5層共に無遺物層であるが一部遺物が4層中に含まれている。調査時の混入か，あるいは部分的な落ち込みがあったのかも知れない。何れにしても，確たる包含層で無い事は間違いないだろう。

②　出土土器（Fig. 52～57，PL. 44～46）

出土土器は1136点で，砂丘部地区のなかでは群をぬいて出土量が多い（Tab. 5）。その器種別組成比率をグラフにしたのがFig. 57である。土師器85%・須恵器15%に分れ，組成的には比較的単純な様相をもっている。用途別に考えると，土師器甕・竈の煮炊具が80%近く占め，食器類である杯・有高杯・蓋などが14%以上で次に多く，貯蔵容器である須恵器甕・壺（その他）は5～6%という成績がでた。煮炊具の割合が多いこと，食器類・貯蔵器の割合が少ない点な

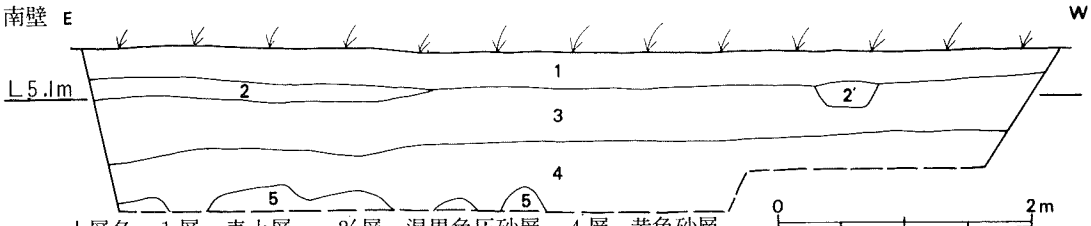


Fig. 50　L区土層壁面図（1/60）

どが指摘できよう。

Fig.51は遺物包含層である3～4層の出土土器分布図である。3層は西側から東側へやや厚味を増し傾斜し，東側に多く集中し，4層も東側だけに遺物が出土した。250点のとりあげ土器のうち233点までが3層に包含されたもので，あとは4層から出土したものである。このなかで，17個体分の接合関係が認められた（Tab. 3）。実線は接合関係，破線を同一個体と考えられるものと結んだ（Fig.51）。これによれば，3・4層の区別無く接合あるいは同一個体と考えられるものがある（15と2）。調査中の誤認も考えられぬこともないが，3層と4層の区別が容易につきやすかったので，むしろ層自体だけでは遺物を厳密に分離するのは困難であると考えたい。また砂層という性格も考慮にいれなければならない。

Tab. 3　L区出土土器接合関係表

層	No.	接合関係	同一個体	Fig.番号	
3層	11	5・89		52－5	
	10	11・16		52－4	
	9	25・26・98			
	4	40・44			
	3	42・45			
	1	58・60・3層	53・56・87	54－37	
	6	59・63・66・3層		53－29	
	5	64・137・1層			
	8	108・157・3層			
	7	116・117			
	14	172・174・185			
	13	178・192・208		53－27	
	12	215・232			
	2	198・219	234	52－11	4層
	5	224・236			
	17	239・240			
	16	244・245			

土師器（Fig.52—㉔，53—㉗～㊱，56）

㉔は底部と体部の境に高台がつく杯で，体部は直線的に開き，高台は小さく強く屈曲する。㉗～㉝は甕で，㉗は小形の甕，㉘㉙は比較的大形のものである。㉘は体部が直立的で，㉙は丸く張りをもつ。口縁の形状では，外弯するもの（㉗～㉙㉛㉝）と「く」の字状に外反するもの（㉚㉜㉞）に区別される。㉟㊱は竈で，㉟は焚口左側辺上部で庇がつく。㊱は体部下端あるいは上部かと考えられる破片である。Fig.56の①～⑤は叩きを有する小形甕片。①～③は外面に連節状の平行条線文叩き，内面は細かい平行条線文当て板痕。④⑤は疎な格子目ふう叩きを有し，内面は細かい平行線文当て板痕。同一個体と考えられる。⑥～⑧は内面に極細糸の布目痕を有するもので，外面は指整形・ナデ仕上げであろう。

須恵器（Fig.52～55）

①～⑩は杯蓋で，身受けかえりを有するもの（①～③），口縁端部を折り曲げ嘴状につくるもの（④～⑩）に分けられる。さらに後者は，釦状つまみのものあるいは有すると考えられるもの（④～⑥⑩）と輪状つまみのものあるいは有すると考えられるもの（⑦～⑨）に区別できる。口縁端部の屈曲は，⑥はやや長めで，⑩はほんの痕跡程度になっている。杯身（⑪～⑮）は，底部から体部の境が丸く曲線的で，体部のたちあがりもやや曲線的なもの（⑪～⑬）と，平坦な底部から体部は直線的に開くもの（⑭⑮）に区分される。⑪は高杯杯部とも考えたが，体中

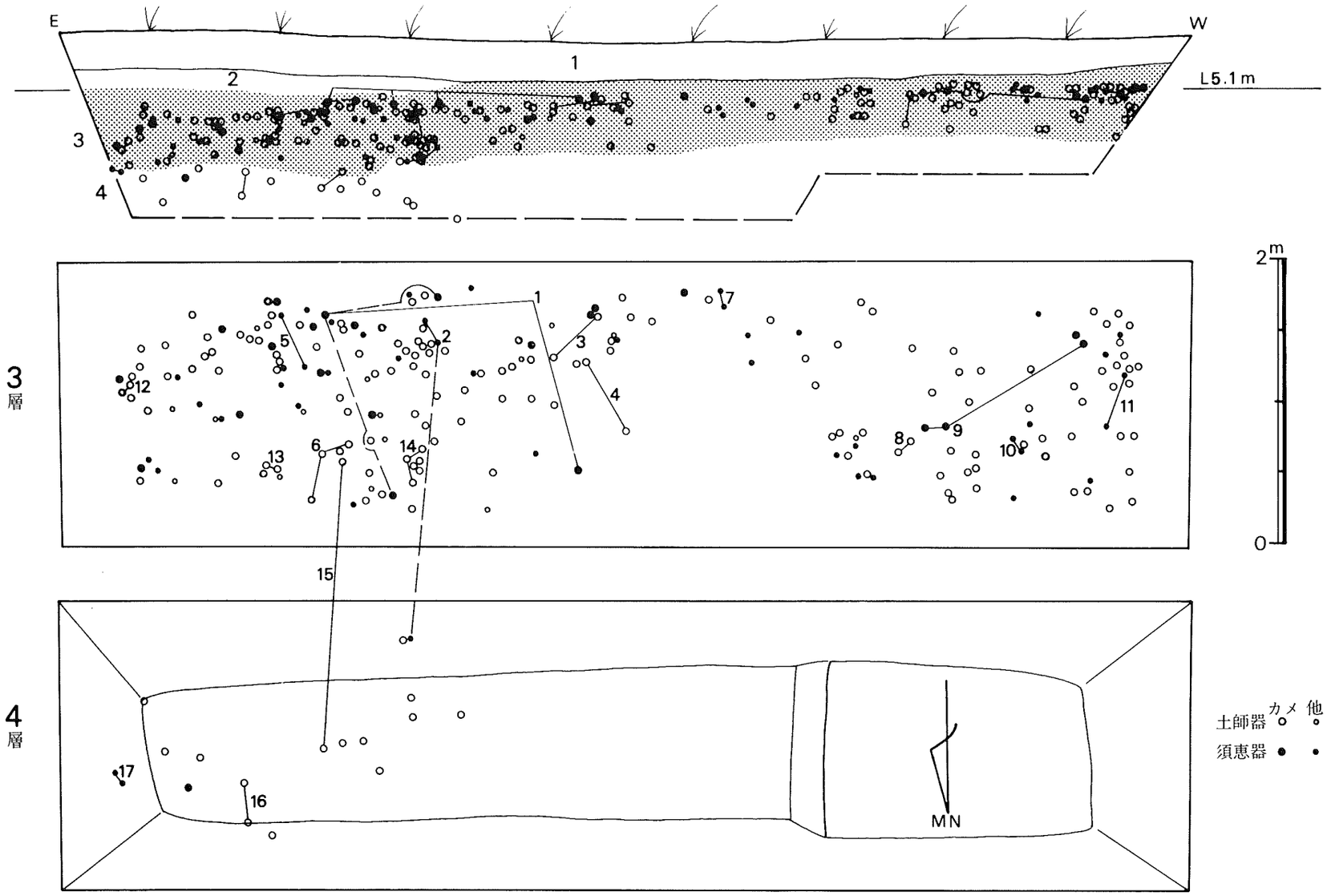


Fig. 51　L区遺物分布図①土器（1/40）

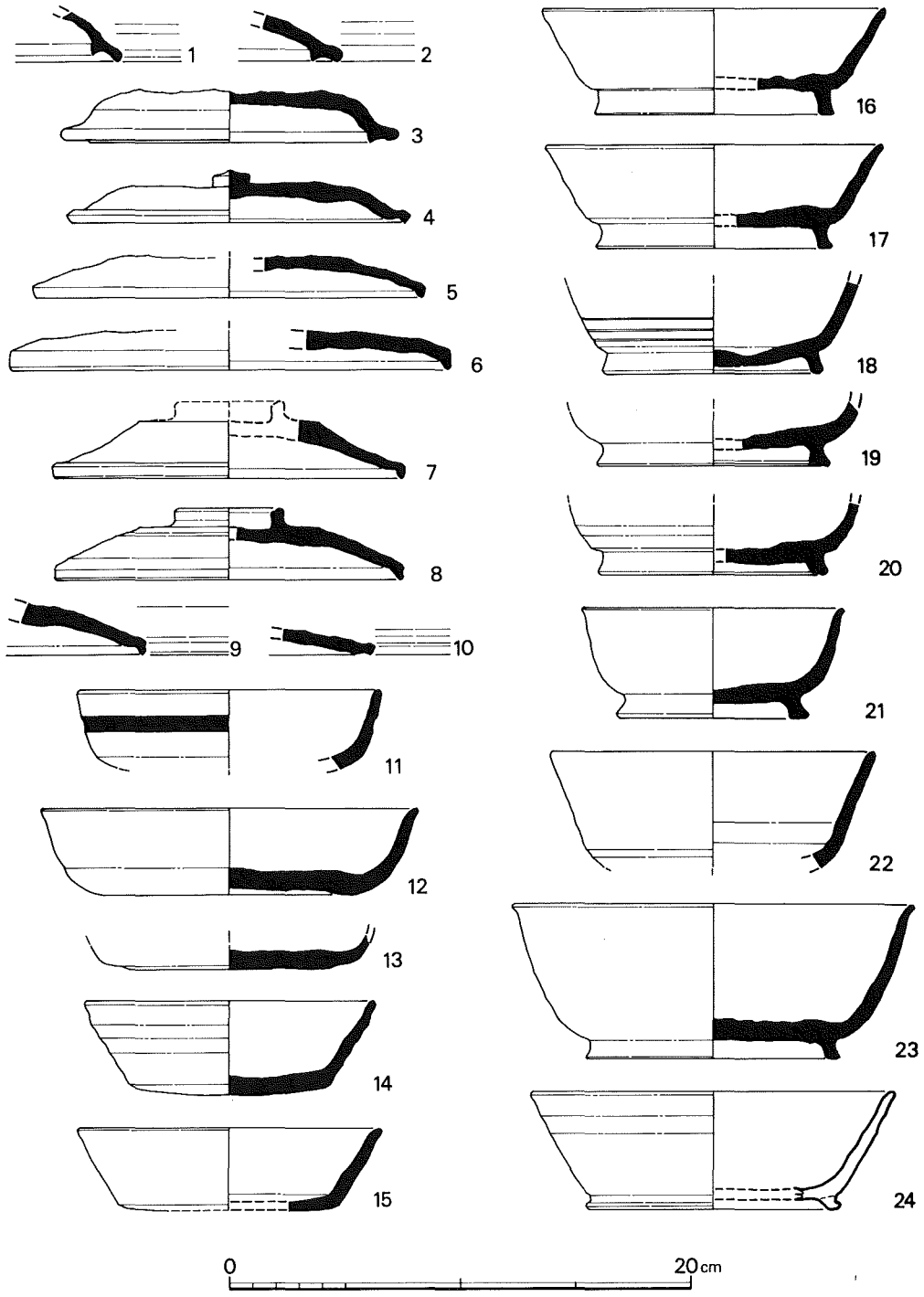


Fig. 52　L区出土土器実測図①（1/3）

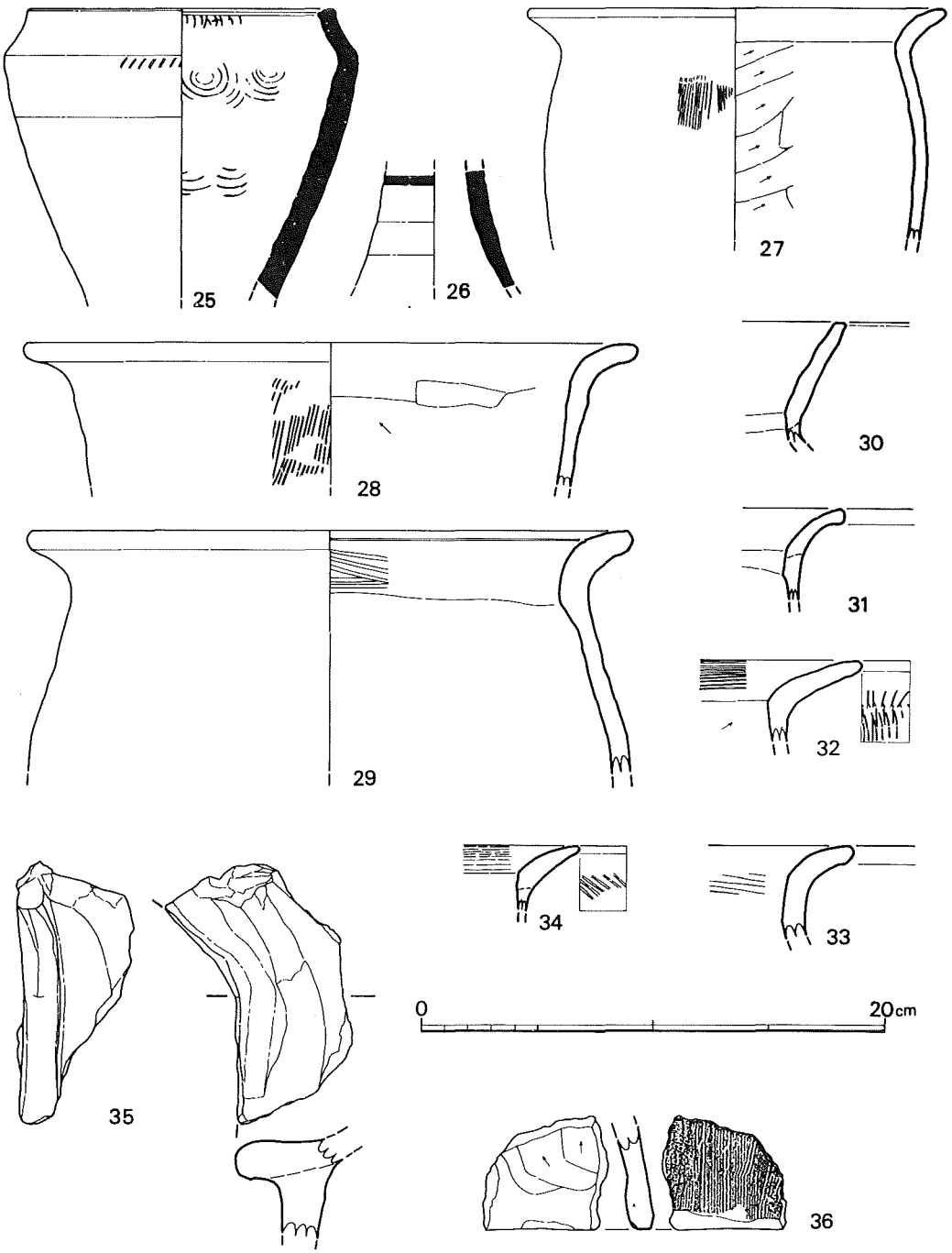


Fig. 53　L区出土土器実測図②（1/3）

程に条線がめぐり他のものに比べて古手のものである。⑭と⑮は，口径のわりに背の高い深みのあるもの⑭と，口径のわりに背の低いもの⑮にさらに区別できる。⑯～㉓は有高台杯。㉑は口径のわりに深みのある小形品。⑯⑰は口径のわりに器高が低く高台がやや長めでふんばりは弱い。⑱～⑳，㉒㉓は口径のわりに背の高いもので，底部から体部境付近は丸く曲線的にたちあがる。高台はやや短めになりふんばりをもつ。㉕は長胴の無頸壺。口縁端部は条線ふうに凹む。㉖は高杯脚部片，上端に沈線状の凹みがはいる。Fig. 54・55は甕で，㊲は器形がある程度復原できた唯一のもので，肩がやや張る大形の甕である。Fig. 55は叩き目文の集成である。外面は，①②が細かい平行条線文，③⑤は太めの平行条線文叩き，④は連節状平行条線文。⑥～⑨は格子目文で，⑥はナデ消している。⑧・⑨は長方形格子目文叩きのあと，平行条線文叩きを行っている。内面は，青海波文あるいは同心円文当て板痕を，②は幅5㎝ぐらいの器具でナデ消しており，⑤は格子目文叩きで消しており，⑦は同心円文が浮きでる連節状平行条線文叩きで消している。

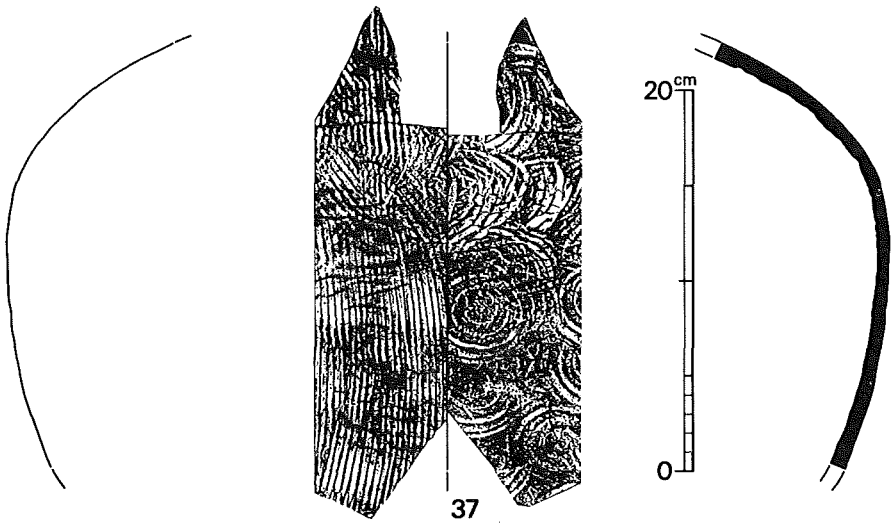


Fig. 54　L区出土土器実測図③（1/4）
（Fig. 55—④と同じ）

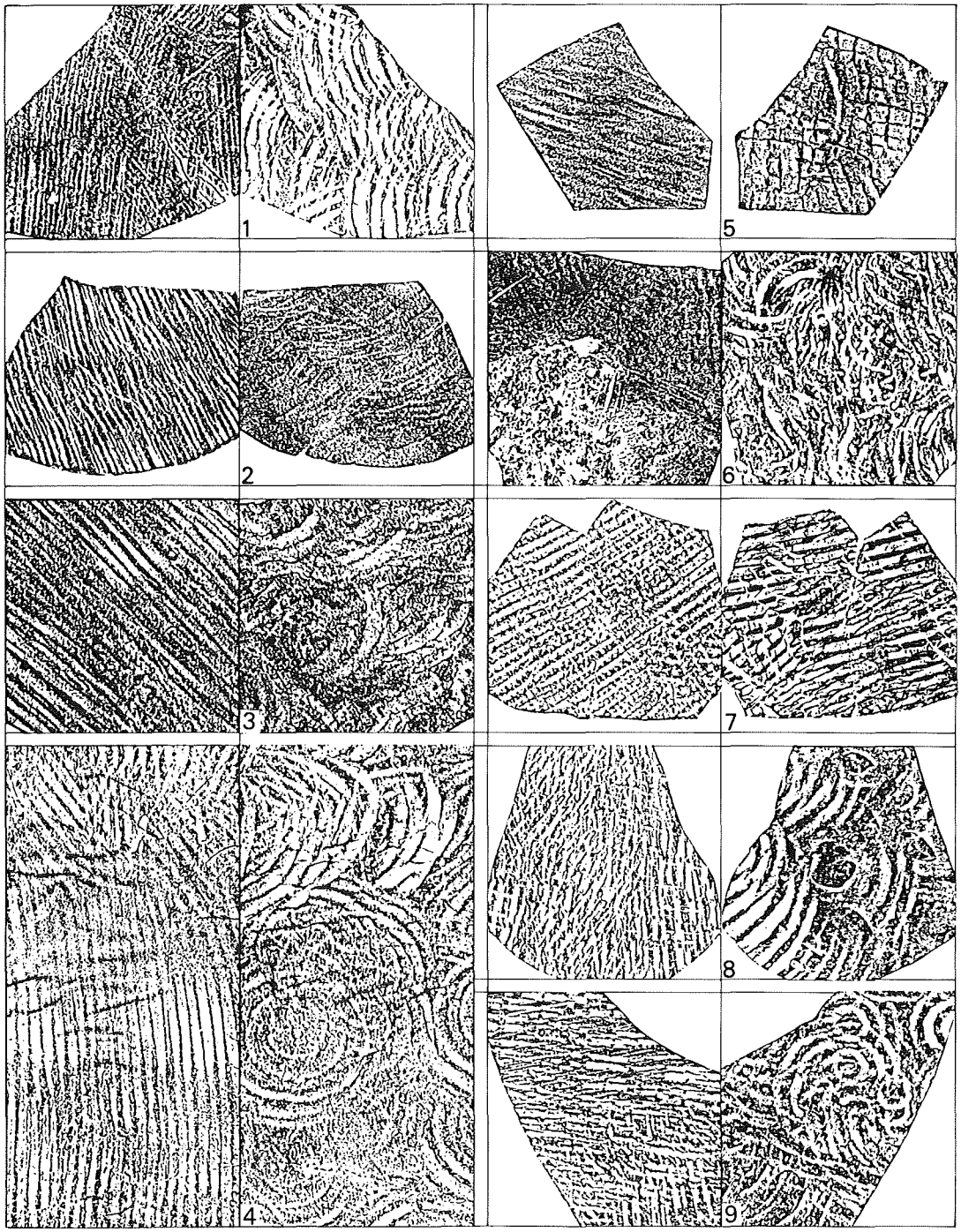


Fig. 55　L区出土須恵器叩き目文拓影（1/2）

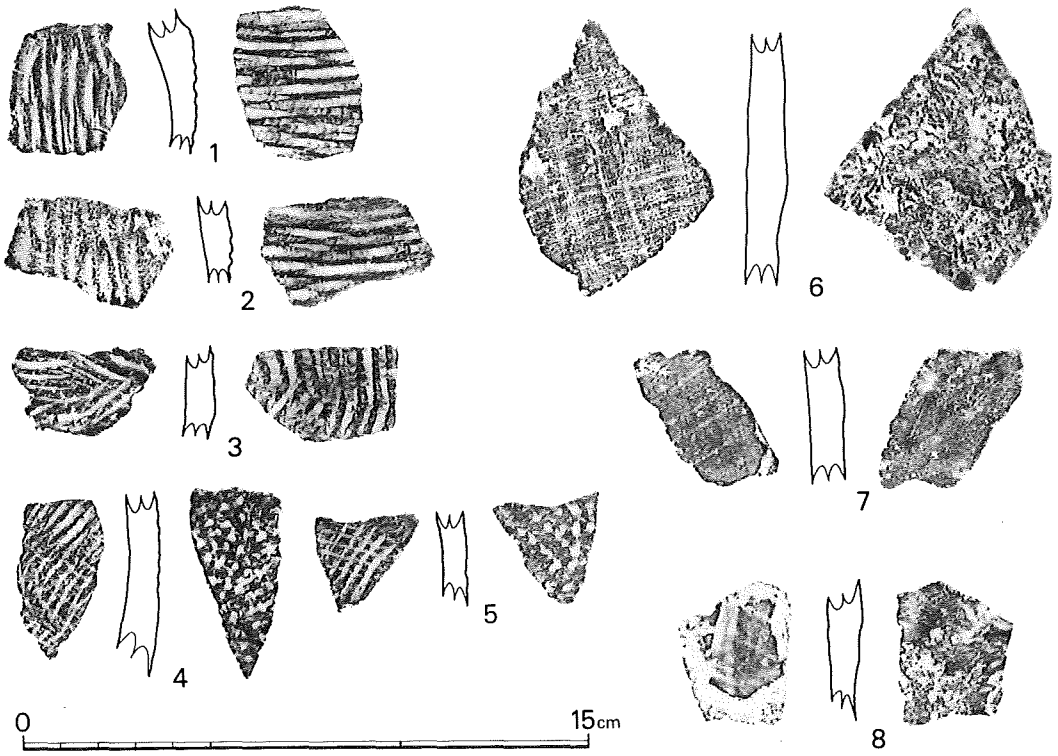


Fig. 56　L区出土叩き目文・布目痕土師器（1/2）

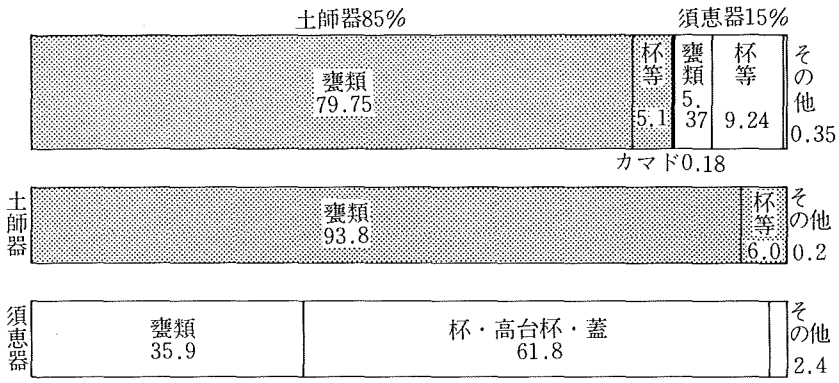


Fig. 57　L区出土土器組成グラフ(%)

③ 獣魚骨出土状況（Fig.58）

獣魚骨は，３層も特に東側に多量の出土があった。その出土状況は集中的で，土器も合わせると正しく足の踏み場も無い程であった。又，アワビ等の貝殻も相当数出土したが，砂丘中の出土にしては何れも風化がひどくぼろぼろで取り上げ後も形を成すのは少なかった。

多くの骨類の中には12個の骨角器が混入していた。この内ドットマップで記録したのは４個で他は，表土中や攪乱気味の層の中にあったものと思われ，特別な遺物番号は附していない。

④ 骨角器（Fig.59・60，PL.56・57）

骨角器は12点出土した。２の鹿角を除いて，全て鯨骨製である。

1．現存長16.5cm，直線的で両端共折損するが，上端には一部に平坦な面がみられ，又下端にも切断の為の切削痕がみられる事から，あるいはこれが目的の長さであるかも知れない。材は，海綿質の部分のみを残して３面共随所に削り痕が明瞭であり，又ａ，ｃの両面には丁寧な研磨の痕もうかがえる。しかし未だ使用に供した痕跡は無く，何らかの未製品と思われる。なお，切断痕はかなり鋭く，薄い金属製の刃の使用が考えられる。

2．鹿角の先端部を利用したもので先端部は意識的に両側より削って薄くし，しかる後，片側より一度穿孔しかけているがうまくいかなかったものとみえ今度は反対側より穿っている。最先端部は切断の後，面を整えて研磨を施す。下端は折損の為明瞭で無いがゆるやかに弯曲するものと考えられる。

3．断面が薄い箱形になるものと思われるが，上下，及び側面を若干折損している。表面は削り痕が明瞭で一方の側面と共によく研磨しているが裏面にはその痕跡はない。

４，５，６は同じ用途を持つ製品で何れも完形に近く，重量も又６～８ｇとほゞ等しくする。

4．片側を欠損するが元来９cm程度あったと思われる。両端に穿孔があり先端には刻み目のようなものがみられる。使用痕と見て差しつかえあるまい。断面はレンズ状を呈し中心ほど厚く両端は薄い。作り方は丁寧である。

5．４に比して全体的に厚みがあるがその中央部を意識的に厚くしているのは同様である。又穿孔部分は穿孔し易くする為か両端を削ってやゝ平坦にしている。やはり片側を欠損する。

6．ほゞ完形であるがやはり穿孔部分を一部欠損している。作業にあたっては，片面に海綿質を残すがよく形を整える為の削り痕がみられる。

7．下方を欠損する。形はよく整えられ研磨の痕跡も僅かながら伺える。

Tab. 4　骨角器計測表

図番号	遺物番号	長(cm)	巾(cm)	厚(cm)	重量(g)
1	ＬＮ16	16.5	最大 3.3 最小 1.1	1.5	50
2	ＬⅠ	4	径	0.9	2.6
3	ＬⅠ	4.5	1.5	0.7	3.5
4	ＬＮ187	8.2	1.5	最大 0.8 最小 0.3	5.9
5	ＬＮ154	8.2	1.5	最大 1.1 最小 0.7	8.2
6	ＬＮⅢ	9.7	1.6	最大 1.1 最小 0.5	8.1
7	ＬⅠ	2.9	2.6	0.7	3
8	ＬＮ103	15.1	2.3	1	22
9	ＬＮ103	10.7	2.6	1.4	17.2

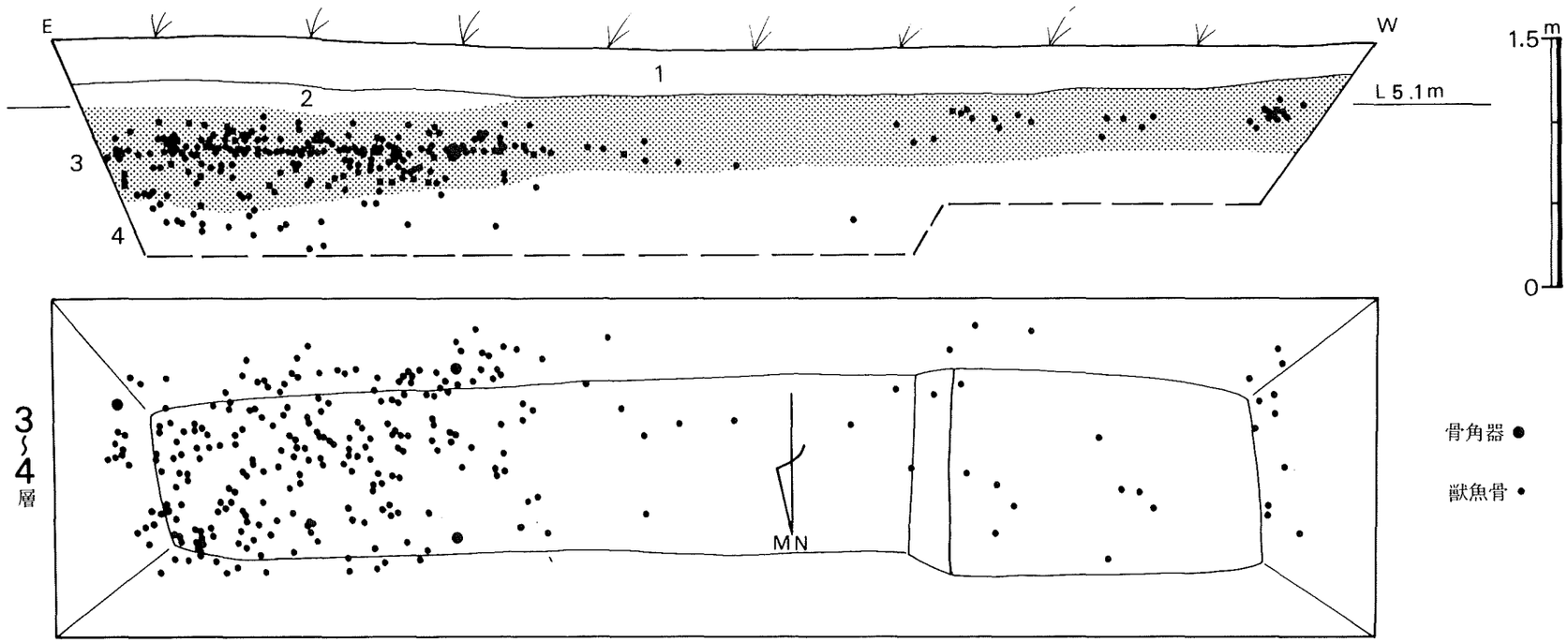


Fig. 58　L区遺物分布図②獣魚骨（1/40）

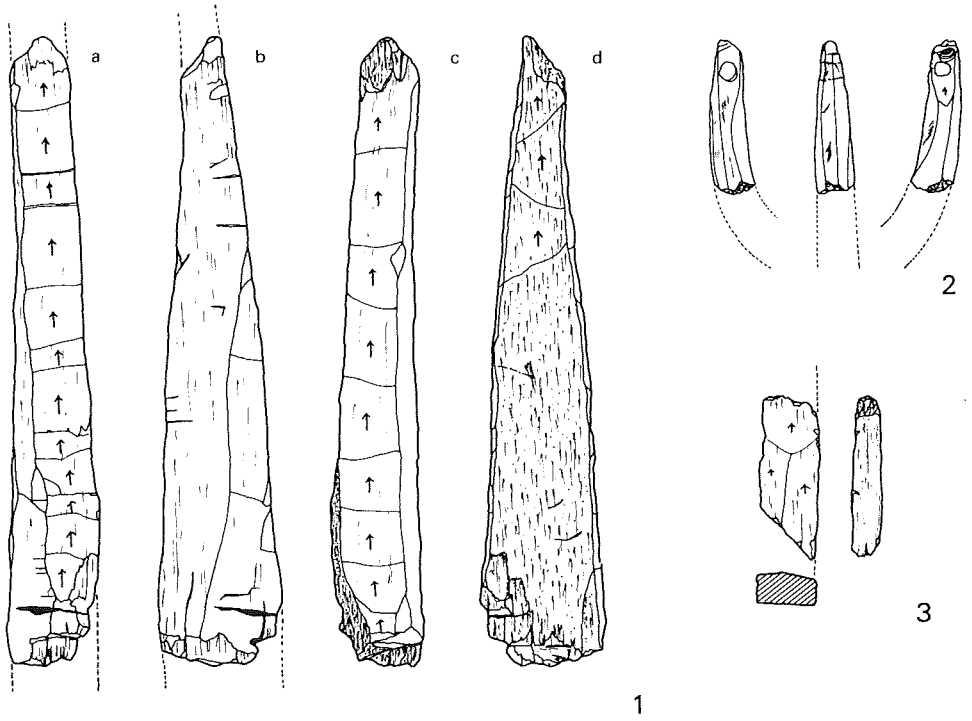


Fig. 59　骨角器実測図① (1/2)

8，9はもともと1個体のものと思われるが中途部分が欠落する。何れも裏面に海綿質を残し，表面には無数の切り傷がみられる。その傷の方向はある程度一定しているが全体的にまんべんなくつけられ，特定部分から切断しようとの意図は感じられない。9の側面にはかすかな研磨痕がみられる。以上が骨角器の概略であるが細部については計測表をのせておく。(Tab. 4)

次にその用途について考えておきたい。1，8，9については未製品と思われる為，詳細は不明である。3は製品と思われるが小片の為これも不明と言わざるを得ない。7は，その大半を欠損するが，大旨扁平なヘラ状製品と思われ，その形状は壱岐，カラカミ，原ノ辻遺跡などでもよく知られる「あわびおこし」[註1]に類似する。2はカーブの延長を想定すると釣針形に近いものと思われるが，用途については不明である。先端部のカットや穿孔，あるいは，返しの無い事等を考えると釣針の可能性は薄く，又装身具であるとも思えない。しかし実用品である事は疑い無く，形態こそ違え，一種の編針ではないかとの教示があった[註2]。4，5，6は何れもその法量が等しく，又，6のように，通常避けた痕跡のある海綿質をも含むなど骨質の何如を問わない例がある事を考えると，ある程度規格性を持ちながらかなり大量に作製された可能性がある。又，穿孔部分の磨耗状況は主に長軸方向に顕著で，その使用については径2～3㎜程度の繊維状のもので緊縛したものではないかと思われる。

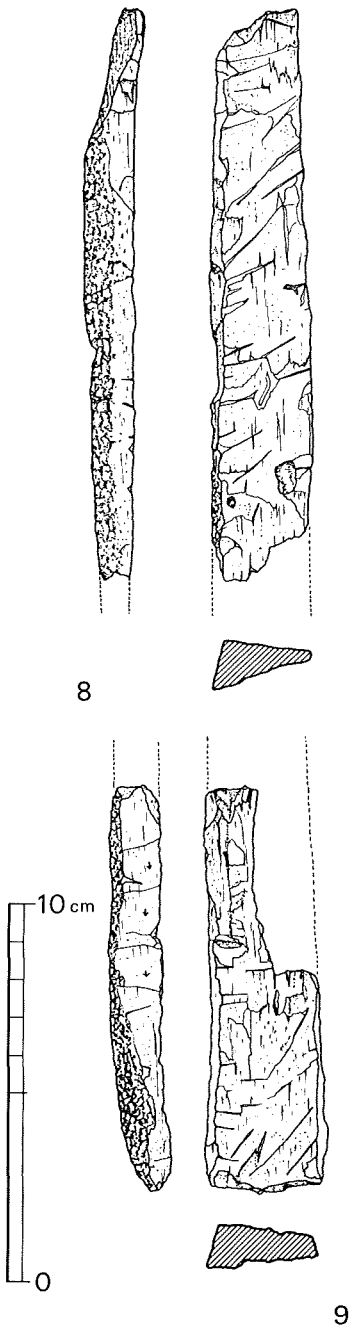


Fig. 60　骨角器実測図② (1/2)

このような製品は類例に乏しく，僅かに北海道オカレンバウシ貝塚[註3]に鹿角製のものが認められるが用途は不明とされている。只出土地は何れも海浜部であり，漁業と深い関係を持つものと思われる。そしてその場合，漁網の沈子[註4]，あるいは漁網の網縁や又，何らかの結合具としての可能性を考えておきたい。但し沈子とした場合その重量は気がかりである。8cmの長さの割に1個約8g程度では仮に20mの長さの網に横に5cm間隔に装着してもその数は150個前後，重量にしてやっと1.2kgでその点土錘等と比してむだが多い。又，網の自重を考慮に入れて

も波の荒い外洋には向かないものと思われる。事実E区，K区，L区では管状土錘の出土がみられる。しかし,沈子の役目のみで無く網のもつれなどを防ぐ目的[註5]があるとすればそれはそれで十分な役目を果たすものと考えられる。

後者の網縁具として使用する場合は主に縦に連結するものと思われ，ある場合には網と網の連結具としても併用されたかも知れない。

この他にも種々利用法は考えられようが，先述した如く漁具[註6]としての可能性が最も強いものとして理解しておきたい。

なお，以上の骨角器は，何れも砂丘部よりの出土であり，伴出土器よりその時期は古墳末～奈良期に比定して大過ないものである。

註1　岡崎敬　1978「倭の水人」日本民族と南方文化

註2　立平進氏教示。又，五島在住，松崎久磨氏は木製で返しのある大型釣針型の網道具を収集しておられる。最近まで使用されていたらしいがその用法は明瞭ではない。

註3　清野謙次　1969「釧路国厚岸町オカレンバウシ貝塚」日本貝塚の研究。
2個出土し，1は長径8.2cm・短径1.32cm 1個の孔がある。2は長径8cm・短径2.3cm，両端にそれぞれ1孔がある。何れも鹿角製で用途は不明とある。

註4　立平進氏教示。

註5　下川達彌氏教示。

註6　川合角也　1915「漁網論」水産社。同形態の浮子は何種類か掲載してある。

追……木村氏への獣魚骨鑑定依頼資料の中に，下記の3点の骨角器が混入していたので追記しておく。

1．(PL.57)は，鹿角の根元部分を利用したもので，先端を薄く加工した後穿孔している。半分を欠損し，現存長5.6cm，巾1.4cm，厚さ1cm，重さ5.2gを計る。L区Ⅲ層出土で，形態，用途共に，Fig.59の4，5，6と同じものとみて差しつかえあるまい。

2，3．(PL.57)は，共に鯨骨で，未製品である。薄く盤状に削り，表面をよく研磨するH区の表層より出土している。

10. M　区（Fig. 3）

K区で遺物包含層が見当らなかった事から，その上部に2×5mのトレンチを設定した。

①　層位及び遺構（Fig.61）

層位はH区と同様表土下に黄褐色砂層があらわれ，その下に暗褐色の遺物包含層が認められた。そしてこの層の中でも炭化物を多く含む場所がありそこに炉址と思われる遺構が出土した。炉址は全容を検出していないが，径1m前後，小礫で囲み南側が開口する半円形のもので礫の上面レベルはほゞ等しい。なお，囲みの内側には石の焼けた痕が明瞭であった。この事からもこの場で火を使用していた事は明白であるが遺構の周囲に散乱する土器片，獣骨の出土からみて，単に暖をとる為のものでは無く煮炊きの用に供したものであろうと思われる。又，この区内にはその他の遺構は見当らず，又ピットと思われるものも認められない事からこの炉址は当初より屋外に設けられていたものであろう。

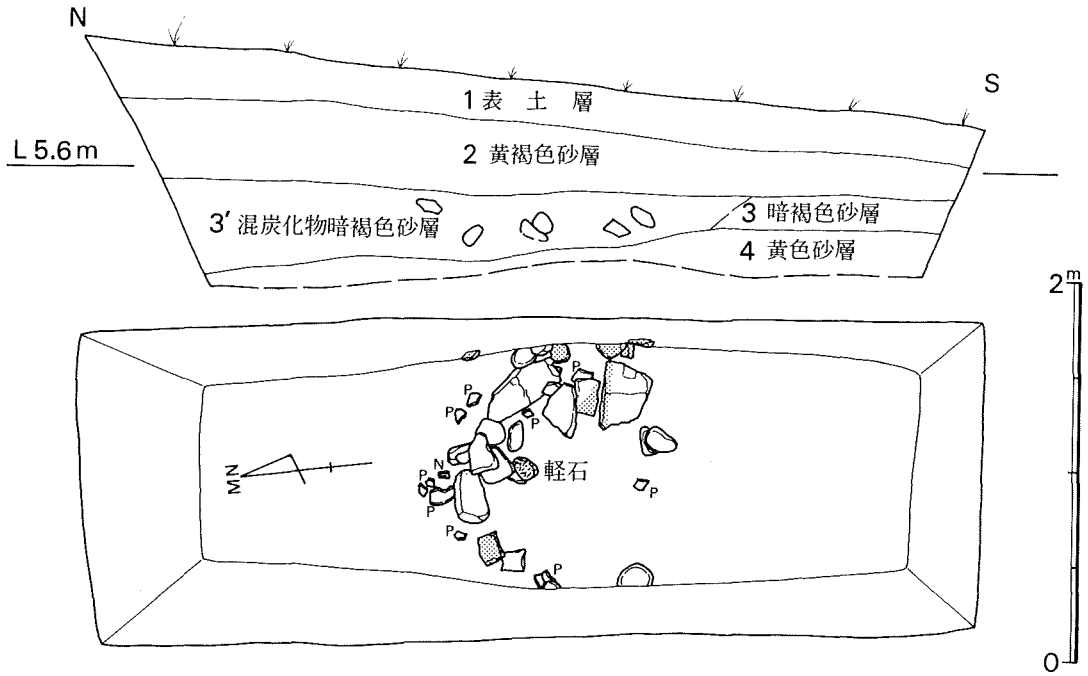


Fig.61　M区遺構出土状況（1/40）

②　出土土器（Fig.62・63，PL.47）

3層が遺物包含層で，240点のうち233点が3層から出土した。

土師器（Fig.62—③⑩⑪～⑬）

③は平坦な底部から体部との墳付近は丸く曲線的にたちあがる杯身。丁寧なナデ仕上げ。⑩は有高台杯で高台は小さくやや屈曲する。⑪⑫は甕口縁片。⑫は小形。⑬は竈の焚口付近と思われ，剝落部は付庇がとれたものか。

須恵器（Fig.62—①②③～⑨，63）

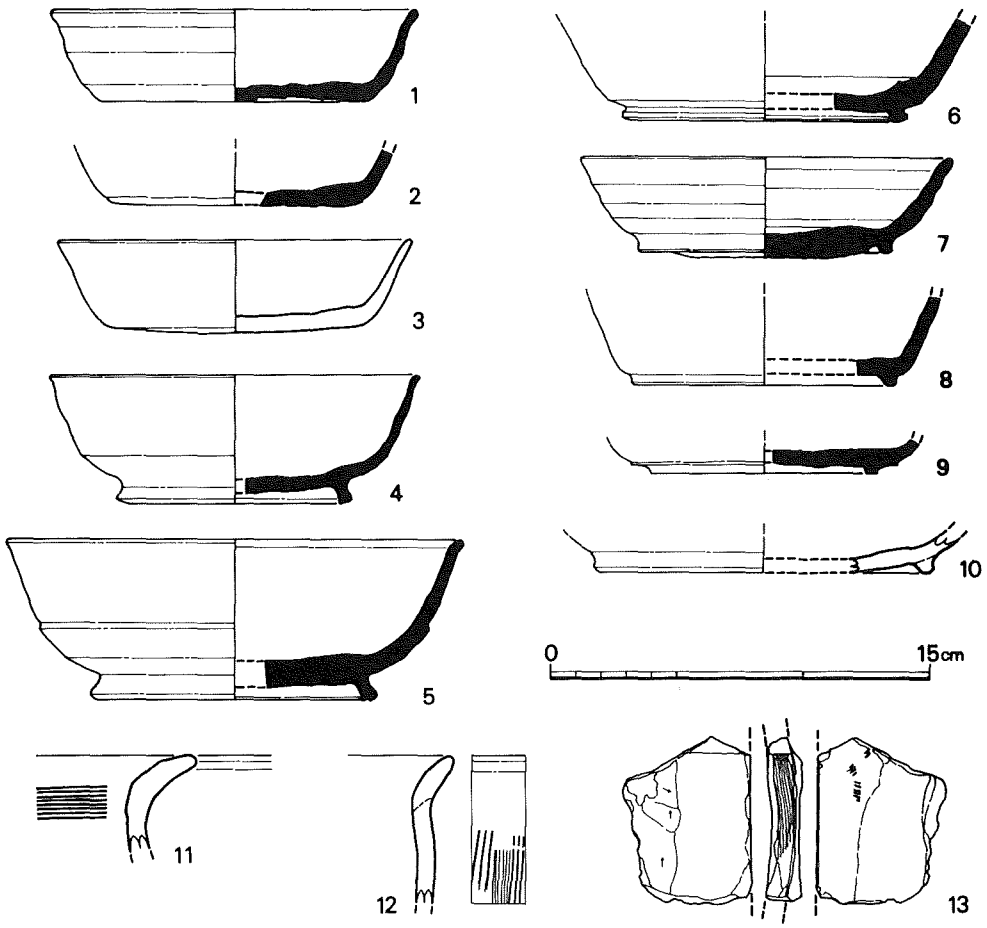


Fig. 62　M区出土土器実測図（1/3）

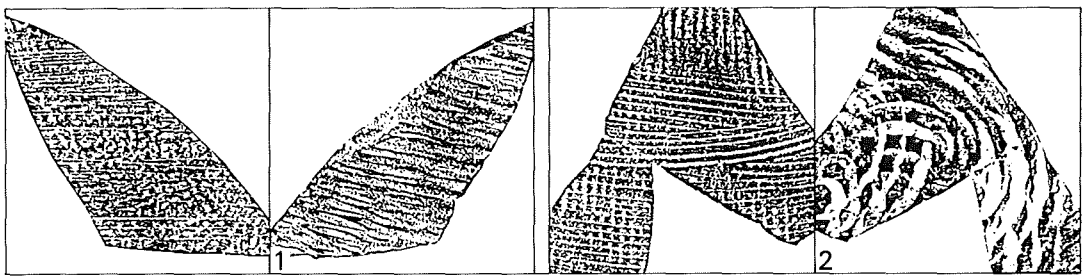


Fig. 63　M区出土須恵器叩き目文拓影（1/2）

①②は底部から体部との境が丸く曲線的にたちあがる杯身。④～⑨は有高台杯。④⑤は体部が屈折あるいは段がはいるもの。高台はやや短かめでふんばる。⑥は底部と体部の境に稜がつき角ばる。高台は小さく屈曲する。⑦～⑨は高台が小さく低いもの。Fig. 63は甕の叩き目文拓影である。①は細かい格子目文叩きのあとカキ目調整，内面は平行条線当て板痕。②は連節状平行条線叩きのあとカキ目調整，内面は同心円文当て板痕。

Tab. 5　砂丘部出土器数量表(破片点数)

種類 / 地区	土師器			須恵器			弥生	その他	計
	カメ	杯等	カマド	カメ	杯等	他			
A	14								14
	12	2							
E	42			2			2	(須恵器系鉢) 1	47
	38	4		1	1				
F	25			12				(青磁) 1	38
	24	1		2	9	1			
G	27			8					35
	22	4	1	4	4				
H	301			88					389
	261	33	7	32	50	6			
J	116			41					157
	99	17		18	21	2			
K	15			6			5		26
	13	2		2	3	1			
L	966			170					1,136
	906	58	2	61	105	4			
M	193			47					240
	157	35	1	16	24	7			
表採	9			2					11
	7	1	1	1	1				
計	1,708			376			7	(中世) 2	2,093
	1539	157	12	137	218	21			
%	81.61			17.96			0.33	0.1	100%
	81.96			18.04					
	73.85	7.53	0.58	6.57	10.46	1.01			
	2,084								

11. その他の遺物

古　　銭（Fig.64, PL.55）

江戸時代に鋳造された寛永通宝が，4枚出土している。1は小型，薄手で内面窓径が大きく字体が細字であるが，それに比して2は太字で内面窓径が小さい。3は裏面全体及び表面一部が腐蝕している。稀混貝砂層からの出土だが，海底遺跡のための流れ込みと思われる。4は4枚中一番大型で重量がある。4枚それぞれに字体が異なるが，いずれも背文がない。

Tab. 6　古銭計測表　　（単位　mm, g）

No.	直　径	内直径	内面窓径	重　量	出土地区
1	23.0	18.2	7.5	1.9	G区　2層
2	24.1	19.3	6.0	2.7	G区　2層
3	23.2	18.6	6.9	2.7	C・D区 Ⅱ層
4	24.9	19.7	6.5	3.0	C区　表採

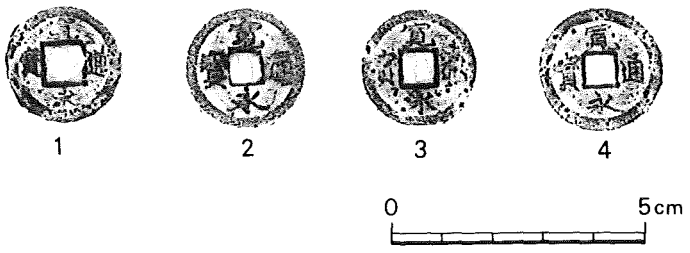


Fig. 64　古銭拓影（2/3）

三、第2地点の調査

調査も順調に進んでいた7月26日，昼食の休憩より帰って来た作業員の1人が附近より採集したと数片の土器片を持って来た。採集場所は崖の間からだという。土器片は，胎土に多量の滑石粉末を混入し，器表上に太形凹文を施こした阿高系の土器であった。早速採集地点へ行ったところ，確かに礫の下に土器片がはさまっておりそれは崖崩れにより一度に土器がつぶされたような状況であった。

早速写真撮影を行い，更に附近を精査したが他に類品は見当らず，結局，その地点からのみ発見されたにすぎなかった。当該地点は，海面につき出たビーチロックの最奥部にあたり，すでに遺物包含層たるべき土層の堆積は全く見当らない。恐らく，波による浸蝕で消失してしまったものと思われる。

しかしながら，単に散布地点とは言えない面もあり，一応第2地点と呼称しておいた。なお，当地点は貝塚の在るC区からは西へ約50mの至近距離であり，貝塚より出土した数片の同時期の土器片はもともとこの地点からの流れ込みであるかも知れない（Fig.74）。

① 出土土器（Fig.65, PL.55）

27点の一括出土があり，有文部片その他を図化した。全て滑石を多量に含む阿高式系の土器群である。①は楕円形の凹点文を施す口縁部片。幅約5cmが文様帯で，その下は無文になる。②は上部を欠失してわからないが，U字状に貼りつけを行っている。左側と貼りつけ内に短い凹線文がはいる。③は「く」の字状に屈折する深鉢の体上部片。平滑にナデ仕上げる。④⑤は横位に展開する凹線文の組合せの同一個体と考えられるもの。⑤の下半が無文になるところから，⑤のほうが④のやや下の位置にくると考えられる。⑥は底部小片で，下底面はやや凸凹になっているが，鯨背骨使用は不明。

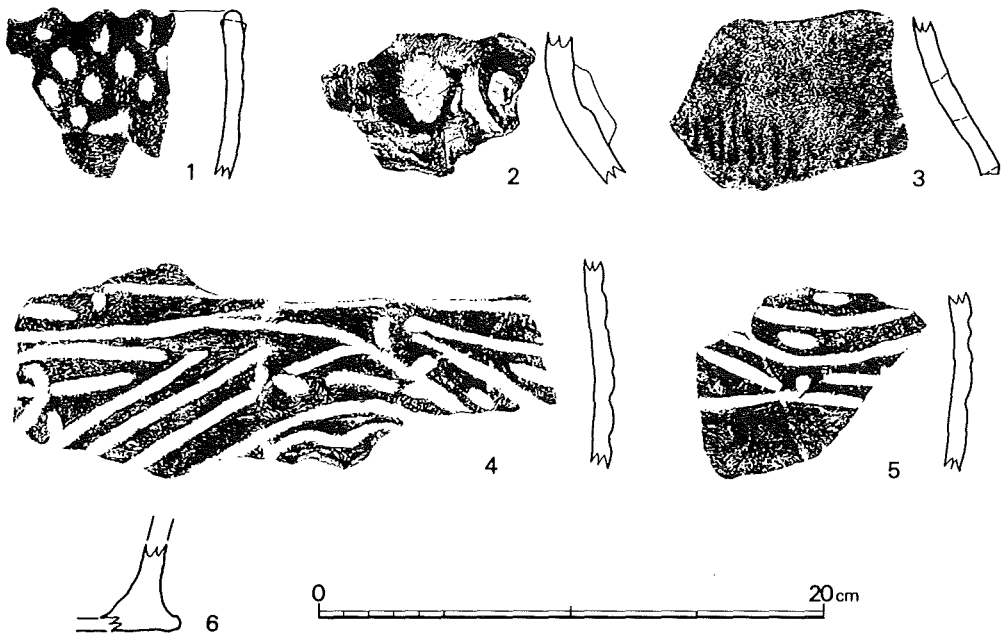


Fig.65 第2地点出土土器実測図（1/3）

第3章　考　　察

一、礫器について

礫器は手頃な礫の一部に打撃を加えて刃部を作るといった極めて簡単な石器で，特別な加工技術を必要としないが，いわば万能石器であり，その使用範囲は多岐にわたる。又，時期的には，旧石器時代より縄文時代へ自然に連続し，各時期を通じて受けつがれながら，最近では，確実に弥生後期まで残存する例が知られるようになった。

Fig. 66とTab. 7は，現在知られている礫器出土分布図とその一覧表である[註1]。これ以外にも特に縄文早期に属する遺跡で礫器を出土する遺跡は数例知られているがここでは視点を縄文前期以降におきたい為に数例を図示するのみにとどめておく。

分布状況から一見して明らかな事は，まずその立地が大部分の縄文早期の各遺跡を除いて海岸部に多く，又地域的には対馬暖流が北上する海域，すなわち有明海，天草灘，五島灘，玄海灘等を含む，東支那海側に集中する傾向があげられる。これら地域の海岸線は至る所でリアス式海岸がみられるなど極めて変化に富んでいる。なお，外国でもその例は知られ韓国東三洞貝塚[註2]，香港・深湾遺跡[註3]等でも出土するなどやはり海岸に面した遺跡に顕著である。

出土礫器のタイプ[註4]をみると早期に比定されるものは，早水台等で知られるⅠ類の尖頭状のものか深原等で顕著なⅣ類のchopper，chopping-tool状のものでⅡ類はみられない。しかし前期になると明瞭なⅡ類があらわれ，以降縄文各期を通じ普遍化する。更にⅡ類は一部の局地的な現象ながら弥生中，後期に至って更に双角状という名にふさわしい形に定形化し量産されている。

次に礫器の出土時期別の遺跡数を概観してみよう(Fig. 67)。図中に示した遺跡総数は76であるが，現在ある程度時期が決定できるのは52遺跡である。この差は，例えば縄文前期のみというように単純に時期が決定できるのはその内31遺跡で残り21遺跡は全て2時期以上に重複するという結果による。

各時期を簡単にみてみよう。早期は7遺跡で礫器が出土するが確実な早期の礫器は大分県早水台，同東台，福岡県深原，熊本県中後迫，同沈目の5遺跡で残りの2遺跡は他の時期と重複する。又，この時期では未だ貝塚は形成していない。前期になると13遺跡より出土するが，その属する時期が確実なのは長崎県江湖，同越高，鹿児島県荘の3遺跡で残りの10遺跡は他の時期と重なる。なお，この13遺跡中5遺跡は貝塚を形成している。中期も又前期と同じような比率を示す。すなわち礫器出土遺跡13の内貝塚は5遺跡である。しかし確実に中期に属する遺跡は見当らず，全て各時期が複合している。後期になると全体的に遺跡数が急増する。礫器出土遺跡もその例にもれず飛躍的に多くなる。又，遺跡総数に対する貝塚の割合も75%と高い数値を示す。晩期に入ると急速に礫器出土遺跡数は減じる傾向になるが，それでも7遺跡で例が知

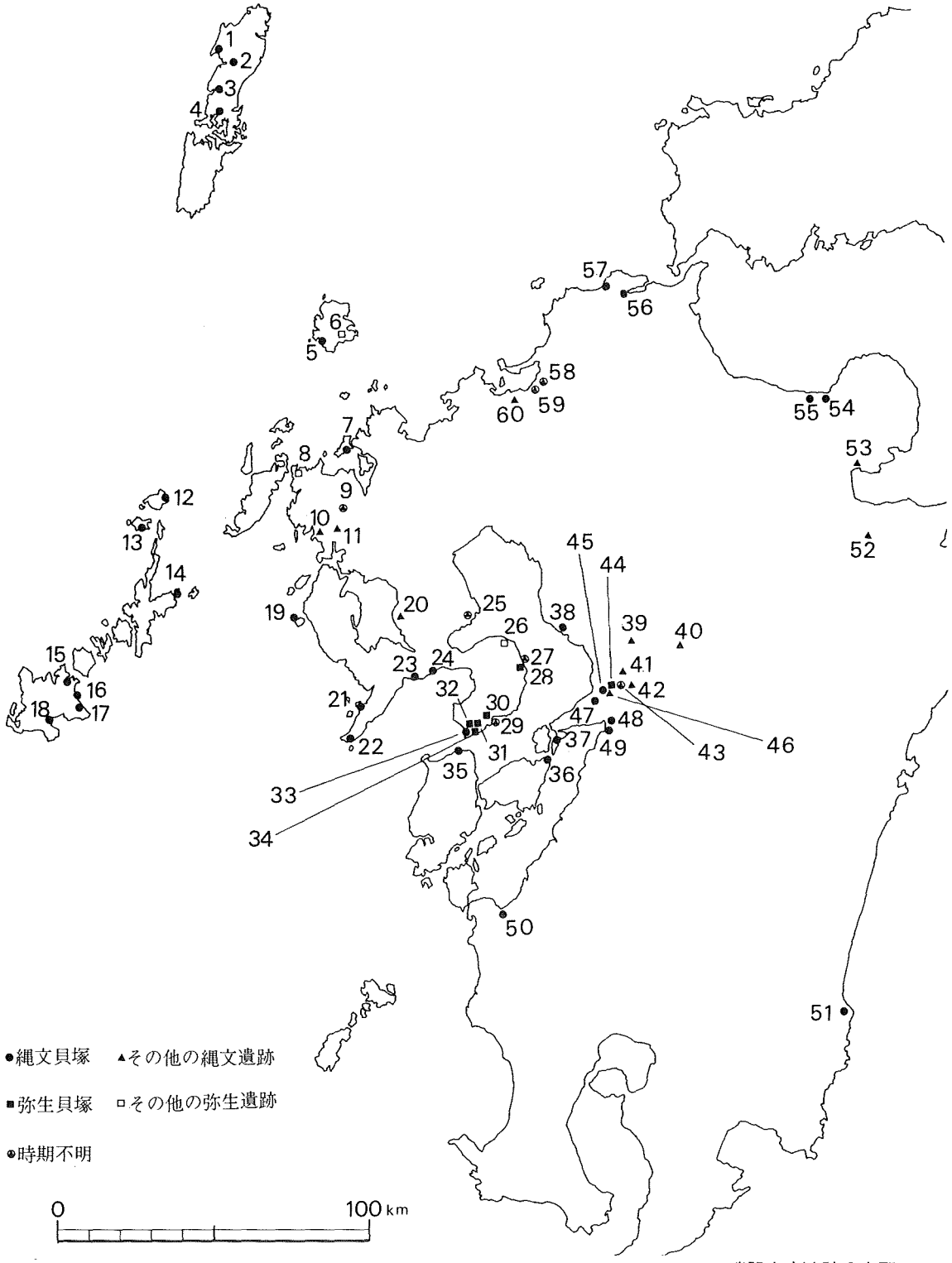


Fig. 66　礫器出土遺跡分布図

Tab 7　礫器出土地名表

図番号	遺跡名	遺跡所在地	遺跡の立地	遺跡の種類	礫器のタイプ	時期	文献
1	越高	上県郡上県町大字越高字ハヤコ	湾に面する	包蔵地	Ⅳ(1) Ⅴ(1)	縄文前期	1
2	志多留	上県郡大字志多留字茂	内湾に面する　標高3～5m	貝塚	Ⅰ(1)	縄文後期中葉	2
3	吉田	上県郡峰町大字吉田	台地先端部　比高10～15m	貝塚	Ⅴ(1)	縄文中・晩	3
4	ヌカシ	上県郡豊玉町大字嵯	海に面した扇状地	包蔵地	Ⅰ	縄文中・後	4
5	鎌ケ崎	壱岐郡郷ノ浦町	海底遺跡　表採	不明	Ⅰ(1)	縄文前～中	5
6	原ノ辻	壱岐郡芦辺町原ノ辻	台地上　標高10m	墓址,住居址,包蔵地	Ⅱ(1) Ⅴ(5)	弥生後期	6
7	友尻	北松浦郡鷹島町大字中通り免	扇状地上外湾に接する	包蔵地	Ⅰ(1)	縄文後	7
8	里田原	北松浦郡田平町里免	低湿地　標高15～16m 盆地	包蔵地	Ⅰ(3) Ⅱ(5) Ⅴ(3)	弥生中	8
9	岩谷口	北松浦郡世知原町岩谷口	舌状台地先端	岩陰	Ⅴ(1)	不明	9
10	下本山	佐世保市下本山町字迎野	標高16m　低位段丘上	岩陰		縄文前～後	10
11	岩下	佐世保市松瀬町岩下	標高200m	洞穴	Ⅳ(1) Ⅴ(1)	縄文前（？）	11
12	長崎鼻	北松浦郡宇久町長崎鼻	台地上	包蔵地		縄文前～中期	13
13	殿寺	北松浦郡小値賀町殿寺	砂丘	不明	Ⅰ	不明	13
14	浜泊	南松浦郡有川町頭ケ島	砂丘	包蔵地	Ⅱ(1) Ⅴ(5)	縄文前～後期	14
15	堂崎	福江市堂崎	海底	不明	Ⅰ(1)	縄文前～中期	15
16	江湖	福江市下大津町江湖	海底遺跡	貝塚	Ⅰ(4)Ⅱ(1)Ⅲ(3)Ⅳ	縄文前	16
17	白浜	福江市白浜	海岸に面した砂地	貝塚	Ⅰ Ⅱ Ⅳ Ⅴ	縄文後晩～弥生前	17
18	宮下	南松浦郡富江町宮下	旧海岸線	貝塚	Ⅰ(3) Ⅳ(1)	縄文前～後期	18
19	串島	大瀬戸町松島内郷串島	海底遺跡	貝塚	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ	縄文後・晩	19
20	黒丸	大村市黒丸	標高2～7m。扇状地	包蔵地	Ⅱ	縄文後	12
21	深堀	長崎市深堀	標高4m前後　砂丘	一部貝塚，墓址	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ	縄文後	20
22	脇岬	西彼杵郡野母崎町脇岬下揚	砂丘	貝塚	Ⅰ Ⅱ	縄文後	22
23	下釜	北高来郡飯盛町江ノ浦	湾に面する台地	貝塚	Ⅲ(1) Ⅴ(1)	縄文中・後	23
24	有喜	諫早市川床町六本松	台地先端部	貝塚	Ⅰ(1)	不明	24
25	小ノ浦	北高来郡小長井町小ノ浦	不明	不明		不明	25
26	中熊	南高来郡吾妻町	有明海に面する台地上	墳墓	Ⅱ(2)	弥生中初	26
27	三会下町	島原市三会下町	海底遺跡（有明海）	不明	Ⅱ(1)	不明	27
28	景華園	島原市三会	台地上	包蔵地，墓地	Ⅱ	弥生中	28
29	堂崎海中	南高来郡有家町堂崎	海底遺跡	不明	Ⅱ	不明	31
30	今福	南高来郡北有馬町今福	標高10～15m　台地先端～中腹	包蔵地，生活址	Ⅰ Ⅱ Ⅲ	弥生後	30
31	内野	南高来郡加津佐町上宮原名内野	丘陵先端部　標高30～45m	貝塚	Ⅱ	弥生後	31
32	千愴	南高来郡加津佐町宮原名酢ノ木	洪積台地　標高20m	貝塚	Ⅱ	弥生中～後（？）	31
33	永瀬	南高来郡加津佐町水月名野馬水	丘陵突端　標高10m	貝塚	Ⅱ	縄文後	31
34	口之津	南高来郡口之津町上砥石川	傾斜する台地上　標高30～27m	貝塚	Ⅰ(2) Ⅱ(30)	弥生後	31
35	沖ノ原	熊本市天草五和町	砂丘	貝塚	Ⅰ Ⅱ Ⅴ	縄文中後	32
36	前島	熊本県天草郡松島町大字合津	海抜12m　平坦地湾に面する	貝塚	Ⅱ	縄文後（？）	33
37	戸馳	熊本県天草郡戸馳島		不明	Ⅰ	縄文中～後	34
38	尾田	熊本県玉名郡文水町大字尾田	低丘陵上　標高4～7m	貝塚	Ⅰ(1) Ⅱ(1) Ⅳ(3)	縄文前～後	35
39	中後迫	熊本県菊池郡大津町	阿蘇外輪裾部丘陵 245～249m	包蔵地	Ⅲ(1) Ⅳ(1) Ⅴ(3)	縄文早期	36
40	桑鶴土橋	熊本県阿蘇郡西原村	山裾上　標高230m	包蔵地	Ⅳ(1) Ⅴ(1)	縄文前期	37
41	宮ノ前	熊本県上益城郡嘉島村下六嘉宮ノ前	台地上	不明	Ⅱ	弥生中期	33
42	久保	上益郡御船町豊秋久保	台地上30～35m	包蔵地	Ⅳ(1)	縄文早・後	38
43	櫛島	上益郡益城町島田	丘陵裾野8～10m	包蔵地	Ⅳ(1)	縄文早・前	38
44	囲	熊本県下益城郡城南町	台地上	貝塚	Ⅱ	弥生後期	33
45	黒橋	下益城郡城南町	河床下標高3.8m前後～6m谷口に立地	貝塚	Ⅴ	縄文中期・後期	21
46	沈目	下益城郡城南町	台地上　29～30m	包蔵地	Ⅳ(1)	縄文早期	51
47	轟	熊本県宇土市宮庄	台地上	貝塚	Ⅰ Ⅱ	縄文中期・後期	39
48	大野	熊本県下益郡松橋町	台地上	貝塚	Ⅱ	縄文晩期	33
49	当尾	熊本県下益城郡当尾	台地上	貝塚	Ⅱ(1)	縄文晩期	40
50	荘	鹿児島県出水市荘	舌状の扇状地　標高5～6m	貝塚	Ⅱ(7) Ⅴ(3)	縄文前期	41
51	松添	宮崎市青島	砂丘	貝塚	Ⅰ(1)	縄文後・晩	42
52	東台	大分県臼杵市大字小野字東台	標高97.85m　台地上	包蔵地	Ⅳ(2)	縄文早期	43
53	早水台	大分県早見郡日出町	台地上	包蔵地	Ⅰ(3) Ⅴ(1)	縄文早期	44
54	西和田	大分県宇佐市中敷用字西和田	舌状低丘陵　標高10m	貝塚	Ⅴ(1)	縄文後期	45
55	石原	大分県宇佐市大字青森字石原	微高地上　標高3～4m	貝塚	Ⅴ(1)	縄文後～晩	45
56	永犬丸	北九州市八幡区大字永犬丸字八百田	低地　標高1m前後	貝塚	Ⅴ(1)	縄文後期	46
57	山鹿	福岡県遠賀郡芦屋町大字山鹿	響灘に面する砂丘標高5～6m前後	貝塚	Ⅰ(1) Ⅱ(2) Ⅴ(1)	縄文後期	47
58	板付	福岡市板付	台地上 7.9m	包蔵地，墓地，住居址	Ⅳ(2)	不明	48
59	湯納	福岡市十六町	標高5～6m　沖積地	住居址，包蔵地	Ⅴ(1)	不明	49
60	深原	福岡県筑紫郡那珂町大字中原	ゆるやかな傾斜の台地上標高38～44m	包蔵地	Ⅳ(25)	縄文早	50

不定形のものをⅤ類とする。

られる。この内確実に晩期の例は熊本県当尾，同大野の両遺跡のみである。なお，出土遺跡は全て貝塚である。

弥生時代に入ると，前期では目下長崎県白浜遺跡のみで他に例をみない。しかし中期になると長崎県里田原，熊本県宮ノ前などの遺跡で出土し，後期に至ると８遺跡と又急増する。この場合，やはり貝塚の占める割合は大きく，８遺跡中，６遺跡と75%を示している。

しかし，特に弥生後期の礫器出土遺跡は殆ど，有明海を囲む熊本県の一部とこの時期になって貝塚が発達する島原半島南半部に限定される感があり局地的な特殊な現象と言わざるを得ない。

古墳時代になると，その確実な例を知らないが，その機能と安易さ等を考えると，外洋に面する小規模な貝塚などで案外見い出されるかも知れない。

以上が礫器出土遺跡の概略であるが，遺跡の種類が貝塚でなくとも，出土遺物の中に貝類を含む遺跡の例を加えると，その比率は更に高まる。これは，礫器が漁撈，特に貝類との関係の中でとらえられるべき性質のものである事を如実に示している。

礫器の大きさをみてみよう。串島の礫器の計測表はTab. 8，Fig.68に示しておいた。そしてその平均値と比較可能な各遺跡の平均値をTab. 9 において示してみた。只，比較表では煩雑さを避ける為にⅠa，Ⅰb等の細分ははずしている。

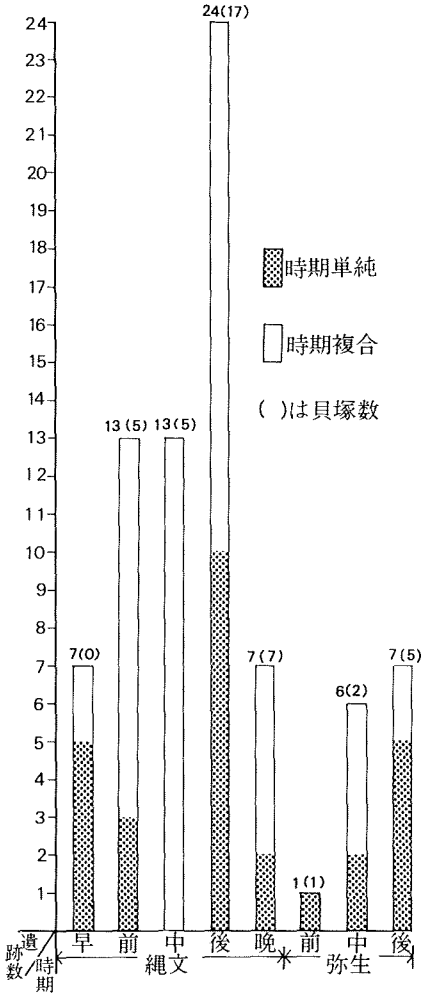


Fig. 67　時期別礫器出土遺跡数

これらの表からまずⅠ類について比較してみる。Ⅰ類で比較が可能なのは江湖貝塚の４例と沖ノ原の４例，そして串島の15例である。三軒屋貝塚からも出土しているが，耕土中からの出土で時期が明確でない（Fig.69)。

江湖の例は長さはまちまちであるが巾はほゞ一定している。これに比して沖ノ原出土例は長さ，巾共にバラツキがみられまとまらない。串島例は比較的まとまるが，それでも定形化しているとは言えない。石器の厚さは共に近似値を示し尖頭部の長さは江湖例が一番短かい。しかしこれらの計測値から時期的な差異をみい出す事は困難であり，強いてこれらの特徴を総合すると前期に属する江湖例の方が巾のわりに長さがあり形状的にスマートである。そして後期の沖ノ原例と後晩期の串島例は長さに比して巾が増しやゝ安定型となっている。形状は沖ノ原例が一番小型である。

Tab. 8 礫 器 計 測 表

石器番号	出土区	径 (cm) a	b	c	d	e	礫器型	石材	重量(g)
1	C－3 Ⅰ	9.3	11	3	3.3		Ⅰa	玄武岩	350
2	C	8	9.8	4.5	3.7		〃	〃	260
3	C	8	11	5	2.6		〃	〃	460
4	C－8 Ⅲ	9	11	4.2	5		〃	〃	435
5	C	14	8.7	4.3	1.6		〃	〃	750
6	C	12.3	10	4.8	3.7		〃	〃	660
7	C－3 Ⅲ	12	10.3	4.5	3.9		〃	〃	650
8	C	14	11.4	4.8	4		〃	〃	670
9	C－10 Ⅲ	13	11	3.3	4		Ⅰb	〃	560
10	C－1 Ⅰ	6＋α	9	1.8	2.9		〃	〃	100＋α
11	C	11	12	3.3	3.3		〃	〃	500
12	C－5 Ⅰ	11.4	8.3	3	2.1		〃	〃	370
13	C	11	8.7	2.1	2.7		〃	〃	290
14	C	11.3	9.5	3.3	4		〃	〃	420
15	C－1	10.5＋α	9	2.5	2.6		〃	〃	220＋α
16	C	14	11.5	2.9	2.9		〃	〃	500
17	C	9.5	12.5	4.5		1	Ⅱa	〃	680
18	C	7	9.1	4.1		0.2	〃	〃	370＋α
19	C－11	9	10.2	5		0.6	〃	〃	620
20	C	9	8.3＋α	4.1		0.7	〃	〃	400＋α
21	C	7.9	10	3.5		0.7	〃	〃	350
22	C	13	13	5		0.8	〃	〃	1,075
23	C－6	10	13.8	5.4		1.6	〃	〃	980
24	C	9.5	9	3.8		0.7	〃	〃	350
25	C	12.5	9	2.5		1.8	Ⅱb	〃	345
26	C	10＋α	9.2＋α	2.3			〃	〃	350＋α
27	C	9.8	9	2.8		0.9	〃	〃	290
28	C	7.8＋α	9	2.9		0.8	〃	〃	260＋α
29	C	11.5	8.5	2.1		1.5	〃	〃	220
30	C	10	10	2.8		1.4	〃	〃	310
31	C	10.3	9.7	2		0.9	〃	〃	290
32	C－2 Ⅳ	11.3	8	3.1		0.7	〃	〃	350
33	C	13	6.5	2		0.9	〃	〃	220
34	C	8	5＋α	2.1			〃	〃	100＋α
35	C	9	5＋α	2		0.8	Ⅱb	玄武岩	130＋α
36	C	8.5	7＋α	2.1			〃	〃	200＋α
37	C	10.5	5＋α	2.4			〃	〃	150＋α
38	C	12.3	7.6＋α	3.1			〃	〃	330＋α
39	C	9.5	11	3.1			〃	〃	400
40	C	7.5＋α	12＋α	3.5			Ⅲ	〃	370＋α
41	C	9.5	9.8	3.2			〃	〃	400
42	C	6.2	10＋α	3.1			〃	〃	230＋α
43	C	11.5	9.2	3			〃	〃	440
44	C	12.3	9.8	3.6			〃	〃	500
45	C	11.5	13.5	3.8			Ⅳ	珪岩	840
46	C	7.1	6	2.1			〃	玄武岩	130
47	C	10.5	8.5＋α	1.6			〃	〃	230＋α
48	C	8.5＋α	9.5				〃	〃	400＋α
49	C－6 Ⅰ	6.7＋α	8.5＋α	1.7			〃	〃	120＋α
50	C	10.7	7.3	1.7			〃	〃	120

Tab. 9　礫器計測平均値

遺跡名	時期	計測資料	礫器型	径 (cm) a	b	c	d	e	重量(g)
荘	縄文前	7	Ⅱ	8.45	11.1	2.2		1.4 (1.06)	333
江湖	〃	4	Ⅰ	13.75	9.65	3.57	3.1		
沖ノ原	縄文後	4	Ⅰ	8.65	7.25		3.37		
		5	Ⅱ	8	8.2			1.14	
串島	縄文後～晩	15	Ⅰ	11.4	10	3.7	3.28		485
		14	Ⅱ	9.93	9.85	3.4		1.0	477
三軒屋	弥生後期	25	Ⅱ	7.7	10.9	3.5		1.32	
			Ⅰ	8	8.7	2.6	4.2		

しかし写真等でみる沖ノ原出土の礫[註5]器には，定形化した極めて尖頭部の長いタイプが多くみられる為上記の計測値とどれ程一致するか疑問である。この他，長崎県脇岬遺跡では縄文後期の貝塚から千個を越す礫器が出土しているという。報文が待たれる。

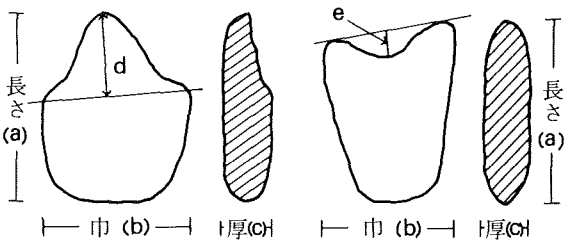


Fig. 68　礫器計測図

ともあれ，このⅠ類は前述した如く，旧石器時代からの伝統で縄文各時期に受けつがれるが，その典型的なタイプが弥生時代まで残存する例は極めて少ないようである。

Ⅱ類の比較可能なのは荘貝塚の７例，沖ノ原の５例，串島の14例そして三軒屋の24例である（Fig. 70）。

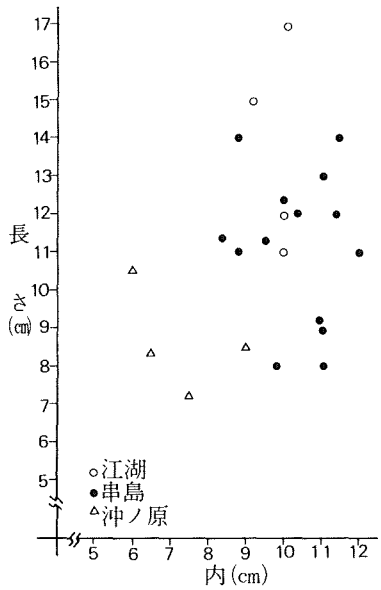


Fig. 69　Ⅰ類礫器計測グラフ

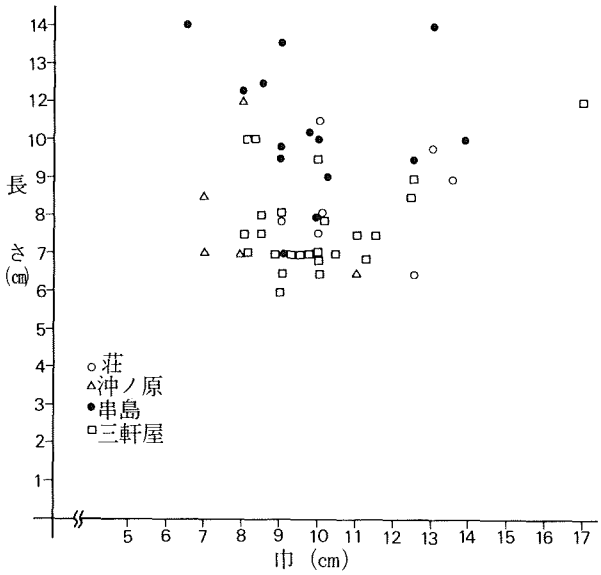


Fig. 70　Ⅱ類礫器計測グラフ

諸例とも大きなバラツキは無く，串島，三軒屋の数例を除くと比較的まとまっているといえよう。時期的にみると，後期の沖ノ原例が最も小型で串島例が全体的に大型であるが縄文前期の荘貝塚例と弥生後期の三軒屋例が近似値を示している。又，弯曲度は荘貝塚の１例を除くとその平均値は縄文期では差が無く，三軒屋の方が若干深い程度である。しかし礫器の細部を観察すると，縄文期のものに比して，弥生後期のそれは，形状的に双角状という名にふさわしく刃部の作り出しも入念になり，定形化した半月形に成す為の調整剝離は全周に及ぶという相違が指摘できる。

一般的に弥生後期のそれは，三軒屋に限らず，タイプはⅡ類が圧倒的でしかも量産されている傾向が強い。遺跡の地域的な特殊性はあるにしても使用目的がかなり限定できるものと思われる。

最後に礫器の機能について触れておきたい。

串島の場合，出土礫器50個の内，完形品は33個でその残存率は66％であった。又，これをタイプ別にみると，Ⅰ類は16個の内14個は完形でその残存率は88％と高いのに比べ，Ⅱ類は22個中９個は欠損しており完形率は60％にとどまる（Fig.71）。

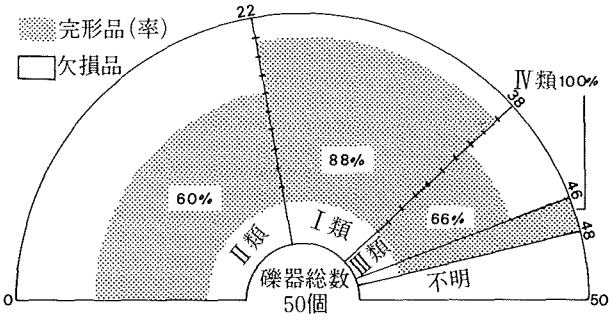


Fig.71　礫器完形残存率グラフ

一方，礫器の使用痕はⅠ類については圧倒的に尖頭部にあり，Ⅱ類では尖頭部と弯曲する凹底部に磨滅や敲打痕が観察される。使用に際してはこの弯曲する刃部が意識下にあったものと思われる。

これらの事実，及び遺跡の立地，種類等を考慮に入れると，すでに先学[註6]が指摘しているとおり，礫器は漁撈に関連する遺物であろう事は疑い得ない。そして，その場合，Ⅰ類の尖頭状礫器はやはりアワビ，カキなどの貝類捕獲の機能を果たし，Ⅱ類は調理の用に供したものと思われる。これらの推定が正しければ，先のタイプ別による欠損の度合いも，例えばⅠ類の使用を主に海中での作業と想起する事によりある程度納得がいく。又Ⅱ類については，尖頭部を利用したカキ打ち的な使用法が考えられると同時に，クボガイ，レイシ，コシダカガンガラ，サザエ等の巻貝の割載用に弯曲した刃部が利用された可能性がある。弯曲度の強弱はそのまま対象物の貝の大きさ，特に殻高に応じているものであるかも知れない。

Ⅱ類及びⅣ類については，その用途は多岐にわたるものであろうが，少なく共何れも貝類等の捕獲には向かない事だけ追記しておきたい。

ちなみに，各礫器，特にⅠ，Ⅱ類について，下記のような機能の推定をしている例があるので附記しておく[註7]。

Ⅰ類：貝類捕獲，掘削，木の割載時のくさび。

Ⅱ類：木製品の切削，貝類の割載，肉の解体。

最後に長崎県深堀遺跡で着柄の可能性を示唆した礫器が1点出土しているが，串島ではそのような例はみられなかった。

註1　昭和55年2月，当課より九州各県教委及び各研究機関に対して礫器出土の有無を問い合わせる文書が出された。これは本県北有馬町今福遺跡で弥生後期の層から多量の礫器が出土した事に対して，同様な例の存否を知る為に行われたものである。現在，1県から1遺跡のみについて回答が寄せられているが，その結果については本書は一切触れていない。

註2　坂田邦洋氏教示

註3　WILLIAM MEACHAN 1978：SHANWAN, LAMMAISLAND HONG KONG ARCHAEOLOGICAL SOCIETY.

註4　礫器の出土遺跡数は各報文によって知り得るが，タイプ別の数量までは把握できなかった。従って各時期のタイプ別の出土頻度は除外した。

註5　1959年，1964年，1969年の3次にわたって調査が実施され，百数十個の礫器が出土しているという。

坂本経堯他　1971「天草の古代」

註6　賀川光夫　1976「後期旧石器文化から縄文文化への移行」別府大学文学部史学科研究論叢1。

賀川光夫・橘昌信　1967「深堀遺跡」長崎県文化財調査報告第5集，長崎県教育委員会。

山崎純男　1975「九州地方における貝塚研究の諸問題」九州考古学の諸問題。

吉田正隆・松藤和人　1975「口之津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告」百人委員会埋蔵文化財報告第5集。

安楽　勉　1979「浜泊遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ，長崎県文化財調査報告書第45集，長崎県教育委員会。

長野真一　1979「荘貝塚」出水市文化財調査報告書1，出水市教育委員会。

他

註7　註3に同じ。文中では下記のとおり記してある。

"picks"：digging, shell-collecting(from rocks), wedging for tree-felling "notched" concave scrapers：wood-shaving, opening/smashing sheels, scraping meat from bones.

ここでは"picks"をⅠ類"notched" concave scrapersをⅡ類に解した。

礫器地名表参考文献

1	坂田邦洋	1978	「韓国隆起文土器の研究」
2	坂田邦洋	1976	「対馬の考古学」
3	坂田邦洋	1976	「対馬の遺跡」第20集
4	坂田邦洋	1978	「対馬ヌカシにおける縄文時代中期文化」
5	横山順，田中良之	1979	「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」九州考古学54
6	長崎県教育委員会	1977	「原ノ辻遺跡」長崎県文化財調査報告書31集
7	坂田邦洋他	1975	「鷹島埋蔵文化財調査報告」
8	長崎県教育委員会	1976	「里田原遺跡」長崎県文化財調査報告書第25集
9	片岡　肇	1976	「岩谷口遺跡群の発掘調査」世知原町教育委員会
10	佐世保市教育委員会	1972	「下本山岩陰」
11	麻生　優	1968	「岩下洞穴の発掘記録」
12	稲富裕和氏教示		
13	正林　護氏教示		
14	長崎県教育委員会	1979	「浜泊遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ 長崎県文化財調査報告書第45集
15	田川　肇氏教示		
16	坂田邦洋	1973	「江湖貝塚」
17	福江市教育委員会	1980	「白浜貝塚」福江市埋蔵文化財調査報告書第２集
18	長崎県教育委員会	1971	「宮下遺跡調査報告」長崎県文化財調査報告書第９集
19	本　　書		
20	長崎県教育委員会	1967	「深堀遺跡」長崎県文化財調査報告第５集
21	熊本県教育委員会	1976	「黒橋」熊本県文化財調査報告第20集
22	坂田邦洋氏教示		
23	酒詰仲男他	1943	「肥前下ノ釜貝塚発掘調査報告」人類学雑誌58－４
24	高野・横山表採	1979	
25	小長井町在住の入江光秀君の採集資料による。		
26	古田正隆	1979	「吾妻町中熊台地調査報告」吾妻町の文化財４
27	古田正隆	1974	「島原市の海中干潟遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告２集
28	古田正隆	1963	「三会中野景華園遺跡－島原市三会の弥生文化」
29	1979～調査継続中		
30	古田正隆・松藤和人	1975	「口之津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告」百人委員会埋蔵文化財報告第５集
31	坂田邦洋	1975	「縄文時代に関する研究北久根山式土器の設定」考古学論叢

31 坂本経堯他 1971 「天草の古代」
32 熊本県教育委員会 1968 「前島貝塚発掘調査」熊本県文化財調査報告第9集
33 富田紘一氏教示
34 坂田邦洋 1974 「尾田貝塚」
35 中後迫遺跡調査団 1978 「中後迫遺跡調査報告」
36 熊本大学文学部考古学研究室 1979 桑鶴土橋遺跡(2)
37 熊本県教育委員会 1975 「久保遺跡」熊本県文化財調査報告第18集
38 浜田耕作他 1920 「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」
江坂輝彌 1967 「日本文化の起源」講談社現代新書
39 清野謙次 1969 「日本貝塚の研究」
40 出水市教育委員会 1979 「荘貝塚」出水市文化財調査報告書1
41 宮崎市教育委員会 1974 「松添貝塚」宮崎市文化財調査報告書第2集
42 臼杵市教育委員会 1974 「東台遺跡」
43 大分県教育委員会 1955 「早水台」
44 宇佐市教育委員会 1979 「石原貝塚，西和田貝塚」
45 北九州教育委員会 1972 「永犬丸遺跡」北九州文化財調査報告第8集
46 山鹿貝塚調査団 1972 「山鹿貝塚」
47 福岡市教育委員会 1976 「板付」福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集
48 福岡県教育委員会 1976 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第4集
49 福岡県教育委員会 1978 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第8集
50 熊本県教育委員会 1974 「沈目」熊本県文化財調査報告13集

二、出土土器について

貝塚部，砂丘部および第2地点から出土した総数量は3,447点に及ぶ。その内訳は，貝塚部1,327点，砂丘部2,093点，第2地点27点となる。時代別にわければ，縄文時代239点，弥生時代369点，古墳時代～歴史時代2,631点，不明208点を数える（Tab. 2・5）。

縄文時代は第2地点および貝塚部，弥生時代は貝塚部，古墳時代～歴史時代とくに奈良時代前後頃の資料が砂丘部にそれぞれ集中的に出土した。各時代ごとにまとめを行いたい。

(1) 縄文時代

時期的には中期～晩期にわたる資料がある。縄文中期～後期初頭の阿高式系土器が，第2地点で一括出土（Fig. 66）し，貝塚部では数点出土している(Fig. 10)。最近，田中良之氏によって阿高式系土器の研究がなされた[註1]。貝塚部出土のⅠ類としたものは，短凹線などの単純な文様を口辺部に集約しており，田中氏の研究にしたがえば坂の下Ⅱ式（後期初頭）に該当しよう。第2地点一括土器群は，凹線文を組合せた文様を横位に展開させており，おそらく体中位以下は無文となる資料である。Fig. 66—④⑤は，文様的には田中氏論稿27頁第19図3に最も近い。しかしこれは阿高Ⅲ式に分類され，その分布は中九州が中心で，同段階の西北九州には坂の下Ⅰ式が対置されている。明らかに坂の下Ⅰ式まで下降する資料とは考えられず，氏分類の阿高Ⅰ・Ⅱ式とも異なり問題になるところである。いちおう中期中葉～後葉頃の資料と考えておきたい。

後期土器は貝塚部から出土した。しかし時期を明確に限定できるのはⅠ区出土資料（Fig. 16—①）ぐらいのもので，他はこれに伴出すると考えられる粗製土器が大半であった。Ⅰ区資料は波状口縁で磨消縄文を施す精製深鉢で，後期後半の西平式といわれているものである。粗製土器は，貝殻条痕系のもの（Ⅳ類）とナデ仕上げしたもの（Ⅴ類）に区別され，前者が結晶片岩を胎土に含むのに対して，後者は貝殻細片を多量に含む。Ⅴ類はⅠ区で西平式と共伴しており，同時期と考えてよかろう。以上の粗製深鉢土器は，福岡市四箇遺跡J—10i地点[註2]出土の三万田(古)式土器に類似し，ここではⅥ・Ⅴ類とも後期後半に包括される時期のものと考えておきたい。

晩期として明確にあげることのできる資料は1点のみで，突帯期の資料である(Fig. 10—⑦)。体下半はヘラケズリのままで，刻みも粗くやや古手の様相をもつ。

(2) 弥生時代

前期後半～中期前半の資料がやや多く，後期が若干出土している。前期土器は甕・鉢があり，全て胴部に1～2条の沈線をめぐらしている。このようなタイプの甕類は北九州でも遠賀川流域に多いといわれ[註3]，当該遺跡を含め西北九州地域の弥生文化波及の問題を考えていくうえで興味深い。同タイプの甕類は，五島福江島の岐宿町岐宿貝塚（A類[註4]），北松浦群田平町里田原遺跡[註5]などで出土している。中期土器は弥生土器のなかで比較的多い。口縁断面が三角形や逆L字形になる中期初頭から前半期にかけてのもので，資料的に中期後半の時期は欠落し出土をみない。

後期に属する資料は散発的で，Fig. 5 —①，6 —⑧，15—㊳の壺は後期後半期，Fig. 31—⑧甕は口縁の特徴などから終末～古式師器にかけての資料と考えられる。

(3) 古墳時代前期

古式土師器と考えられる土器は，C地区から数点出土している（Fig. 15)。㊴は複合口縁壺で，口唇の特徴がやや異なるが，類似した資料として福岡市湯納遺跡D 5[註6]溝出土壺があげられる。早良平野は他に先がけて古式土師器の研究が進行した地域で，最近では武末純一氏の研究があげられる[註7]。それによれば，湯納遺跡資料は第ⅡB期（有田Ⅰ期）に位置づけられ，畿内の布留式に平行する時期とされる。したがって㊴壺はその段階に該当する資料といえよう。㊷㊸は高杯で，4・5世紀のものであろう。

(4) 古墳時代末期～奈良時代

当期に属する土器群は，砂丘部から比較的まとまって出土した。7世紀中葉頃～8世紀にかけての，県内ではまだ数少ない貴重な資料である。最近の調査では，北松浦郡田平町里田原遺跡，南高来郡有明町松尾遺跡などが知られている。

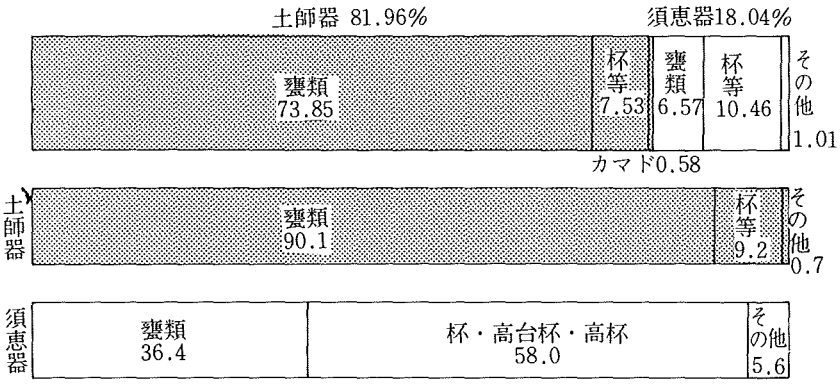


Fig. 72 砂丘出土土器組成グラフ(%)

土器組成について

砂丘部では，土師器（1,708点),須恵器(376点）の計2,084点が当期に該当する（Tab. 5)。その器種別組成がFig. 72のグラフである。L区についても同様なグラフ（Fig. 57）を作成しその成績を述べたが，ここでは両者をあわせみながら論を進めていきたい。

土師器と須恵器の割合は，土師器約82%，須恵器約18%で，L区の土師器85%，須恵器15%とほぼ変らない数値がでている。煮炊具である土師器甕・竈が74%以上（L区約80%）と圧倒的に多く，杯・高台杯・高杯・蓋などの食器類は約18%（L区約14%),貯蔵容器である須恵器甕・壺など（その他）は約6%（L区6%）という成績がでている。

以上についての対比資料をあまり見い出せないが，平城宮などのデータが示されている。平城宮Ⅲ（750年頃）SK820土壙出土土器群では，食器類93.3%・貯蔵器3.5%・煮炊具3.2%

である。平城宮Ⅴ(780年頃)SK 2113土壙資料では，食器類78.1%・貯蔵器13.4%・煮炊具8.5%という成績がでている[註8]。食器類については，平城宮Ⅱ（730年頃）のSD485 土壙で約70%，平城宮Ⅵ（765年頃）のSK 219 土壙で87%という数値[註9]がでており，平城宮では奈良時代を通じて食器類が70～90%以上の高率を示し，土師器に於いても八割を食器類が占め，煮炊具は一割余り，貯蔵器は皆無に近い。それに対して，大阪府柏原市船橋遺跡出土の土師器は，甕類が46%，食器類35%で，平城宮と比率が異なる。この点については,「宮内出土土師器の大半は，食品を盛り，食べるための食器類で」,「これは多人数を前提とした画一的な饗膳方式」をとる「中央官衙および宮」の特殊性という評価がなされ，また船橋遺跡では四割近くを須恵器が占めることから，平城宮に対して須恵器貯蔵形態が多いこと,「こうした傾向は，須恵器生産の中心地であり供給量の多かった畿内」集落の一般的状況であるとされる[註10]。

これらのデータと串島のそれを比較すれば，須恵器は二割に満たず，畿内村落と地方僻村である串島との格差を示す。土師器についての内訳は，串島では甕類等約91%，食器類９%という比率で，煮炊具の割合が異常に多い点が指摘でき，食器類は須恵器のそれを加えた全体のデータでも18%に過ぎない。供膳形態が少ないのは，串島砂丘遺跡の集団が少人数だったことを暗示しており，煮炊形態が多いのは砂丘住民の生活において何らかの煮炊を中心とした作業労働が行われていたことを物語っている。砂丘遺跡での生活の一端をあらわしていると思われるが，他に対比資料の蓄積が望まれるところである。

出土土器の分類・編年について

砂丘部出土の須恵器・土師器は，一部９世紀前後頃の資料もあるが，大半は７世紀中葉頃から８世紀代にかけての時期の資料である。このなかでとくに特徴のでやすい杯蓋・杯身・有高台杯などの分類を行いたい。

須 恵 器

杯蓋　杯蓋は身受けかえりを有するものと口縁端部を折り曲げ嘴状につくるものに大別される。前者をⅠ類，後者をⅡ類とする。さらにつまみの形態によって，A擬宝珠状あるいは釦状のつまみ，B輪状のつまみ，Cつまみの無いものに細分される。ⅡA類のなかで口縁端部の折り曲げが退化したものを２類として小区分する。

ⅠA類（Fig.40—①，52—①②）

ⅠC類（Fig.52—③）

ⅡA１類（Fig.40—②③）

ⅡA２類（Fig.52—④⑩）

ⅡB類（Fig.52—⑦～⑨）

杯身　底部付近のつくりと体部の状態によって次のように分類できる。

Ⅰ類（Fig.45—②）小形で口径のわりに身の深いもの。

Ⅱ類　底部から体部への移行が丸く曲線的にたちあがるもの。次のごとく細分できる。

Ⅱ A 類（Fig. 52—⑪）体部は直線的にのび沈線がはいる。高杯の可能性もある。

Ⅱ B 1 類（Fig. 49—①，62—①）口径14cm前後で口縁はやや外弯する。

Ⅱ B 2 類（Fig. 52—⑫）口径16cm以上でむしろⅢに含めた方がよいような形態。

Ⅲ A 類（Fig. 45—③，52—⑮）平坦な底部から体部は直線的にのび外傾度のやや強いもの。

Ⅲ B 類（Fig. 52—⑭）前者にくらべ口径のわりに器高の高いもの。

有高台杯　高台杯は杯部・高台部の特徴から次のごとく分類できる。

Ⅰ類（Fig. 40—④，49—②，52—㉑）口径のわりに身の深い小形品。

Ⅱ類（Fig. 52—⑯⑰）杯部が口径のわりに浅く，高台はやや長めで直立気味。

Ⅲ A 類（Fig. 40—⑤⑥，52—⑱）底部から体部へは丸く曲線的にたちあがる。高台は屈曲をもたず直線的でやや長め。

Ⅲ B 類（Fig. 45—④，52—⑲⑳㉓）底部から体部への移行は丸く曲線的。高台はふんばりを有し，Fig. 45—④は外方に稜がつく。52—⑲⑳は屈曲し下方に凹線がはいる。㉓は大形品で杯部に対して高台はやや小さい。

Ⅳ類（Fig. 62—④⑤）体下半に強く屈折する稜あるいは段を有するもの。高台はわりとふんばりをもつ。

Ⅴ類（Fig. 40—⑦，60—⑥）底部と体部の境界は稜がつき角ばる。体部は直線的に開き，高台は小さい。

Ⅵ類（Fig. 37—③，45—⑤⑥，62—⑦～⑨）高台は小さく低い。断面は方形あるいはやや丸味をもつ。Fig. 37—③，62—⑦は口径のわりに杯部の浅いもので，62—⑧はやや深味をもつようだ。

土 師 器

杯身　Fig. 40—⑧は深味のある丸底の杯であろう。他に較べ時期的に遡るものか。Fig. 62—③は須恵器杯Ⅱ B 2 類に，45—⑦がⅢ B 類に対応する。

有高台杯　Fig. 52—㉔は須恵器高台杯Ⅴ類に対応する資料である。

以上の資料について検討を加えたい。当時期の古墳時代末期～奈良時代須恵器の研究は，小田富士雄氏の八女古窯跡群の調査をもとにした編年によってⅥ期・Ⅶ期の設定区分がなされていたが[註11]，やや資料不足の感があった。最近亀井明徳氏は大宰府の資料を中心として，Ⅰ期（7世紀後半），Ⅱ期（8世紀），Ⅲ期（9世紀）に区分され，歴史時代須恵器の再検討を行った[註12]。それらに従えば，串島遺跡のそれは大半が小田氏編年のⅥb・c期，亀井編年の歴史時代須恵器第Ⅰ期に包括されるように思える。串島遺跡出土土器群は次のごとく段階的にとらえられるようだ（Fig. 73）。

串島Ⅰ期　杯蓋が身受けかえりを有する段階で，杯蓋Ⅰ類・有高台杯Ⅱ類が中心で，杯身Ⅱ A 類，土師器杯（Fig. 40—⑧）などは時期的にやや遡る資料であろう。亀井氏Ⅰ期の直前（7世紀中頃）に比定される福岡県太宰府町長浦窯跡出土資料に較べ，有高台杯は高台部があまり

屈曲をもたずやや後出の感があるのでここでは7世紀後半代を中心とした時期と考えておきたい。

串島Ⅱ期　大半の資料が当期に属し，杯蓋は口縁端部が嘴状になり，有高台杯は高台がやや短かめになりふんばりをもつ。7世紀末頃から8世紀前半代を考えている。

串島Ⅲ期　杯蓋はつまみが小さな釦状になり，口縁端部の折り曲げが退化したもの（ⅡA2類），有高台杯は高台部のふんばりがなくなり小さく低い高台をつけるもの（Ⅴ・Ⅵ類），平坦な底部から直線的に体部が開く杯身（Ⅲ類）などが該当する。時期的には8世紀中頃以降を考えている。この段階にはいると串島遺跡では資料的に稀薄になる。なおJ区出土の突帯を付す須恵器壺（Fig. 45—⑥）は8世紀末から9世紀前半頃にかけての資料であろう。

したがって串島砂丘遺跡では，7世紀後半から8世紀前半頃の土器群が主体であることがわかった。串島Ⅲ期は貧弱な資料で，この空白な時期を埋める土器群が，北松浦郡田平町里田原遺跡（昭和52年度17次調査）と南高来郡有明町松尾遺跡（昭和53年度調査）で最近発掘された。里田原17次調査資料は8世紀中頃以降，松尾遺跡は8世紀後半から9世紀にかけての良好な資料である。いずれも整理中途で報告がまたれる。

須恵器叩き目文について

須恵器甕146点について叩き目文の形状について調べた結果次のような数値がでた。

a．単純平行条線（50点）34.2%
b．連節　〃　（38点）26.0%
c．格子目　（48点）32.9%
d．格子目一部単純平行（2点）1.4%
e．ナデ消し　（7点）4.8%
f．カキ目調整で消えた（1点）0.7%

このなかで，一部ナデ消し（3点），一部カキ目調整したもの（6点）などもある。

内面文様については次のごとくである。

a．青海波（円弧）（73点）50.1%
b．同心円　（20点）13.7%
c．単純平行条線　（12点）8.2%
d．連節　〃　（5点）3.4%
e．aをcで消した（18点）12.3%
f．aをdで消した（5点）3.4%
g．aを格子目で消した（4点）2.7%
h．ナデ消し　（9点）6.2%

このなかで一部ナデ消したものは7点ある。

以上の成績から気付いた点をあげれば，外面の叩きは，平行条線系や格子目文のままのもの

Fig. 73　砂丘部須恵器・土師器編年表（1 / 4）

が大半で，ナデ消しや・カキ目調整したものは少ない。内面の文様は，青海波文・同心円文が大半を占め，ナデ消したのは少ない。興味深いのは，青海波文・同心円文の当て板痕を，単純か連節状の平行条線文や格子目文の当て板（叩き板？）に替え消していることで，あたかも内面を叩いている様に見える。当て板（叩き板？）の種類を変えることによって何らかの技術的効果があったのかもしれないが，このような手法が認められたことを指摘しておく。

叩き目文・布目痕土師器について

平行あるいは格子目叩きの土師器小形甕片は，砂丘部19点，貝塚部４点の計23点がある。外面の叩きの種類は，次のごとくである。

a．単純平行条線（３点）
b．連節　〃　（15点）
c．格子目　（３点）
d．ナデ消し　（２点）

Tab. 10　カマド・タタキ目文・布目痕土器出土一覧表

	地区	カマド	タタキ目文	布目痕
砂丘	A	1		
	F		1	
	G	1		
	H	7	8	3
	J		2	
	L	2	8	17
	M	1		
貝塚	C・D	1	3	2
	N		1	1
計		13	23	23

内面の当て板文様は，細かい単純平行条線あるいは弯曲がほとんどない青海波（円弧）文である。これらの叩き目は，須恵器のそれと変わりはないが，しいて違いをあげれば内面の当て板痕は細く長さが短かく，叩き板も小形のようだ。はっきり形をなす類似資料として福岡県沖ノ島５号遺跡[註13]出土土器があり，印文土師器壺として紹介されている。時期は７～８世紀に位置づけられており，串島出土資料もその年代に矛盾しない。

内面に極細糸の布目痕を有する手づくねふうの小形甕（一応甕類に含めた）は23点出土しているが，器形を復原できる資料はない。破片より形状を推定すれば，小形でコップ状の筒形土器のようになるようだ。量的には少ないが，製塩土器に類する。あるいは内浦湾の内海で小規模な製塩を行っていた可能性もある。M区の石組炉址がそれに関連すればおもしろいが，砂丘部は試掘を一部実施したにすぎないので結論はだせない。なおはっきりした天草式製塩土器は西彼杵郡野母崎町脇岬遺跡資料がある。

竈について

竈と考えられるものは13点ある。砂丘部12点，貝塚部で１点みられるが，全て部分破片で形状を復原できる資料はない。個体数では少なくとも４個体以上はあるようだ。砂丘部出土須恵器・土師器のうち占める割合は0.58%，土師器総量でも0.7％にすぎない。竈形土器そのものの実用のあり方から，日本古代社会のなかにおける竈の役割について論究された稲田孝司氏の論考[註14]によれば，竈は付け庇系統と曲げ庇系統の両者にわかれ地域的特性をもち，竈の使用については「日常炊さんの竈ではなく，非日常的な臨時の場合の炊さん具」であり，「それは宗教的祭祀において聖なる食物を調理する竈であった」としている。

串島出土資料は付け庇系統のもので，稲田氏の型式変遷観によれば，庇の形態およびそのと

りつく位置によって変化がたどれ，第二段階（７世紀初頭に存続期間の一点がある）の「より幅広くなった庇が斜め上方につき出る」大阪府難波宮跡下層遺跡資料に類似しており，この段階に位置づけてよいであろう。時期的には串島Ⅰ・Ⅱ期（７世紀後半～８世紀前半頃）に包括されると思われる。なお県内では他に，南高来郡有明町松尾遺跡で出土している。

(5) 歴史時代（中世期）

中世期の遺物としてあげられるものはほんの数点にすぎない。E区の須恵器系瓦質鉢片（Fig.34—②），F区青磁椀片（Fig.35—②）などがあり，他にG区Fig.37—④は土鍋片ではないかと思われる資料である。F区出土青磁椀はいわゆる竜泉系のもので，横田賢次郎・森田勉氏が太宰府出土資料を中心として分類したⅠ—4類[註15]に該当し，体部内面を五区画に篦描文で区分するものである。時期的には12世紀末頃～13世紀代と考えてよかろう。

参考文献（数字は註と同じ，他はアルファベット）

（縄文時代）

註1 田中良之（1979）「中期阿高式系土器の研究」『古文化談叢第６集』九州古文化研究会

2 柳田純孝他（1978）『四箇周辺遺跡調査報告書(2)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集 福岡市教育委員会

（弥生時代）

3 井上裕弘・藤瀬禎博・石橋新次（1978）「前期末の地域性について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第７集』福岡県教育委員会

4 鏡山 猛（1964）「岐宿貝塚」『五島遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告書第二集 長崎県教育委員会

5 正林護・高野晋司・安楽勉他（1974）『里田原遺跡略報Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第18集
安楽勉・藤田和裕他（1976）『里田原遺跡』長崎県文化財調査報告書第25集 長崎県教育委員会

他a 小田富士雄（1972～73）「入門講座弥生式土器—九州１～６」考古学ジャーナル76～84号 ニューサイエンス社

b 橋口達也（1979）「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅩⅪ』福岡県教育委員会

c 高倉洋彰・渡辺明夫（1973）「東町遺跡について」『鹿部山遺跡』日本住宅公団

d 武末純一（1977）「弥生土器」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅨ』福岡県教育委員会

e 高倉洋彰（1976）「弥生土器」『垂水廃寺』新吉富村文化財調査報告書第２集 新吉富村教育委員会

（古墳時代前期）

6 栗原和彦他（1976・77）「湯納遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第４・５集』福岡

県教育委員会
7　武末純一（1978）「福岡県早良平野の古式土師器」『古文化談叢第5集』九州古文化研究会
f　井上裕弘（1978）「弥生終末～古墳前期の土器群について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集』福岡県教育委員会
g　武末純一（1977）「土師器」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIX』福岡県教育委員会
（古墳時代末期～奈良時代）
8　小笠原好彦・西弘海・吉田恵二他（1976）『平城宮発掘調査概報Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第二十六冊　奈良国立文化財研究所
9　西　弘海（1979）「奈良時代の食器類の器名とその用途」『研究論集Ⅴ』奈良国立文化財研究所
10　山中敏史（1973）「八・九世紀における中央官衙と土師器」『考古学研究76号』考古学研究会
11　小田富士雄他（1969～72）『八女古窯跡群調査報告Ⅰ～Ⅳ』八女市教育委員会
12　亀井明徳・高橋章（1975）「向佐野・長浦窯の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ』福岡県教育委員会
13　岡崎敬他（1977）『宗像沖ノ島展』宗像大社復興期成会　出光美術館
14　稲田孝司（1978）「忌の竈と王権」『考古学研究97号』考古学研究会
h　田辺昭三（1966）『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
i　中村浩他（1976～79）『陶邑Ⅰ～Ⅳ』大阪府教育委員会
j　岩瀬正信・酒井仁夫・川述昭人（1977）「御笠川東岸における須恵器の編年について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅦ』　福岡県教育委員会
k　木下　修（1978）「須恵器について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第5集』福岡県教育委員会
l　力武卓治・横山邦継他（1979）「土器」『三宅廃寺』福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集　福岡市教育委員会
m　『太宰府史跡』(1974～79) 昭和48年～53年度概報　九州歴史資料館
n　小田富士雄他（1977）『天観寺山窯跡群』北九州埋蔵文化財調査会
o　前川威洋（1979）「Ⅰ－1A以前の土師器」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集(下)』福岡県教育委員会
p　田浦郁子（1979）「Ⅰ－1A以前の土師器について」『同　上』
（歴史時代中世期）
15　横田賢次郎・森田勉（1978）「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

三、ま と め

長崎県は，我が国の最西端に位置し，その行政区画範囲には実に多くの島嶼を擁する。ちなみに，その数は対馬，壱岐，五島列島を始め有人，無人合わせて572にのぼり，それらの海岸線は実に4,018km[註1]にも及ぶ。

又，位置的には当然ながら大陸に最も近接し，特に朝鮮半島とは一衣帯水の間にあることから，古来より種々の面でかなり活発な交渉があった事は周知の事実である。

ここに報告した串島遺跡は，内容的に彼我の直接的な交流を示すものではないが，海を媒介とする事例が多い本県の遺跡の1特色を示すものとして注目してよい遺跡であろう。

以下遺跡のまとめを簡単に行う。

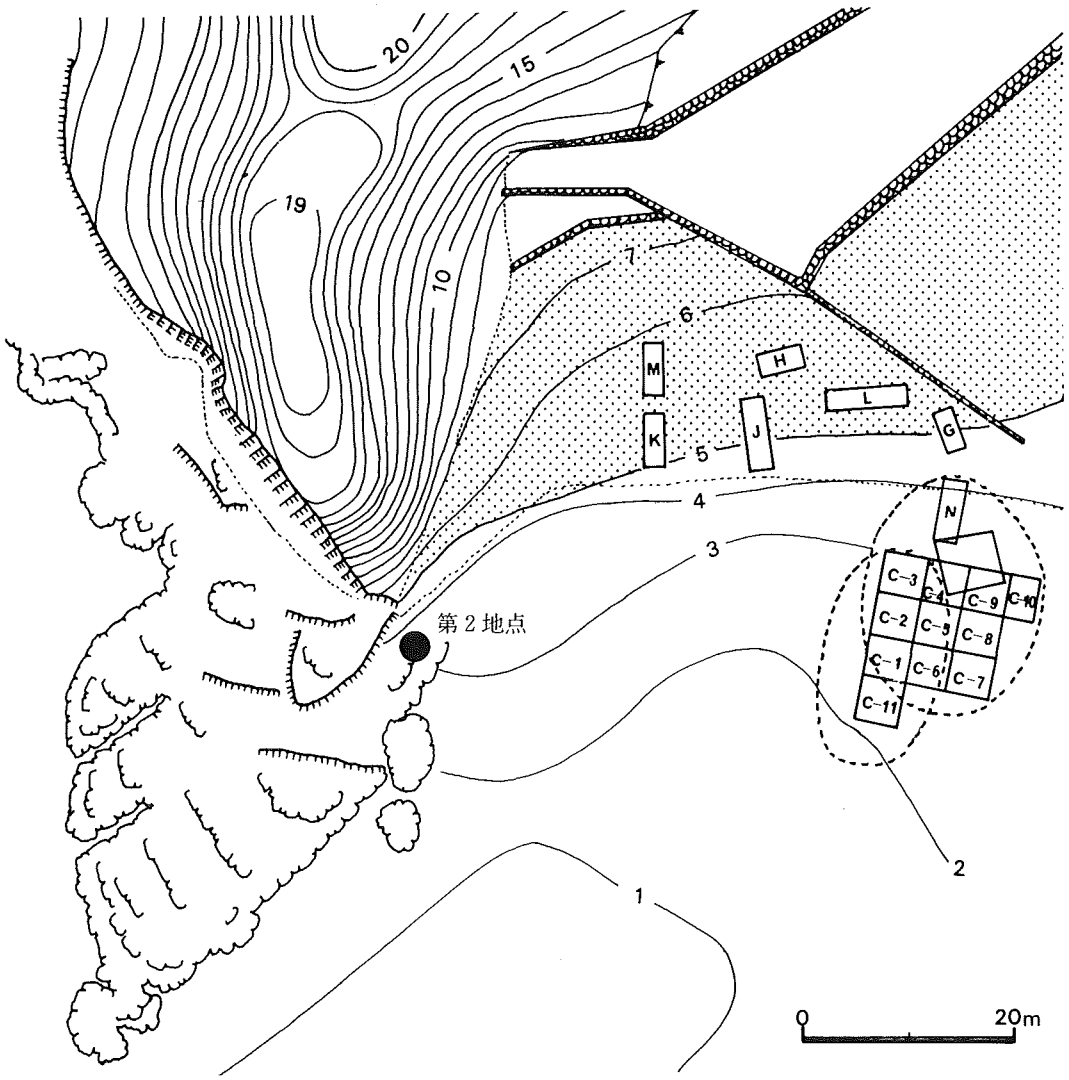


Fig. 74　串島遺跡範囲図

1．貝　塚

貝塚の面積は，当初の我々の予想よりは広く，400㎡ 以上に堆積している事が判った。次に貝層のレベルは，その上面が標高1.8mから2.15m，下面は0.8mから1.25mの間にあり，この地の平均潮位1.66mからするとかなり低い位置にあると言わざるを得ない（Fig.74)。

つまり貝塚部分は，北東より南西に向ってゆるやかに低く推積しているが，その大部分は海面下に没する所謂海底遺跡の観を呈している訳である。

このような例は特に西北九州に多く，佐賀県では西唐津海底[註2]，本県では，壱岐鎌崎[註3]，同湯本[註4]，五島列島有川町川尻海底[註5]，福江市江湖[註6]，島原市三会下町[註7]，西彼杵郡野母崎町菖浦郷[註8]，同脇岬下揚[註9]，熊本県ヒイデン洲海底[註10]，天草郡松島海底遺跡[註11]などが知られているが，これらの遺跡からは主に縄文前期曽畑式土器が出土する事が多い。これらの事実は，時期及び立地的に汎世界的な海進海退現象とは一致せず，これらの地域を含む範囲について縄文前期以降でも継続的な地殻変動があったものと解さざるを得ない。

串島貝塚は，主に縄文後・晩期～弥生中期にかけての海底遺跡で，前述の諸遺跡とは時期を異にするが，その生成理由は各遺跡の例と同様，局地的な地盤沈降によるものであろう。後論の山本氏の貝類の分析の中で，出土貝類の中に現地形では考えられない，生息条件の異なる種類が多くみられるという事実は，氏も指摘するように，従来陸続きであった松島と串島の分離によって生じた現象として理解できるのである。

貝塚の調査の項で述べた如く，貝層中，各層から任意抽出した貝について ^{14}C を行った。選んだ層は，弥生前期の可能性が強い層と縄文後晩期に属する層であったが，結果は，4例中2例は2610±80y.B.P，2650±90y.B.P.と縄文晩期末の数値を示し，2例は2990±85y.B.P.，2950±80y.B.P.と同じ晩期初頭頃の値を示した。壁面崩壊を気にしながらの採集であった為，多分に調査時の混乱も考えられるが，それにしても貝層の時期を区別する明瞭な線は引けなかった事を意味している。しかし ^{14}C の示した数値が，確実に貝塚形成の一時期である事は，少ないながらも出土土器の特徴からも肯首できよう。

次に出土遺物を概観してみよう。貝層中の多量の獣魚骨の出土からすると，当然その捕獲用具が考えられるが，他の貝塚等でよくみられる骨角器などの明瞭な道具は出土していない。遺跡の形成当時は松島と串島は陸続きであったろう事は前述したが，外洋と内湾とに面した立地は，網漁にも刺突漁にも適した好環境であったはずである。しかし何れの漁業形態であったのか直接的な証拠がない為に推定の域を出ない。

概して，貝層中からの石器の出土も極めて少なかった。礫器にしても，その殆どは表採もしくは表層中のものであり，何か自然要因によって攪拌された可能性も残る。なお，貝類の捕獲，調理等についてはすでに礫器の項で述べたのでくり返さない。

2．砂丘部

砂丘部の調査は，目的が範囲の確認にあった為に調査面積も狭く，内容的にも詳細は不明で

る。しかしその予想される遺跡の範囲は標高５ｍ以上の砂丘，凡そ 2,400㎡程度に広がるものとみて差しつかえあるまい（Fig.74)。

出土遺物は，須恵器，土師器，骨角器，多量の獣魚骨があり，遺構としては一基の炉址が確認された。そしてその属する時期は７Ｃ後半から８Ｃ前半頃が主体である事が判った。

出土土器では特に煮沸に供したと思われる甕類の比率が高く，又出土炉址の状況から製塩の可能性もあるが，専従的な製塩遺跡ではないだろう。

骨角器の中には，網漁用と思われる類のものとアワビおこしと思われるものが出土している。鉄製品そのものは見当らなかったが，未製品に顕著であった鋭利な刃の傷痕は，鉄器の存在を想起せしめるのに十分な資料である。

現在まで，当地附近で，同時期の遺跡は殆ど知られておらず，又際立った文献にも登場することはなかったが，ここに僅かながらその存在を垣間みることができた。更に遺跡自体は，幸いにも関係者の深い御理解により現状保存の了解を得たので，その詳細な性格，内容等については将来の調査と研究を待つこととなった。

ともあれ，この遺跡の如く，水人の伝統を受けつぐ小規模な村落が，名も無い西海の島々にも連綿と息づいていたのであろう。

註１　長崎県統計協会　1978年資料による。

註２　江坂輝彌　1967　「日本文化の起源」講談社現代新書

註３　横山順・田中良之　1979　「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」九州考古学54

註４　横山順・須藤資隆・安楽勉氏教示

註５　正林　護　1969　「西北九州縄文時代研究の問題点」

註６　坂田邦洋　1973　「江湖貝塚」

註７　古田正隆　1974　「島原市の海中干潟遺跡(図録)」百人委員会埋蔵文化財調査報告第２集

註８　註５に同じ

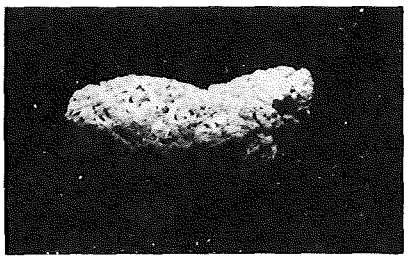
註９　同　上

註10　田辺哲夫編　1980　「熊本の上代遺跡」

註11　同　上

追

Ｃ－11区Ⅱ層より糞石が１個出土している。現存長3.3cm，径1.2cmである。内容に多くの貝類砕片を含んでいるが，人のものかどうかの判断はつかない。



糞石（１／1）

付.　土器観察表

凡　　例

- 法量の項目で,(　) は推定値である。
- 特徴の項目で,「回転ナデ」とはロクロによる「ヨコナデ」,「静止ナデ」とは「仕上げナデ」のことである。青海波文と同心円文は中心の有無で区別した。
- 参考文献は,「第3章　考察　二.出土土器について」の項の文献と同じ。
- この表は宮崎が作成し，責任は宮崎にある。

C・D区①

Fig.番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
5 - 1	壺 口縁片	口径(16.0)	• なめらかに外弯する口縁部破片で，口唇上方はやや平坦 • 外面は縦位ハケあと，上部は内面上部にかけてヨコナデ仕上げ • 内面は横位ハケ	黄橙色 結晶片岩（1～3.5mm）石英（1mm）など含 焼成やや甘い	C Ⅰ層 弥生終末
5 - 2	甕 底片	底径 5.7	• 底下面はややくぼむ • 外面は縦位ハケが残るが，若干風化をうける • 内面は内底部に指圧痕が残る。ナデ仕上げ	赤褐色 不透明な石英粒（～3mm）など多含 焼成やや甘い	D Ⅱ層 弥生中期前半
5 - 3	甕 口胴部片	口径(29.0)	• 直立ぎみの胴部から口縁は小さく外弯し刻目はない • 胴部に一条の沈線がめぐる。外面は若干風化うける • 胴下半は横位ハケ，口縁下端には指圧痕 • 内面は上半が横位ハケをナデ消している。下半はナデ仕上げ	外・暗褐色 内・黄茶色 石英粒（1～2.5mm）多含，金雲母・角閃石若干含 焼成やや良好	D Ⅱ層 弥生前期後半
5 - 4	甕 口胴部片	口径(36.0)	• 胴部はやや丸味をもち，口縁は小さく折れまがり，端部はやや下がる。 • 胴外面は横位ハケあと，縦位ナデ仕上げ。 • 口縁下端には指圧痕，口縁はヨコナデ仕上げ。 • 内面はナデ仕上げ。若干風化うける。	淡茶褐色 石英粒(0.5～3mm) 金雲母（1mm以下）若干含 焼成やや甘い	D ⅣB層 弥生中期初頭
6 - 5	鉢 口胴部片		• 椀状の精製小形鉢。 • 外下端は横位のヘラケズリ，他は内外面とも横位のヘラミガキ • 器肉は中が黒灰色を呈する。	淡(黄)茶色 石英粒(0.5～1mm)含 角閃石僅かに含 焼成普通	C 表採 縄文後期
6 - 6	高杯 口縁片		• わりと直線的に広がり口端へいたる。 • 口縁は未発達で，上方が平坦面をもち，外方・内方にわずかに突出するけはいをもつ。 • 外面は若干風化をうけ，砂粒が浮きでている。 • 内面はナデ仕上げ。	暗灰色 器壁は淡黄橙色 石英粒(～1mm)多含 赤色砂粒，角閃石若干含	C Ⅰ層 弥生前期末から中期初頭
6 - 7	鉢 胴部片		• 胴部は丸味をもち，口縁は端部を欠損するが，短く外反する鉢と思う。 • 外面は風化をうけ，砂粒が浮きでている。二条の沈線がはいる。 • 内面はナデ仕上げ。	黒褐色 部分的に黄茶色 大粒石英粒（1～4mm）多含 焼成やや甘い	D Ⅱ層 板付Ⅱ式
6 - 8	壺 胴部片		• 外面縦位の粗いハケ。貼りつけ突帯の上方・下方はヨコナデ，端部の刻目は貝殻施文と思われる。 • 内面は風化をうけるが，ナデ仕上げ。	暗褐色 石英粒（0.5mm） 長石，角閃石など含 焼成やや甘い	D Ⅱ層 弥生後期
6 - 9	甕 口胴部片		• 胴部は張り気味，口縁は端部が丸味をもつ断面三角形の粘土貼りつけ。 • 内外面とも平滑にナデ仕上げる。	淡赤橙色 大粒石英粒(0.5～2.5mm)多含 焼成わりと良好	C・D ⅣB層 弥生中期初頭
6 - 10	甕 口胴部片		• 口縁は断面三角形の貼りつけ，風化をうけるが刻目はないようだ。 • 胴部突帯には刻目がみられる。 • 内外面ともナデ仕上げ，とくに外面は平滑に仕上げる。	淡黄土色 石英粒（0.5～1.5mm）を含 焼成やや甘い	D ⅣB層 弥生中期初頭

C・D区②

6 ｜ 11	甕 口縁片		• 口縁は屈折し，外方は内弯ぎみにややあがる。内方はやや突出する。 • 口縁はヨコナデ，他はナデにて平滑に仕上がる。	淡赤褐色 石英粒(～2㎜)を含，結晶片岩を含 焼成普通	D　Ⅳ B 層 弥生中期前半
6 ｜ 12	把手		• 指整形，ナデ仕上げ • 内面はヘラケズリ	黄土色 石英粒(1～2㎜を含 焼成やや甘い	C　表採 土　師　器
6 ｜ 13	盌 1/5片	口径(13.2)	• 体部は丸味をもち，口縁端部はやや尖り気味におさめる。 • 外面は体部がヘラケズリ，口縁から体中程にかけヨコナデ仕上げ • 内面下半は指圧痕，ナデ	赤橙色 石英粒(1㎜)含 金雲母微片多含	C　Ⅰ層 土　師　器
6 ｜ 14	高台杯 1/3底片	底径(9.9)	• 高台は小さく，下方は平坦，外方にやや突出する。 • 体部は丸味をもち曲線的にのびあがるようだ。 • 内･下底面は静止ナデ調整，他は回転ナデ調整	淡灰色 石英粒(0.5～3㎜) 含 焼成普通	C　表採 須　恵　器
6 ｜ 15	壺 底　片	底径　9.5	• 体部は直線的にたちあがるようだ。 • 下底面はまきあげ痕状のヘラ切り痕がみとめられる。他は回転ナデ調整	灰色 石英粒（2～3㎜）を若干含 焼成普通	C　表採 須　恵　器
7 ｜ 1	小形甕 細　片		• 外面は細かな格子目文叩き • 内面は指整形ナデ仕上げ	外・茶褐色 内・赤茶色 小石英粒(～0.5㎜) 多含 焼成普通	C　Ⅰ層 土　師　器
7 ｜ 2	小形甕 細　片		• 全面にわたって風化ローリングしている。 • 外面は細かな格子目文叩き。 • 内面は平行条線の当て板痕	外・淡茶褐色 内・淡黄茶色 石英粒(～1㎜)多含 焼成普通	C　表採 土　師　器
7 ｜ 3	小形甕 細　片		• 外面はナデ仕上げ。おそらく叩きのあとナデ消したと思う。 • 斜格子状の当て板痕にみえるが，おそらく平行条線文が重なったものと思う。	外・赤褐色 内・淡茶褐色 石英粒(0.5～2㎜) 含	C　Ⅰ層 土　師　器
7 ｜ 4	小形甕 細　片		• 外面は若干風化している。ナデ仕上げであろう。 • 内面は極細糸の布目痕	外・淡黄橙色 内・赤橙色 石英粒（～1.5㎜）含，金雲母微片僅かに含 焼成甘い	C　表採 土　師　器

C 1～11区①

Fig. 番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
10 - 1	深鉢 口縁片		• 全面風化ローリングしている。 • 口縁部付近のみ凹線文を施す。他は無文	赤褐色 石英粒（1～2mm）含，結晶片岩少量含 焼成普通	C 3 Ⅱ層 阿高式系
10 - 2	深鉢 口縁片		• 口唇上面は押圧によって小さな山形をなす。 • 外面は凹点文や凹線を施す。	赤褐色 滑石（1～2mm）多含 焼成やや甘い	C 3 ⅣB 層 阿高式系
10 - 3	深鉢 口縁片		• 口唇上方はやや平坦 • 凹線が一条めぐる他は無文	赤褐色 滑石（1～2mm） 結晶片岩（～3mm）含 焼成普通	C 7 Ⅰ層 阿高式系
10 - 4	深鉢 口縁片		• 口唇上方・外方は平坦でやや角ばった感じ。 • 斜凹線が口縁部帯にめぐる。その下はおそらく無文 • 内面は指圧痕が残る。	赤褐色 滑石（1～3mm）多含 焼成やや甘い	C 8 Ⅰ層 阿高式系
10 - 5	鉢 胴部片		• 風化ローリング著しい • 沈線がめぐりその下は横位の貝殻条痕	黄土色 白色砂粒(0.5mm以下）を含 焼成甘い	C 8 ⅣA 層 縄文後期
10 - 6	鉢 胴部片		• 精製の鉢と思われる。内面は風化している。 • 沈線が2条めぐる。	淡茶褐色 1mm以下の石英長石，黒色粒など含 焼成やや甘い	C 11ⅣB 層 縄文後期
10 - 7	深鉢 胴部片		• 全面風化ローリングしている。胴下半の破片 • 突帯の刻目はわりと太く施される。 • 外面は横位ヘラケズリのままで，内面はナデ仕上げであろう。	外・淡茶褐色 内・淡赤茶色 石英粒（1～3mm），赤色砂粒，黒色粒を含 焼成やや甘い	C 3 Ⅰ層 縄文晩期
10 - 8	深鉢 胴部片		• わりと細かな貝殻条痕調整，図では上向に施している。 • 内面は横位にケズリ調整している。 • 内面はススが付着している。 • わりと薄手のつくり。	外・赤褐色 内・黄茶色 石英(～2mm) 結晶片岩（～4mm）を多含 焼成普通	C 5 Ⅱ・ⅣB 層 縄文後期
10 - 9	深鉢 口縁片		• 直線的に外反する口縁と思われ，端部は丸くおさめる。 • 外面は粗い貝殻条痕。内面は横位ケズリ。 • 下端は接合面で擬口縁状を呈する。	外・黄茶色 内・淡赤茶色 結晶片岩（1～2mm），石英粒，金雲母微片多含 焼成やや甘い	C 3 ⅣB 層 縄文後期
10 - 10	深鉢 胴部片		• 内外面とも粗い貝殻条痕	外・赤茶色 内・暗茶色 白色砂粒（～2mm），赤色砂粒（～3mm）など含 焼成甘い	C 6 Ⅱ・Ⅲ層 縄文後期

C 1 ～11区②

10 ｜ 11	深鉢 胴部片		• 薄手のつくり • 内外面とも粗い（貝殻）条痕	赤茶色 結晶片岩（～3㎜）多含 焼成甘い	C 1 Ⅳ B 層 縄文後期
10 ｜ 12	深鉢 口胴部片		• 若干内弯気味に広がり，口縁端部は丸くおさめる。 • 外面は粗い貝殻条痕のまま，内面は横位の貝殻条痕のあとナデにてすり消している。 • 内面にススが付着している。	外・淡赤茶色 内・黄土色 結晶片岩（～5㎜）多含 焼成普通	C 3 Ⅳ B 層 縄文後期
10 ｜ 13	深鉢 胴部片		• 内外面とも粗い条痕を施す。	赤茶色 1㎜以下の結晶片岩，石英粒を含 焼成普通	C 11 Ⅳ B 層 縄文後期
10 ｜ 14	深鉢 胴部片		• 内外面とも粗い条痕を施す。	赤茶色 結晶片岩（～2㎜）を多含 焼成やや甘い	C 11 Ⅳ B 層 縄文後期
10 ｜ 15	深鉢 口胴部片		• 胴部は内弯気味にたちあがる。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。 • 内外面とも横位の貝殻条痕	外・暗茶褐色 内・赤茶色 結晶片岩（～4㎜）多含 焼成普通	C 5 Ⅱ・Ⅳ B 層 縄文後期
11 ｜ 16	深鉢 口胴部片		• 胴部はわりと直線的に開き口縁にいたる。口縁は尖り気味に丸くおさめる。口縁から胴上端にススが付着 • 外面から口縁内面にかけナデ仕上げ • 他内面は粗い条痕のまま放置する。 • わりと薄手のつくり。	茶褐色 結晶片岩（～2㎜），黄色砂粒（～1㎜） 焼成普通	C 6 Ⅱ・Ⅲ層 縄文後期
11 ｜ 17	深鉢 口胴部片		• 口縁は尖り気味に丸くおさめる。 • 条痕のあとナデ仕上げ	赤褐色 結晶片岩（～3㎜）若干含 焼成甘い	C 1 Ⅱ・Ⅳ B 層 縄文後期
11 ｜ 18	深鉢 口胴部片		• 直線的に開く深鉢形を呈する。 • 内外面とも平滑に仕上げる。 • 若干器表は多孔質	外・黄茶色，黒褐色 内・黒褐色 貝殻片（～7㎜）多含，結晶片岩も若干含 焼成わりと良好	C 11 Ⅳ B 層 縄文後期
11 ｜ 19	深鉢 口胴部片		• 尖り気味に丸くおさめた口縁端部から体部はやや内弯気味にすぼまるようだ。 • 焼成後穿孔がみとめられる。 • 内外面ともナデ仕上げ，外面はとくに平滑に仕上げる。 • 器表は多孔質	黄土色 貝殻片（～5㎜）多含 焼成甘い	C 11 Ⅳ B 層 縄文後期
11 ｜ 20	深鉢 胴部片		• 内外面ともナデ仕上げと思われるが，外面は雑な仕上げでデコボコしている。	淡黄茶色 貝殻片（～4㎜）多含 焼成普通	C 11 Ⅳ B 層 縄文後期

C 1 ～11区③

11 ｜ 21	深鉢 胴部片		• 外面はヘラ状のものでナデ調整している。 • 内面は平滑なナデ仕上げ。 • 器面は多孔質	茶褐色 貝殻片(～4㎜) 多含 焼成甘い	C 11Ⅳ B 層 縄文後期
11 ｜ 22	深鉢 胴部片		• 内外面ともナデ仕上げ。	淡茶褐色 貝殻片(～3㎜) 含 焼成甘い	C 11Ⅳ B 層 縄文後期
11 ｜ 23	深鉢 胴部片		• 内外面とも条痕のあとナデ仕上げ。	外・茶褐色 内・赤茶色 結晶片岩(1㎜) を少量含 焼成甘い	C 8 Ⅱ・Ⅳ A 層 縄文後期
11 ｜ 24	深鉢 口胴部片		• 体部は直線的に開き，口縁はわずかに外傾する。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。 • 外面は粗いナデ仕上げ，内面はナデにて平滑に仕上げる。	外・茶灰色 内・黄茶色 貝殻片(～5㎜) 多含，結晶片岩 を少量含 焼成甘い	C 11Ⅳ B 層 縄文後期
11 ｜ 25	深鉢 胴部片		• 外面は粗いナデ，内面は平滑なナデ仕上げ	外・淡茶色 内・黄土色 貝殻片(～4㎜) 多含	C 1 Ⅳ B 層 縄文後期
12 ｜ 26	深鉢 口胴部片	口径(40.5)	• 体部は若干丸みもってたちあがり，口縁はわずかに外弯する。 • 外面は横位に粗いナデ仕上げ。 • 内面は平滑なナデ仕上げ。	外・淡茶色 内・黄土色 貝殻片(～5㎜) 多含	C 1 Ⅳ B 層 縄文後期
13 ｜ 27	深鉢 底部片	底径(8.0)	• 外面は風化をうける。器面は多孔質 • 内面は平滑なナデ仕上げ。 • 底下部は貼りつけ。	外・赤褐色 内・黄茶色 貝殻片(～3㎜) 多含，石英粒僅かに含，焼成甘い	C 1 Ⅳ B 層 縄文後期
13 ｜ 28	深鉢 底部片	底径(7.7)	• 下端は直立気味で，体部は丸くふくらみ気味にたちあがる • 内面はナデ仕上げ。 • 底下面は平坦	外・淡茶黄色 内・暗茶色 貝殻片(～4㎜) 多含 焼成甘い	C 1 Ⅳ B 層 縄文後期
13 ｜ 29	深鉢 底部片	底径8.1	• 外面はヘラ状器具で上位にケズリ状のナデ調整 • 内面はナデ仕上げ • 底下面は平坦 • 器面は多孔質	黄土色 貝殻片(～4㎜) を多含 焼成甘い	C 1 Ⅳ B 層 縄文後期
13 ｜ 30	甕 1／8片	口径(27.4)	• 胴部は内傾気味にたちあがり，口縁は短く屈折する。 • 外面は細い縦位ハケのあとナデ仕上げ，口縁はヨコナデ調整 • 内面はナデ。若干風化している。	外・茶褐色 内・黄茶色 石英粒(～3㎜) 多含，金雲母微片含，焼成普通	C 10Ⅳ A 層 弥生中期初頭

C 1～11区④

14 ｜ 31	甕 1/8片	口径(23.3)	• 胴部はやや内傾し，口縁はL字状に屈折する。 • 胴部外面は細かい縦位ハケのあとナデにて平滑に仕上げる。 • 口縁下端はヨコナデ，内面はナデ仕上げ	外・淡赤茶色 内・黄茶色 石英粒(1㎜)含 金雲母微片少量含 焼成普通	C 10ⅣA層 弥生中期前半
14 ｜ 32	甕 底部片	底径(6.2)	• 器面は著しく風化をうけ砂粒が浮きでている。 • 平底	外・赤茶色 内・黄土色 石英粒（2㎜） 多含 焼成甘い	C 1 Ⅰ層 弥生前期
14 ｜ 33	甕 底部片	底径(8.0)	• 器面は風化をうけ調整不明瞭 • 下底面は若干くぼむ。 • 整形は，粘土塊を芯として，それに円筒状の帯をまき，そのあと下底面に粘土を詰め込み完成したようだ。	外・赤黄色 内・黄茶色 大粒石英（～3㎜）かなり多含 焼成甘い	C 表採 弥生中期初頭
14 ｜ 34	甕 底部片	底径 6.2	• 下端は直立気味にたちあがり，大きく外弯しひろがる。 • 下底面はわりとくぼみ，接地面は輪状を呈する。 • 器面は若干風化をうけるが，内外面ともナデ仕上げ	淡赤褐色 石英粒(0.5～2㎜）結晶片岩を多含 焼成やや甘い	C 10Ⅰ層 弥生中期初頭
14 ｜ 35	甕 体下半	底径 7.6	• 底部付近は風化し砂粒が浮きでている。 • レンズ状の平底から体部は直線的に開く。 • 外面は平滑に丁寧に仕上げる。内面もナデ • あるいは壺かもしれない。	外・赤茶色 内・淡茶色 石英粒(～3㎜) 赤色砂粒を含 焼成やや甘い	C 7Ⅱ層 弥生後期
15 ｜ 36	甕 口縁片		• 口縁は断面三角形の粘土貼りつけ。 • 体部は細かい縦位ハケをナデ消す。口縁はヨコナデ • 内面はナデ • 体外面はススが付着し黒ずんでいる。亀甲状にヒビわれる。	外・暗茶褐色 内・淡赤茶色 石英粒（1㎜） 赤色砂粒，結晶片岩など多含 焼成普通	C 10ⅣA層 弥生中期初頭
15 ｜ 37	甕 口縁片		• 口縁は断面三角形の粘土貼りつけ • 器面は風化のためかもろくなっているが，内外面ともナデ仕上げ。口縁下端はヨコナデ調整 • 器表は亀甲状にヒビわれる。	外・暗茶褐色 内・茶褐色 石英粒(～3㎜) 多含，結晶片岩若干含 焼成甘い	C 2 表採 弥生中期初頭
15 ｜ 38	壺 胴部片		• 外面は縦位ハケあとナデ仕上げ，内面はナデ • 突帯の上方・下方はヨコナデ調整，刻目は貝殻施文と思われる。 • Fig. 6－8と同一体と思われる。	外・黒色(黒斑) 内・淡赤茶色 長石，角肉石を含 焼成普通	C 4 弥生中期
15 ｜ 39	複合口縁壺 1/5片	口径(21.2)	• 器面は風化し，若干砂粒が浮きでている。 • くびれた頸部は大きく外弯し，屈折部から口縁は外反し，口唇はわずかに外傾する。 • 内外面ともナデ調整	外・淡黄茶色，黒茶色 内・淡黄茶色 石英粒(～1㎜) 多含，金雲母微片僅かに含 焼成やや甘い	C 表採 古式土師器
15 ｜ 40	甕 口縁片		• 内傾する胴部から口縁は大きく外弯し端部は丸くおさめる。 • 口縁下端から胴上端にかけヨコナデ，体内面はヘラケズリ他はナデ仕上げ	赤茶色 石英粒(～3㎜) かなり含，金雲母微片若干含 焼成やや甘い	C 10Ⅰ層 土 師 器

C－～11区⑤

15 ｜ 41	把手		• 整形は，粘土塊を芯としてまわりに粘土を貼りつけ指で整形している。	淡赤橙色 石英粒(～4㎜)多含 焼成やや甘い	C 表採 土師器
15 ｜ 42	高杯 杯部		• 杯部下半破片で，脚部との接合はソケット式であろう。 • 内外面ともナデ仕上げ。	外・淡茶褐色 内・淡赤褐色 石英粒(～3㎜) 結晶片岩などわりと含 焼成やや甘い	C 10Ⅱ層 土師器
15 ｜ 43	高杯 脚部		• 筒部は細長い柱状，裾部は強く屈折する。 • 器表はローリングをうけ調整不明瞭，内部はヘラケズリを施す。 • 上端には沈線が一条めぐる。	淡茶褐色 赤色粒，金雲母などかなり細かな砂粒を含 焼成やや甘い	C 10Ⅰ層 土師器
15 ｜ 44	杯蓋		• つまみは扁平な釦状，天井部は平坦なつくり。 • ろくろ左廻りの回転ナデ調整で，内面はさらに静止ナデを施す。	暗灰色 石英粒（～1.5㎜）若干含 焼成普通	C 8 須恵器
15 ｜ 45	高台杯 1/6片	高台径 (10.7)	• 高台は小さくふんばり，接地面は平坦 • 底部と体部の境は稜がつき角ばる。 • 底面はヘラ切り，内底面に静止ナデ調整を行う。	淡灰青色 石英粒（1～3㎜）わりと含 焼成良好	C 4 表採 須恵器
15 ｜ 46	高台杯 1/4片	高台径 (10.1)	• 高台は小さく，接地面は平坦で外方がわずかにあがる。 • 底部との境はやや丸味をもつ。 • 底面はまきあげ痕状を呈する。体部はヨコナデ仕上げ。	灰色(若干黄味) 焼成やや甘い	C 10Ⅰ層 須恵器
15 ｜ 47	竈 庇片		• 庇の左側最下端部と思われる。 • 接合面で剝落している。 • ナデ調整	赤橙色 石英粒(～2㎜)多含 焼成普通	C 4Ⅰ層 土師器

Ⅰ 区

Fig.番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
16 ｜ 1	深鉢 口縁片		• 器面を研磨した精製鉢，内面は風化を著しくうけ器表が荒れている。 • 波状口縁の頂部近くの破片で，口縁の文様帯には3条の沈線をめぐらし，各沈線間は磨消され，屈折部上端にのみ縄文が残る。 • 沈線間に（・）の文様を施す。	外・淡茶褐色，黒褐色 内・淡茶褐色 細かい貝殻片，長石，角閃石，他砂粒を含 焼成甘い	Ⅰ ⅣB層 縄文後期
16 ｜ 2	深鉢 胴部片		• 外面は横位の貝殻条痕，内面は横位のケズリ調整のあとナデ（？）	淡茶褐色 貝殻片(～4㎜)多含	Ⅰ ⅣB層 縄文後期

N　区①

Fig.番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
30 ｜ 1	甕 1/8片	口径(25.4)	• やや丸く張りだした胴部から，口縁はゆるやかに外弯する。 • 口縁下端はややふくれ，刻目ははいらない。 • 胴部には沈線が1条めぐる。 • 胴下半は極細の縦位ハケをナデ消している。胴上端から口縁下方ヨコナデ，内面はナデ調整	外・淡黄茶色，黒茶色(黒斑) 内・暗茶色 石英粒（1～2㎜）多含，金雲母微片含 焼成甘い	N　ⅣB層 弥生前期末
31 ｜ 2	深鉢 胴部片		• 器面は著しくローリングしている。 • 凹線文を施す。	淡赤褐色 滑石(～3㎜)多含 焼成やや甘い	N　ⅣB層 縄文中期
31 ｜ 3	壺 口縁片		• 大きく外弯する口縁で，内側に貼りつけ内面にいくらか突出部をもつ未発達の鋤先状口縁 • 内外面ともナデ仕上げ	淡赤茶色 石英粒（1～3㎜）多含，金雲母微片若干含 焼成普通	N　ⅣB層 弥生中期前半
31 ｜ 4	壺 胴部片		• 丸く張りだした胴部片で，断面三角形の突帯を1条めぐらす。 • 外面は平滑にナデ仕上げ，内面は風化をうけるがナデであろう。	外・明黄茶色 内・淡赤茶色 石英粒(～2㎜)を多含，他に角閃石，長石なども含 焼成やや甘い	N　ⅣB層 弥生中期前半
31 ｜ 5	甕 口縁片		• 口縁は大きく外弯し，やや平坦な口唇下端に刻目を施す。 • 胴部に2条の沈線がめぐる。 • 器面は若干風化しているが，ナデ仕上げで外面と口縁内面にハケ目が残る。	淡赤褐色 石英粒(～2㎜)多含，金雲母少量含 焼成普通	N　ⅣB層 弥生前期末
31 ｜ 6	甕 口縁片		• 口縁は断面三角形の貼りつけ • 外面は斜縦位のハケ調整，口縁はヨコナデ，内面は風化しているがナデ仕上げ	淡黄茶色 石英粒（1～2㎜）多含，金雲母若干含 焼成やや甘い	N　ⅣB層 弥生中期初頭
31 ｜ 7	甕 口縁片		• 直立気味の胴部から口縁は強く屈曲し，端部はややたれ下がる。 • 内面はやや風化しているが，内外面ともナデ仕上げ，とくに外面は平滑に仕上げる。	淡茶灰色 石英粒(1㎜)多含，金雲母，長石微片若干含 焼成やや甘い	N　ⅣB層 弥生中期前半
31 ｜ 8	甕 口縁片		• 丸く張った胴部から口縁は直立気味（やや外弯）にたちあがりさらに外反する。 • 口縁端部は平坦で方形をなす。 • わりと薄手のつくりで，口縁内外面は粗いハケ調整，他はそれをナデ消しておりとくに内面は丁寧に平滑仕上げる。	赤褐色 金雲母多含，石英粒(2㎜)含 焼成やや良好	N 弥生終末～古式土師
31 ｜ 9	杯蓋		• わりと扁平な杯蓋で，内面のかえりは小さい。 • 天井部と同内面に静止ナデがみられる他は回転ナデ調整	外・暗灰色 内・灰色 石英粒（1～2㎜）少量含 焼成わりと良好	N　O層 須恵器
31 ｜ 10	杯 1/3片	底径(10.9)	• 外面は風化ローリングしている。 • 底部と体部の境は丸味をもちたちあがる。 • 体内面にはヘラ記号がはいる。 • 底部はろくろ左廻りのヘラ切り，内面は丁寧なナデ仕上げ	明茶色 赤色砂粒を含 焼成良好	N 土師器

N　区②

31 － 11	竈 庇片？		• どの部分かはっきりしない。 • 全体に風化をうけ調整はあまり明瞭でないが指ナデ仕上げであろう。 • アミの部分は暗褐色を呈し，二次的な火を受けたもののようにもみえるが，黒斑にちかい。	淡黄橙色（ハダ色に近い） 石英粒(0.5～2㎜) 多含 焼成やや甘い	N　Ⅰ層 土　師　器
32 － 1	小形甕 細　片		• 外面は格子目叩きではなく，平行条線文叩きが重複したもの。 • 内面も平行線条文の当て板痕が重複したものと思われる。	外・赤橙色 内・赤茶色 石英粒(1㎜)含 焼成普通	N　0層 土　師　器
32 － 2	小形甕 細　片		• 外面は指頭による整形で指紋がついている。 • 内面は眼にとまらぬほどの極細の糸の布目痕が残る。	淡黄橙色（ハダ色に近い） 赤色砂粒，石英粒，貝殻片など多含	N　0層 土　師　器

A区付近表採

Fig.番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	色調・胎土・焼成	備　考
33	竈 庇　片		• 接合面から剝落した庇の最上部付近と思われる。 • 器面は若干風化しているがナデによる仕上げ • 庇下面(内面)は二次的な火の影響か赤味をおびる。	上面・淡黄茶色 下面・赤橙色 石英粒（1～3㎜）多含 焼成やや甘い	土　師　器

E　区①

Fig.番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	色調・胎土・焼成	備　　考
34 － 1	高台杯	高台径 (10.3)	• 高台は小さくふんばり，接地面は平坦 • 底面はまきあげ痕状を呈し，下底面は回転ナデ調整，内底面は静止ナデ調整を施す。	外・淡灰色（若干黄色味） 内・灰茶色 石英粒(0.5～3㎜) わりと含 焼成甘い	E 須　恵　器
34 － 2	瓦質鉢 口縁片		• 口縁は玉縁状をなし，その部分のみ暗灰色を呈する。 • 内面下半が静止ナデを施す他は，回転ナデによる。	灰白色 石英粒(～3㎜) 他砂粒含 焼成軟質	E 中　世　期
34 － 3	壺 口縁片		• 朝顔形に開く口縁で，端部はややくぼみ気味に角ばる。 • 外面は細かい縦位ハケ，内面は横位ハケをそれぞれナデ調整し消している。体内面は指頭痕，ナデ仕上げのようだ。	淡黄土色 白色砂粒（～2㎜）など多含 焼成普通	E 弥生終末～古式土師
34 － 4	壺 底部片		• 丸底の底部付近であろう。3とあるいは同一個体とも考えられる。 • 外面は指整形，ナデ仕上げ，内面は丁寧に平滑ナデ仕上げ	外・淡黄圧色 内・淡黄土色 石英粒（1㎜）など含 焼成やや甘い	E 弥生終末～古式土師

E　区②

Fig.番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
34 — 5	土錘	長　4.9 径　11.1 孔径 0.3 重　5.8g	・器面ローリングしている。指整形	赤褐色 赤色砂粒など含 焼成良好	E 土師質
34 — 6	甕 胴部片		・外面平行条線叩き文，内面青海波文当て板痕をそれぞれ回転ナデ調整するが，文様は残る。 ・上端は内外面とも回転ナデ仕上げ	淡黄(灰)色 砂粒若干含 焼成軟質	E 須恵器

F　区

Fig.番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
35 — 1	甕 口縁片		・大きく外弯する口縁片で端部は尖り気味に丸める。 ・体外面は縦位ハケ，口縁はヨコナデ	淡黄橙色 石英粒(0.5～1㎜)，角閃石多含 焼成やや甘い	F 土師器
35 — 2	青磁椀 口縁片		・体内面に篦描文，内外面とも貫入が著しい。	釉色淡緑灰色 胎土白灰色 焼成良好	F 中世期
36	小形甕 細片		・外面は連節状の平行条線文叩き，内面は風化しているがかすかに平行条線文の当て板痕がうかがわれ，ナデ消したものか。	外・赤橙色 内・淡黄茶色 石英粒(0.5～1㎜)含 焼成普通	F 土師器

G　区①

Fig.番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
37 — 1	杯蓋		・つまみは扁平な釦状で，稜はややシャープ，中央はわずかに突起する。 ・天井部ろくろ右廻りのヘラケズリ調整を行い，内面には静止ナデを施す。	淡茶灰色 石英粒(0.5～3㎜)わりと多く含 焼成やや甘い	G　1層 須恵器
37 — 2	高台杯	高台径 6.9～7.3	・高台は小さく低く外方がややあがる。貼りつけ，ナデは雑なつくり。 ・下底面はヘラ切り，内底面は静止ナデを施す。	淡灰色（黄味もつ) 石英粒(～2㎜)少量含 焼成普通	G　1層 須恵器
37 — 3	高台杯 1/6片	口径(13.9) 器高　3.8 高台径 (10.4)	・高台は小さく，断面はやや丸味をもつ。 ・底部から体部への移行は丸く曲線的で，口縁へはほぼ直線的にたちあがる。 ・体部は回転ナデ，内底面は静止ナデ調整，下底面はヘラ切りされる。	体部・暗灰青色 他・灰色 石英粒（～1.5㎜）含 焼成良好	G 須恵器

G　区②

37 － 4	土鍋（？） 口縁片		• 体部から強く屈折，口縁は内弯し，端部は上方に突り気味におさめる。内面にも粘土を貼りつけ突出部をもつ。 • 口縁上面にススが付着し黒ずんでいる。	淡黄茶色 石英粒（～ 1.5 ㎜）含 焼成良好	G　2層 土師質 中世（？）
37 － 5	甕 1／8片	口径(26.9)	• 直線的に内傾する体部から口縁は大きく外弯し端部は丸くおさめる。 • 体外面は粗い縦位のハケあと平滑にナデ調整，口縁はヨコナデ，体内面は上向するヘラケズリを施す。 • ヘラケズリの境界の目安と思われる淡い条線がはいる。	外・茶灰色 内・淡茶灰色 石英粒（～ 2.5 ㎜），角閃石多含 焼成良好	G　1層 土師器
37 － 6	甕 1／6片	口径(31.1)	• やや丸く張りをもつ体部から口縁は強く外反し端部はやや角ばる。 • 体外面は極細の縦位ハケ調整，口縁外面ヨコナデ，同内面横位ハケ，体内面は上向するヘラケズリを施す。	淡茶褐色 石英粒（～ 2.5 ㎜）わりと含， 金雲母微片含 焼成良好	G　1層 土師器
38 － 1	甕 胴部片	原　0.7	• 外面は細かい平行条線文叩き，内面は青海波文当て板痕	外・灰青色 内・淡灰青色 石英粒（1㎜） 少量含 焼成良好	G 須恵器
38 － 2	甕 胴部片	厚　1.2	• 外面は平行条線文叩きあとカキ目調整，内面は平行条線文当て板痕	外・灰色 内・（黄味もつ） 砂粒（～0.5㎜） 少量含 焼成良好	G　4層 須恵器
38 － 3	甕 胴部片	厚　0.9	• 外面は連節状の平行条線文叩きのあとカキ目調整，内面は青海波文当て板痕を平行条線叩き（押え？）で消している。	外・灰色（緑味もつ） 内・赤灰色 石英粒（～ 1 ㎜） 若干含 焼成普通	G 須恵器

H　区①

Fig.番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
40 － 1	杯蓋		• 扁平な擬宝珠形つまみで，稜は角がとれ，中央はやや突起する。 • 天井部は回転ナデ，内面は静止ナデを施す。	灰白色 石英粒（1～3 ㎜）含 焼成やや甘い	H　1層 須恵器
40 － 2	杯蓋 1／7片	口径(15.7)	• わりと扁平なつくりで，つまみは欠損，口縁は短く屈曲し断面三角形 • 天井部大半はろくろ右廻りのヘラケズリ，他は回転ナデ調 • 整し，そのあと内面を静止ナデを施す。	淡黄灰色 石英粒(0.5㎜以下）若干含 焼成やや良好	H　1層 須恵器
40 － 3	杯蓋 1／6片	口径(18.4)	• わりと大形の杯蓋で，器高も高く天井部は丸味をもつ，口縁は純角に折れまがる。 • 天井部はろくろ右廻りのヘラケズリ，口縁から内面は回転ナデ，中央部内面はさらに静止ナデを施す。	外・灰色，明茶色 内・淡橙色 石英粒（1㎜） 他砂粒若干含 焼成良好	H 須恵器

H　区②

40 ｜ 4	高台杯 1／4片	高台径 （7.6）	・小形の杯で，高台は中位で屈曲し小さくふんばる。 ・内面は風化をうける。下底面はヘラ切りされ，ヘラ記号が1条淡くはいる。	淡灰色（黄味もつ） 石英粒（～2㎜） 若干含 焼成やや甘い	H　1層 須　恵　器
40 ｜ 5	高台杯 1／8片	高台径 （9.6）	・底部から体部への移行は丸く曲線的 ・高台は中位でわずかに屈曲する程度で，どちらかといえば直立気味。下方には凹線がはいる。下底面にはヘラ記号がはいる。 ・底部から体部は回転ナデ調整，内底面は静止ナデを全面に施す。	外・茶灰色 内・灰茶色 砂粒（1～3㎜）含 焼成良好	H　1層 須　恵　器
40 ｜ 6	高台杯 1／4片	口径(13.3) 器高　4.8 高台径 (10.0)	・底部から体部の境には甘い稜線がはいる。体部は丸く曲線的にたちあがり中程から直線的にのび，口縁はわずかに外湾する。 ・高台は5と同様 ・底部から体部は回転ナデ調整，内底面は静止ナデを全面に施す。わりと丁寧なつくり	茶灰色 砂粒（1㎜）を含 焼成良好	H　1層 須　恵　器
40 ｜ 7	高台杯 1／3片	高台径 (11.5)	・高台は小さく，下方（接地面）に凹線がはいる。 ・底部と体部との境は強く屈折し角ばり，体部は直線的にのびる。 ・下底面はヘラ切り，体部は回転ナデ，内底面には静止ナデを施す。	灰色 石英粒(～2.5㎜) わりと多含 焼成普通	H　1層 須　恵　器
40 ｜ 8	杯 1／3片	口径(16.2)	・体下半に淡い稜がはいり，上半は内弯気味にのび，口縁付近は直立気味で端部は丸くおさめる。 ・著しく風化をうけ，調整不明瞭	黄橙色 砂粒を含まず精良 焼成甘い	H　1層 土　師　器
40 ｜ 9	壺 体下半片		・体外面はロクロ水びきのまま，肩部に1条の条線がはいる。体下端は手もちの横位ヘラケズリを施す。内面は回転ナデ調整	淡灰色 石英粒（1～2.5㎜）含 焼成普通	H　1層 須　恵　器
40 ｜ 10	鉄鉢形鉢 1／4片	口径(21.0)	・丸く肩の張った体部から，口縁は短く屈折し先端は尖る。 ・口縁から体上半にかけ丹が付着している。 ・内外面とも回転ナデ調整，体下半にうすく自然釉をかぶる	外・褐灰色 内・淡灰色 石英粒僅かに含 焼成良好	H　1層 須　恵　器
41 ｜ 11	竈 庇・体部片		・焚口の右側部分で，体部と付庇の一部である。 ・焚口部分と体内面の一部はヘラケズリ，他は指整形ナデ仕上げ。	外・黄橙色 内・明橙色 石英粒（～2㎜） 金雲母微片含 焼成良好	H　1層 土　師　器
41 ｜ 12	竈 庇　片		・体部との接合面から剝落した付庇の最上部の破片と思われる。 ・上面端部から約4.5㎝幅で円塗りにもみえる赤い化粧土がうすくかかる。 ・11と同一個体と思われる。	外・黄橙色 内・明橙色 石英粒（1～2㎜）金雲母微片含，焼成良好	H　1層 土　師　器
41 ｜ 13	竈 体部片		・竈体部の上端に近い部分ではないかと考える。 ・上面は平坦であるいは擬口縁状にもみえる。 ・器面は少々荒れ気味だが，ハケのあとナデ仕上げ，内面は粗いヘラケズリ整形	淡黄茶色 石英粒（1～3㎜） 焼成わりと良好	H　1層 土　師　器

H　区③

42 － 1	甕 胴部片	厚　1.0	• 外面は連節状の平行条線文叩き，内面は青海波文が一部深く残っているので，いったん青海波文当て板押えのあと，円心円文が節となって浮きでる平行条線文叩き（押え？）と考えられる。	淡茶灰色 石英粒（1㎜以下）など含 焼成普通	H　1層 須恵器
42 － 2	甕 胴部片	厚　0.9	• 同上，同一個体	同上	H　1層 須恵器
42 － 3	甕 胴下半片	厚0.6～1.0	• 同上，同一個体。内面の青海波文は顕著でない。 • 内面下端は当て板痕を手の腹でナデ押えたようだ。 • 内面には割れを黄橙色粘土でふさいだような痕跡がみられる。	同上	H　1層 須恵器
42 － 4	甕 胴部片	厚　0.5	• 外面は平行条線文叩き，内面は青海波文押えのあと，格子目文叩き（押え）で消している。 • 薄手のつくり。 • L区3層出土の破片と接合（Fig.54－5）	淡灰色 石英粒(0.5㎜以下）わずかに含 焼成やや甘い	H　1層 須恵器
42 － 5	甕 体上半片	厚　0.9	• 体上半の肩部以下の破片 • 上端は回転ナデ，体外面は格子目文叩きのあと下端をカキ目調整，体内面は青海波文当て板痕	外・淡灰色 内・黄味もつ 石英粒（1㎜以下）など若干含 焼成普通	H　1層 須恵器
42 － 6	甕 胴部片	厚　0.9	• 外面は格子目文叩き，内面はいったん青海波文押えのあと，円心円文がわずかに節として浮きでる平行条線当て板叩き（押え？）と思われる。 • 薄手のつくり。 • L区3層の破片と類似	淡茶灰色 石英粒（1㎜以下）などわずかに含 焼成良好	H　1層 須恵器
42 － 7	甕 胴部片	厚　1.1	• 外面は格子目文叩き，内面は平行条線当て板痕	外・淡灰色，アズキ色 内・アズキ色 石英粒(0.5㎜)など若干含 焼成良好	H　1層 須恵器
42 － 8	甕 胴部片	厚　0.7	• 外面は格子目文叩き，内面は平行条線にちかい太めの青海波文当て板痕	淡黄灰色 砂粒ほとんど含まず 焼成軟質	H　1層 須恵器
43 － 1	小形甕 細　片		• 外面は太めの平行条線文叩き，内面は細かい平行条線文当て板痕	外・赤橙色 内・淡黄茶色 石英粒(～1㎜)多含，金雲母微片若干含 焼成やや甘い	H 土師器
43 － 2	小形甕 細　片		• 同上，同一個体と思われる。	同上	H 土師器

H　区④

43 — 3	小形甕 細　片		• 外面は淡い連節の平行条線文叩き，内面は細かい平行条線文当て板痕	外・淡茶褐色 内・黄橙色 石英粒（1㎜） など含 焼成普通	H　1層 土　師　器
43 — 4	小形甕 細　片		• 外面は風化しているが，淡い連節の平行条線文叩きをナデ消しているようだ。内面は3と同じで，同一個体と思われる。 • 外面は二次的な火によって黒ずんでいるようだ。	外・暗褐色 内・淡黄茶色 石英粒（1㎜） など含 焼成やや甘い	H　1層 土　師　器
43 — 5	小形甕 細　片		• 風化をうけるが，外面は叩きをナデ消したものか，内面は細かい平行条線文当て板痕	外・赤橙色 石英粒（1～2㎜）多含 焼成甘い	H　1層 土　師　器
43 — 6	小形甕 細　片		• 外面は連節の平行条線文叩き，内面は平行条線に近い細かな青海波文当て板痕	外・淡茶褐色，暗茶褐色 内・淡黄茶色 石英粒(～1㎜) など含 焼成良好	H　1層 土　師　器
43 — 7	小形甕 細　片		• 同上，同一個体と思われる。	同　上	H　1層 土　師　器
43 — 8	小形甕 細　片		• 同上，同一個体と思われる。	同　上	H　1層 土　師　器
43 — 9	小形甕 細　片		• 手づくねふうの小形品と思われ，外面は指頭痕が残り，ナデ。内面には極細の布目痕が残る。	外・淡黄灰色 内・淡黄橙色 石英粒(～1㎜) など含 焼成普通	H　1層 土　師　器
43 — 10	小形甕 細　片		• 外面は指整形，ナデ仕上げ，内面には極細の布目痕が残る。	淡茶褐色 砂粒(～2㎜)含 焼成良好	H　1層 土　師　器

J　区①

	器　種	法量(cm)	特　　徴	色調・胎土・焼成	備　考
45 — 1	杯蓋		• 扁平な釦状で中央がやや突起するつまみで，稜は角がとれシャープさがない。 • 天井部は粗い回転ナデ調整，内面は静止ナデを行う。	淡灰色 小石英粒(0.5㎜) 僅かに含 焼成良好	H　1層 須　恵　器

J　区②

45 ｜ 2	杯 身 1/3片	口径(8.4) 器高(3.6) 底径(6.0)	• 小形の杯身で，底部と体部との境界は丸味をもち，体部は直線的に開く。 • 器面は全体に回転ナデ調整され，内底面はさらに静止ナデを施す。	灰色（若干黄味おびる） 石英粒(～1㎜)含 焼成良好	J　1層 須　恵　器
45 ｜ 3	杯 身 1/3片	口径(13.3) 器高　3.3 底径(9.0)	• 口径に対して器高の低い杯身で，つくりは粗く，体部は歪んでいびつ，平坦な底部から体部は直接的に開く。 • 下底面はヘラ切りされ，体部は回転ナデ，内底面はさらに静止ナデを施す。	灰色（緑味おびる） 石英粒(～1㎜) 若干含 焼成良好	J　1層 須　恵　器
45 ｜ 4	高台杯 体下半	高台径 9.1	• 高台は中位で屈曲し小さくふんばる。外方はややあがり鋭い稜がつく。高台は灰黄色を呈し，体部と異なる。 • 底部から体部への移行は丸く曲線的 • 下底面から体部は回転ナデ，内底面は静止ナデを施す。	灰（緑）色 石英粒(～1㎜) 若干含 焼成若干甘い	J　1層 須　恵　器
45 ｜ 5	高台杯 底部片		• 底部と体部の境はやや角ばり，小さく低い高台は内側につけられる。 • 下底面はヘラ切り，体部は回転ナデ調整している。	淡灰色 石英粒（1㎜） 若干含 焼成良好	J　1層 須　恵　器
45 ｜ 6	高台杯 底部片		• 底部と体部の境は丸味をもつ。小さく低い高台はやや内側につけられる。 • 下底面から体部は回転ナデ調整	淡灰色（黄味おびる） 石英粒(0.5㎜) 若干含 焼成やや甘い	J　1層 須　恵　器
45 ｜ 7	杯 身 小　片		• 体部外面と内底面にヘラ記号がはいる。 • 器面は全体にわたって丁寧なナデ仕上げ。	明茶褐色 胎土精良，赤色砂粒含 焼成良好	J　1層 土　師　器
45 ｜ 8	高台杯 1/4片	高台径11.1	• 高台は小さくふんばり，外方はややあがり稜がつく。 • 下底面はヘラ切りされ，体部は回転ヘラケズリ，内底面は回転ナデのあと静止ナデ	赤茶色 石英粒（1～2㎜）若干含 焼成やや甘い	J　1層 土　師　器
45 ｜ 9	壺 体上部片		• 突帯を胴部にめぐらす壺の破片であろう。 • 外面は突帯下1㎝ぐらいまで回転ナデ調整し，内面は円心円当て板文を回転ナデ調整し消している。	外・淡灰色 内・淡灰黄色 石英粒（1㎜） 若干含 焼成普通	J　1層 須　恵　器
45 ｜ 10	甑 体下半片		• 甑の体下端部片，体上半は細かい縦位ハケ調整，下半から内面下端はヨコナデ仕上げ，内面は下向するヘラケズリ	淡黄茶色 石英粒(～5㎜)多含，金雲母微片含 焼成良好	J　1層 土　師　器
46 ｜ 1	甕 胴部片	厚　0.8	• 外面は細かい平行条線文叩き，内面は青海波文当て板痕	赤褐色 砂粒(0.5㎜以下)含 焼成やや甘い	J　1層 須　恵　器

J　区②

46 ｜ 2	甕 胴部片	厚　0.9	• 外面は細かい平行条線文叩きをナデ消している。内面は青海波文当て板痕をナデ消している。	灰色 砂粒（1㎜）若干含 焼成普通	J　1層 須　恵　器
46 ｜ 3	甕 胴部片	厚　0.7	• 外面は細かい連節状の平行条線文叩き，内面は連節状の平行条線文当て板痕	淡灰茶色 石英粒(～1㎜)など含 焼成普通	J　1層 須　恵　器
46 ｜ 4	甕 胴部片	厚　0.7	• 外面は太めの平行条線文叩き，内面は同心円文当て板痕がくっきり残る。	灰茶色 極小の砂粒含 焼成良好	J　1層 須　恵　器
46 ｜ 5	甕 胴部片	厚　1.1	• 外面は細かな格子目文叩き，内面はやや太めの青海波文当て板痕	淡灰色，外面一部灰褐色 石英粒(～1㎜)など含 焼成良好	J　2層 須　恵　器
46 ｜ 6	甕 胴部片	厚　1.2	• 外面は雑な格子目文叩き，内面はやや太めの青海波文当て板痕をナデ調整しているようだ。	内・灰色（若干緑味） 内・赤灰色 石英粒(～1㎜)僅に含 焼成普通	J　1層 須　恵　器
46 ｜ 7	甕 胴部片	厚　0.7	• 外面全体に緑黄色の自然釉がかかる。 • 外面は格子目文叩き，内面は同心円文当て板痕を回転ナデ調整するが，上端は平行条線文(叩き？)が残る。	外・淡灰白色 内・灰茶色 黒色粒含 焼成普通	J　1層 須　恵　器
47 ｜ 1	小形甕 細　片		• 外面は若干風化をうけるが，連節状の平行条線文叩き，内面は平行条線文当て板痕をナデ消して仕上げる。	外・淡赤茶色 内・黄橙色 石英粒(～1㎜)含 焼成やや甘い	J　1層 土　師　器
47 ｜ 2	小形甕 細　片		• 外面は連節状の平行条線文叩き，内面は平行条線文当て板痕をナデ消している。	外・淡茶褐色 内・赤橙色 石英粒(～1㎜) 雲母微片若干含 焼成やや良好	J　1層 土　師　器

K　区①

Fig,番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
49 ｜ 1	杯身 1/4片	口径(13.7) 器高(3.6) 底径(10.1)	• 底部から体部との境は丸く曲線的で，体部は直線的にのび口縁はやや外傾する。やや厚手のつくり。 • 下底面はヘラ切りされ，体部は回転ナデ調整	淡灰色，黄茶色をおびる 石英粒(～1㎜)若干含 焼成普通	K　2層？ 須　恵　器

K　区②

49 ｜ 2	高台杯 1/3片	口径(10.5) 器高(4.3) 高台径(6.6)	• 口径のわりには背の高い小形品。体部は内弯気味に開きのびる。高台は小さく低くふんばり，接地面は平坦 • 下底面はヘラ切りされ，体部は回転ナデ調整	淡灰色（若干黄色おびる） 石英粒(0.5～1mm) 含 焼成普通	K　2層 須　恵　器
49 ｜ 3	甕 1/5口縁片	口径(21.4)	• 小形甕の口縁部片で，大きく外弯し，端部下方は鋭い稜がつく。 • 回転ナデ調整され，全体につくりは丁寧	灰色，赤褐色，黄橙色 器肉・黄灰色 砂粒(～0.5mm) 若干含 焼成良好	K　2層 須　恵　器
49 ｜ 4	土錘	長　6.0 径　2.9 孔径 0.8 重　29.4g	• 器面は若干風化，指整形と思われる。	淡茶褐色 砂粒若干含 焼成良好	K　1層 土　師　質

L　区①

Fig.番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	色調・胎土・焼成	備　考
52 ｜ 1	杯蓋		• 身受けかえりを有する杯蓋小片 • 天井部は回転ヘラケズリ，口縁付近と内面は回転ナデ調整	外・淡茶灰色 内・灰色 石英粒(0.5mm以下) 若干含 焼成やや甘い	L　4層 須　恵　器
52 ｜ 2	杯蓋 1/7片	口径(16.9)	• 身受けかえりを有する杯蓋片 • 外面は風化しているが，天井部は回転ヘラケズリ他は回転ナデ調整	淡灰色 石英粒（～2.5mm）含 焼成やや甘い	LP 186 （3層） 須　恵　器
52 ｜ 3	杯蓋 2/3片	口径(14.6) 器高　2.3	• 身受けかえりを有する杯蓋で，つまみは無い。 • 天井部下半から内面にかけ回転ナデ調整，天井部内面には静止ナデを施す。	外・茶灰色 内・赤茶色 石英粒(0.5～2mm) 含 焼成やや甘い	LP 230 （3層） 須　恵　器
52 ｜ 4	杯蓋 1/2片	口径(14.8) 器高(2.3)	• つくりは粗くやや歪んでいる。 • つまみは小さい釦状で中央が突起する。口縁は小さく折り曲げ嘴状につくる。 • 外面はつまみ付近と口縁付近を回転ナデ，内面は回転ナデ調整し中央付近は静止ナデを施す。	灰色（若干緑味おびる） 石英粒(0.5～3mm) 含 焼成普通	LP 11・16 （2・3層） 須　恵　器
52 ｜ 5	杯蓋 1/4片	口径(16.9)	• 粗いつくりの杯蓋でつまみは不明 • 口縁は小さく折り曲げ嘴状につくる。 • 天井部は回転ヘラケズリのあと回転ナデか，内面は中央付近静止ナデで口縁近くは回転ナデ調整	淡灰（黄）色 石英粒(0.5～2mm) 焼成甘い	LP 51・89 （3層） 須　恵　器
52 ｜ 6	杯蓋 1/3片	口径(19.0)	• 口縁を垂直に折り曲げる杯蓋で，器高の低い形状，つまみは不明 • 天井部はろくろ右廻りのヘラケズリ，天井部下端から口縁付近内面にかけ回転ナデ調整，他内面は静止ナデを施す。	灰色（緑味おびる） 石英粒（1mm） 若干含 焼成普通	LP 101(？) 須　恵　器

L　区②

52 ｜ 7	杯蓋 1/3片	口径(15.3)	• 天井部上端は平坦で稜がつく，口縁は短く折れ曲げ嘴状につくる。つまみは欠失するがおそらく輪状のつまみであろう。 • 天井部は回転ナデ，内面には静止ナデを施す。	外・淡赤茶色 内・赤茶色 石英粒(～1㎜) 若干含 焼成良好	L P 64・1層（3層） 須　恵　器
52 ｜ 8	杯蓋 1/5片	口径(15.0) 器高(3.1)	• 輪状のつまみの杯蓋で，口縁は短く折れ，中位でさらに小さく屈曲し稜がはいる嘴状を呈する。 • 天井部中程までろくろ右廻りのヘラケズリ，他は全面にわたって回転ナデ仕上げ。	外・赤茶色 内・淡茶褐色 石英粒(0.5～1㎜) 若干含 焼成良好	L P 188（3層） 須　恵　器
52 ｜ 9	杯蓋		• 口縁は短く折れ，中位でさらに小さく屈曲し稜がはいる嘴状を呈する。 • 全面にわたって回転ナデ調整	外・淡茶褐色 内・灰茶色 石英粒(0.5㎜以下) 若干含 焼成普通	L P 65（3層） 須　恵　器
52 ｜ 10	杯蓋		• 扁平な杯蓋小片で，口縁の屈曲は小さく，むしろ痕跡程度にちかい。 • 天井部中位までろくろ右廻りのヘラケズリ，他は回転ナデ調整	淡灰色 石英粒(0.5～3㎜) 含 焼成普通	L 須　恵　器
52 ｜ 11	杯身 1/4片	口径(13.2)	• 底部から体部への移行は丸く曲線的で，体部は直線的にのび，口縁は端部を丸くおさめている。体部にはわりと幅広の条線がめぐる。 • 内外面とも回転ナデ調整される。	淡灰色 石英粒（～1.5㎜）含 焼成普通	LP198・219 234 (3・4層) 須　恵　器
52 ｜ 12	杯身 1/2片	口径(16.3) 器高　3.8 底径(10.9)	• 器面は著しく風化をうけている。 • 底部から体部への移行は丸く曲線的で，体部はやや内弯気味に開き，口縁はやや外傾する。 • 下底面はヘラ切りされ，他は回転ナデ調整であろう。	淡灰色 砂粒僅に含 焼成やや甘い	L 付近表採 須　恵　器
52 ｜ 13	杯身 1/4片	底径(11.1)	• 底部から体部への移行は丸く曲線的 • 下底面はヘラ切りあと指腹で整形ナデたようだ，内底面は静止ナデを施す。	淡灰色（若干黄味おびる） 石英粒(～2㎜) 若干含 焼成少々甘い	L P 109（3層） 須　恵　器
52 ｜ 14	杯身 3/4片	口径(12.5) 器高　4.0 底径(8.7)	• 口径に対して背がわりと高い杯身で，底部から口縁へ体部は大きく開く，内面は風化し小さい傷が多くはいる。 • 下底面はヘラ切りされ，体部はロクロ水引き時の凹凸がつく	灰緑色，淡赤茶色 砂粒は少ない 焼成やや甘い	L 須　恵　器
52 ｜ 15	杯身 1/5片	口径(13.2) 器高(3.6) 底径(9.5)	• 平坦な底部から直線的に体部が開く杯身 • 下底面はヘラ切り，体上半から体内面は回転ナデ調整	灰色 石英粒(0.5～2㎜) 若干含 焼成普通	L 1・2層 須　恵　器
52 ｜ 16	高台杯 1/3片	口径(14.8) 器高(4.5) 底径(10.3)	• 高台はやや長めで中位からやや屈曲する。 • 底部から体部との境には甘い稜がつき，体部は下半が丸味もって上半は直線的に開く。内底面にはまきあげ状痕がつく。 • 下底面はヘラ切り，体部は回転ナデ調整	黄橙色 石英粒(0.5～2㎜) 含 焼成普通	L 須　恵　器

L　区③

52 ｜ 17	高台杯 1／3片	口径(14.6) 器高(4.5) 高台径(10.2)	• 底部から体部の境は丸く曲線的で，体部は直線的に開く。 • 高台はやや長めで中位から屈曲しふんばる。接地面は平坦 • 下底面から体部は回転ナデ仕上げ，内底面は静止ナデを施す。	淡黄灰色 石英粒(0.5mm以下) 若干含 焼成やや甘い	LP 81 (3層) 須恵器
52 ｜ 18	高台杯 1／2片	高台径 (9.5)	• 底部から体部の境は丸く曲線的で，体部は直線的にのびる体部に淡い条線が数本めぐるが意識的に入れたのかはわからない。 • 高台はやや長めで，直線的に開く，下底面に直線的なヘラ記号がはいる。 • 下底面はヘラ切りのあと，体部にかけ回転ナデ調整	外・灰茶色（緑味おびる） 内・淡赤茶色 石英粒(～1mm) 若干含 焼成軟質	LP 239・240(4層) 須恵器
52 ｜ 19	高台杯 1／5片	高台径 (10.1)	• 底部から体部への移行は丸く曲線的，高台は強く開きふんばる。 • 下底面はヘラ切りのあと回転ナデ（？），体部は回転ナデ，内底面は静止ナデを施す。	灰色 石英粒(～0.5mm) ごく僅かに含 焼成やや良好	LP 176 (3層) 須恵器
52 ｜ 20	高台杯 1／6片	高台径 (9.9)	• 底部から体部の境は丸く曲線的で，体部も内弯気味に開く • 高台はふんばり，下方に凹みがはいる。 • 下底面はヘラ切り，体部から内底面にかけては回転ナデ調整する。	外・淡赤褐色 内・淡赤茶色 石英粒(0.5mm) 僅かに含 焼成良好	LP 134 (3層) 須恵器
52 ｜ 21	高台杯 1／9片	口径(11.4) 器高(4.8) 高台径(8.2)	• 口径のわりに背の高い器形の小形品と思われる。 • 底部から体部の境は丸く曲線的で，体部はやや直線的にのび口縁はわずかに外弯する。 • 高台はふんばり，接地面は平坦 • 体部は回転ナデ，内底面は静止ナデを施す。	灰色 石英粒(0.5mm) 僅かに含 焼成普通	LP 189 (3層) 須恵器
52 ｜ 22	高台杯 1／5片	口径(14.0)	• 口径のわりに背の高い器形と思われる。わりと薄手のつくり • 底部から体部の境は丸く曲線的で体部は直線的に開き，口縁端部は尖り気味におさめる。 • 底部と体部の境付近は回転ヘラケズリ，体部は回転ナデ調整	外・淡茶褐色 内・黄橙色 砂粒（0.5mm以下）僅かに含 焼成甘い	LP 229 (3層) 須恵器
52 ｜ 23	高台杯 2／3片	口径(17.4) 器高 6.7 高台径(11.0)	• 口径も大きく器高も高い高台杯で，やや薄手の丁寧なつくり • 体外面に部分的に自然釉がうすくかかる。 • 底部から体部の境付近は丸く曲線的で，体部は直線的に開き，口縁端部は短く外弯する。高台は杯部にくらべて小さい • 下底面はヘラ切りのあと回転ナデ，他も回転ナデ調整し，内底面はさらに静止ナデを施す。	茶灰色（赤っぽい） 石英粒(0.5mm) 若干含 焼成良好	L 須恵器
52 ｜ 24	高台杯 1／4片	口径(15.7) 器高(5.1) 高台形(11.0)	• 高台は底部と体部の境につけられ，体部は直線的に開く。 • 高台は中位から強く屈曲し，ふんばる。 • 内外面とも丁寧なナデ仕上げ。	淡黄茶色 石英粒(0.5mm以下) 若干含 焼成良好	LP 土師器
53 ｜ 25	壺 1／8片	口径(13.3) 最大径(15.2)	• 長胴の無頸壺で，体部は歪んでいびつなつくり。 • 直線的に開く体部から強く内に折れ，口縁はやや内弯気味にのびる。端部は条線ふうに凹む。 • 全体に回転ナデ仕上げで，外面は平行条線文叩き文，内面は同じ円文当て板痕を消している。	淡黄橙色 砂粒あまり含まず 焼成やや甘い	LP71 (3層) 須恵器
53 ｜ 26	高杯 脚部片		• 脚部上部付近の破片，上端に沈線状の凹みがめぐる。 • 内面は回転ナデ，外面は横位の静止ナデ仕上げ。	灰色 石英粒(～2mm) 僅かに含 焼成良好	LP35 須恵器

L　区④

53 ｜ 27	小形甕 口胴部片	口径(18.0)	• やや丸く張りながら体部はすぼまり，口縁は外弯し端部をやや尖り気味におさめる。 • 体部は細かい縦位ハケをナデ消し，口縁はヨコナデ仕上げ体内面は斜上向するヘラケズリ • 体外面と口縁内面にススや黒ずんだ個所がみられる。	茶褐色 石英粒(～3㎜)多含，金雲母微片若干含 焼成良好	LP78・192 208 (3層) 土師器
53 ｜ 28	甕 口胴部片	口径(26.4)	• 口縁はいびつで歪んでいる。 • 体外面は縦位ハケを一部ナデ消し，口縁はヨコナデ仕上げ体内面は横位ヘラケズリ	外・淡灰茶色 内・赤味もつ 砂粒(～2.5㎜)角閃石を多含，金雲母微片含	LP30 (3層) 土師器
53 ｜ 29	甕 口胴部片 1/3	口径(26.0)	• 体部は内傾しすぼまり，口縁は大きく外弯する。 • 体外面は二次的な火のためか器面が荒れているが縦位ハケが部分的にわかる。口縁は粗いハケあとをヨコナデ仕上のげ，体内面はヘラケゲリ • 口縁内面中程に淡い条線がはいる。	淡黄橙色(赤味もつ) 石英，角閃石，金雲母など多含 焼成良好	LP59・63 66 (3層) 土師器
53 ｜ 30	甕 口縁片		• 直線的に外傾する口縁片 • 口縁はヨコナデ仕上げ，体内面はヘラケズリ	外・淡茶褐色 内・暗茶褐色 石英粒(～1㎜)結晶片岩（～4㎜）含 焼成普通	LP236 (4層) 土師器
53 ｜ 31	甕 口縁片		• 体部から口縁は強く外弯する。 • 体部は風化し荒れている。口縁はヨコナデ，体内面は斜上向するヘラケズリ	淡黄茶色 石英粒，角閃石など含 焼成普通	LP20 (3層) 土師器
53 ｜ 32	甕 口縁片		• いびつで雑なつくり • 体部は縦位ハケ，口縁はハケをヨコナデ仕上げで消している。体内面は斜上向するヘラケズリ	黄桃色 石英粒（1～3㎜）多含 金雲母僅かに含 焼成普通	LP237 (4層) 土師器
53 ｜ 33	甕 口縁片		• 外弯する口縁で，端部は丸くおさめる。 • 体部は縦位ハケあととナデ消し，口縁はヨコナデ仕上げ，体部はヘラケズリ	淡黄茶色 石英粒(0.5㎜以下）角閃石含，若干金雲母含 焼成普通	LP177 (3層) 土師器
53 ｜ 34	甕 口縁片		• 外面は斜位ハケのあとナデ，口縁内面は横位ハケのあとナデ，体内面は横位のヘラケズリ • 二次的な火のためか部分的に黒ずんでいる。	淡黄茶色 石英粒（～2.5㎜）含 焼成普通	LP242 (4層) 土師器
53 ｜ 35	竈 体庇片		• 竈の焚口左側上部付近の破片であろう。 • 体内面はヘラケズリ，他は指整形ナデ仕上げ	赤橙色 石英粒(1㎜)，金雲母含 焼成良好	LP135 (3層) 土師器
53 ｜ 36	竈片 (?)		• 竈の体下端あるいは上端の破片ではないかと思うがよくわからない。 • 外面は縦位ハケ，接地面付近はヘラケズリ，体内面もヘラケズリ	淡黄茶色 石英粒（1～3㎜）多含 焼成良好	LP90 (3層) 土師器

L　区⑤

54 | 37	甕 体上半	最大径 (46.6)	• やや体上部で肩の張る甕 • 外面は淡い連節状の平行条線文叩き，内面は同心円文当て板痕 • 体上部は緑黄色の自然釉をうすくかぶる。	灰色 石英粒（1㎜）わりと含 焼成普通	LP42・58 60（3層） 須　恵　器
55 | 1	甕 胴部片	厚　0.7	• 外面は細かい平行条線文叩き，内面は青海波当て板痕がくっきりと残る。	外・アズキ色 内・暗灰色 砂粒（0.5㎜以下）僅かに含 焼成普通	L （3層） 須　恵　器
55 | 2	甕 胴部片	厚　0.7	• 外面は細かい平行条線文叩き，内面は青海波当て板痕を幅5㎜ぐらいの器具でナデ消している。	灰色 砂粒（0.5㎜以下）含 焼成普通	L 須　恵　器
55 | 3	甕 胴部片	厚　1.4	• 外面は太目の平行条線文叩き，内面はまだ粘土がやわらかい時に叩かれたらしく，青海波当て板痕がけばだっている • 外面に自然釉がうすく部分的にかぶる。	外・暗灰色 内・灰色 器内，紫灰色 石英粒(～2㎜)など含 焼成わりと良好	LP 204 （3層） 須　恵　器
55 | 4	甕 体上半	厚　0.8	• 外面は淡い連節状の平行条線文叩き，内面は同心円文当て板痕 • 体上部は緑黄色の自然釉をうすくかぶる。 • Fig.54—37	灰色 石英粒（1㎜）わりと含 焼成普通	LP42・58 60（3層） 須　恵　器
55 | 5	甕 胴部片	厚　0.6	• 外面は太い平行条線文叩き，内面は青海波文当て板痕を格子目叩き（押え？）で消している。 • H区の破片と接合（Fig.42—4）	淡灰色 石英粒(0.5㎜以下）など含 焼成普通	LP 214 （3層） 須　恵　器
55 | 6	甕 胴部片	厚　1.4	• 外面はわりと細かい格子目文叩きのあとナデ消している。自然釉が燃え滓のようにこびりついている。内面は青海波文当て板痕が残る。	外・灰色 内・赤茶色 石英粒(～2㎜)僅かに含 焼成わりと良好	LP 133 （3層） 須　恵　器
55 | 7	甕 胴部片	厚　0.7	• 外面はわりと細かい格子目文叩き，内面は青海波文当て板痕を同心円文の連節が浮きでる平行条線文叩き（押え？）	外・淡茶褐色 内・淡灰茶色 ほとんど砂粒を含まず 焼成わりと良好	LP 116 （3層） 須　恵　器
55 | 8	甕 胴部片	厚　0.7	• 外面は長方形状の格子目文叩きのあと，平行条線文叩きを行っている。内面は同心円文当て板痕	外・暗灰色 内・灰色 石英粒(～2㎜)若干含 焼成普通	LP 207 （3層） 須　恵　器
55 | 9	甕 胴部片	厚　0.7	• 外面は長方形状の格子目文叩きのあと，平行条線文叩きを行う。内面は同心円文当て板痕	青灰色 石英粒（1㎜）若干含 焼成良好	LP 241 （4層） 須　恵　器

L　区⑥

56 — 1	小形甕 細　片		• 上端が肩にあたる部分と思われる。 • 外面は連節状の平行条線文叩き，内面は細かい平行条線文当て板痕	淡茶褐色 赤色砂粒（1～3㎜），石英粒（～2㎜）含 焼成良好	L 土　師　器
56 — 2	小形甕 細　片		• 外面は連節状の平行条線文叩き，内面は細かい平行条線文当て板痕	赤茶色 赤色砂粒（1㎜） 石英粒（～2㎜）含 焼成やや良好	L　1層 土　師　器
56 — 3	小形甕 細　片		• 外面は連節状の平行条線文叩き，内面は細かい平行条線文当て板痕	外・茶褐色 内・淡茶色 赤色砂粒（1㎜） 石英粒（～2㎜）含 焼成やや良好	LP83 （3層） 土　師　器
56 — 4	小形甕 細　片		• 外面は疎な格子目風叩き，内面は細かい平行条線文当て板痕	黄橙色 石英粒(~1.5㎜) 焼成普通	LP106 （3層） 土　師　器
56 — 5	小形甕 細　片		• 同上，同一個体と思われる。	同　上	L　3層 土　師　器
56 — 6	小形甕 細　片		• 外面は風化著しく調整不明瞭，内面は極細の布目痕	赤橙色 赤色砂粒（～3㎜）など含 焼成甘い	LP11 （3層） 土　師　器
56 — 7	小形甕 細　片		• 外面は指整形ナデ，内面は極細の布目痕	淡茶褐色 石英粒（～3㎜）含 焼成普通	LP139 （3層） 土　師　器
56 — 8	小形甕 細　片		• 外面は指整形ナデ，内面は極細の布目痕	淡黄茶色 石英粒（～3㎜） 金雲母微片含 焼成わりと良好	LP141 （3層） 土　師　器

M　区①

Fig.・番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
62 — 1	杯身 1/3片	口径(14.5) 器高　3.6 底径(10.6)	• 底部と体部の境は丸く曲線的で，体部はろくろ水引き時の凹凸がつく。 • 下底面はヘラ切りされ，体部は回転ナデ(ろくろ右廻り？)内底面は静止ナデを施す。	灰色 砂粒含 焼成良好	M　3層 須　恵　器

M　区②

62 － 2	杯身 1／4片	底径(10.2)	・底部と体部の境はやや丸く曲線的 ・下底面はヘラ切りされる。他は風化のため調整不明瞭	灰白色 石英粒(～2㎜) 若干含 焼成軟質	M　3層 須恵器
62 － 3	杯身 1／3片	口径(14.0) 器高　3.7 底径(9.7)	・平坦な底部から，体部は丸味をもってたちあがり直線的に開く。 ・内面は風化し器面が傷んでいるが，器面全体にわたって丁寧なナデ仕上げ，底部はヘラ切りのあと丁寧なナデ調整している。	明茶色 石英粒(0.5㎜以下) 若干含むが精良 焼成良好	M　3層 土師器
62 － 4	高台杯 1／4片	口径(14.5) 器高(5.1) 高台径 (9.3)	・薄手のつくりの高台杯で，体部は下半で強く屈折し稜がはいる。高台は小さくふんばり，外方はやや鋭い稜がつく。 ・下底面はヘラ切りのあと回転ナデ調整，体部は回転ナデ，内底面は静止ナデを施す。	淡灰色 石英粒（～2.5㎜）若干含 焼成良好	M　3層 須恵器
62 － 5	高台杯 1／8片	口径(18.1) 器高(6.3) 高台径 (11.4)	・口径18.1㎝の大形品でつくりはわりと丁寧，体中程に段をもち稜がつく，高台は杯部に対して小さく，ふんばりをもつ。 ・内底面はヘラ切り，体部は回転ナデ調整，内底面は静止ナデを施す。	淡赤橙色 砂粒（0.5㎜以下）若干含） 焼成良好	M　3層 須恵器
62 － 6	高台杯 1／4片	高台径 (11.2)	・つくりはやや粗い高台杯底片，底部と体部の境には稜がつく，体部はやや内弯気味に開く，高台は小さく，強く屈折しふんばる。 ・器面はろくろ右廻りの回転ナデ仕上げ	灰青色 石英粒（～2.5㎜）含 焼成良好	M　3層 須恵器
62 － 7	高台杯 1／4片	口径(14.6) 器高(3.9) 高台径 (10.0)	・口径に対してやや背の低い高台杯で，底部は厚味もつ。 ・高台は小さく，体部は凹凸をもってやや内弯気味に開く。 ・下底面はヘラ切り，体部は回転ナデ，内底面は静止ナデを施す。	灰色 砂粒(0.5㎜) 若干含 焼成良好	M　3層 須恵器
62 － 8	高台杯 1／5片	高台径 (10.4)	・底部と体部の境付近に小さい高台はつけられる。 ・下底面はヘラ切り，体外面は風化をうけ調整不明瞭，内面は回転ナデ調整	淡灰色 砂粒.（1㎜）若干含 焼成やや甘い	M　3層 須恵器
62 － 9	高台杯 1／5片	高台径 (8.9)	・小さな高台は灰青色を呈し，杯部と色が異なる。 ・下底面はヘラ切りのあと回転ナデ仕上げ，内底面には静止ナデを施す。	淡灰色 高台・灰青色 石英粒（1㎜以下）若干含 焼成やや甘い	M　3層 須恵器
62 － 10	高台杯 1／7片	高台径 (13.4)	・高台杯よりも盤にちかいものか。高台は小さく屈曲する。 ・下底面はヘラ切りのあとナデ(？)，体部・内底面はヘラミガキ調整	淡赤茶色 石英粒(～2㎜)含 焼成良好	M　3層 土師器
62 － 11	甕 口縁片		・外弯し，端部を丸くおさめる口縁部小片 ・外面はヨコナデ，口縁内面は横位ハケを下半に残しヨコナデ仕上げ，体内面はヘラケズリ	淡黄茶色 石英粒(～1㎜) 角閃石含 焼成やや甘い	M　3層 土師器

M　区③

62 ｜ 12	小形甕 口縁片		• やや外傾する口縁で，端部は尖り気味におさめる。 • 体部は器面が荒れているが縦位ハケ目が残り，口縁はヨコナデ仕上げ，内面は指ナデのようだ。	外・茶褐色 内・淡黄茶色 石英粒(0.5mm以下) 角閃石含 焼成普通	M　3層 土　師　器
62 ｜ 13	竈 体部片		• 竈の焚口付近と思われる。外面はおそらく庇が剝落したものか。 • 外面は細かいハケをナデ消し，内面はヘラケズリしている	黄土色（赤味もつ） 石英粒（2～3mm）多含 焼成良好	M　3層 土　師　器
63 ｜ 1	甕 胴部片	厚　0.5	• 外面は細かい格子目文叩きのあとカキ目調整，内面は平行条線文当て板痕	外・褐灰色 内・淡灰色 器肉淡灰(黄)色 砂粒少々含 焼成良好	M　3層 須　恵　器
63 ｜ 2	甕 胴部片	厚　0.5	• 外面は連節状の平行条線文叩きのあとカキ目調整，内面は同心円文当て板痕が深く残る。	外・赤褐色 内・青灰色 石英粒(～4mm)など僅かに含 焼成良好	M　3層 須　恵　器

第2地点

Fig. 番号	器種	法量(cm)	特徴	色調・胎土・焼成	備考
66 - 1	深鉢 口縁片		• 指頭状のもので楕円形の凹点文を5cm幅にわたって施し，下方は無文となる。口縁は指押圧によって小さな波状をなす • 凹点文は指先（親指）で左から右方向へ押圧し，爪跡がむかって右側にのこる。	茶褐色 滑石（～2mm） 多含 焼成やや甘い	第2地点一括 縄文中期
66 - 2	深鉢 胴部片		• 左側には曲線的な凹線文が2ケ所，中央は上部を欠損するがU字形に貼りつけ，さらに短い凹線文がはいる。 • 内面はナデにて平滑に仕上げる。	外・暗褐色 内・茶褐色 滑石（～2mm） 多含 焼成甘い	同上
66 - 3	深鉢 胴部片		• くの字状に屈折する深鉢の体上部片か • 平滑にナデ仕上げ	赤褐色 滑石（～2mm） 多含 焼成甘い	同上
66 - 4	深鉢 胴部片		• 全体的に横位に展開する凹線文の組合せ • 凹線間および内面は平滑なナデ仕上げ	赤褐色 滑石（～3mm） 多含 焼成甘い	同上
66 - 5	深鉢 胴部片		• 4と同じく横位に展開する凹線文の組合せで，中程下は無文部になる。4と同一体でその下方部分と思われる。	明赤褐色 滑石（～3mm） 多含 焼成甘い	同上
66 - 6	深鉢 底片		• 内・外面は指ナデ仕上げ，下底面はやや凸凹しているが，小片なため鯨背骨使用かどうかは分らない。	外・赤褐色 内・黄茶色 滑石（～3mm） 多含 焼成やや甘い	同上

附章　人骨及び動物遺体について

一、串島遺跡出土の人骨

松下孝幸※・分部哲秋※

長崎県西彼杵郡大瀬戸町松島にある串島遺跡より少量の人骨が発掘された。筆者らは現場を実見していないが，採集された人骨は出土状況，人骨の保存状態および骨質から判断して２体分と考えられる。

この資料は別項で述べられているように，考古学的所見より縄文時代後晩期に属するものである。

資　料

１号人骨：頭蓋骨片２片，右頬骨。

２号人骨：左橈骨。

所　見

１号人骨

頭蓋骨片が２片と石頬骨とが残存するのみである。頭蓋片２片のうち１片は左右不明の頭頂骨の前頭角の部分で，その大きさは25cm×25cmである。残りの１片の大きさは25cm×15cmで，これも頭頂骨の一部と考えられるが，左右いずれかは判別できない。２片とも骨質は厚くなく，また表面はかなり磨滅している。

右頬骨は完全に残っていたが，大きさは小さく，女性を思わせる大きさであるが，年令は不明である。

２号人骨

２号人骨は左橈骨のみであるが，保存状態はきわめて良好で，遺存状態はほぼ完全である。

諸径はやや大きく頑丈で，橈骨粗面の発達も良好であるが，骨体の扁平性は認められない。諸径が大きくて頑丈であることから，男性の橈骨と考えられるが，年令については不明である。

計測はほとんどの項目について可能であり，その結果は表１に示す通りである。

次いで橈骨の計測値を津雲縄文人の男性橈骨（左側）の平均値と比較してみると，串島２号人橈骨の最大長は230mmで，津雲人の233.3mm（11例）よりもわずかに小さく，機能長は218mmで，津雲人の217.5mm（11例）と大差ない。最小周は46mmで，津雲人の43.6mm（17例）よりも大きい。従って長厚示数は21.10となり，津雲人の20.0（11例）よりもやや大きい示数値を示している。

※　長崎大学医学部解剖学第２教室

また骨体横径は17mmで，津雲人の16.9mm（17例）と大差ないが，骨体矢状径は13mmで，津雲人の11.6mm（17例）よりは大きい値である。従って骨体断面示数は76.47で，津雲人の68.8よりもやや大きい示数値となり，示数値からも骨体の扁平性は認められない。

一方，彎曲指数は2.20となり，津雲人の2.5（11例）よりも小さく，津雲人よりは彎曲は弱い。

ついで，橈骨最大長からPearsonの公式を用いて推定身長値を算出すると，161.16cmとなり，縄文人としては比較的高い値を示している。

総　括

1．串島遺跡より少量の人骨が出土したが，解剖学的・人類学的検討の結果，これらは2体分と考えられる。

2．1体は女性骨（1号人骨）と考えられ，他の1体は男性骨と推定されるが，いずれも年令については不明である。

3．1号人骨は頭蓋骨片2片と右頬骨のみが残存していたにすぎない。

4．2号人骨は完全な左側橈骨だけであるが，最大長は230mm，長厚示数は21.10，骨体断面示数は76.47を示し，同時代人の例である津雲縄文人の平均値と比較してみると，長径については大差ないが，周径や矢状径が大きい。また骨体の扁平性や彎曲度は弱い。

5．橈骨最大長からPearsonの公式を用いて2号人骨の推定身長値を算出すると161.16cmであった。

（擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた長崎県教育庁文化課，ならびに御指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。）

参考文献

1．大場秀夫，1935：吉胡貝塚人人骨の人類学的研究　第4部　上肢骨の研究。人類誌，50　第9付録。

2．清野謙次，平井　隆，1923：津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第3章　上肢骨について。人類誌，43　第3付録。

3．島　五郎，寺門之隆，1965：縄文人の形質。日本の考古学Ⅱ，河出書房新社。

4．鈴木　尚，1963：日本人の骨，岩波書店。

5．Martin-Saller，1957：Leherbuch ber Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.

Tab. 11　橈骨計測値（左）（2号人骨）　　mm

1	最大長	230
1a	小頭粗面距離	31
1b	平行長	228
2	機能長	218
3	最小周	46
4	骨体横径	17
4a	骨体中央横径	16
4(2)	頸横径	15
5	骨体矢状径	13
5a	骨体中央矢状径	13
5(1)	小頭矢状径	22
5(2)	頸矢状径	16
5(4)	頸周	50
5(5)	骨体中央周	46
5(6)	骨下端幅	33
6	骨体彎曲弦長	182
6	骨体彎曲高	4
7	頸体角	169
3／2	長厚示数	21.10
5／4	横断示数	76.47
6／6	彎曲示数	2.20
5a／4a	中央断面示数	81.25

二、長崎県串島貝塚の貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元

山本愛三

1．遺跡の所在と発掘概要

本遺跡は，長崎県西彼杵郡大瀬戸町松島に所在し，昭和53年７月，長崎県文化課によって発掘が行われ，その貝類資料を筆者が分析することになったので所見を発表するとともに，この機会をあたえて下さった，長崎県文化課，高野主事，ならびに関係諸氏に謝意を示すものである。本遺跡の発掘は，松島火力発電所建設のための緊急発掘としてなされたものである。

本遺跡の長崎における位置，発掘現状図は，第75図，第76図で示した。高野（1980）によれば今回の発掘トレンチＪ，Ｋ，Ｌ，Ｍは貝層発見されず，古墳末～奈良期のもの，であり，貝層はＣ区から発見され，Ⅱ層は攪乱層であり，資料はⅣＢ層から採集したものである。(第77図第78図参照)

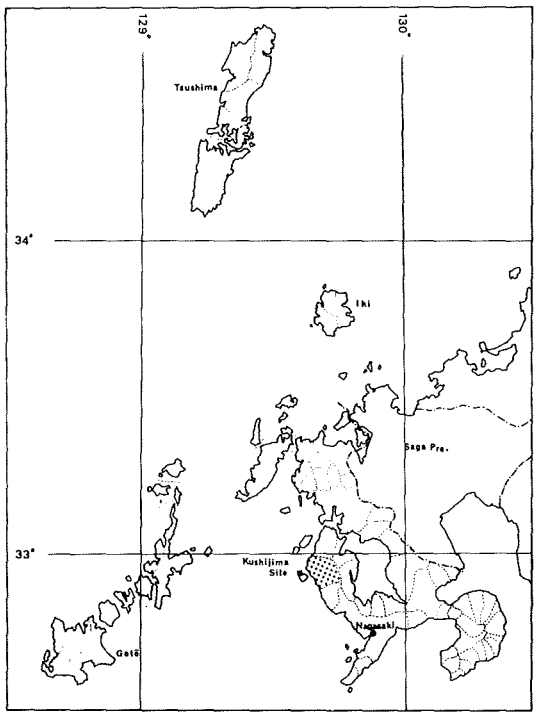


Fig. 75　串島貝塚
（長崎県西彼杵郡大瀬戸町松島内郷）

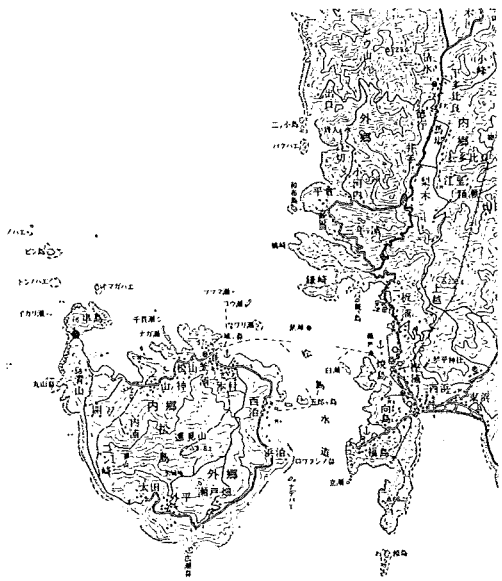


Fig. 76　串島貝塚周辺図

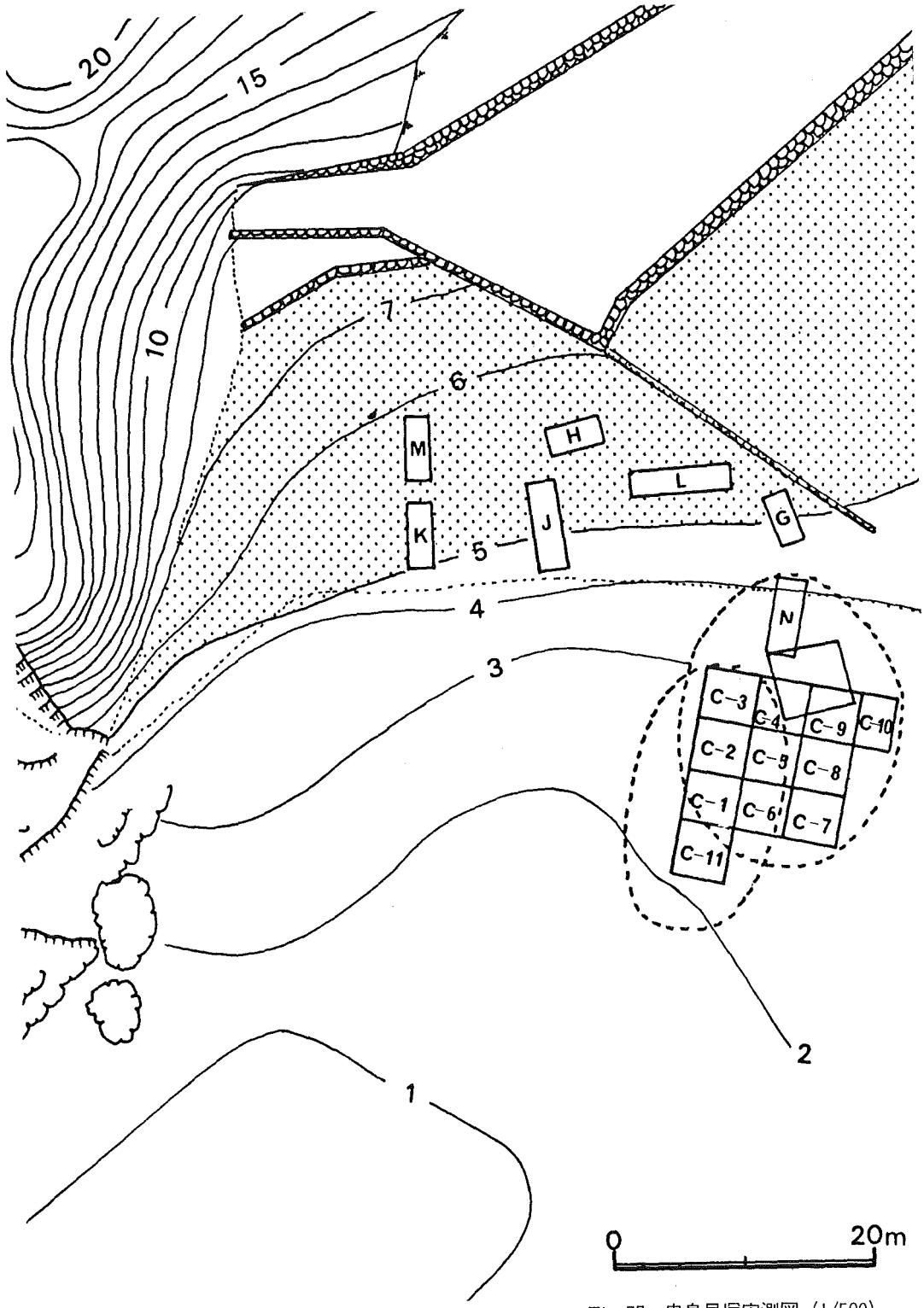


Fig. 77　串島貝塚実測図（1/500）

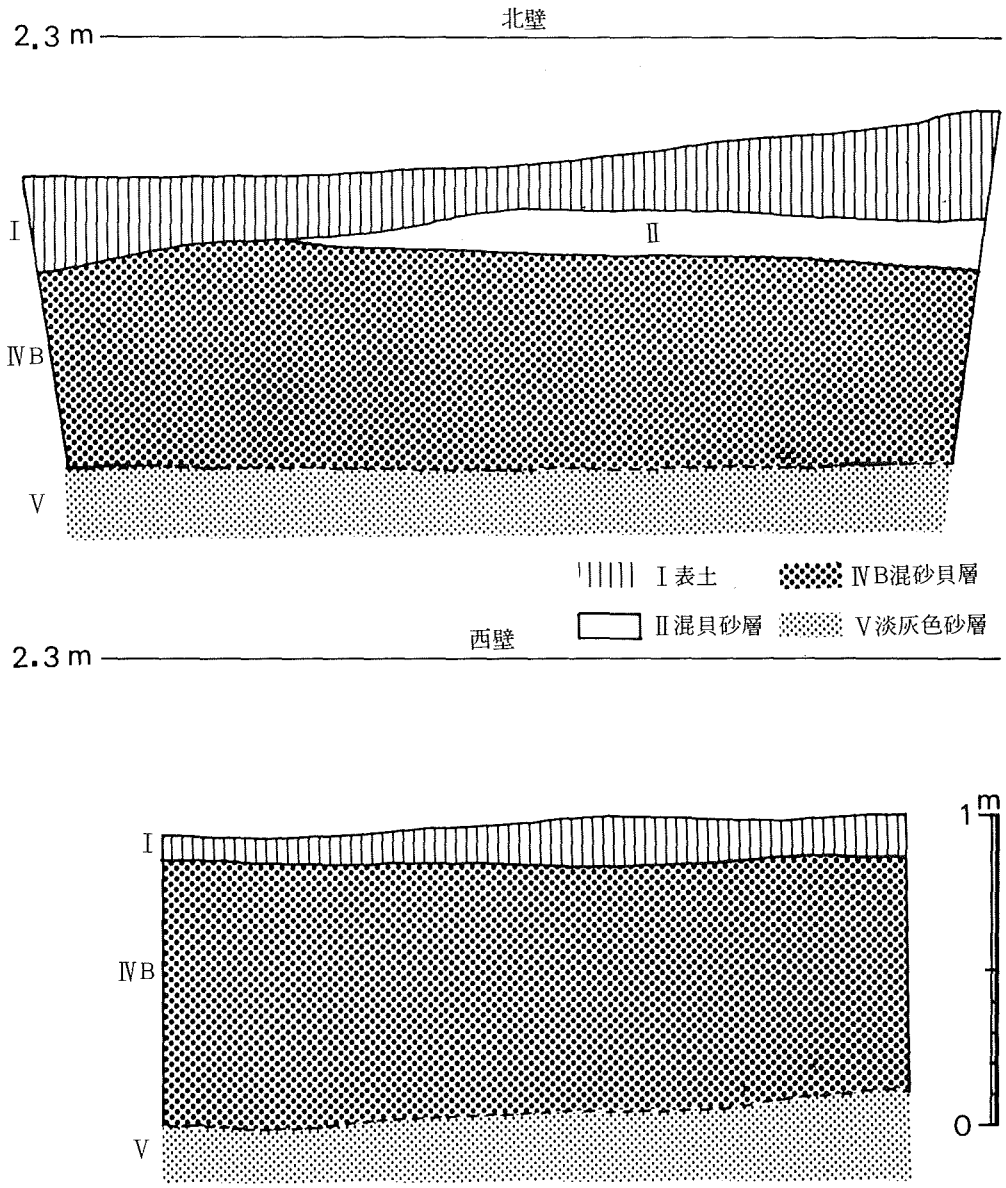


Fig. 78　C－11区壁面図（高野・宮崎〔1980〕による）

2．土器編年及び^{14}Cによる絶対年代

本遺跡の貝類資料を採集したC－11トレンチにおいて，Ⅰ，Ⅱ層からは弥生前期後半の土器が一部混入しているが，本資料を得たⅣB層出土の土器は調査員によれば，縄文後期～晩期に比定されるものであった。一方本貝層より出土したアワビ，カキより^{14}Cによる絶対年代の測定を日本アイソトープ協会に依頼し2950±80BP，2950±85BP，2650±90BP，2610±80BP との結果を得ている。

3．貝類資料の抽出と分析

貝類はC－Ⅰ，C－11，両トレンチⅣB層出土のものをすべて採集した。貝塚の範囲はFig. 77図に示す点線内と予測されるが，他のトレンチでは出土状況不良のため，採集していない，C－Ⅰ及びC－11トレンチの標高は，2mから2.5m内（Fig. 77参照）にあるがFig. 78に示すようにその下面は，標高約1mから1.5mの所にあることになる。ちなみに，本遺跡串島の平均潮位は1.66mで，発掘は土俵を積み，ポンプでたまる海水を吸み出す難作業であった。

^{14}Cによる絶対年代の測定も，この第ⅣB層出土のアワビを使用したので，本第ⅣB層は，B.C 2900年を中心とすると断定される。本遺跡の出土の貝は上記の要領でTab. 12にリストアップした。

4．串島貝塚周辺の現生貝類の調査

現在串島貝塚周辺で生息している貝類と遺跡出土の貝類を対比するため，現地調査を次の要領で行った。本遺跡を中心とする串島海岸全域を1㎡区間に地図上で区分し，貝類の生息し得ない場所，採集不可能な場所を削除して，Staiton No.を設定，次に50pointを抽出，同地点での1㎡コドラード法による採集を行った。一方，打ち上げ貝はすべてを採集し，参考資料とした。第Ⅳ層で発見されるが，現在発見されない貝については，聞き取り調査や，生息場所を想定しての抽出調査をくりかえし，Samplingを拡大した。分析結果はTab. 13に示す通りである。

調査にあたって，食料とならない微小貝類は削除した。調査期日は1977年8月18日，1978年8月2日～3日である。

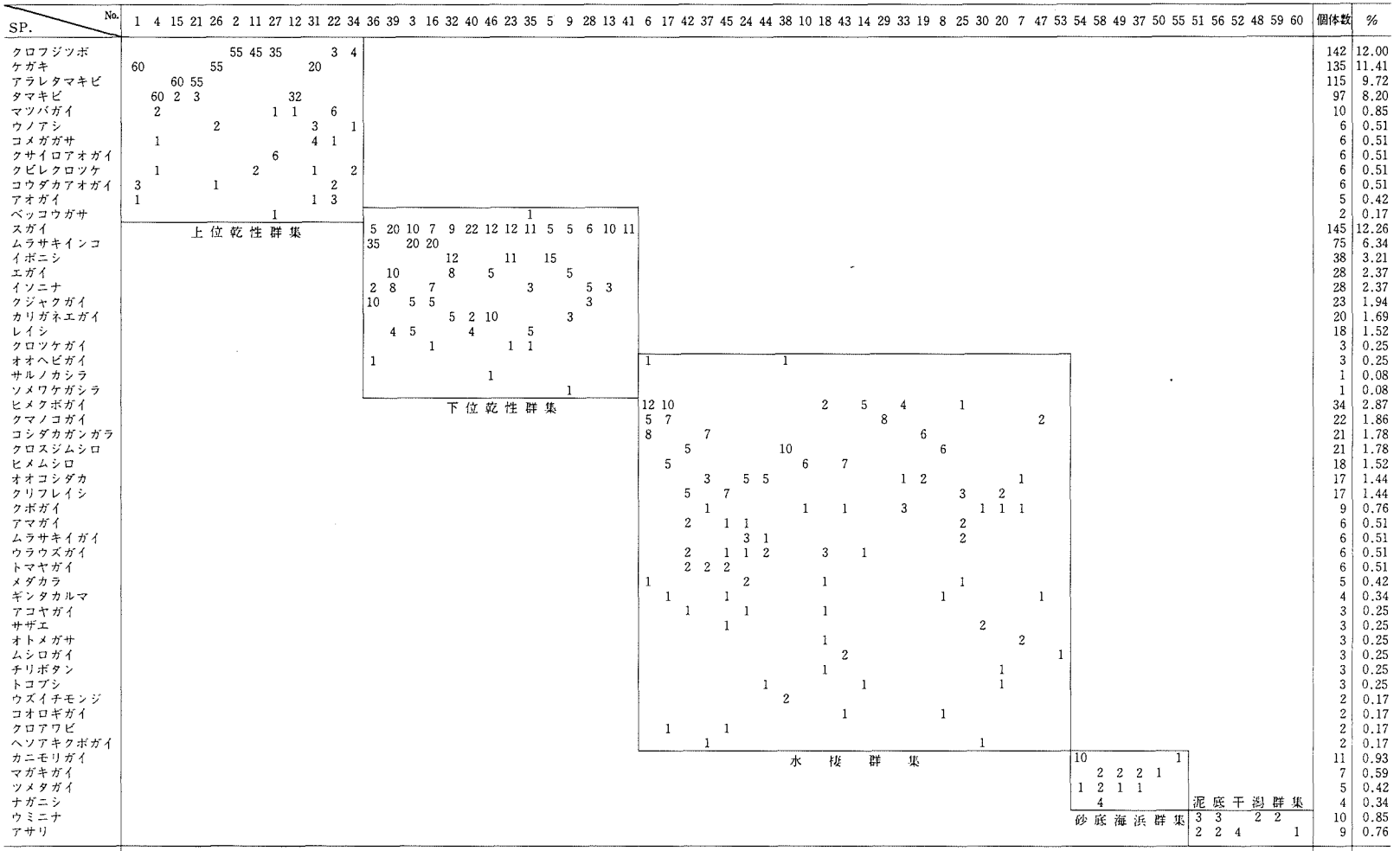
5．串島貝塚周辺の現生貝類と貝塚の貝類との比較

串島貝塚出土の貝類はTab. 12に示し，串島海岸の現生貝類は素表をいく度かくみなおし，Tab 13の常在度表として示した。貝塚に出土しているが串島海岸で未確認の貝は，Tab. 14で示した

Tab. 12　串島貝塚の貝類を中心とする分析表

種類名	Cトレンチ1のⅣ層個体数	Cトレンチ11のⅣ層個体数	計（%）
1. *Notoacmea concinna* (LISCHKE 1870) コウダカアオガイ		2	2 (0.1)
2. *Cellana toreuma* (REEVE, 1855) ヨメガガサガイ		1	1 (0.05)
3. *C. nigrolineata* (REEVE, 1854) マツバガイ	14	174	188 (9.63)
4. *Sulculus aquatilis* (REEVE, 1846) トコブシ		1	1 (0.05)
5. *Nordotis gigantea* (GMELIN, 1791) マダカアワビ	4	8	12 (0.61)
6. *N. sieboldii* (REEVE, 1846) メカイアワビ	1	2	3 (0.16)
7. *N. discus* (REEVE, 1846) クロアワビ	1	8	9 (0.46)
8. *Monodonta* (*Monodnta*) labio confusa Tapparone-Canefri, 1874 イシダタミガイ	1	97	98 (5.02)
9. *M.* (*Neomonodonta*) *perplexa* PILSBRY, 1889 クビレクロツケガイ		1	1 (0.05)
10. *Chlorostoma argyrostoma lischkei* (TAPPARONE-CANEFRI, 1874) クボガイ	2	95	97 (4.97)
11. *C. nigricolor* DUNKER, 1860 クマノコガイ	26	337	363 (18.59)
12. *Omphalius pfeifferi carpenteri* (DUNKER, 1882) オオコシダカガンガラ	10	58	68 (3.48)
13. *O. rusticus* (GMELIN, 1791) コシダカカンガラガイ		8	8 (0.41)
14. *O. nigerrima* (GMELIN, 1791) ヒメクボガイ		3	3 (0.15)
15. *Tectus* (*Tectus*) *pyramis* (BORN, 1780) ギンタカハマガイ		2	2 (0.1)
16. *Marmorostoma stenogyrum* (FISCHER, 1873) コシダカサザエ		3	3 (0.15)
17. *Batillus cornutus* (LIGHTFOOT, 1786) サザエ	47	37	84 (4.30)
18. *Lunella coronata covensis* (RÉCLUZ, 1853) スガイ	14	433	447 (22.89)
19. *Heminerita japonica* (DUNKER, 1860) アマガイ	1	4	5 (0.26)
20. *Littorina brevicula* (PHIUPPI, 1844) タマキビガイ	1	33	35 (1.79)
21. *Serpularbis* (*Cladopoda*) *imbricatus* (DUNKER, 1860) オヘビガイ		1	1 (0.05)
22. *Batillaria multiformis* (LISCHKE, 1869) ウミニナ	1	3	4 (0.2)
23. *Cerithium kobelti* DUNKER, 1877 コオロギガイ		1	1 (0.05)
24. *Ochetoclava kochi* (PHILIPPI, 1848) カニモリガイ		2	2 (0.1)
25. *Conomurex luhuanus* (LINNÉ, 1758) マキガイ	4	3	7 (0.36)
26. *Capulus dilatatus* A. ADAMS, 1860 カツラガイ	1		1 (0.05)
27. *Ergaea walshi* (REEVE, 1859) ヒラフネガイ		1	1 (0.05)
28. *Ponda* (*Mystaponda*) *vitellus* (LINNÉ, 1758) ホシキヌタ		1	1 (0.05)
29. *Polinices sagamiensis* PILSBRY, 1904 ウチヤマタマツバキ	1	1	2 (0.1)
30. *Glossaulax didyma* RÖDING, 1798) ツメタガイ	3	14	15 (0.77)
31. *Ranularia dunkeri* (LISCHKE, 1868) コシダカフジツ		1	1 (0.05)
32. *Rapana bezoar* (LINNÉ, 1767) チリメンボラ		1	1 (0.05)
33. *Reishia luteostoma* (HOLTEN, 1803) クリフレイシガイ		13	13 (0.67)
34. *R. bronni* (DUNKER, 1860) レイシガイ	13	3	16 (0.82)
35. *R. clavigera* (KÜSTER, 1860) イボニシ	1	12	13 (0.67)
36. *Balylonia japonica* (REEVE, 1843) バイ	2		2 (0.1)
37. *Japeuthria ferrea* (REEVE, 1847) イソニナ		2	2 (0.1)
38. *Kelletia lischkei* KURODA, 1983 ミガキボラ		1	1 (0.05)
39. *Siphonalis cassidariaeformis* (REEVE, 1846) ミクリガイ	2	1	3 (0.15)
40. *Reticunassa spurca* (GOULD, 1860) ヒメムシロガイ		1	1 (0.05)
41. *Niotha livescens* (PHILIPPI, 1849) ムシロガイ	1	1	2 (0.1)
42. *Pugilina* (*Hemifusus*) *ternatana* (GMELIN, 1971) テングニシ	1	2	3 (0.15)
43. *Pleuroploca trapezium* (LINNÉ, 1758) イトマキボラ	1		1 (0.05)
44. *Fusinus perplexus* (A. ADAWS, 1864) ナガニシ	2		2 (0.1)
45. *F. nicobaricus* (RÖDING, 1798) チトセボラ	6	13	19 (0.97)
46. *Baryspira rubiginosa albocallosa* (LISHKE, 1874) リユウグウボタル	1		1 (0.05)
47. *Arca navicularis* BRUGIÉRE, 1789 ワシノハガイ		1	1 (0.05)
48. *Balbatia* (*Abarbatia*) *lima* (REEVE, 1844) エガイ		29	29 (1.48)
49. *Mytilus corsucus* GOULD, 1861 イガイ	2	45	47 (2.41)
50. *Septifer* (*Mytilisepta*) *virgatus* (WIEGMANN, 1873) ムラサキインコガイ	4	30	34 (1.74)
51. *Spondylus* (*Spondylus*) *balbatus* REEVE, 1856 ウミギク		6	6 (0.31)
52. *S.* (*S.*) *cruentus* LISCHKE, 1868 チリボタン	1		1 (0.05)
53. *Pecten* (*Notovala*) *albicans* (SCHRÖTER, 1802) イタヤガイ	1		1 (0.05)
54. *Pectostrea imbricata* (LAMARCK, 1819) カキツバタガイ	1	6	7 (0.36)
55. *Saxostrea echinata* (*Quoy et* GAIMARD, 1836) ケガキ		9	9 (0.46)
56. *Crassostrea gigas* (THUNBERY, 1793) マガキ		8	8 (0.41)
57. *Cardita leana* DUNKER, 1860 トマヤガイ		1	1 (0.05)
58. *Chama* (*Pseudochama*) *retroversa* LISHKE, 1870 サルノカシラガイ		6	6 (0.31)
59. *Callista chinensis* (HOLTEN, 1803) マツヤマワスレ		4	4 (0.2)
60. *Meretrix lusoria* (RÖDING, 1789) ハマグリ	1	1	2 (0.1)
61. *Dosinorbis* (*Phacosoma*) *japonicus* (REEVE, 1850) カガミガイ	24	30	54 (2.76)
62. *D.* (*P.*) *pubescens* (PHILIPPI, 1847) ヒメカガミ		4	4 (0.2)
63. *Amygdala philippinarum* (ADAMS et REEVE, 1850) アサリ	6	75	81 (4.15)
64. *Antigona lamellaris* SCHUMACHER, 1817 サツマアサリ	4	1	5 (0.26)
65. *Notochione jedoensis* (LISCHKE, 1874) オニアサリ		5	5 (0.26)
66. *Mactra chinensis* PHILIPPI, 1846 バカガイ	3	1	4 (0.2)
67. *M. veneriformis* REEVE, 1852 シオフキガイ	5	1	1 (0.05)
68. *Nuttallia obivacea* (JAY, 1857) イソシジミ	5	2	7 (0.36)
69. *Solecurtus divaricatus* (LISCHKE, 1869) キヌタアゲマキ		1	1 (0.05)
70. *Semele cardiformis* (HOLTEN, 1803) フルイガイ		2	2 (0.10)
71. *Merisca diaphana* (DESHAYES, 1855) イチヨウシラトリ	1	1	2 (0.10)
72. *Pharaonella perna* (SPENGLER, 1846) ダイミョウガイ	2	1	3 (0.15)
73. *Solen* (*Solen*) *strictus* GOULD, 1861 マテガイ	7	70	77 (3.94)
74. *Cryptomya busoensis* YOKOYUMA, 1922 ヒメマスオガイ		1	1 (0.05)
75. *Cyclophorus herklotsi* MARTENS, 1861 ヤマタニシ	1		1 (0.05)
76. *Balanus tintinnabulum volcano* PILSBRY オオアカフジツボ		1	1 (0.05)
77. *B. t. rosea* PILSBRY アカフジツボ		1	1 (0.05)
	225	1,728	1,953 (100)

Tab. 13　串島海岸の現生貝を中心とする常在度表



36種である。一方現在，現地で棲息が確認されているが遺跡では発見されなかった貝は，Tab.15で示す18種である。Tab.15について考察すると。ムラサキイガイは移入種であるので，今後も遺跡からは出土する可能性はないと考えられる。その他の種については，長崎の他の遺跡（山本，1962，1973，1974，1975，1976，1977）で発見されているので，本遺跡でも，発掘面積を拡大すれば，発見される可能性はないとはいえないと考える。したがって当時棲息していなかったと断定することはできないと考える。

Tab.14について考察すると，マダカアワビ，メカイアワビ，ホシキヌタ，ウチヤマタマツバキ，コシダカフジツ，チリメンボラ，バイ，ミガキボラ，ミクリガイ，テングニシ，イトマキボラ，チトセボラ，リュウグウボタル，ワシノハ，イガイ，ウミギク，イタヤガイ，カキツバタ，マツヤマワスレ，サツマアサリ，キヌタアゲマキ，イチョウシラトリは，，20～30fms.に棲息するもので，浅く見積っても10fms.は必要と思われ，卓越した素もぐりや，漁具の使用による捕獲を想像せざるを得ない。カツラガイ，ヒラフネガイは，寄生或いは着生貝であるが，前者はイタヤガイ類に，後者は大型巻貝に着生するのが普通でいずれも潮干帯のものではない。

マガキ，イソシジミは，汽水の影響が考えられる。アサリ，マテガイ等は，泥砂底のものであるが，現在マテガイの生棲環境に適した環境を串島海岸で発見することは出来ない。マテガイの出土状況は，かなり破損度強く，抽出時にも破損するので個体数の測定は困難をきわめ，

Tab.14　串島貝塚で出土するが現在の串島海域で未確認の貝（干潮線を限度とする）

	種　　名	C－11＋1（%）		種　　名	C－11＋1（%）
1	マダカアワビ	0.61	19	イタヤガイ	0.05
2	メカイアワビ	0.16	20	カキツバタ	0.36
3	カツラガイ	0.05	21	マガキ	0.46
4	ヒラフネガイ	0.05	22	マツヤマワスレ	0.20
5	ホシキヌタ	0.05	23	ハマグリ	0.10
6	ウチヤマタマツバキ	0.10	24	カガミガイ	2.76
7	コシダカフジツ	0.05	25	ヒメカガミ	0.20
8	チリメンボラ	0.05	26	サツマアサリ	0.26
9	バイ	0.10	27	オニアサリ	0.26
10	ミガキボラ	0.05	28	バカガイ	0.20
11	ミクリガイ	0.15	29	シオフキ	0.05
12	テングニシ	0.15	30	イソシジミ	0.05
13	イトマキボラ	0.05	31	キヌタアゲマキ	0.05
14	チトセボラ	0.97	32	フルイガイ	0.10
15	リュウグウボタル	0.05	33	イチョウシラトリ	0.10
16	ワシノハ	0.05	34	ダイミョウガイ	0.15
17	イガイ	1.74	35	マテガイ	3.94
18	ウミギク	0.31	36	ヒメマスオ	0.05
	計				14.08

記録したものは完全個体のみであるので実質は本見塚でもっとも多量に捕食されていたと考えられる。ハマグリ，カガミガイ，ヒメカガミ等は，マテガイより泥の少ない砂底海岸である。バカガイ，シオフキは，両者の中間の底質に定着する。いずれも本貝塚周辺海域ではその生棲最適環境を発見することは出来ない。

Tab. 15　串在串島周辺で発見されるが串島貝塚で未確認の貝

	種　　名	%
1	アオガイ	0.42
2	クロイロアオガイ	0.51
3	クロツケガイ	0.25
4	ヘゾアキクボガイ	0.17
5	ウズイチモンジ	0.17
6	ウラウズガイ	0.51
7	アラレタマキビ	9.72
8	メダカラガイ	0.42
9	オトメガサ	0.25
10	クロスジムシロ	1.78
11	クジャクガイ	1.94
12	ソメワケガシラ	0.08
13	クロフジツボ	12.00
14	ウノアシ	0.51
15	ベッコウガサ	0.17
16	カリガネエガイ	1.69
17	ムサキイガイ	0.51
18	アコヤガイ	0.25
	計	31.35

6．貝類よりみた本遺跡形成時の自然環境の復元

Tab. 12で示す通り，本遺跡で多く捕食されたものは，スガイ(22.89%)，クマノコガイ(18.59%)，マツバガイ（9.63%）等であるが，前述した如く，個体計測のできないマテガイは破片多く，実質はマテガイの捕食が最高である可能性が強い。一方，貝類の生態群集別に，遺跡出土の貝と現生の貝を比較すると，Tab. 16のようになる。すなわち，本遺跡出土の貝類には，川口汽水群集に属すると考えられるものが若干発見されるが，現在の串島には，川は発見されない。おそらく松島内浦からの持込みではないかと考えられる。下位乾性群集(干潮時岩礁に露出する貝類)は，現生（32.36%)，貝塚（32.30%）と大差ないのに，砂底海浜群集，泥底干潟群集はいずれも，現生の出現率が貝塚より下回っている。Tab. 12からも，種類数自体現生の方が少ない，砂，泥の分布が過去の海岸と現在とではかなり変ったのではないかと考えられる。ちなみに，マテガイにしぼ

Tab. 16　生態群集より見た遺跡と現生の貝の比較（%）

生　態　群	現生種	遺跡出土種		
		巻　貝	二枚貝	計
Ⅰ　川口汽水群集	—	—	0.75	0.79
Ⅱ　砂底海浜群集	2.28	1.36	7.17	8.53
Ⅲ　泥底干潟群集	1.61	0.20	8.29	8.49
Ⅳ　上位乾性群集	45.32	11.70	0.42	12.12
Ⅴ　下位乾性群集	32.36	30.42	1.88	32.30
Ⅵ　水棲群集	18.43	37.72	—	37.72
Ⅷ　陸棲群集	—	0.05	—	0.05
計	100	81.45	18.55	100.00

って考えると，粒度の荒い砂と泥土の混合地帯に定着し，かなりの干出時間が必要であるので，平坦な干潟少くとも10～20mの平坦面を有する遠浅の干潟帯が必要である。しかし現在，松島を含む海岸でマテガイの生息する地域は遂に発見できなかったし，聞き出し調査でも過去にも見なかったという答ばかりであった。松島周辺をくまなくまわった結果，マテガイ生息の可能性をひそめた海岸はやはり串島遺跡前面の海岸（Fig.79A，B）より他にない。現在，串島は満潮時は弧立し，干潮時にはかろうじて松島とつながる。満干時にはFig.79A地点は外洋水の浸入で攪拌され，泥質が流出してしまい定着する環境ではない。Fig.79B地点はA地点より礫と砂の量が多い。以上を考える時，遺跡形成時期は，串島は松島とトンボロ形態をなして接続した，陸繋島であり，串島貝塚は，古松島湾の内奥に位置し，泥土の堆積を可能とし，マテガイ等の干潟性貝類をはぐむ余地が充分あったと考えられ，砂底性海浜群集はむしろ，Fig.79B地点で定着していたのではないかと推定される。串島・松島間がいつ切断されたかは，遺跡の生活面が常識より低すぎることとあいまって，海流だけでは判断できない要因があったと考えられる。海水準の低下も他地域とずれがあり，地盤沈下等を考えざるを得ないが，地質学的に証明されるべきことで，筆者のよくする所ではない。

引用文献

山本愛三（1962）：五島岐宿寄神貝塚の貝類に関する考察，五島遺跡調査報告，P.42～51

山本愛三（1973）：(五島)江胡貝塚の貝類，曽畑式土器に関する研究，縄文文化研究会P.70～72

山本愛三（1974）：熊本県尾田貝塚の貝類，曽畑式土器に関する研究，縄文文化研究会

山本愛三（1974）：貝塚における貝類の研究とSampling，長崎県考古学会会報2　P.4～5

山本愛三（1975）：寿命貝塚の貝類

山本愛三（1975）：対馬・住吉平貝塚の貝類，長崎県文化財調査報告書第20集，P.4～5

山本愛三（1976）：志多留貝塚の貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元，対馬の生物　長崎県生物学会P.49～57

山本愛三（1977）：壱岐・原ノ辻遺跡を中心とする壱岐の先史生物，壱岐の生物，P.81～87　長崎県生物学会

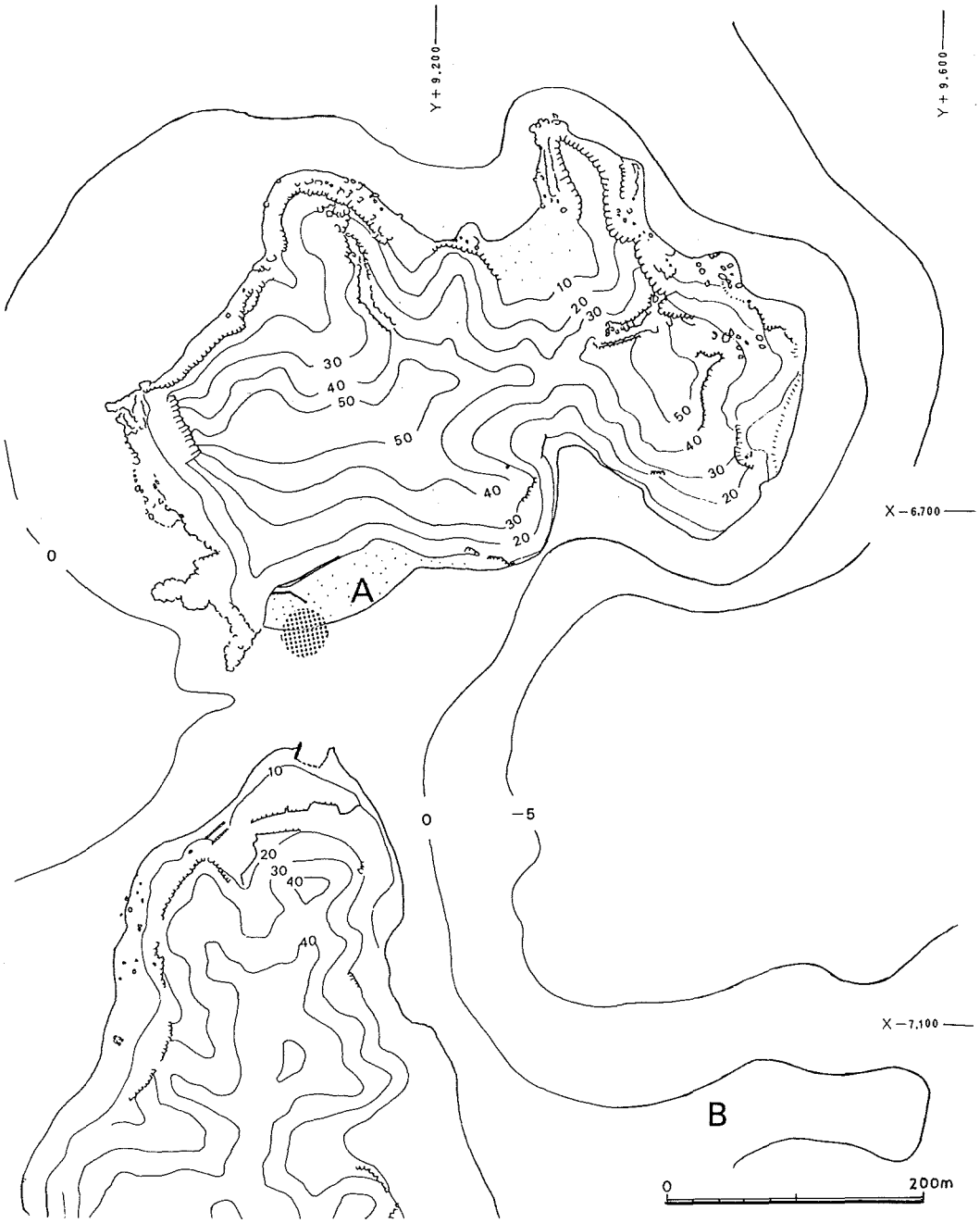


Fig. 79　串島周辺海域図

三、串島遺跡出土の動物遺存体

木村幾多郎

本遺跡より発掘採集された脊椎動物遺存体で，種名の査定されたものは，以下の通りである。

魚　綱　Class Pises

1．サメ類　*Lamina fami.*
2．マダイ　*Pagrus major* (Temminck & Schlegel)
3．マハタ　*Epinephelus septemfasciatus* (Thunberg)
4．カンダイ　*Semicossyphus reticulatus* (Cuvier & Valenciennes)
5．イシダイ　*Hoplognatus fasciatus* (Temminck & Schlegel)
6．クロダイ　*Mylio macrocephalus* (Basilewsky)
7．ヘダイ　*Sparus aries* (Temminck & Schlegl)
8．スズキ　*Lateolabox japonicus* (Cuvier & Valenciennes)
9．マフグ科の一種　*Tetraodontidae gen. et sp. indent.*

爬虫綱　Class Reptilic

10．アカウミガメ　*Caretta Caretta olivacea* Eschscholtz

哺乳類　Class Mammalia

11．イノシシ　*Sus scrofa leucomystax* (Temminck & Schlegel)
12．シカ　*Cervus nippon* Temminck
13．イヌ　*Canis familiaris*
14．マルイカ，*Delphinus delphis* Linnaeus
15．バンドウイルカ　*Tursiops gilli* Dall.
16．クジラ類　*Cetacea fam. indent.*

魚　綱　Class Pisces

軟骨魚

サメ類　*Lamnina fami.*

脊椎骨が9点検出されているが，種名は判定できない。椎高が3㎝に近いもの(PL. 64—10, 11(C－2 ⅣB 層, C－6 区))と，1㎝程の個体5個でそのうち4個は同一個体のものと思われる。

硬骨魚

マダイ　*Pagrus major* (Temminck & Schlegel)

硬骨魚類の中で，数量的に一番多いものであり，出土区の多くは，歴史時代包含層にかたより，特にC区に多い。前上顎骨の計測可能なものは，1点のみ(PL.64—15,(L区3層))であるが，前上顎骨長は5.75cmを示し大形であるが他はやや小形である。歯骨も最大長が5cmを越すもの(PL.64—18(L区3層))もあるが，3cm程の小さなものまで検出されており特に大形のものだけを捕獲したわけではなく,中形程度の個体が多い。主上顎骨に径3.5mm程の棘突によると思われる小孔があいている個体がある。又前頭骨も多く検出されている。マダイは，普通200尋から100尋位までの近海に棲む定着性の魚で，岩礁性で海藻の茂る場所の，下層・中層を遊泳している。産卵期には，浅場で砂礫のある様な海底に群をなして押しよせてくる。クロダイスズキが，ほとんど採集されていないこととともに外海的性格を示しているといえる。

Tab. 17　マダイ地区別出土個体数

部位 / 出土区	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		前鰓蓋骨		方骨		関節骨		脊椎骨
	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	
C区			1	0	1	1							1
F区					1	0							
H区	1	1											
L区	4	4	3	3	1	2	3	1	1	2	1	0	3

カンダイ　*Semicossyhus reticulatus* (Cuvier & Valenciennes)

検出確認されたものは，多くは，下咽頭歯で(6個)，他に上咽頭歯1個，前上顎骨1個である。保存良好なものは咽頭歯だけで，前上顎骨は小破片となる。外洋性の性格を示す遺跡に多い魚種である。

前上顎骨（？）PL.64—3（H区）

上咽頭歯　　PL.64—4（C—1ⅣB層）

下咽頭歯　　PL.64—1，2（C区，L区3層）

マハタ　*Epinephelus septemfasciatus* (Thunberg)

マハタは，マダイ・カンダイと共に本遺物の主要捕獲魚である。歯骨が多く,(右側6点，左側4点),前上顎骨が左右一点づつ検出されている。出土区は，C区，L区で，ほとんどはC区出土である。保存が不良で，計測可能な個体はないが，下顎歯骨で大きいものは歯骨長が10cm

Tab. 18　マハタ地区別出土個体数

部位 / 出土区	前上顎骨		歯骨	
	r.	l.	r.	l.
C区	1	0	5	2
H区			1	0
L区	0	1	0	2

Tab. 19　イシダイ地区別出土個体数

部位 / 出土区	前上顎骨		歯骨	
	r.	l.	r.	l.
C区	1			
L区	3		1	2

を越え(PL.64－5 (L区3層)),小さな個体で歯骨長が6cm程である。マハタは岩礁地帯の海藻や，岩窟のあるような海底を好む底着魚である。

イシダイ　*Hoplognatus fasciatus* (Temminck & Schlegel)

上下の顎骨は，5cm程の大きなものから(PL.64－8，9 (L区3層)) 3cm程の小さなものまであるが，比率からいうと半ばしている。イシダイは海藻の茂る岩礁間に主に棲息する魚で，良く磯釣の対象となる。

クロダイ　*Mylio macrocephalus* (Basilewsky)

前上顎骨（左側)が1点検出されているのみである(PL.64－33(L区3層))。前上顎骨長2.5cm程の小さな個体である。内湾性の魚で，半鹹半淡の水域にも入る。マダイ・カンダイ等外洋性の魚の多いのとは対照的であり，遺跡の立地を良く示している。

ヘダイ　*Sparus aries* (Temminck & Schlegel)

下顎歯骨が1点検出されているのみで(PL.64－34(L区3層)),習性の似るクロダイとともに少い。

スズキ　*Latolabax japonicus* (Cuvier & Valenciennes)

左側前鰓蓋骨(PL.64－30(L区3層)) と脊椎骨(PL.64－32，31(H区，C－10ⅣA層)) 3点が検出されているのみで，他の内湾性魚類とともに少い。

マフグ科の一種　*Tetraodontidae gen. et sp. indent.*

右側下顎歯骨(PL.64－35(L区3層))と，脊椎骨（L区）が各1点検出されているのみである。小さな個体である。

硬骨魚として他に棘が多数検出されているが，どの種類に属するものか不明である。

爬虫綱　Class Reptilia

アカウミガメ　*Caretta caretta olivacea* Eschscholtz

Tab.20　アカウミガメ地区別出土個数

	肩甲骨		上腕骨		大腿骨		脛骨		腓骨	
	r.	l.	r.	l.	r.	l	r.	l.	r.	l.
F区	1									
G区		1								
L区			1	2		1	2			1

アカウミガメは，F，G，L区より出土している。L区よりは最大2個体の骨が検出されている。上腕骨よりみれば最大長13cmを越える個体(PL.65—1(C区4層))と，8.58cmの小さな個体(PL.65—3(L区4層))がある。(PL.65—2(L区3層))の上腕骨は骨体部のみであるが，上記2個より大きく，(PL.65—4(L区3層))の大腿骨に対応するものであろうか。指骨も6個程採集されているが，アカウミガメとは断定できない。

ウミガメの一種　*Chelonidae gen sp. indent.*

N区I層より肩甲骨（右側）が一点検出されているが，アカウミガメのものとは異る。背甲板・腹甲板は点数にすると多いが(約30点程)そのほとんどが小破片で，判定のつかないものが多い。前記の指骨も同様である。C区より6点，G区より3点，H区より11点，L区11点，N区2点でH・L区が多い。L区のものは，前記アカウミガメに付属するものと思われるが，判定できない。

以上のように，本遺跡では，かなり広い範囲にわたってウミガメ類が出土しており，骨の総量的には，大きな部分を示している。他の海棲動物も示すように海洋性的立地を示しているといえる。捕獲は，普通いわれるように産卵のため砂浜に上ったときをねらったものであろう。腹甲板，背甲板は，小片に打割られていることは前述の通りであるが，上腕骨・大腿骨等比較的大きな骨には，刃物によるキズが認められないのに反して，指骨のほとんどに水平断のキズが残っている。

哺乳綱　Class Mammalia

イノシシ　*Sus scrofa leucomystax* (Temminck & Schlegel)

イノシシは，シカとくらべて遺存骨は少ない。出土区は全域に広がるも多くはL区の歴史時代遺跡部分に多い。推定最小個体数は4個体であるが，H区出土分は，遠位端・近位端の破片で同一個体の可能性がある。骨端分離を示す長管骨はないが，歯牙よりすれば，乳歯の残る個体(PL.68—3(L区3層))で，M_1がいまだ骨体内にあり，生後6—7ケ月の個体があり，M_1がやゝ咬耗が認められるだけでP_4が萌出中のもの（G区出土）があり(生後13ケ月)，M_3がいまだ骨体内にありもの（PL.68—1(L区3層)）など幼獣が多い。しかし（PL.68—2（L区3層))のようにM_1が歯頚部まで咬耗しているなど老獣を思わせるものもある。性別は雄獣の犬歯及び歯槽部が2個体確認されているのみで雌獣は未確認である。歴史時代におけるイノシシに

Tab.21　イノシシ地区別出土個体数

	肩甲骨		上腕骨		橈　骨		尺　骨		寛　骨		大腿骨		脛　骨		踵　骨		指　骨	
	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.
C 区	1							1									1	
H 区			1										3			1		
L 区													1		1			2

Tab. 22　イノシシ歯牙

出土区＼部位		右側	左側
		$m_3\ m_2\ m_1$ $M_3\ M_2\ M_1\ P_4\ P_3\ P_2\ P_1\ C\ I_3\ I_2\ I_1$	$m_1\ m_2\ m_3$ $I_1\ I_2\ I_3\ C\ P_1\ P_2\ P_3\ P_4\ M_1\ M_2\ M_3$
串GK 串K 2串N Ⅲ 2串L N 38 2串L N 194 2串L N 212	下顎骨	〔$P_3\ P_2$〕 〔$m_3\ m_2$〕 〔$(M_3)M_2M_1P_4$＋＋＋C⇕〕 〔M_2M_1＋＋＋＋＋⇕〕	〔＋(P_4)M_1M_2〕 M_2
串HK	上顎骨	(M^2)	

※〔　〕顎骨の存在するもの　〔＋〕歯槽部の残存するもの
〔(　)〕骨体内及び萌出中のもの　(　) 遊離したもの

Tab. 23　シカ地区別出土個体数

出土部位＼出土区	肩甲骨		上腕骨		橈骨		尺骨		中手骨	寛骨		大腿骨		脛骨		距骨		中足骨
	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.		r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	
C 区	1							1	1						2			1
G 区						1									2			
H 区	1		1	1			1	1	3	2					1			4
L 区			1	1					3		1				1		2	2
N 区								1										1
総数	2	0	2	2	0	1	1	3	7	2	1	0	0	0	6	0	2	8

Tab. 24　シカ歯牙

	(R)	(L)
下顎骨	$m_3\ m_2\ m_1$ $M_3\ M_2\ M_1\ P_4\ P_3\ P_2\ I_4\ I_3\ I_2\ I_1$	$m_1\ m_2\ m_3$ $I_1\ I_2\ I_3\ I_4\ P_2\ P_3\ P_4\ M_1\ M_2\ M_3$
2串C 3 Ⅱ 2串C −11 Ⅱ 2串C 8 Ⅲ 2串C 10 串HK 串HK 串HK	〔$M_1\ P_4\ P_3\ P_2$〕 〔$P_4\ P_3$ ＋〕 〔$P_4\ P_3\ P_2$〕 〔$m_3\ m_2\ m_1$〕	〔＋ $M_2\ M_3$〕 〔＋ $P_3\ P_4\ M_1$〕
上顎骨	$m^3\ m^2\ m^1$ $M^3\ M^2\ M^1\ P^4\ P^3\ P\ C$	$m^1\ m^2\ m^3$ $C\ P^2\ P^3\ P^4\ M^1\ M^2\ M^3$
2串L N 218/256 2串C −11 Ⅲ 串GK 串HK	(M^2) M^3	〔$P^3\ P^4\ M^1\ M^2\ M^3$〕 (P^2)(P^3)(P^4)(M^1)(M^2)(M^3)

※〔　〕顎骨の存在するもの　〔＋〕歯槽部の残存するもの　(　) 遊離した歯

は幼若獣の比率が多い事は熊本市高橋南貝塚でも確認されている（木村1978)。

シ　カ　*Cervus nippon* Temminck

シカは，本遺跡の中での比率は高い。出土区は全域にわたるも，H，L区に多い。

出土個体数は，脛骨よりすれば最大6個体考えられるが，破片が多いため判定しにくい。中手・中足骨はさらに小破片で，個体数推定の材料とはなりにくい。中手・中足骨は，ヤス等の骨角器として利用されやすく小砂片となるものが多い。性別は，鹿角があり，雄獣の存在を示す。なお成獣の肩甲骨で小形のものがあり(PL.67－6（C－8，Ⅱ・ⅡA層))雌獣のものであろう。年令は，(H区出土）のように乳歯の残存があり，咬耗も認められることから生後1年半位の個体もあるが，他は(PL.67－3（C－11ⅣB層))のように歯頸部まで咬耗のすすんだものや，それまで進まなくてもある程度咬咬の認められる個体が多く，イノシシの場合と対照を示す。

イ　ヌ　*Canis familiaris*

左側大腿骨近位半分が検出されているのみである(PL.68－13(C－8Ⅱ・ⅣA層))。他の標本と比較すると，中型又は中小型犬に属するものと思われる(長谷部1952)。出土地区よりすると弥生時代に属するものであろうか。

イルカ科

イルカ科の動物は，マイルカ *Pelhinvs delphis* Linnaeus，1758 の下顎骨，バンドウイルカ *Tursiops gilli Dall*，1873？の下顎骨と脊椎骨片が数点採集されているのみである。マイルカ(PL.66－2（L区3層))は左側下顎骨歯槽部の破片，バンドウイルカ(PL.66－1（N区Ⅰ層))も右側下顎骨で吻部先端がやゝ欠損する。他に種不明の上顎骨片が一点検出されている（C－6Ⅱ・ⅣB層)。

西北九州における遺跡としてはイルカの出土量はきわめて少ないといえる。積極的な捕獲は考えられにくい遺跡である。

クジラ類　*Cetacea fam. indent.*

クジラ類は全て破片で，やゝ大きめの破片は板状に加工されたものが多い。破片は量的に多いが，個体数としたら少ないものであろう。イルカ類と同様積極的に捕獲したものとは思われない。板状の破片が多いことは，ここで食料としての鯨というより，加工材料として存在した可能性も否定できない。

以上，16種以上の脊椎動物の遺存体が検出された。出土地区はその殆どが7C末頃の遺物の

包含する地区（主にＬ区）であるが，マハタのみはＣ地区に多い。魚類は，立地の示すところにふさわしく，外洋性の魚類の検出が多く，内湾性魚類はほとんどなく，外洋性のものには大きな個体が多い。これは貝塚の方からもいえるようである。漁法を示すものとしてマダイの主上顎骨にヤスのようなもので棘いたものと考えられる小孔が残っていた。

ウミガメ類も，その個体が大きいためか残存骨の量としては多い。甲板には小さな破片が多く，道具として加工された可能性がある。ついでに鯨類についてみれば，前述したように鯨類の残存骨は板状に加工されたものかそれとも小片で，他の脊椎骨等の検出はなく道具製作のために骨を入手していた可能性がある。イルカ遺存骨も少い方である。

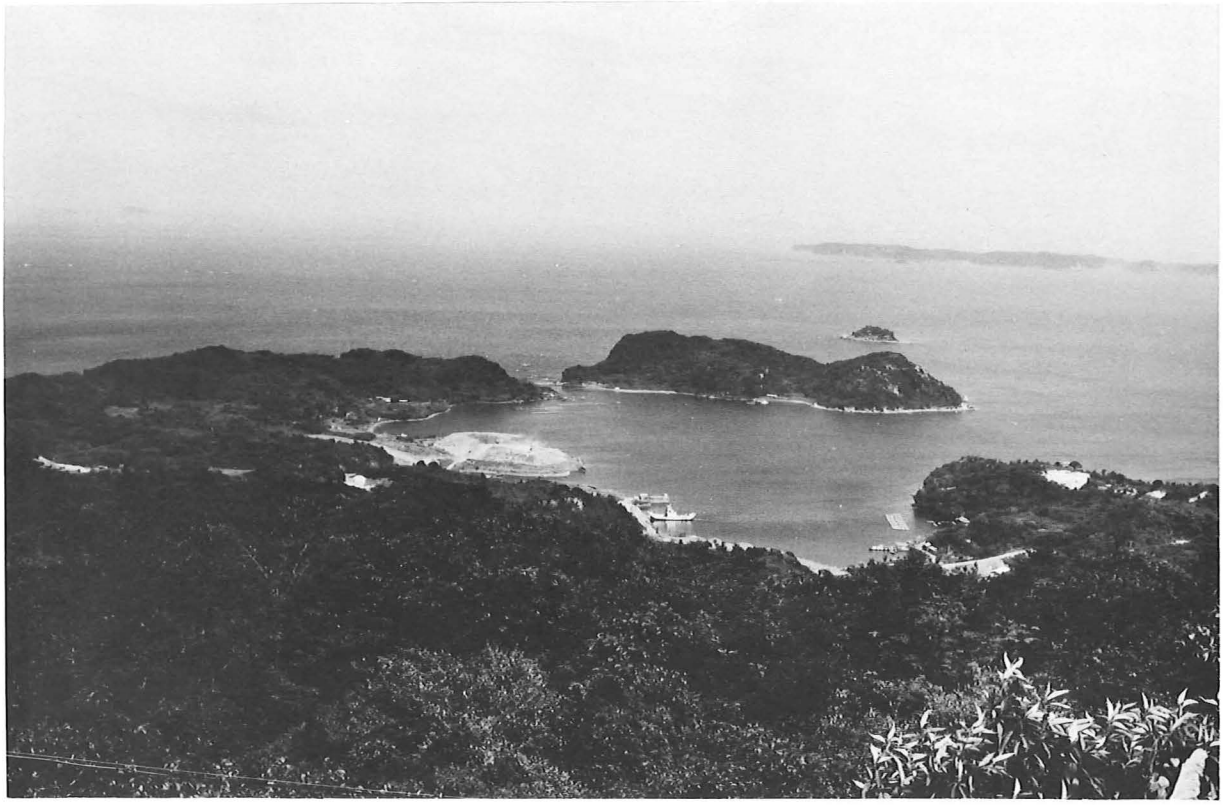
イノシシ，シカは量的にシカが優る。時代は異なるが，五島・岐宿貝塚でもシカがイノシシより優性である。イノシシは前述のように幼若獣が多く，他の歴史時代遺跡と傾向を同じくする。シカは成獣の方が多く，やゝ雄獣が優る。イノシシ，シカとも全体的には多いとはいえない。

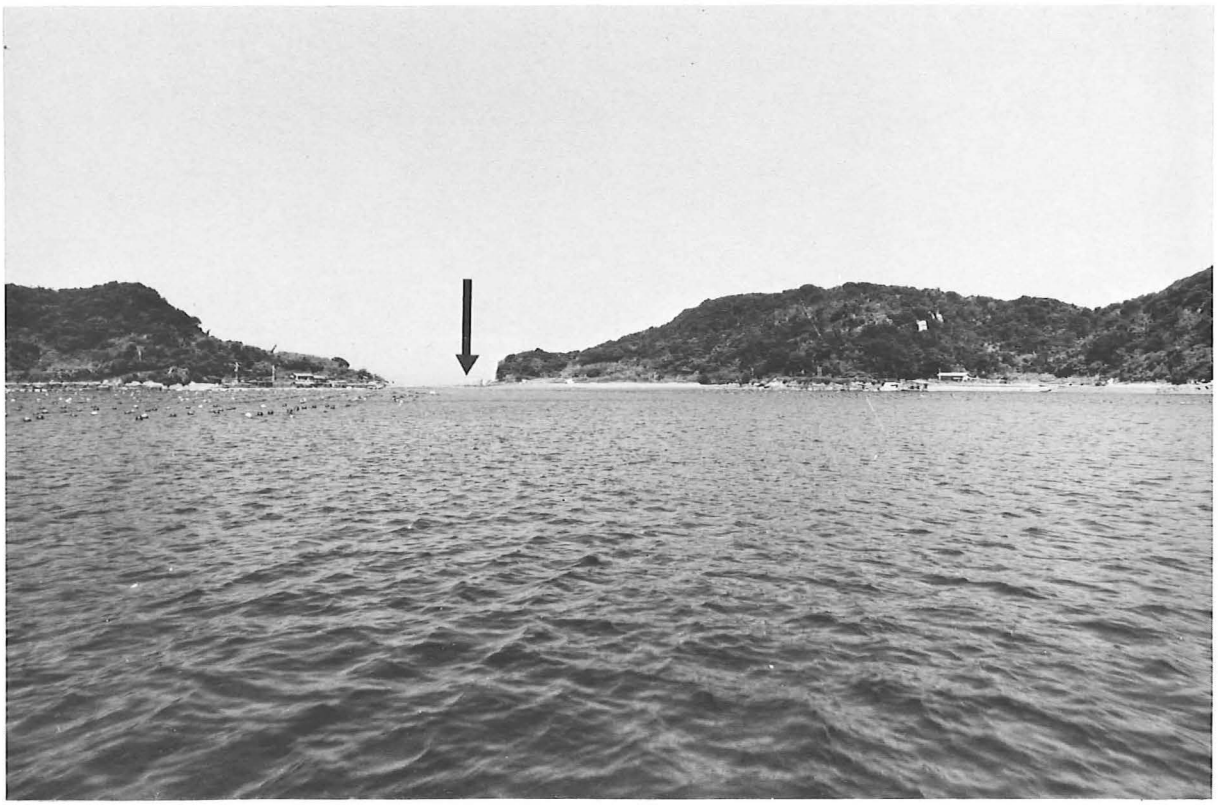
以上のように，本遺跡の動物遺存体は，外洋性の性格を示すものといえる。

木村幾多郎，1978「高橋南貝塚出土の動物遺体」高橋南貝塚85～95頁。熊本。

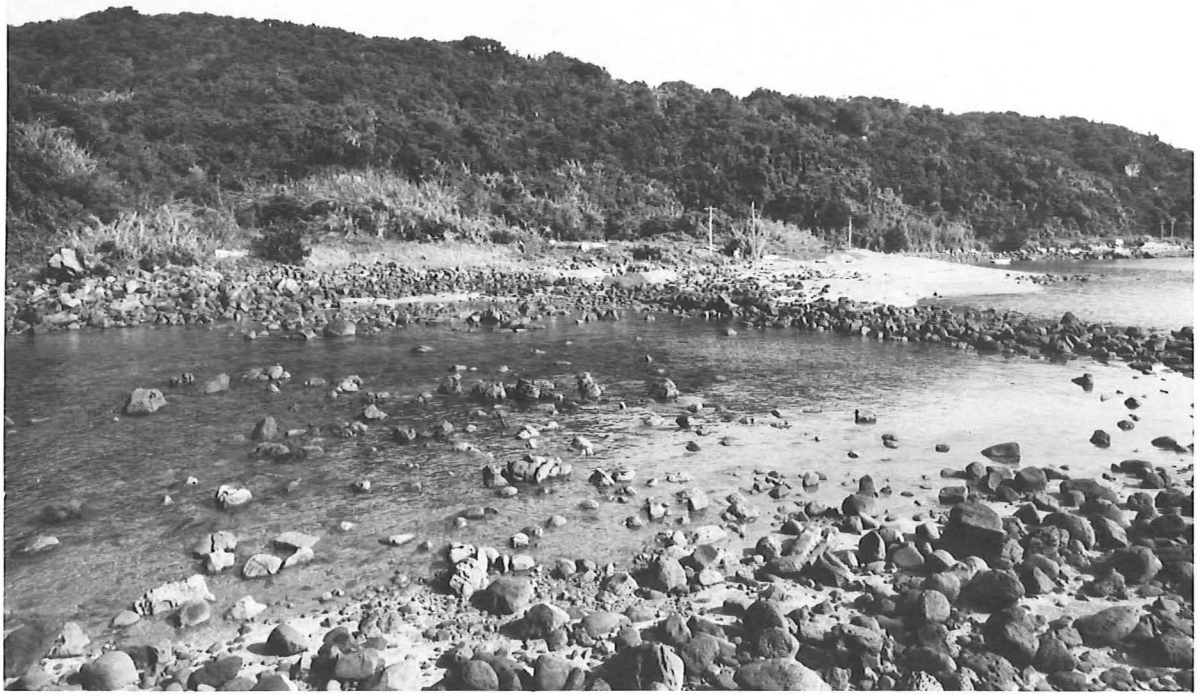
長谷部言人，1952「犬骨」吉胡貝塚　145～150頁。東京。

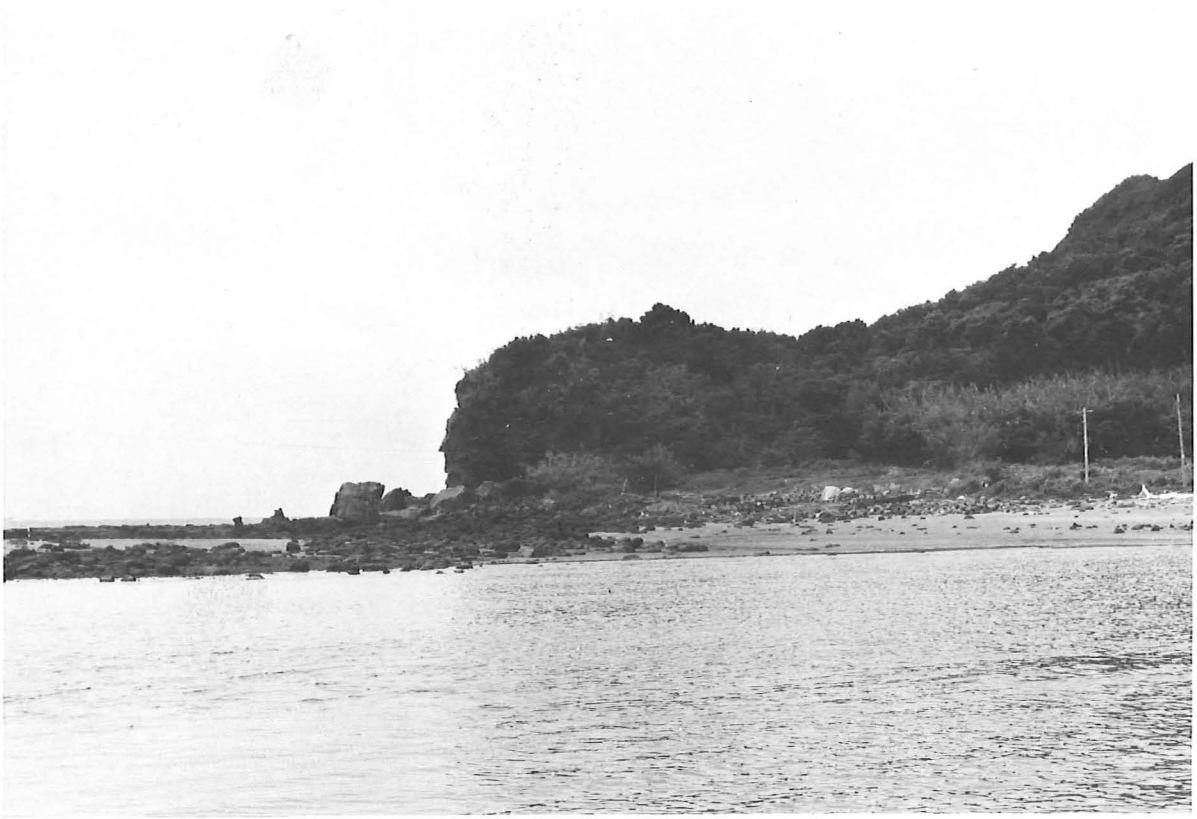
図　　版



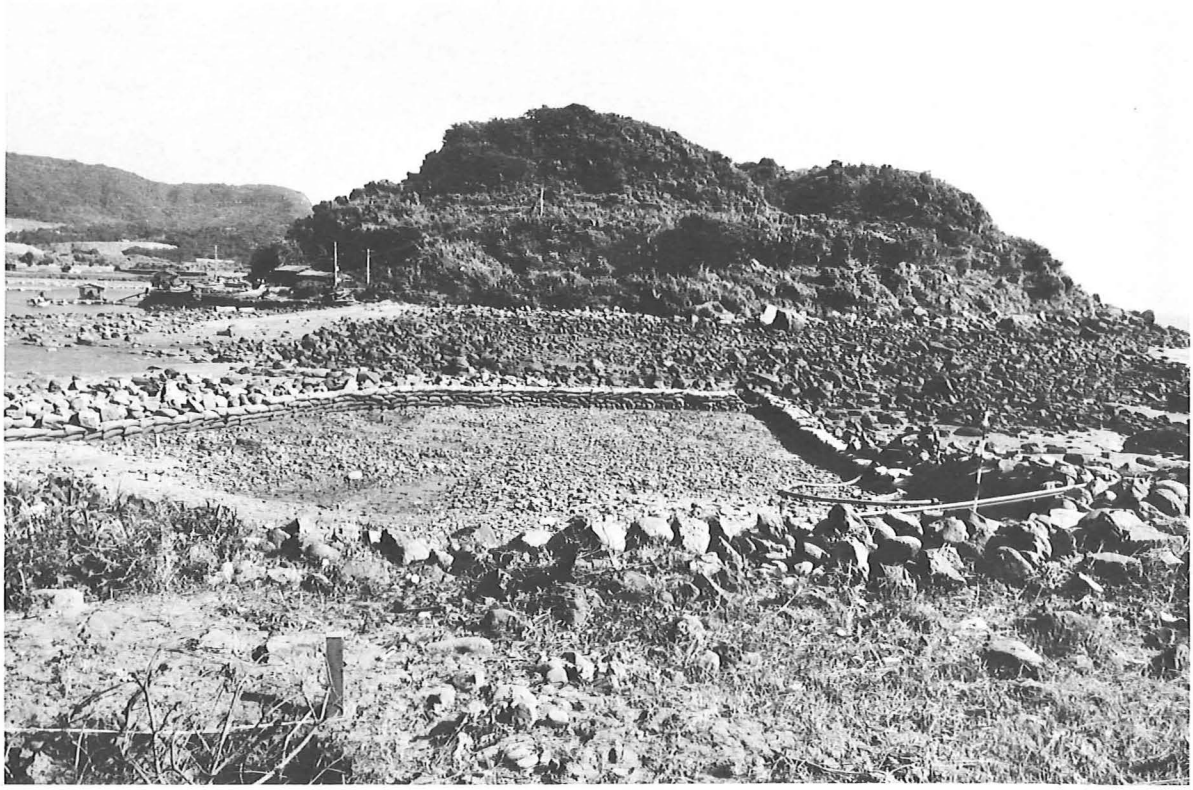


串島遠景

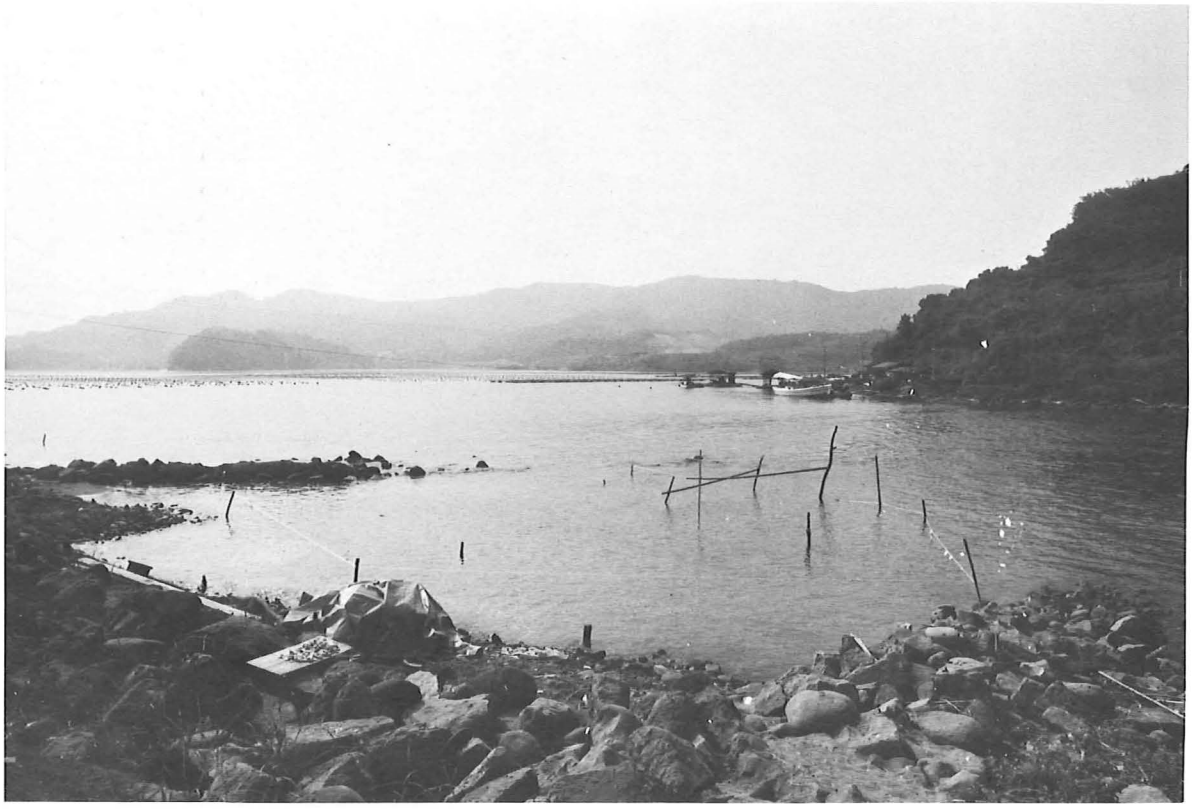




串島遺跡近景



干潮時の遺跡（C区）

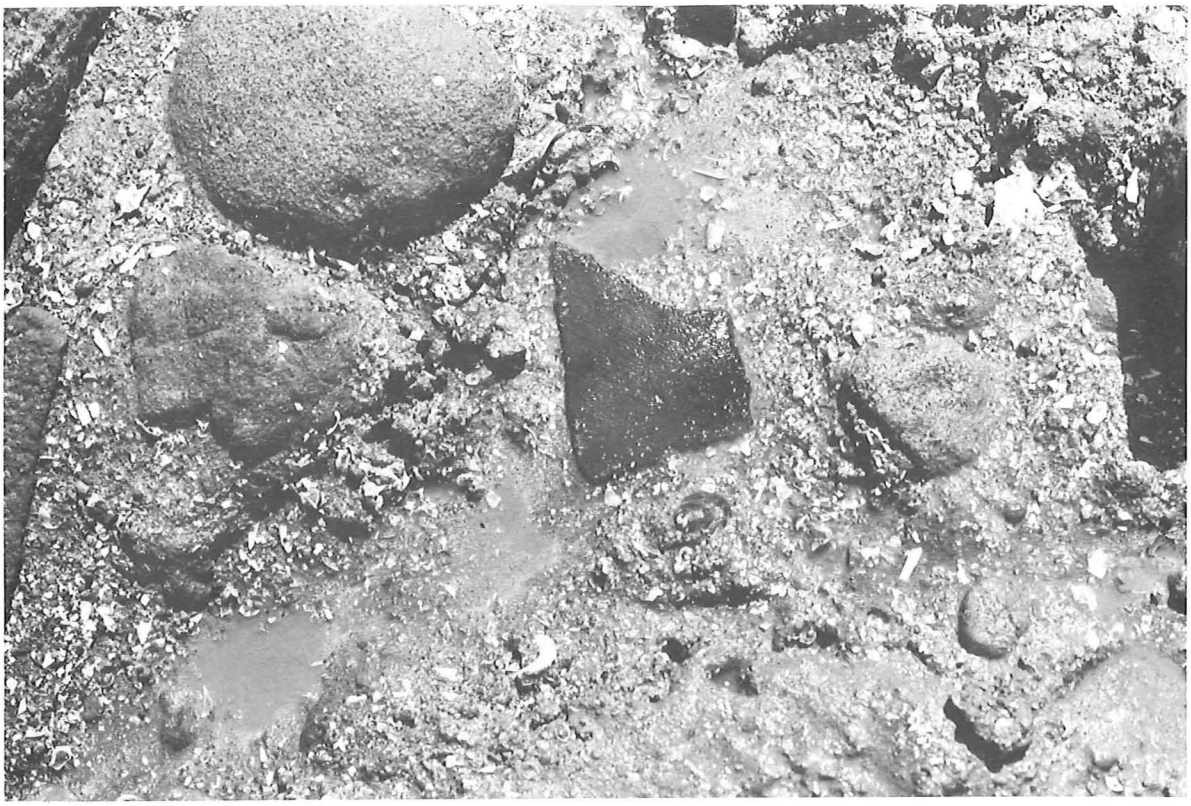


満潮時の遺跡

C・D区調査状況（第１次調査）

C・D区西壁（第１次調査）

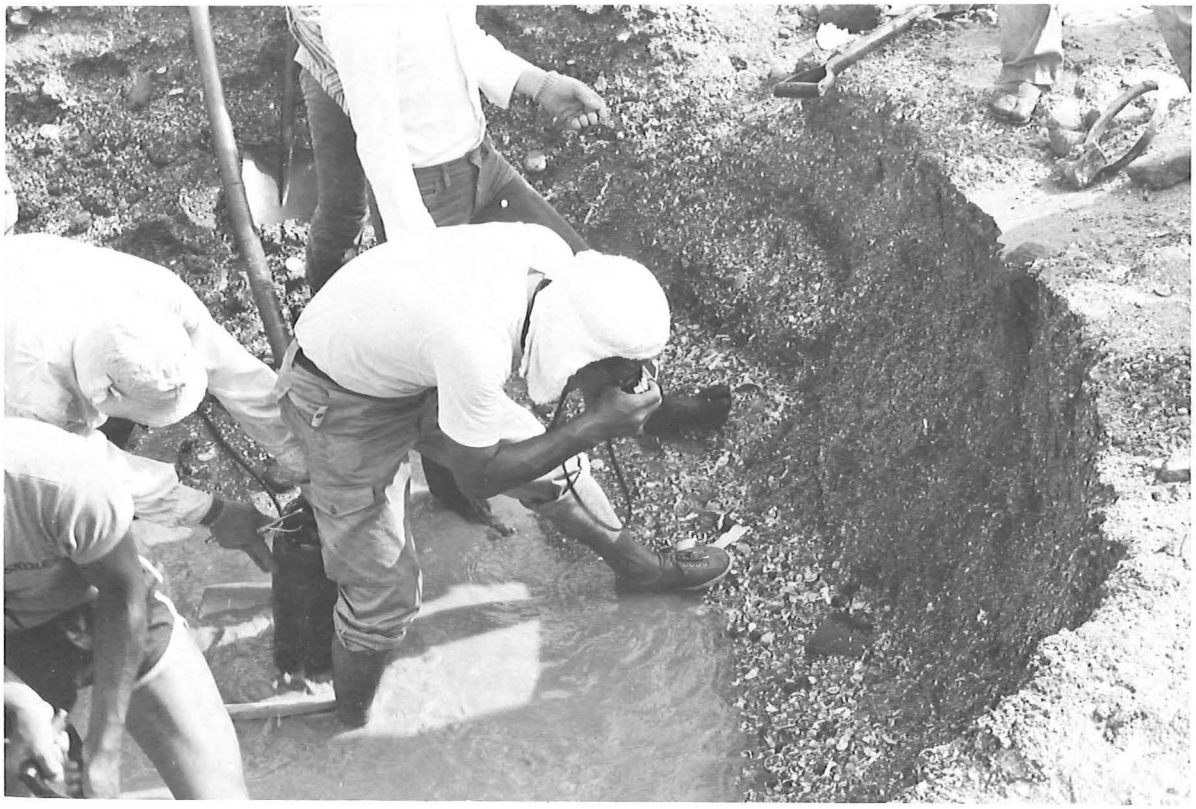
C・D区遺物出土状況（第１次調査）



C・D区遺物出土状況（第１次調査）

A区調査状況（第１次調査）

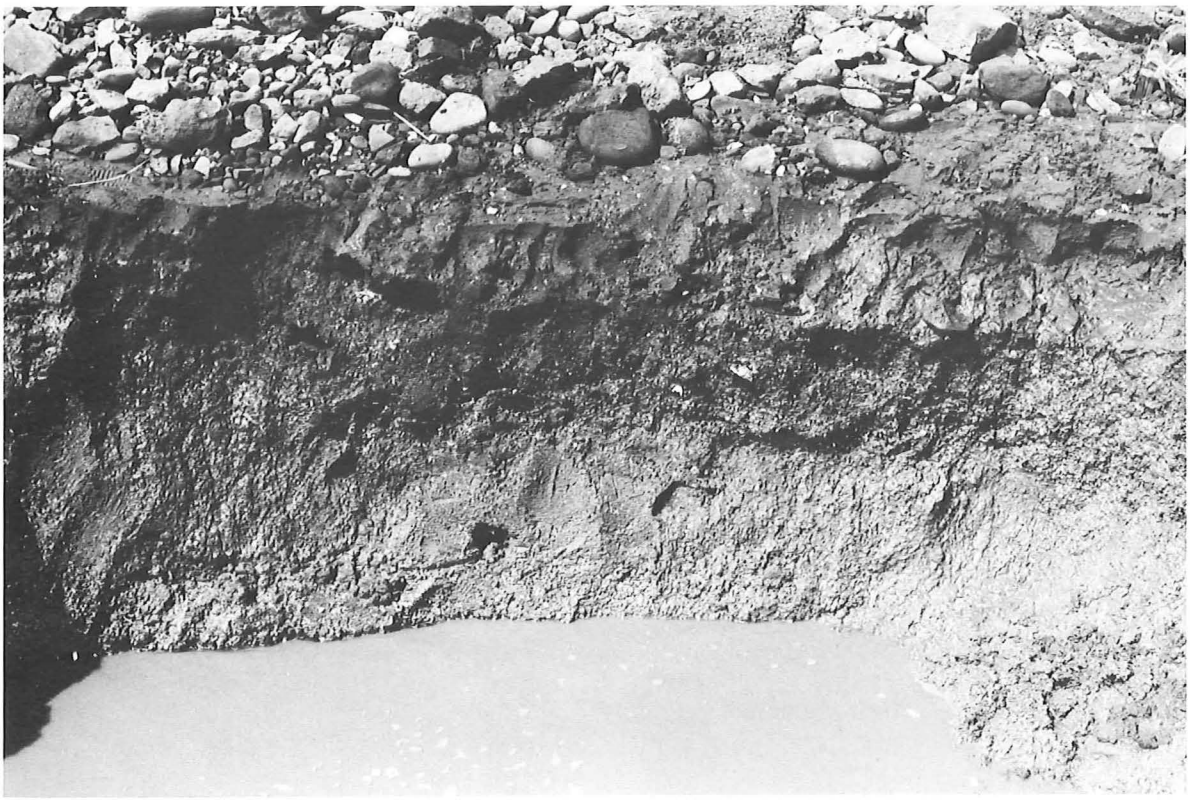
H区西壁（第１次調査）



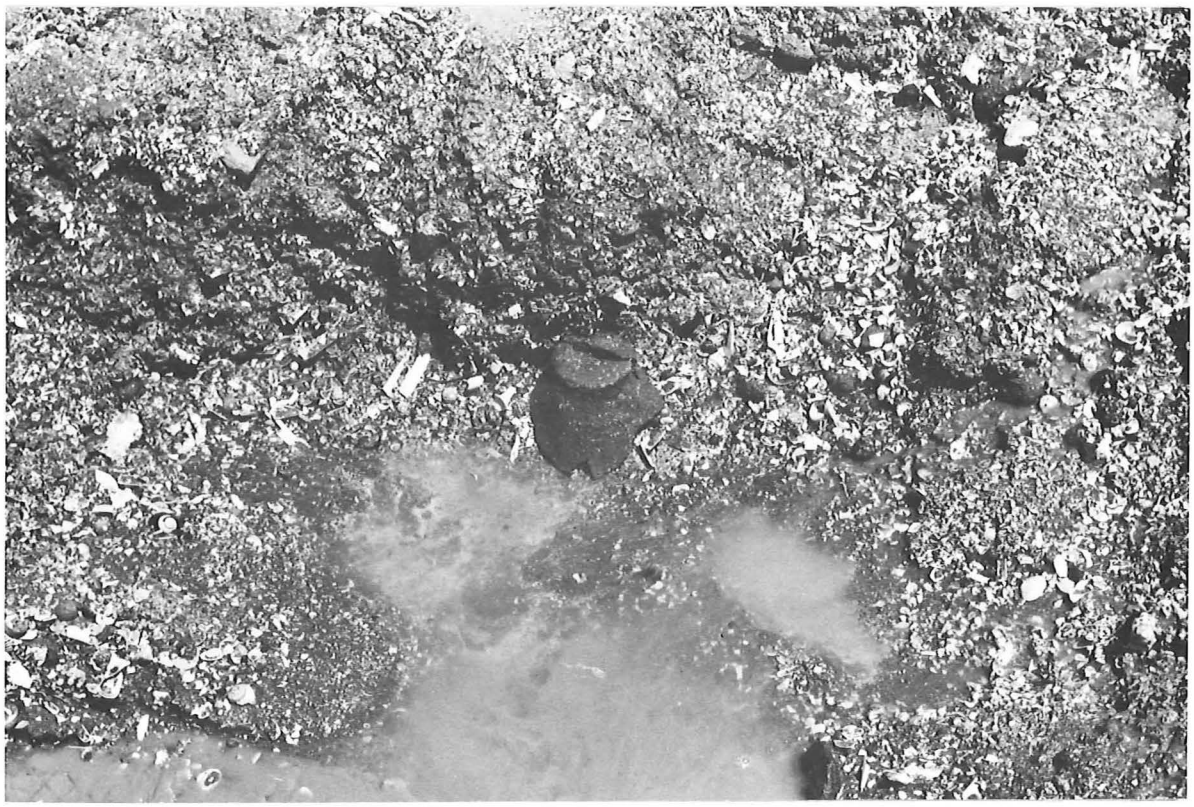
調査風景

調査風景

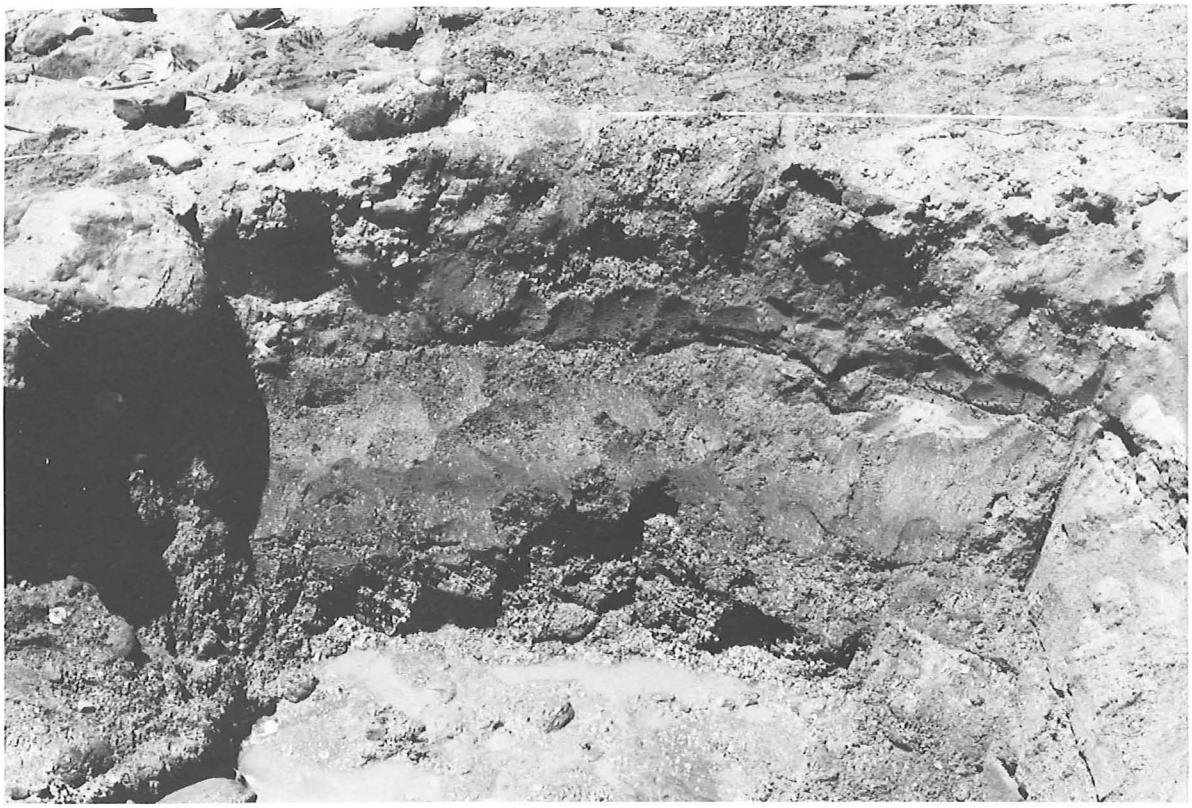
C—1区北壁



C—3区北壁



遺物出土状況（C－1区Ⅳ B 層）



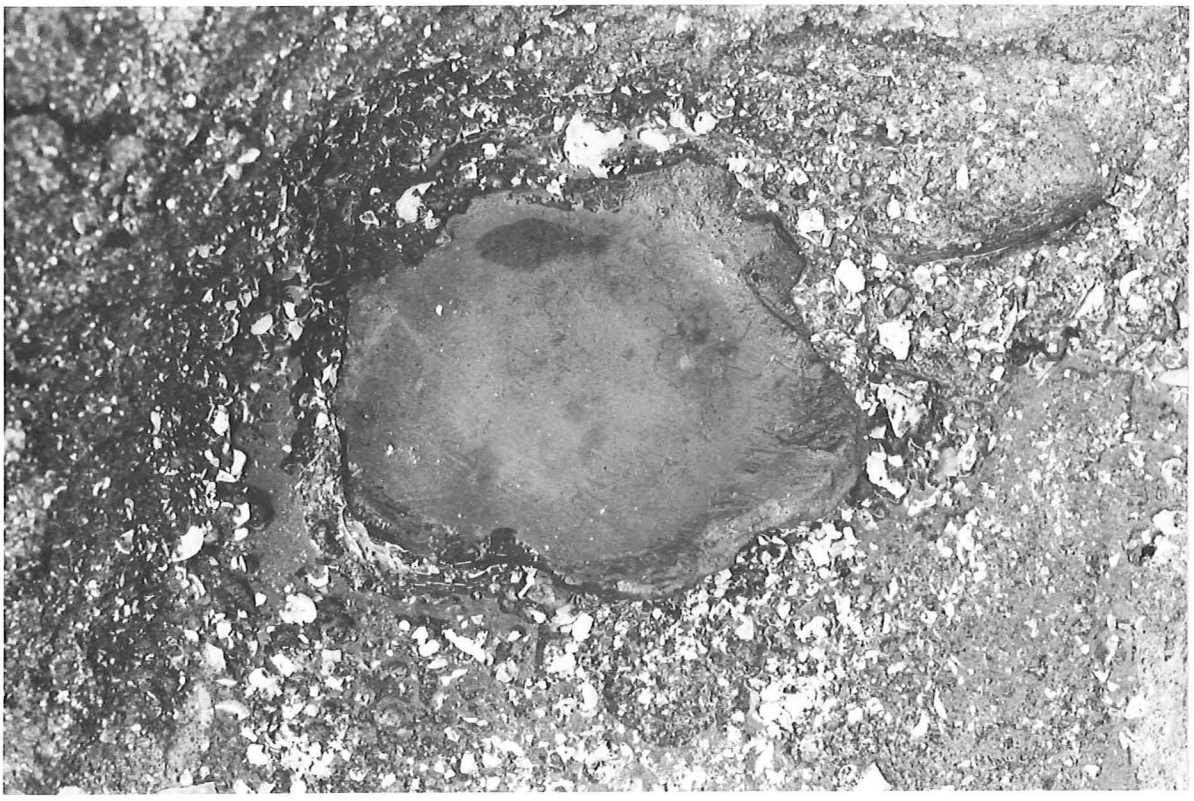
C—5 区北壁

C—4 区西壁

C—6区北壁

遺物出土状況（C—6区Ⅳ B層）

遺物出土状況（C—11区）

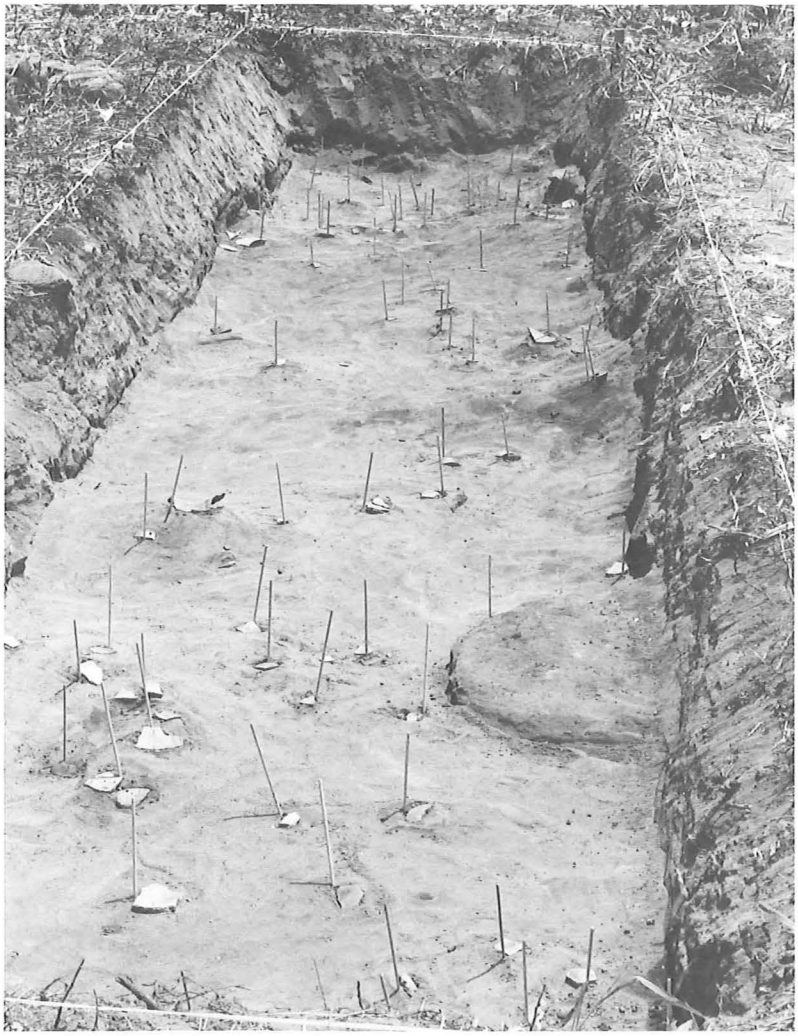


遺物出土状況（C—10区Ⅳ A層）

調査状況（C—11区）

調査状況（N区）

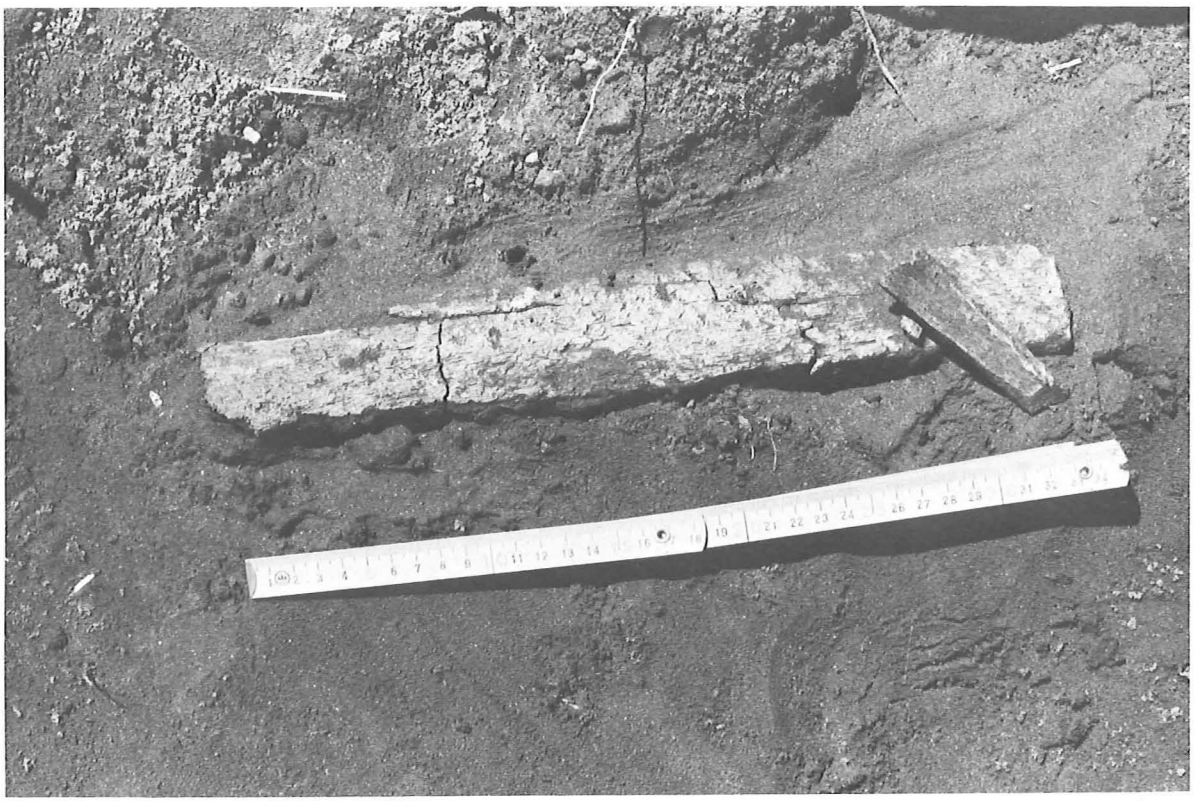
PL. 16



L区遺物出土状況

L区西壁

獣骨出土状況（L区）



骨角器出土状況（L区）

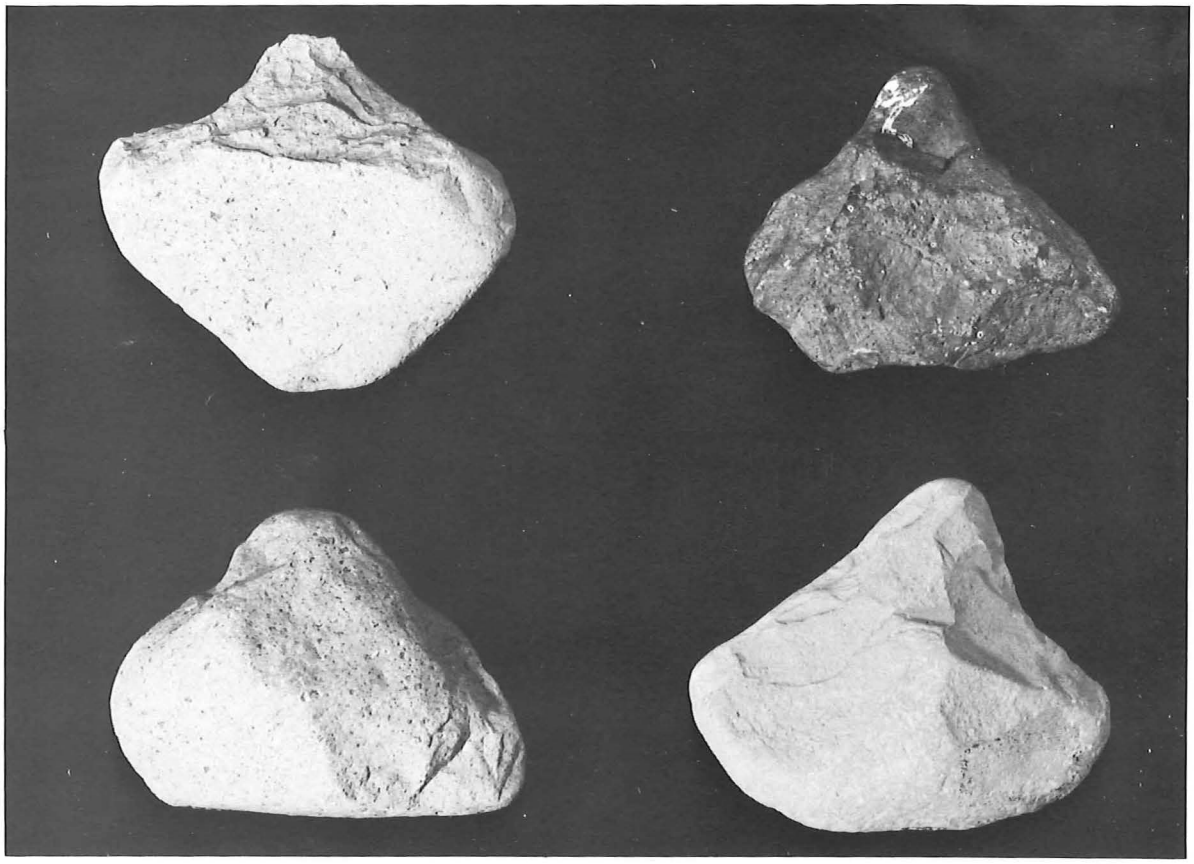
M区炉址（南側から）

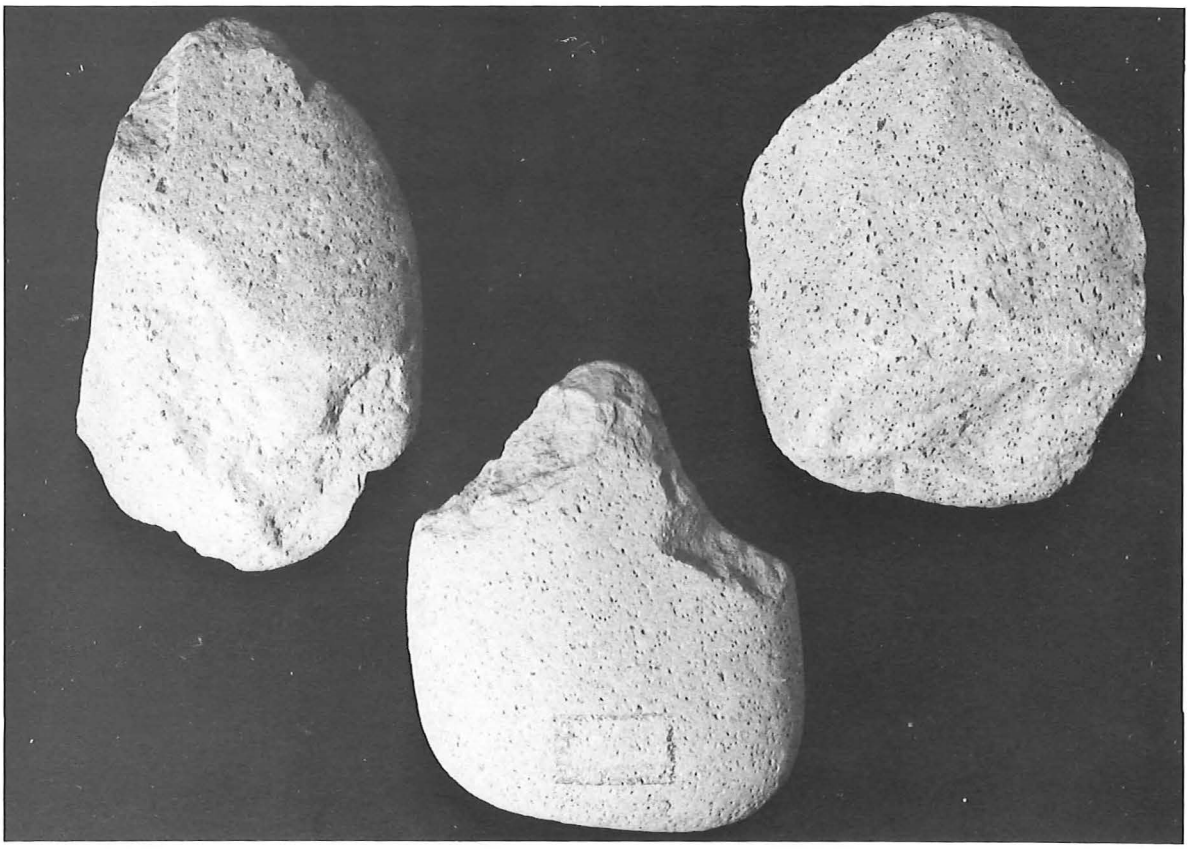
M区西壁

炉址出土状況

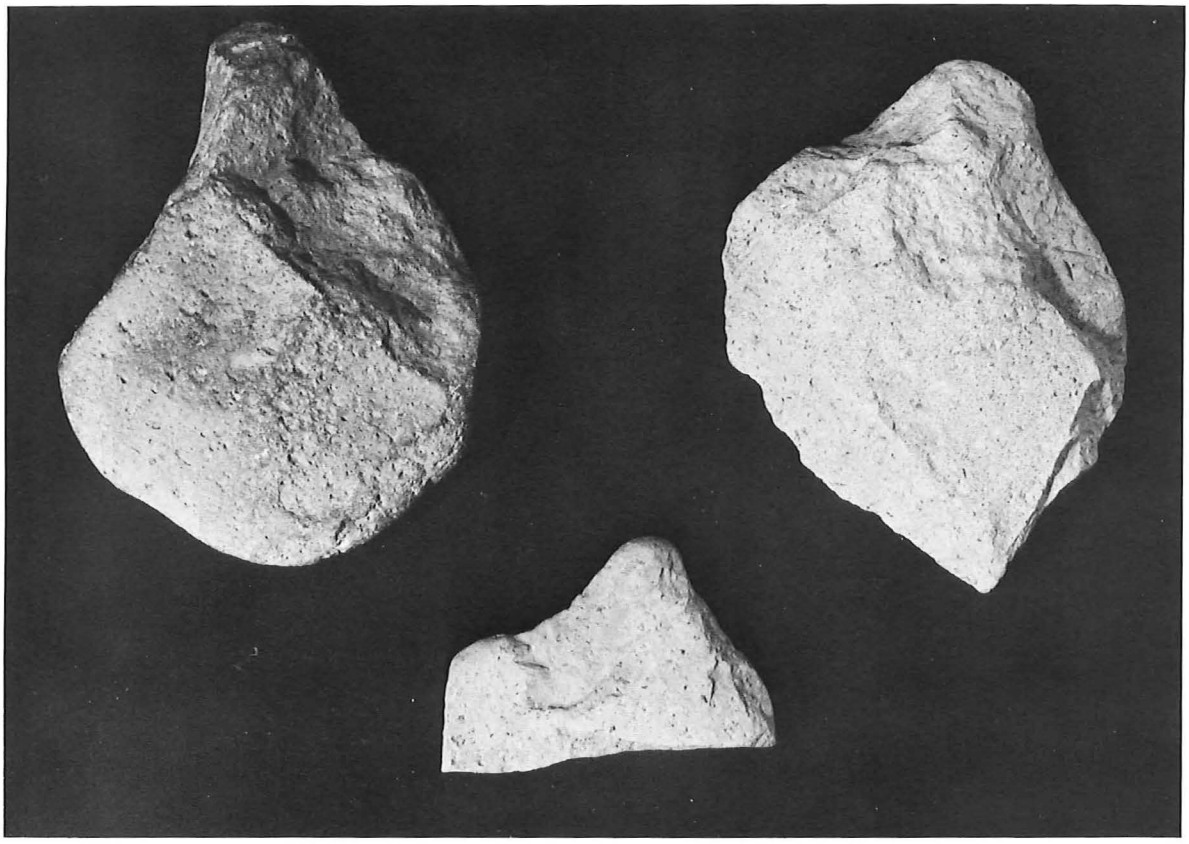
炉址附近の遺物

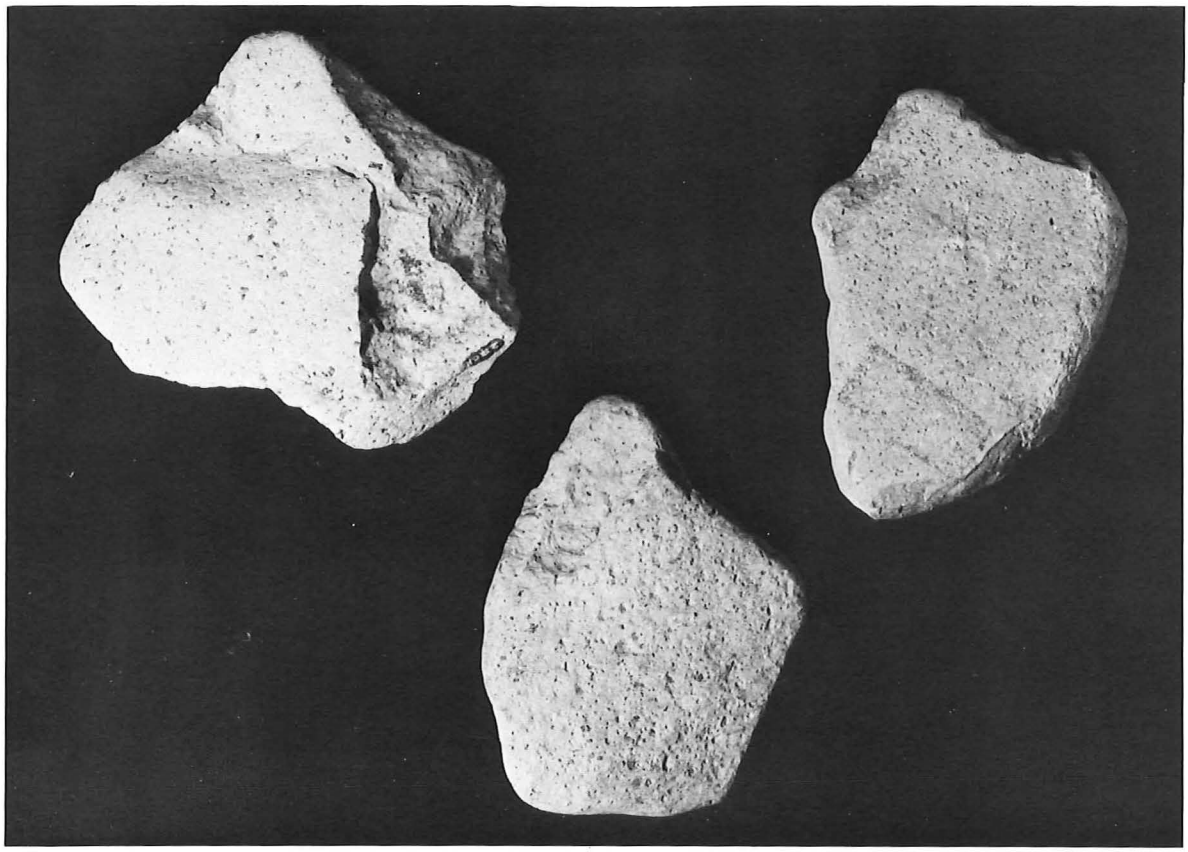
第 2 地点遺物出土状況



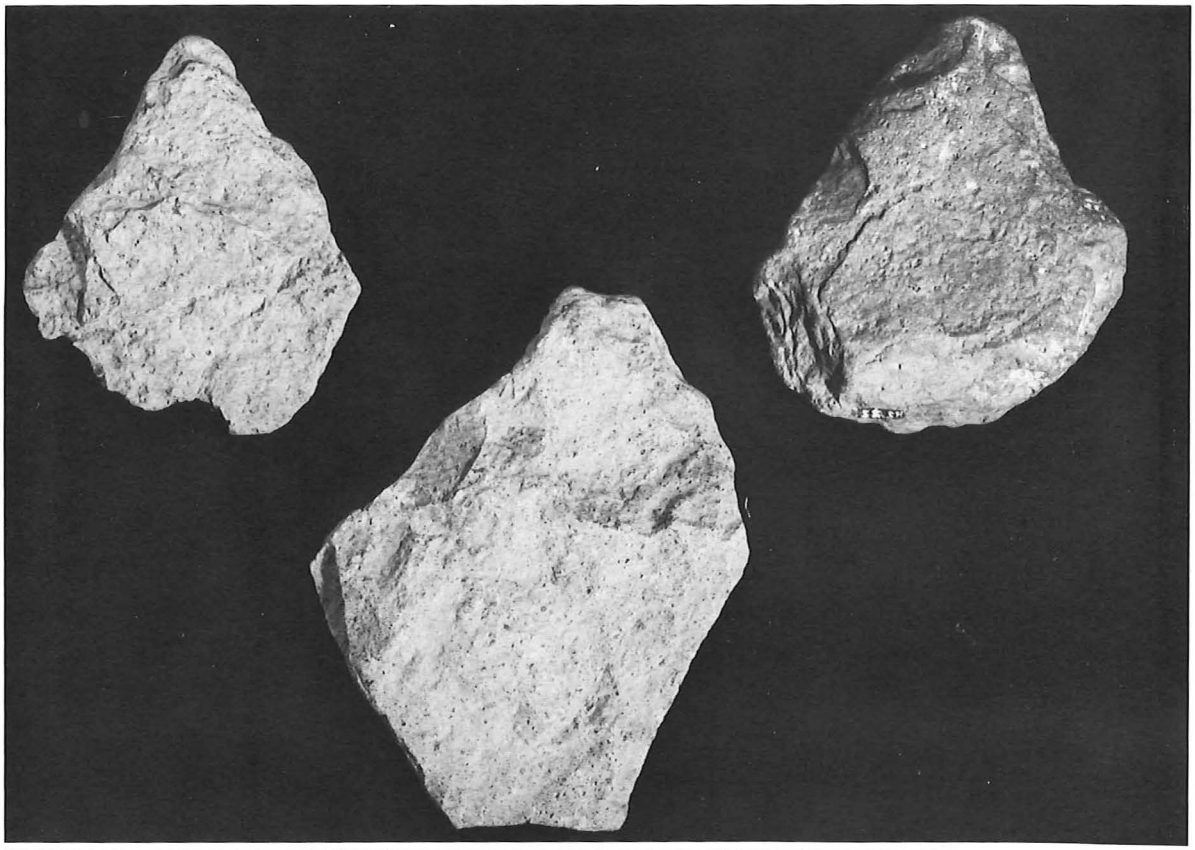


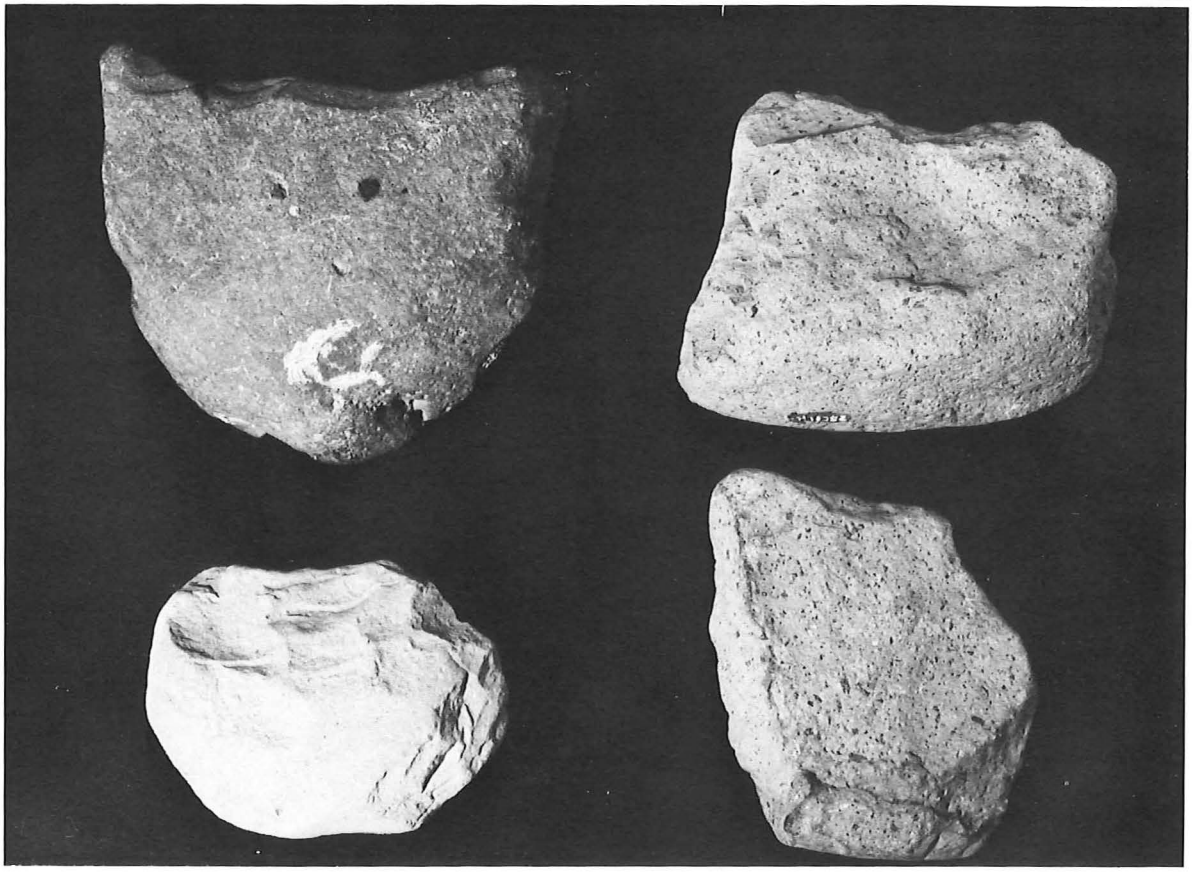
礫器① (1 / 2)



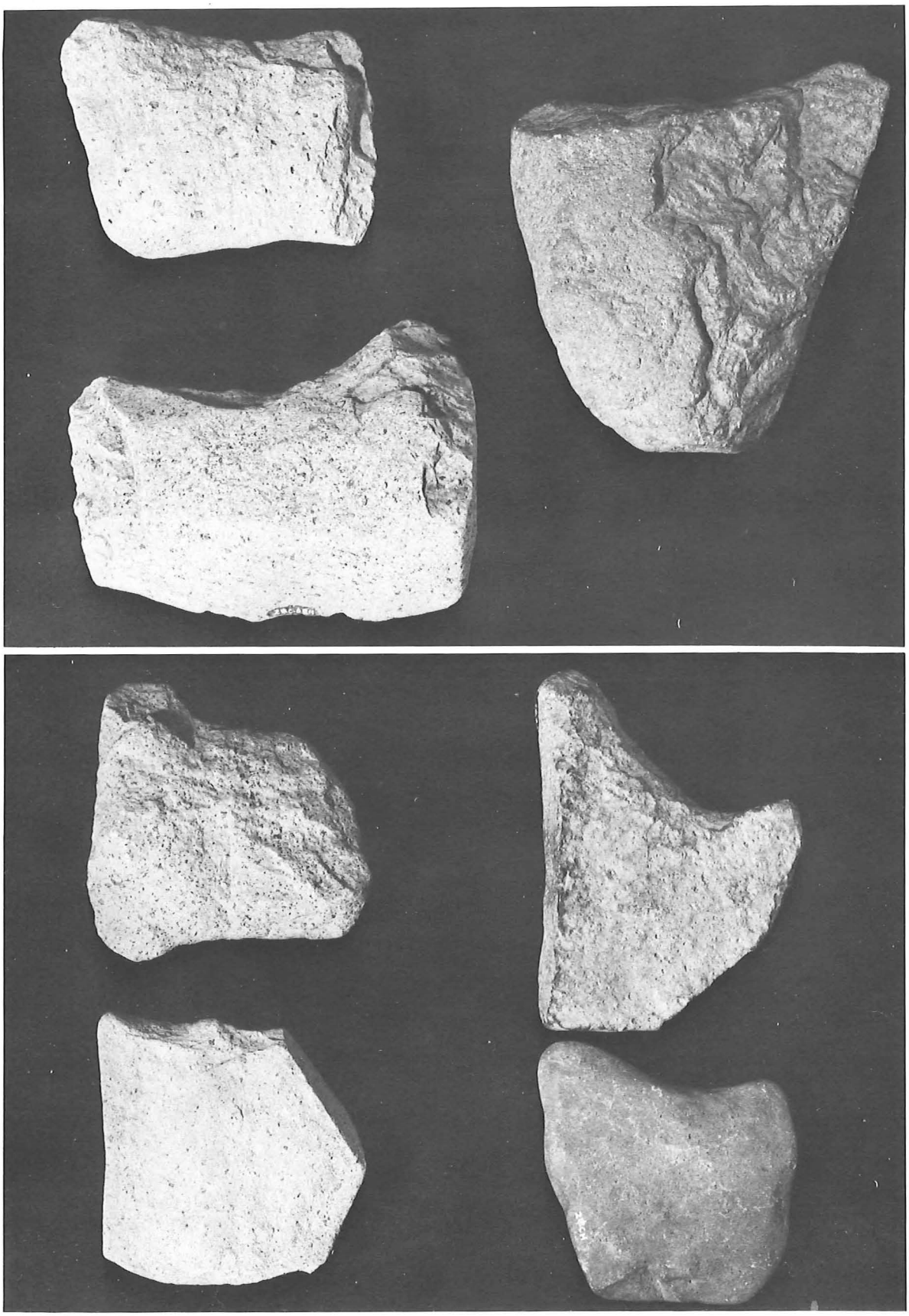


礫器② (1 / 2)

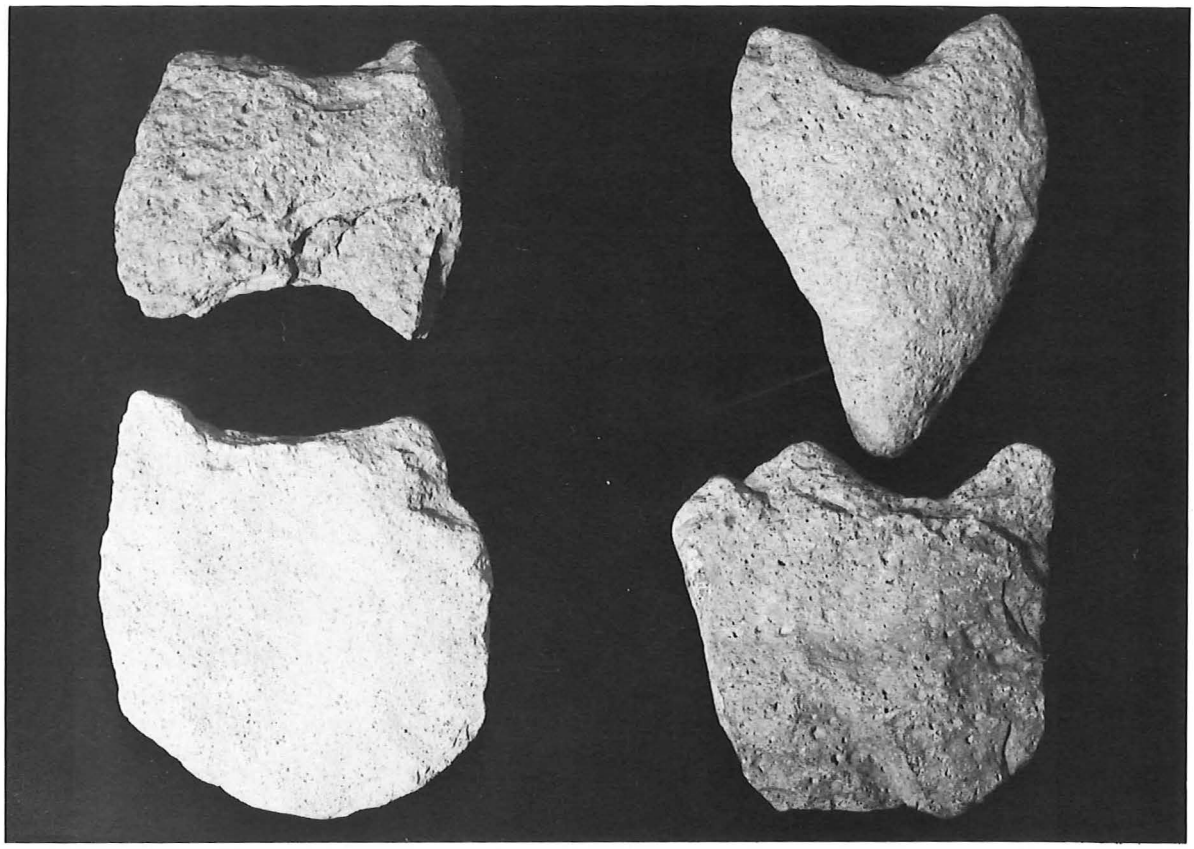


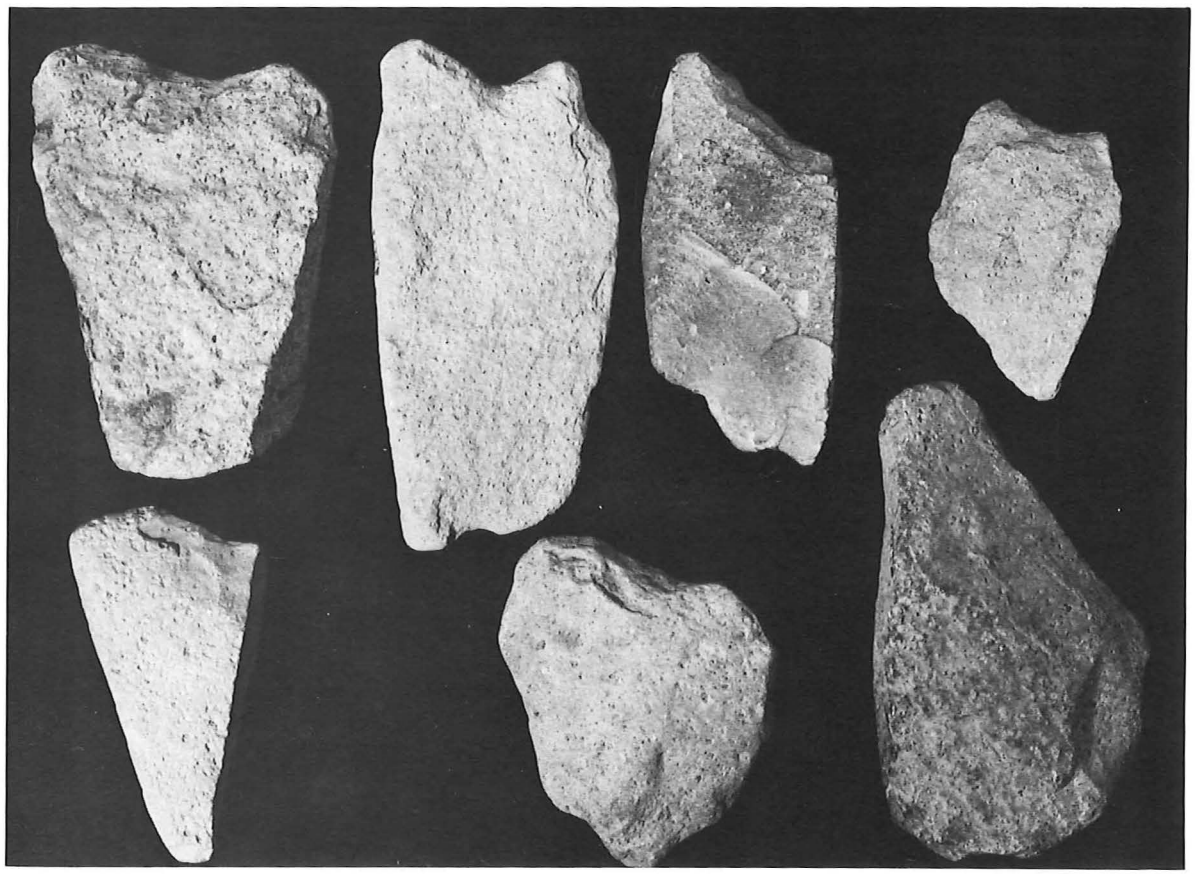


礫器③（1 / 2）

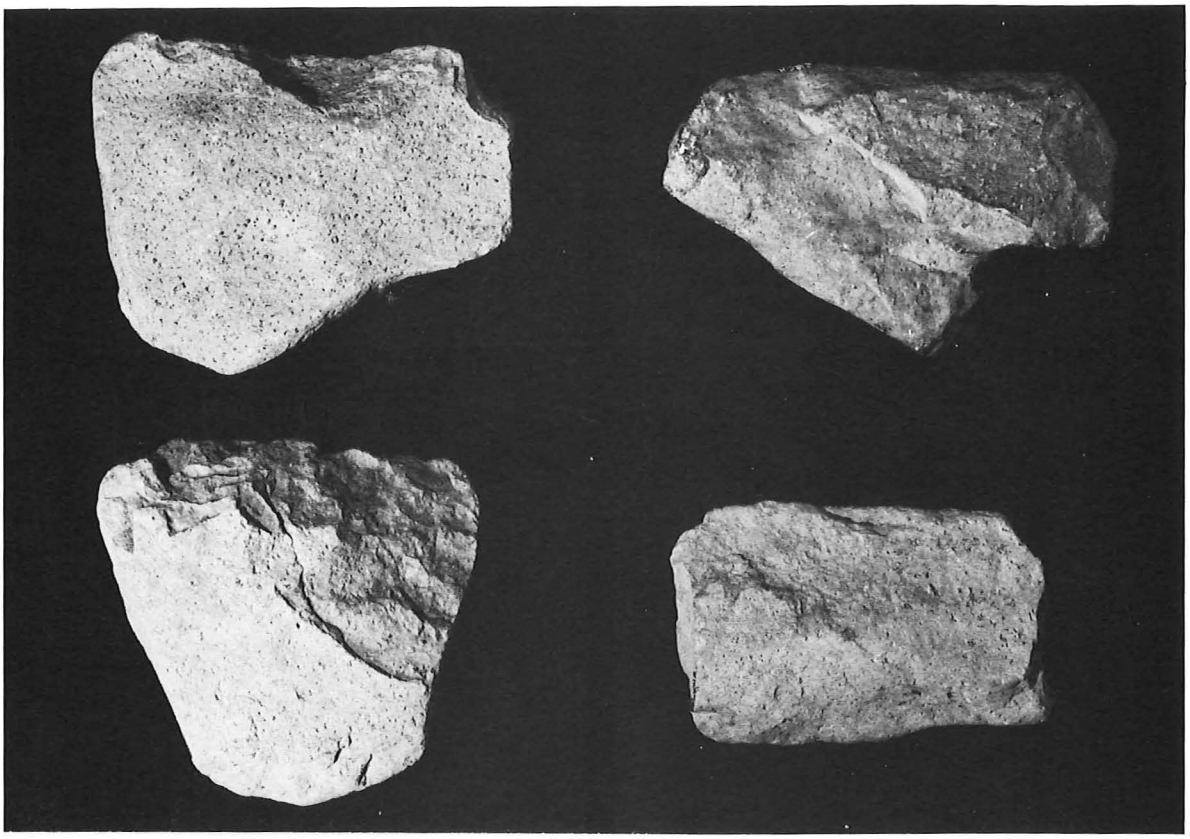


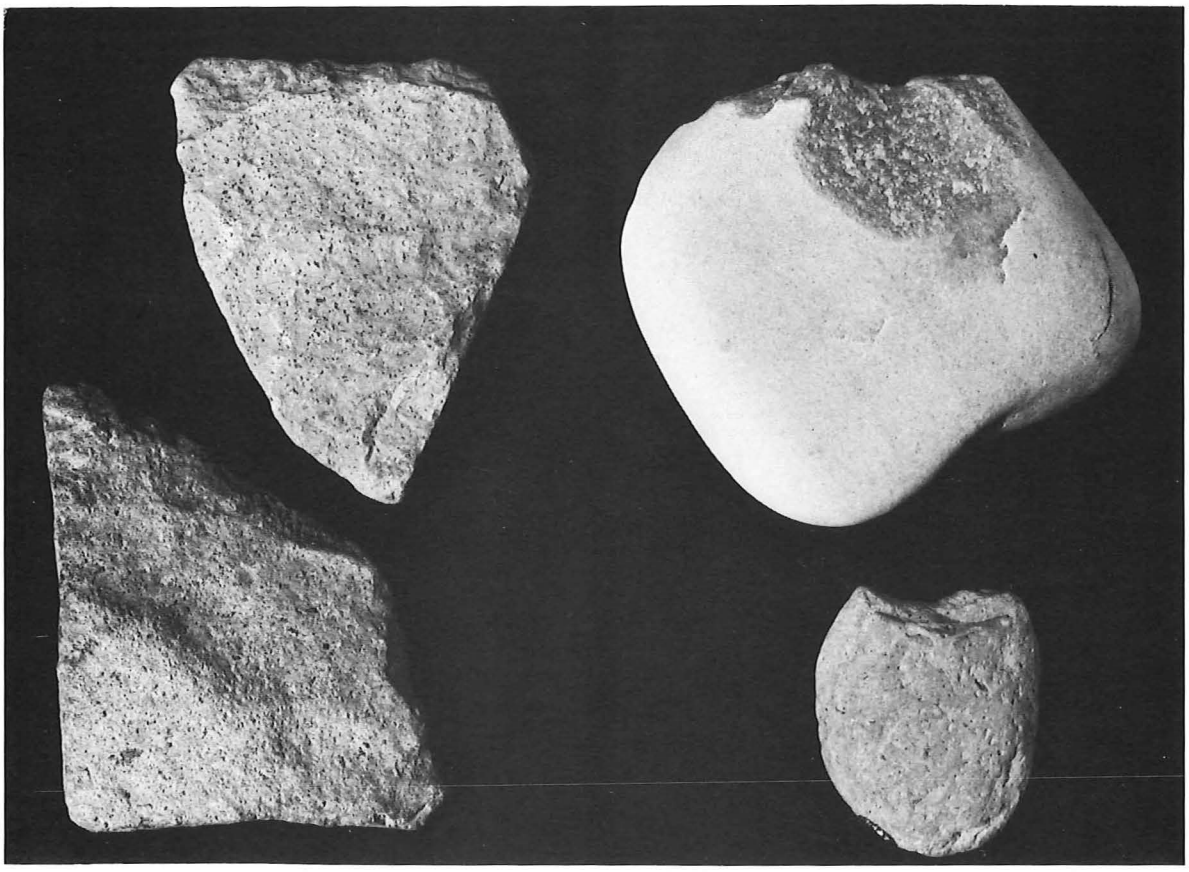
礫器④（1 / 2）



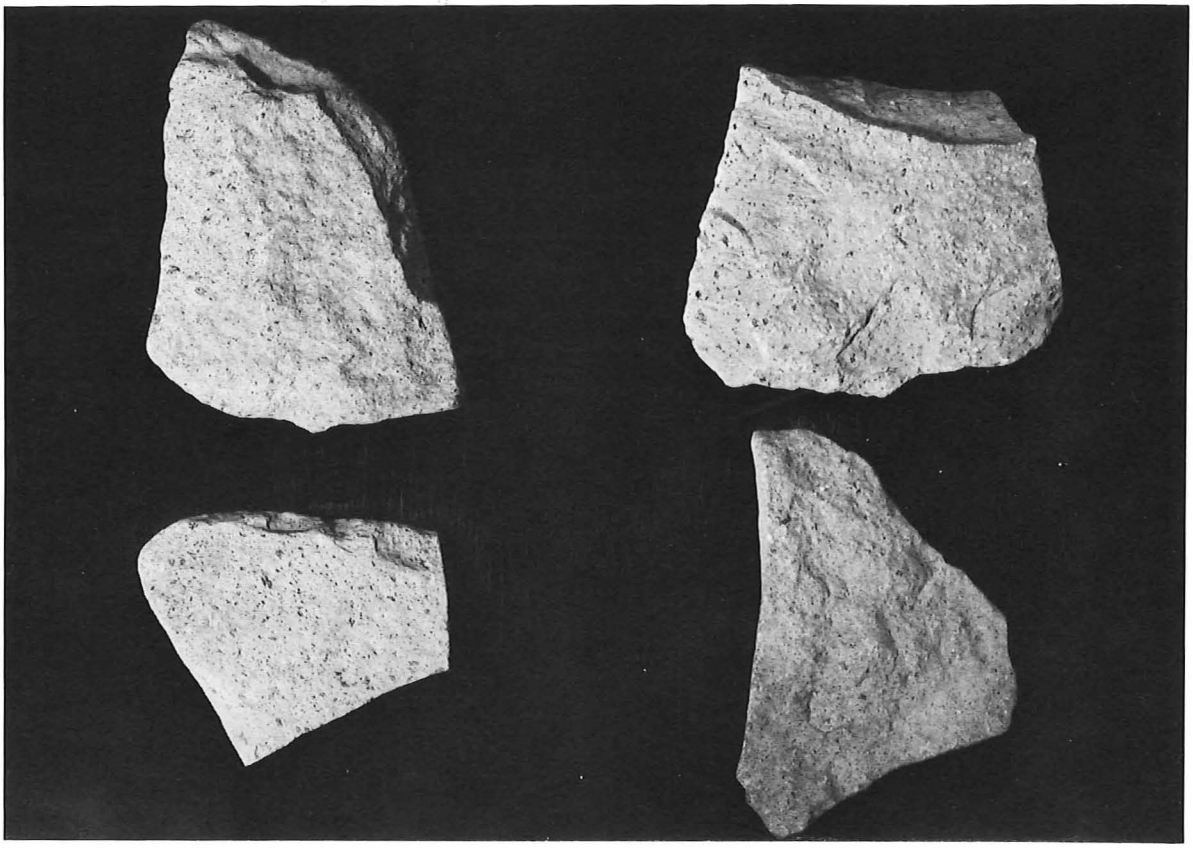


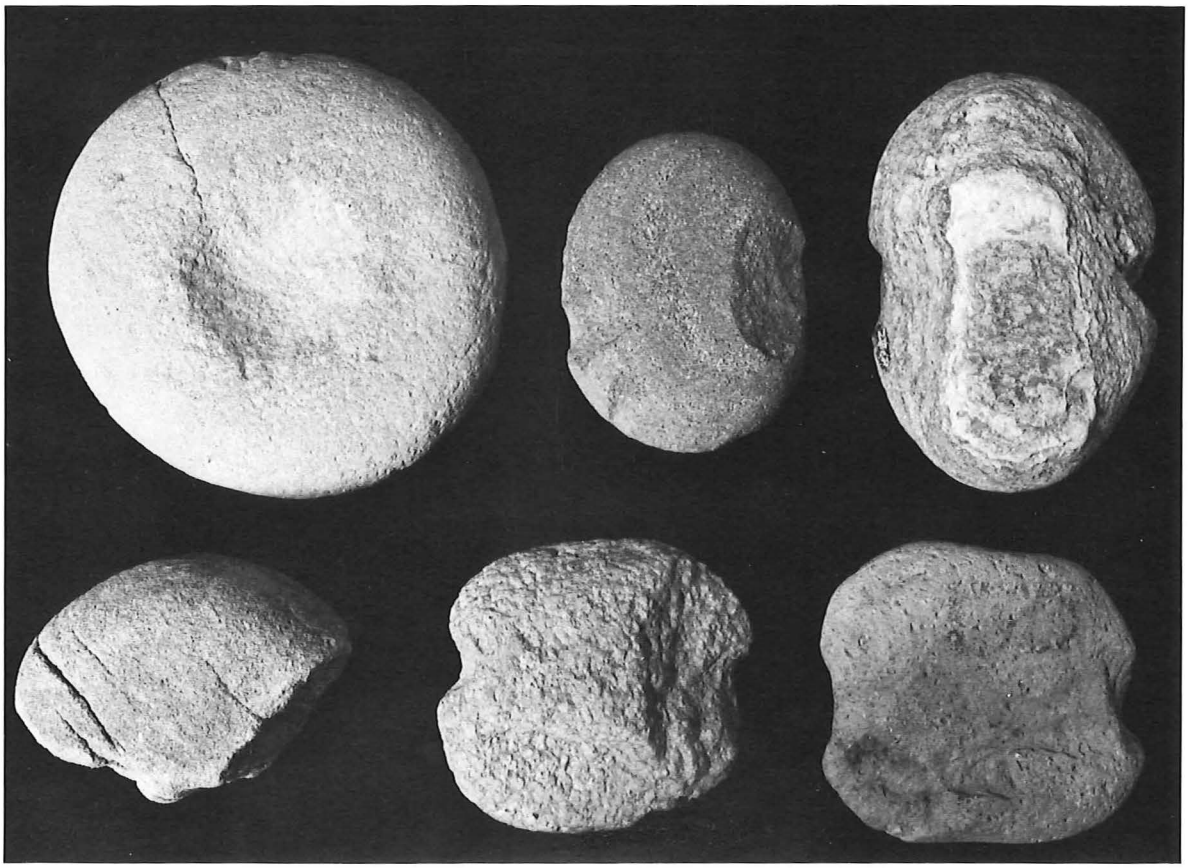
礫器⑤（1 / 2）



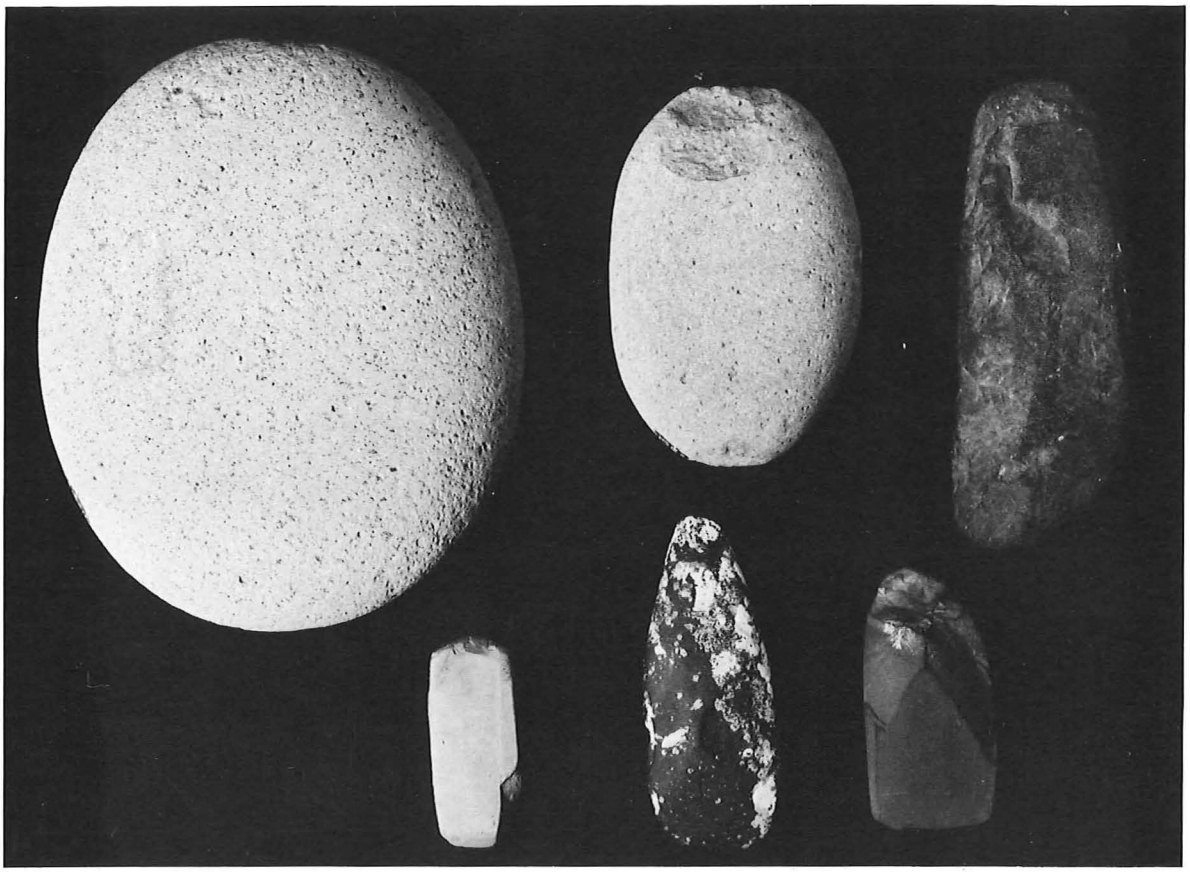


礫器⑥（1 / 2）

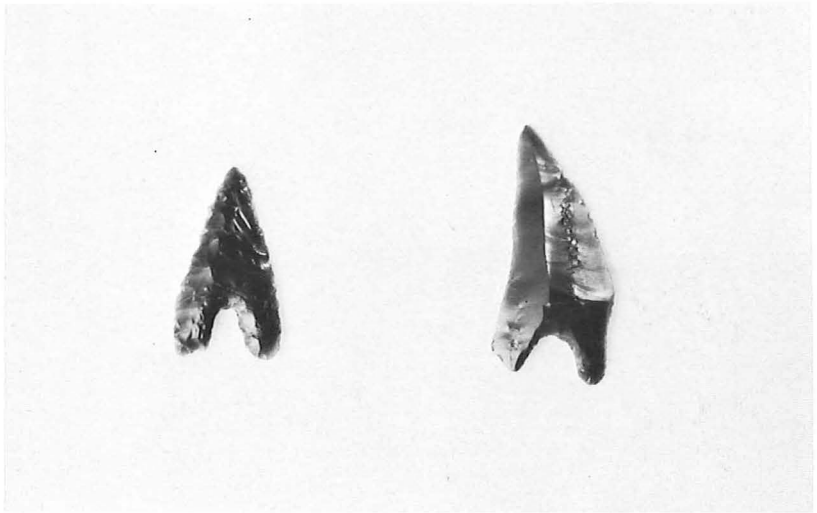




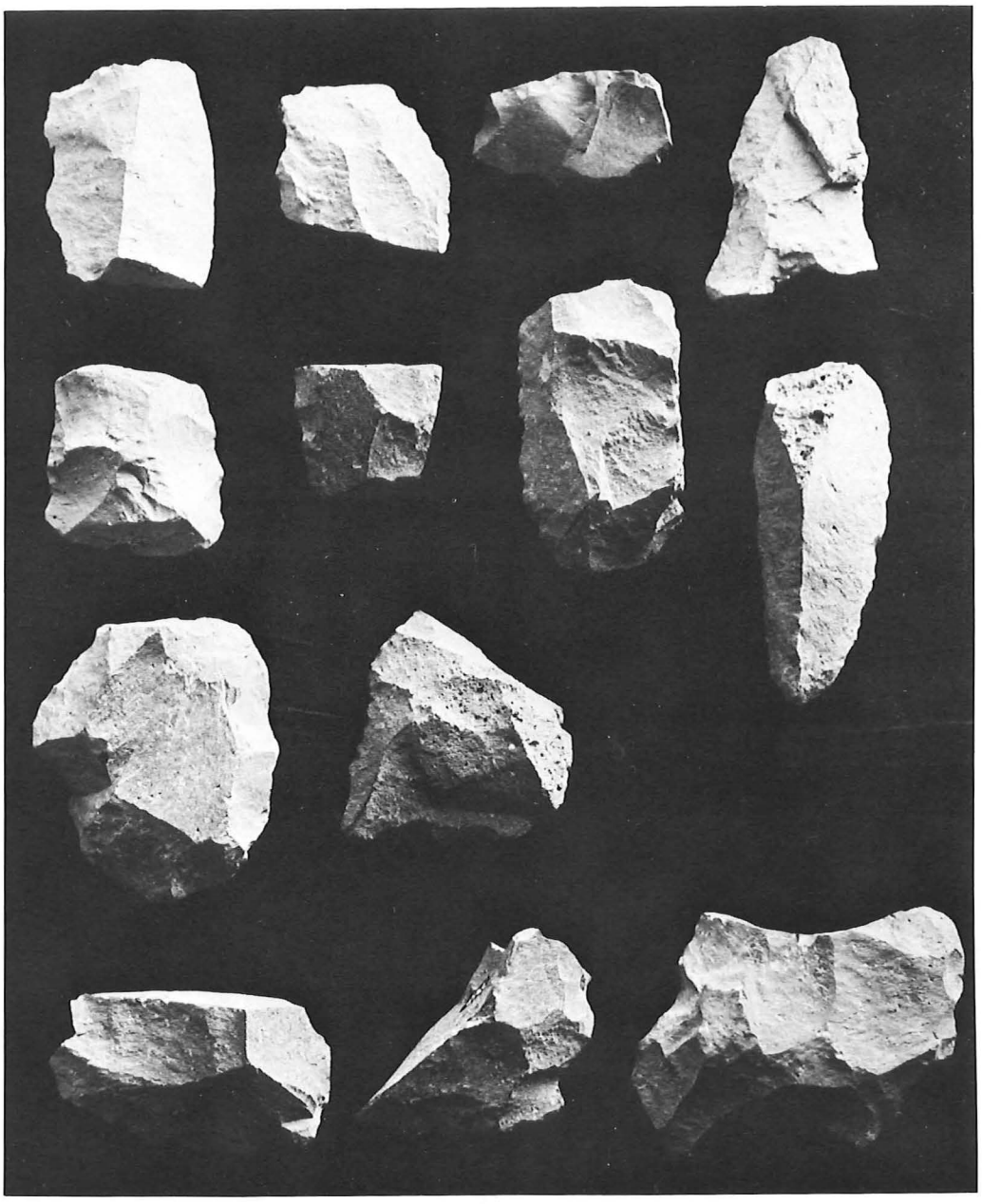
(上) 礫器⑦ (1/2) その他の石器 (1/2)



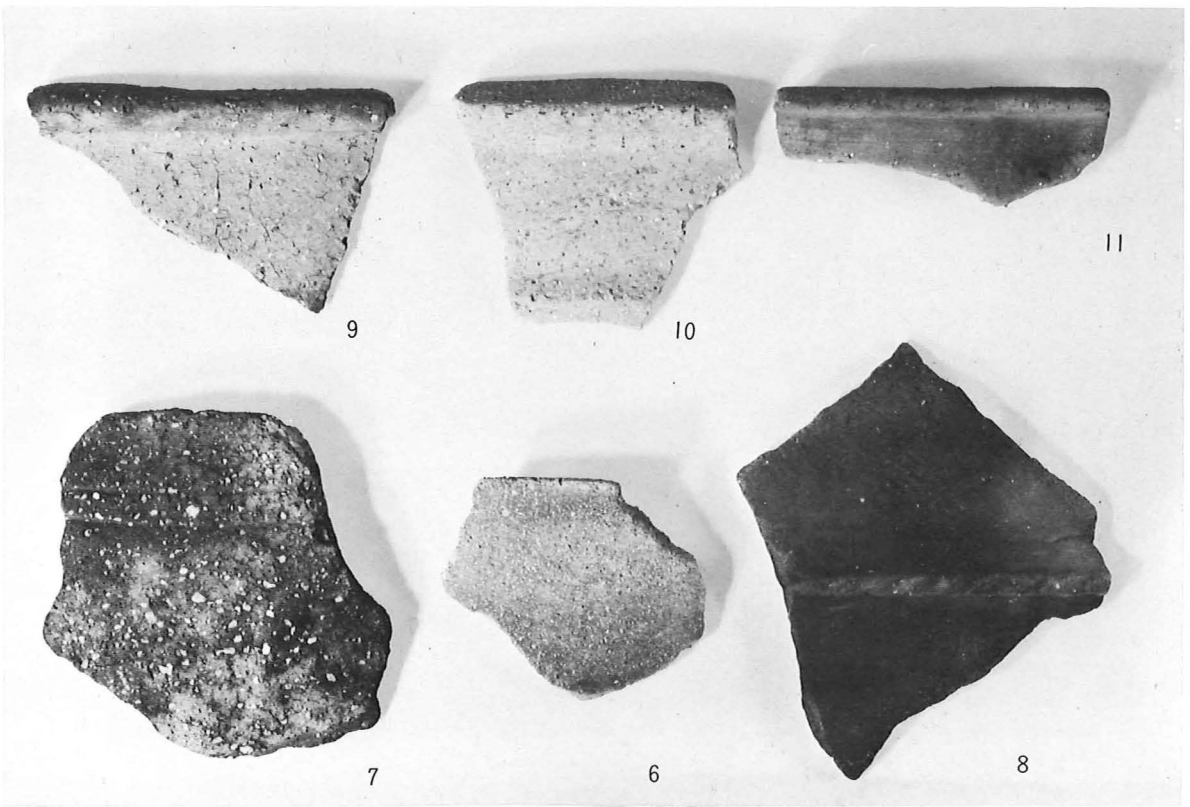
その他の石器（1 / 2）



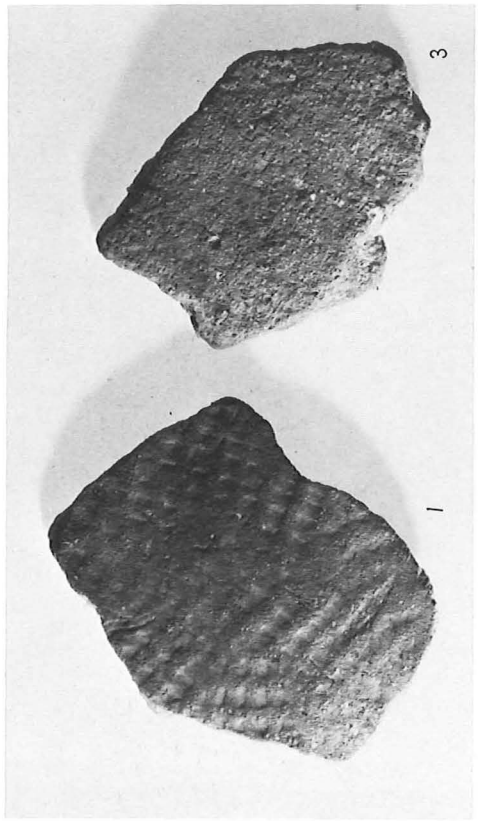
石鏃（1 / 1）

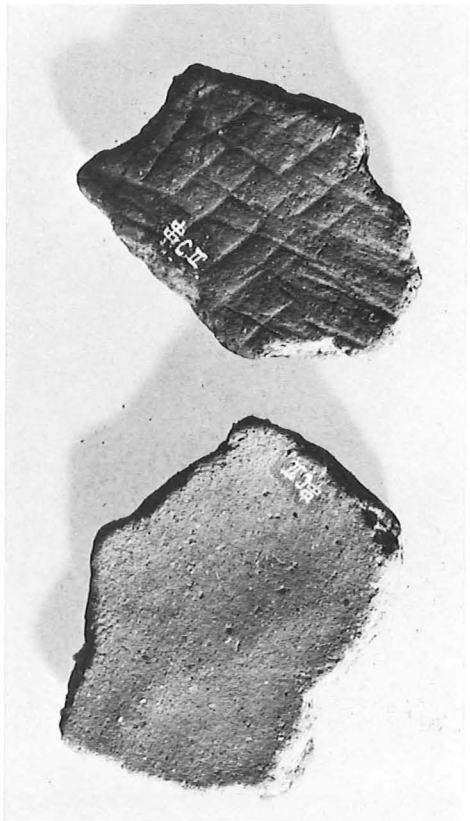


剝片石器(1/2)

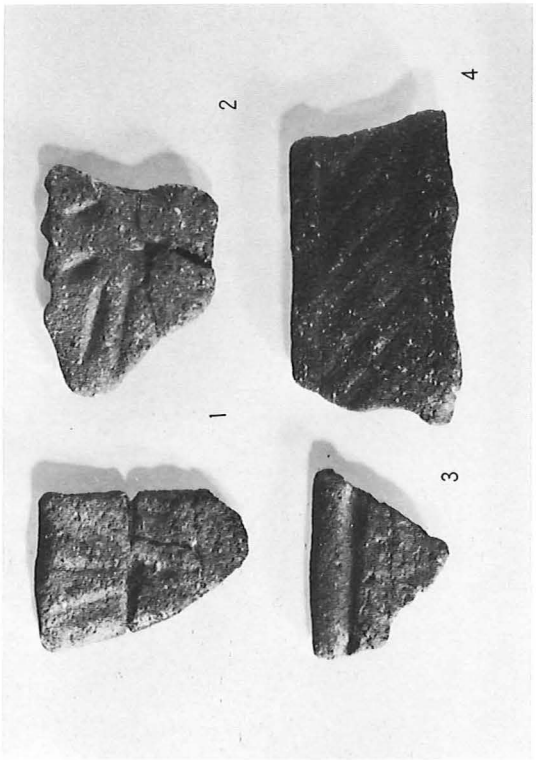


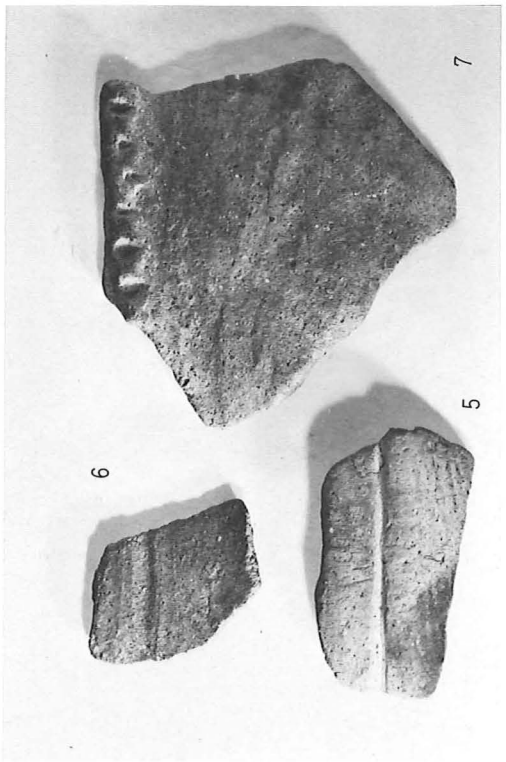
C・D区出土土器① (1 / 2)

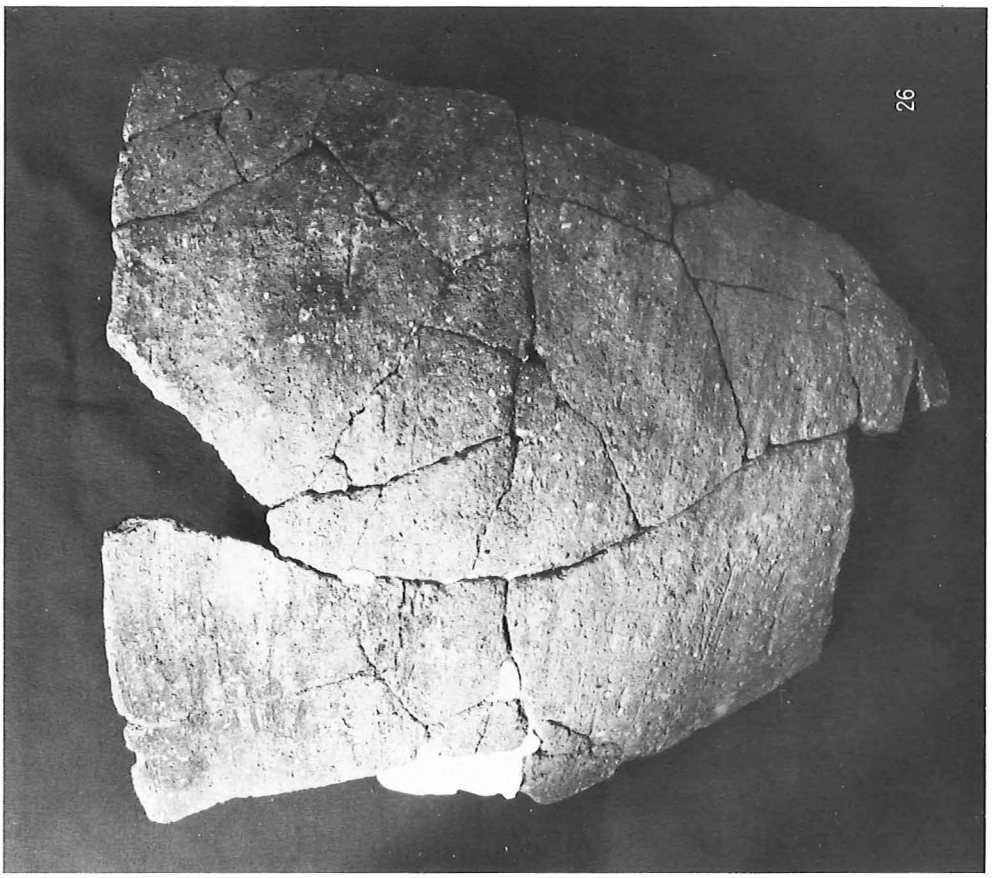




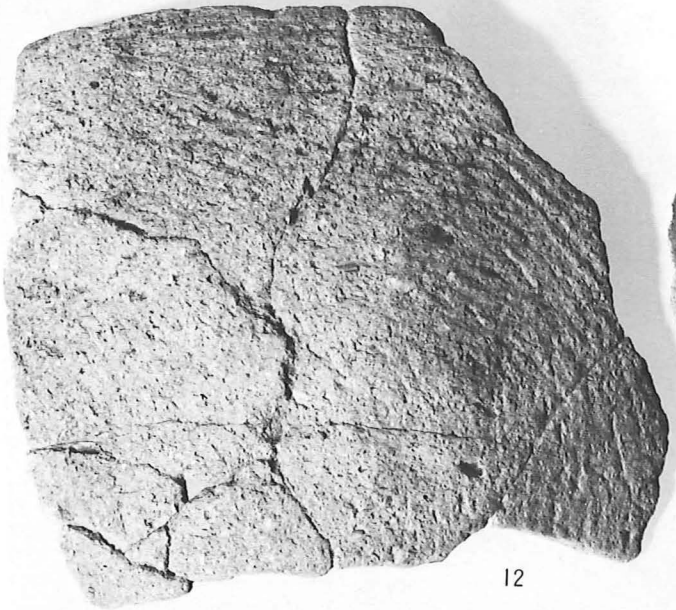
C・D区出土土器②（1／1）







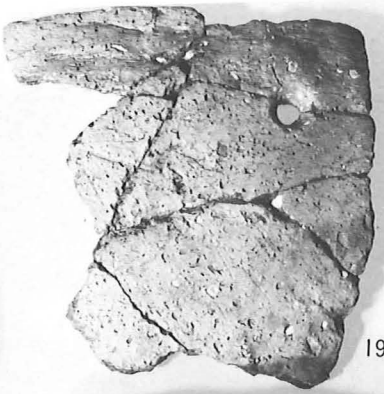
C区出土土器① (1/2) 26 (1/3)



12

15

16

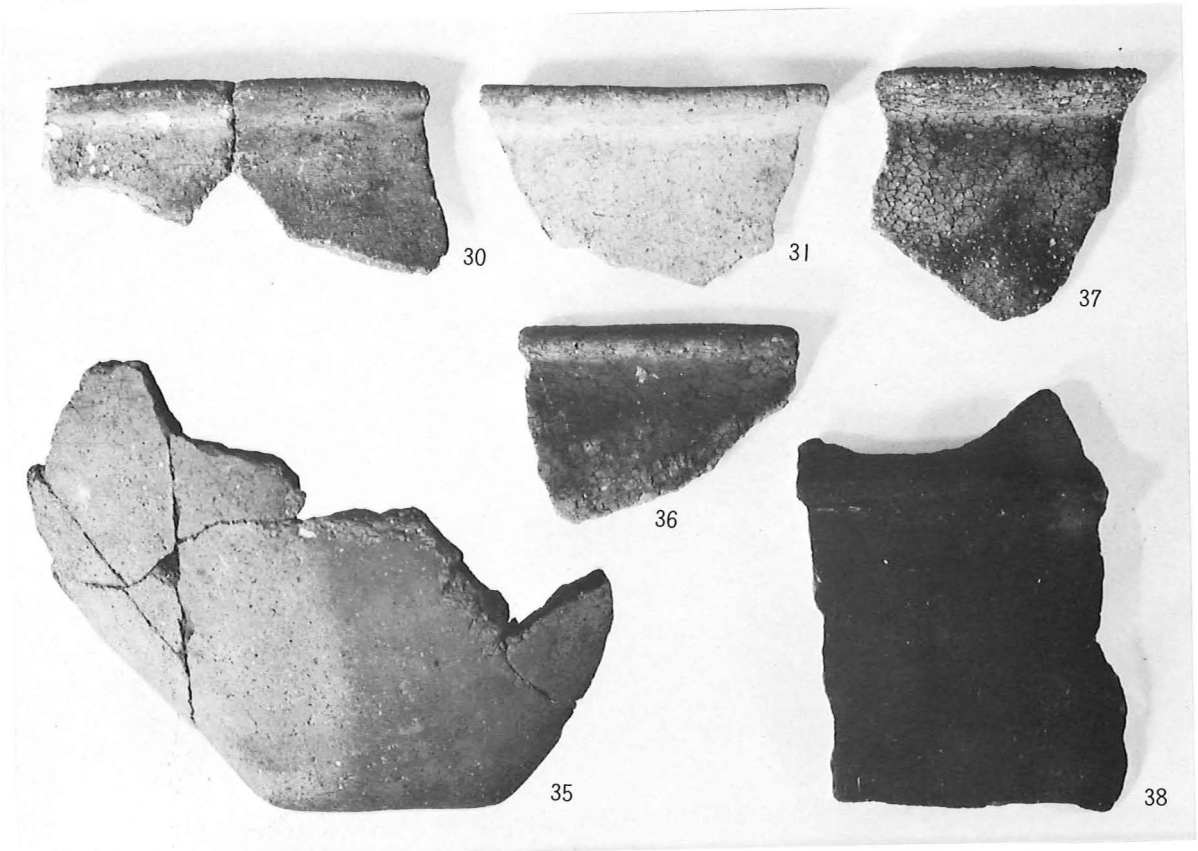


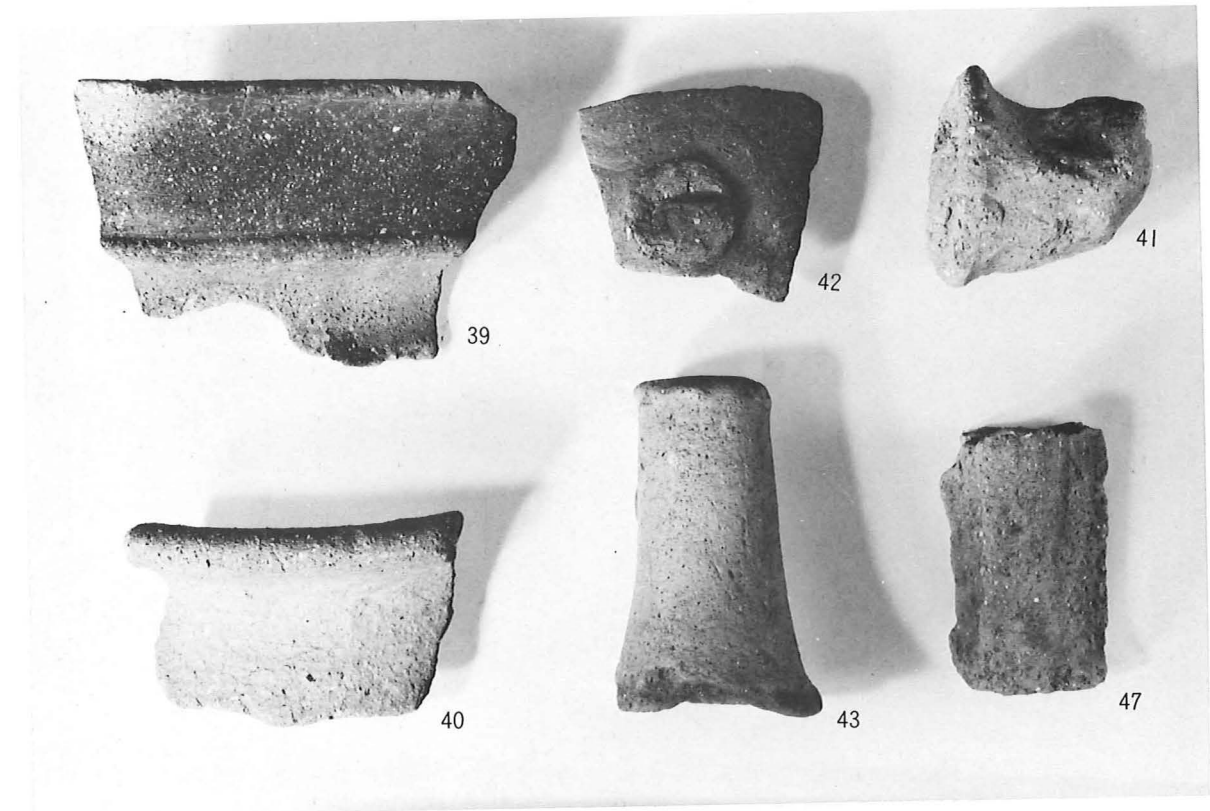
19

18

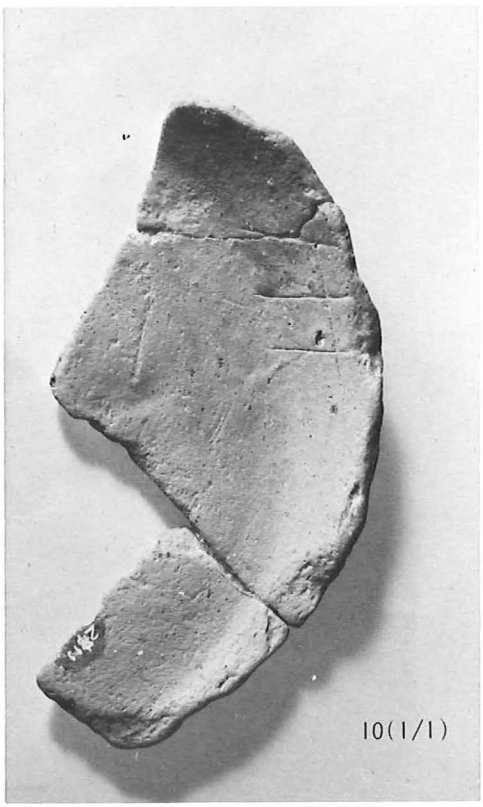
24

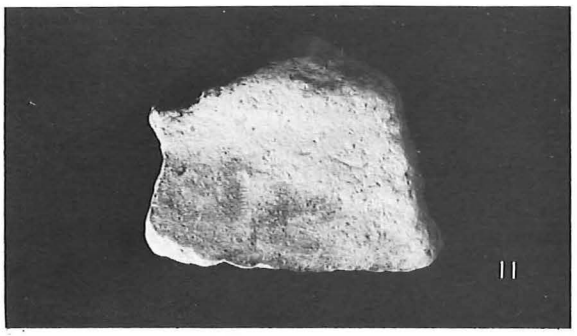
C区出土土器②

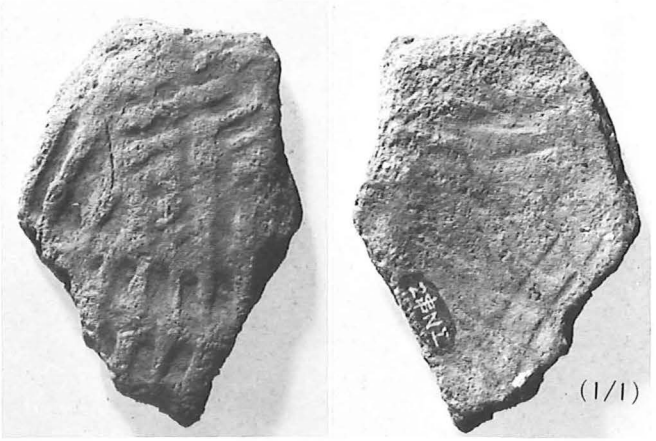




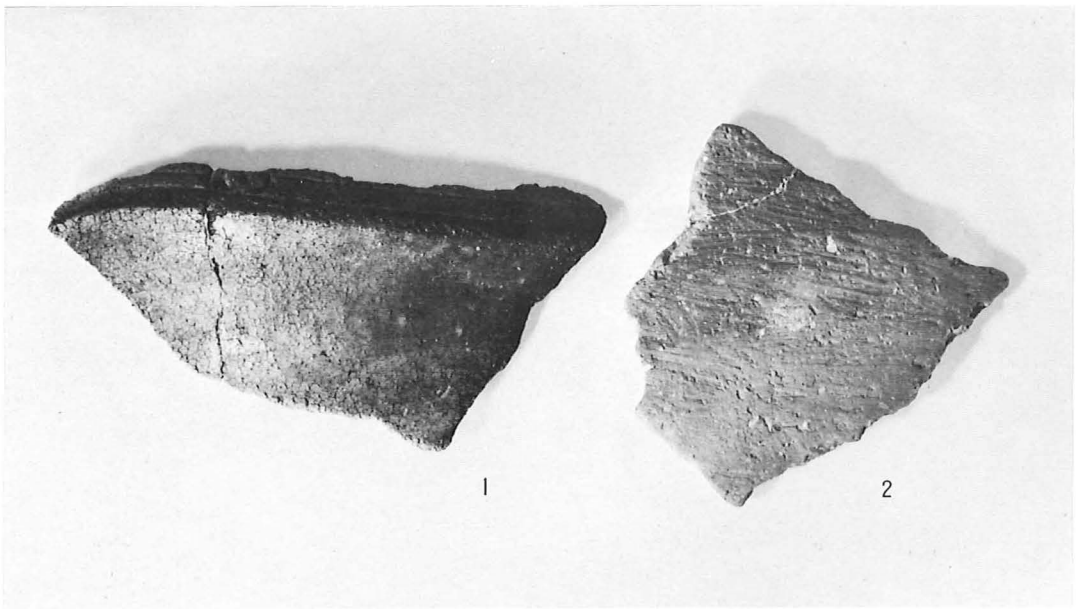
C区出土土器③（1 / 2）



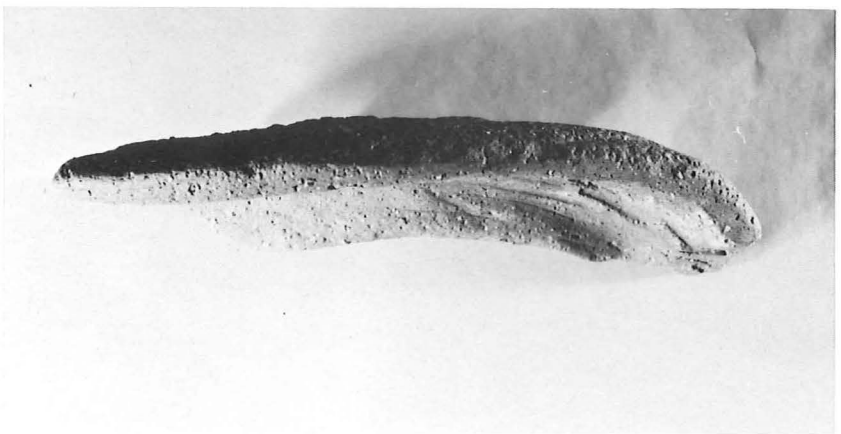




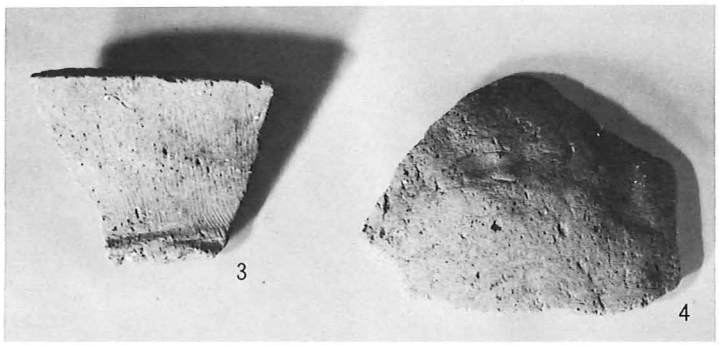
N区出土土器（1 / 2）

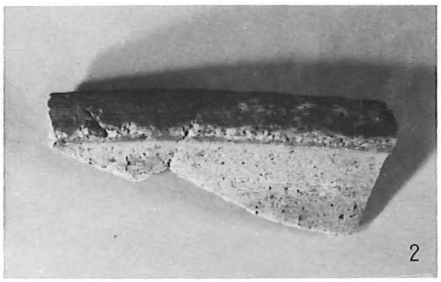


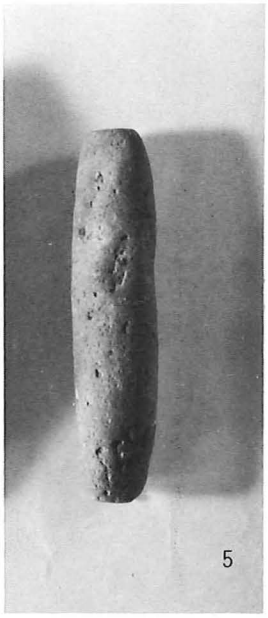
I区出土土器
(1/2)



A区付近出土土器
(1/2)

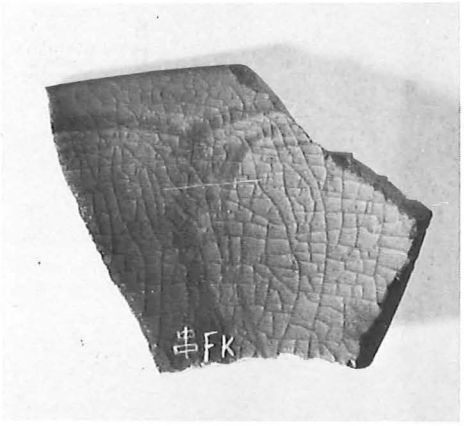


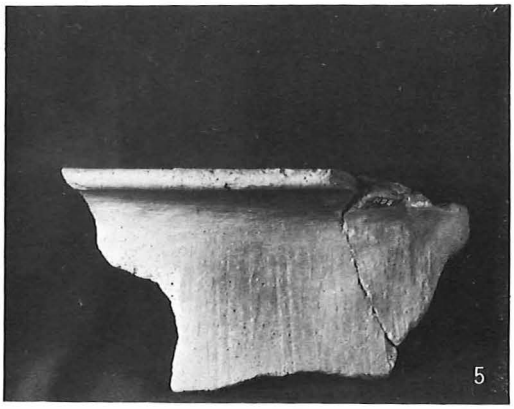


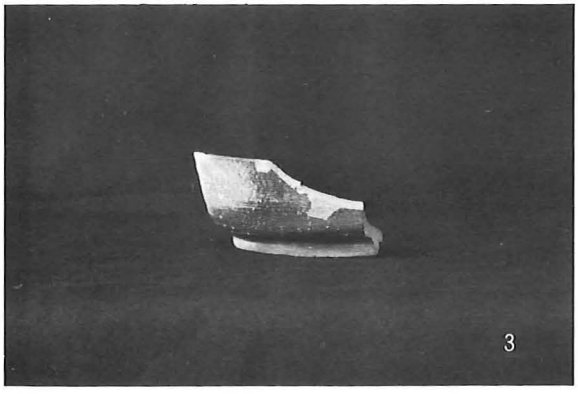


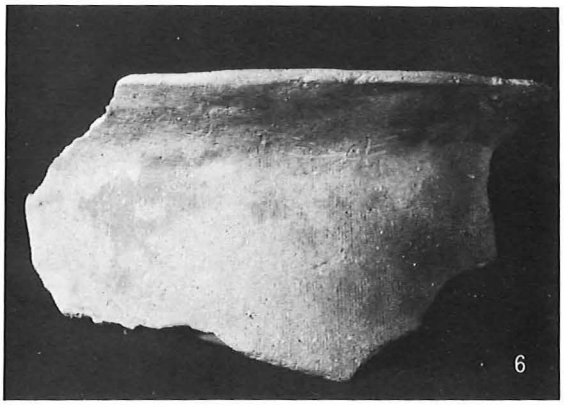
E区出土2～4 (1/2)
5 (1/1)

F区出土 (1/2)

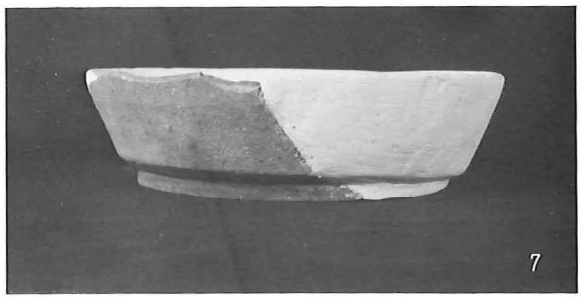


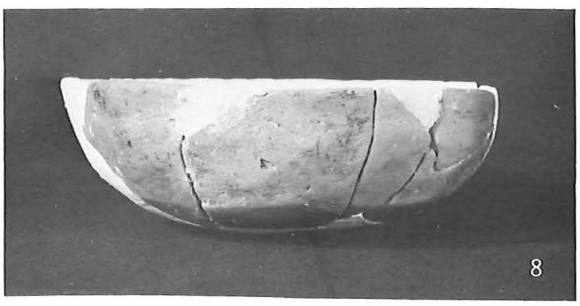


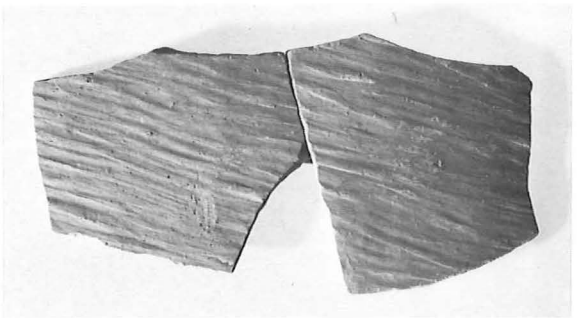


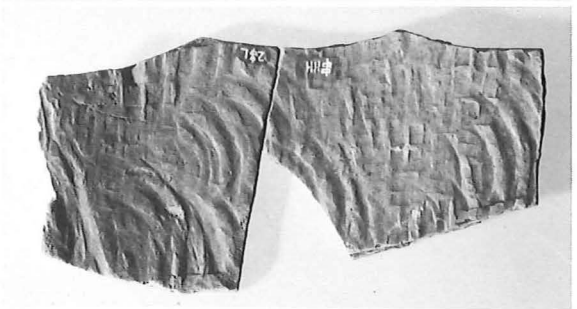


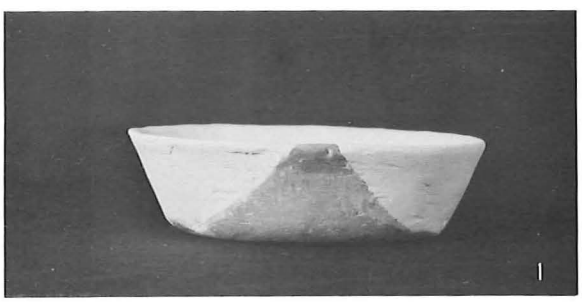
G区出土土器（1 / 3）

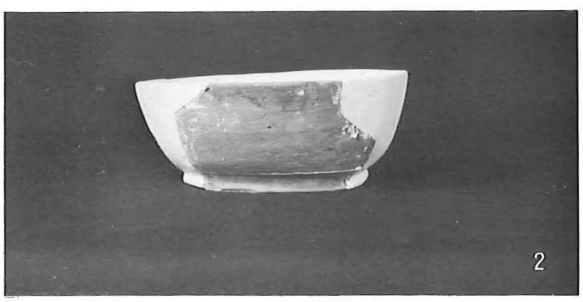




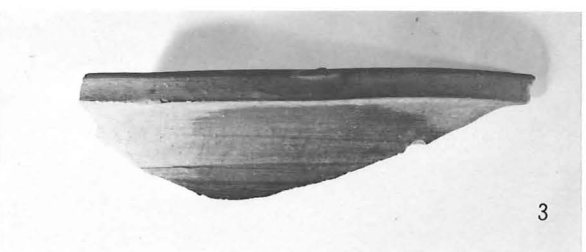


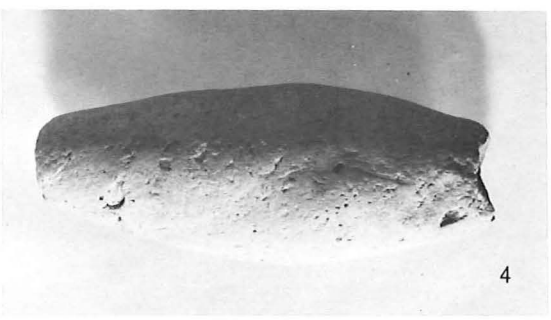






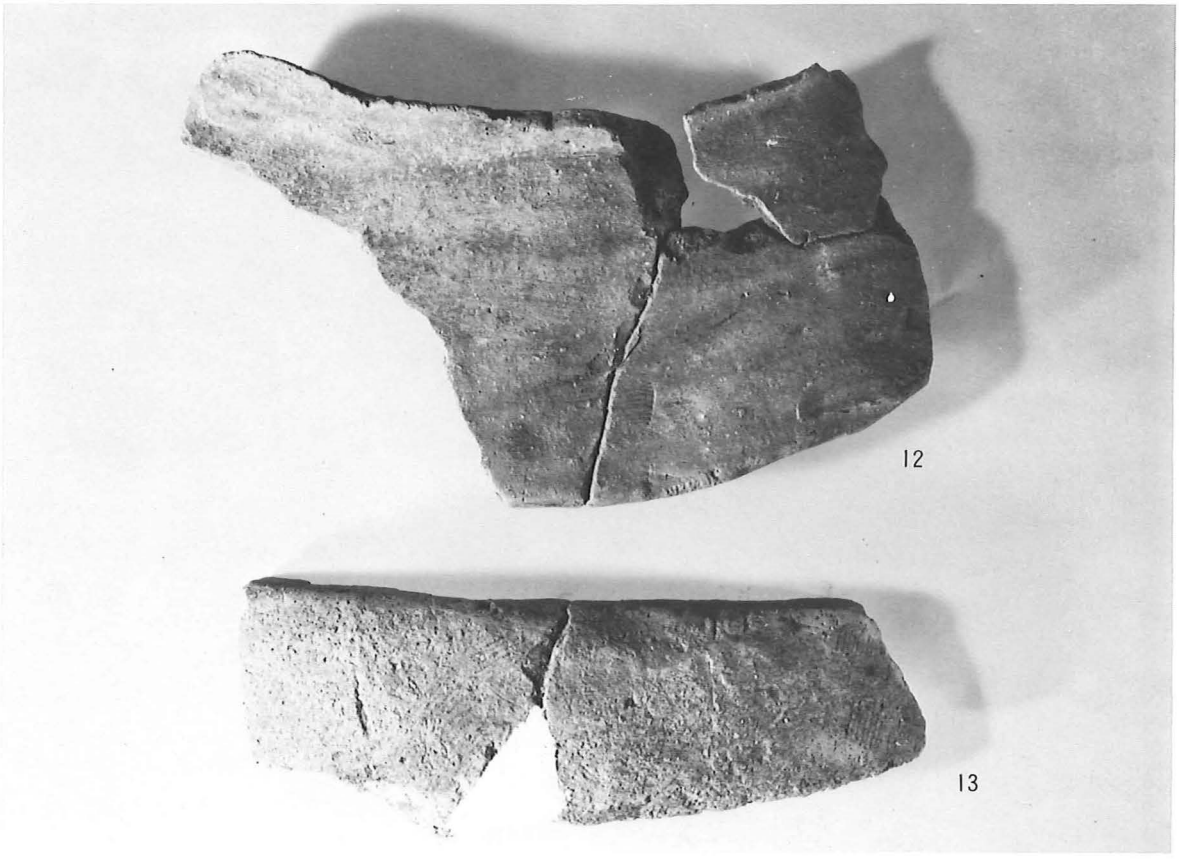
H区出土土器①6～8（1/3）（1／2）





K区出土土器1～3（1／3） 4（1／1）

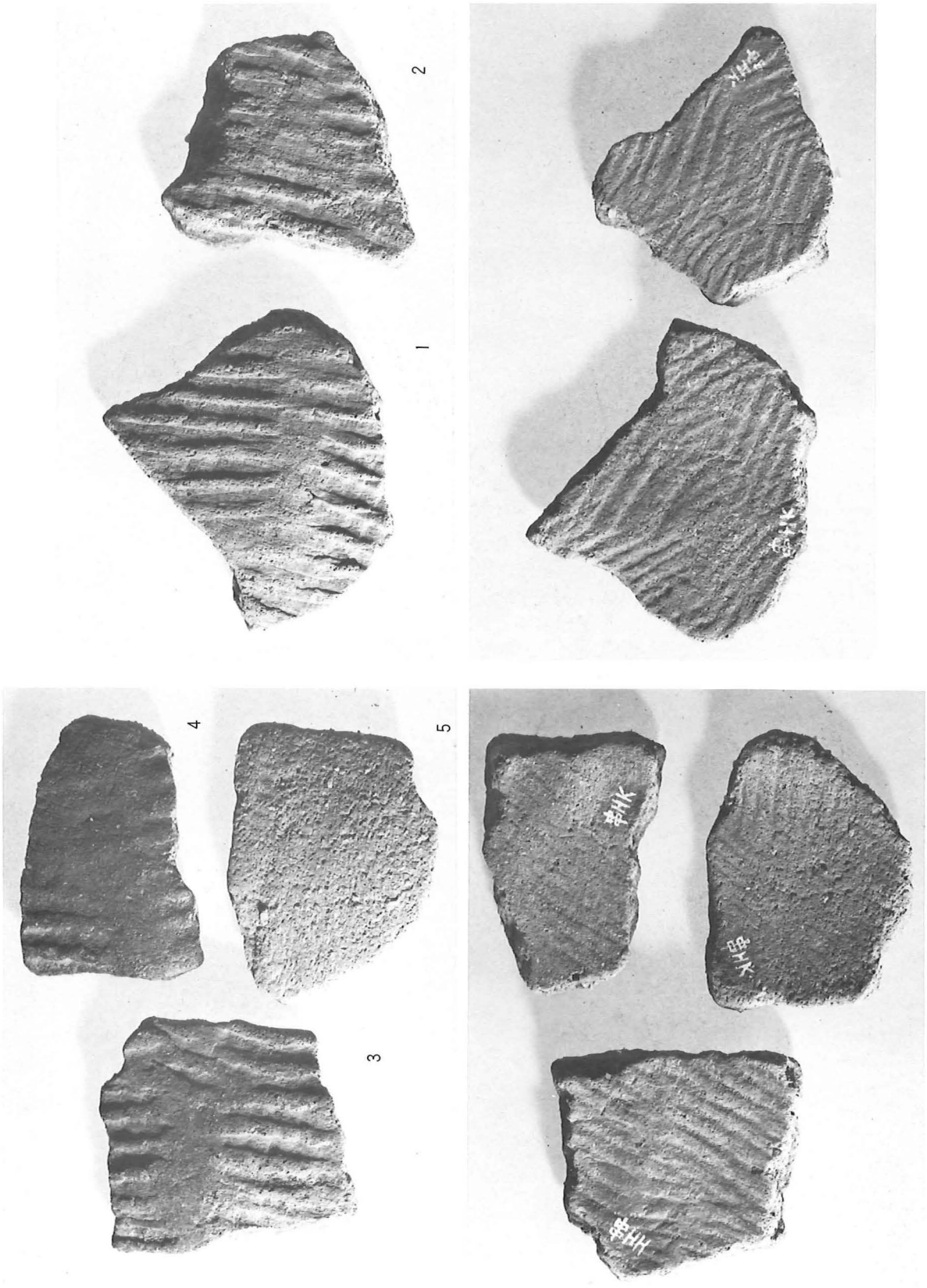
11



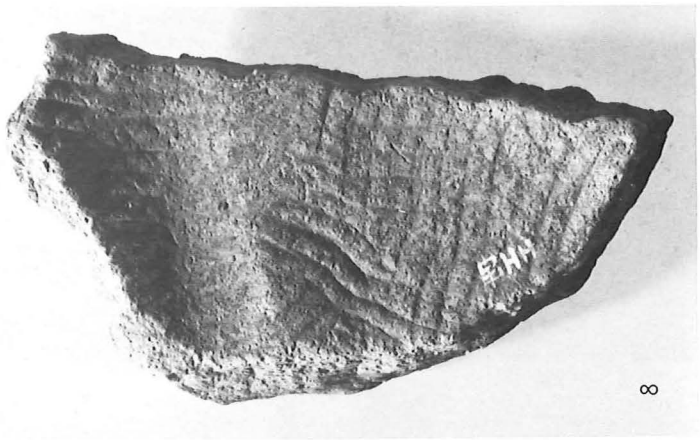
12

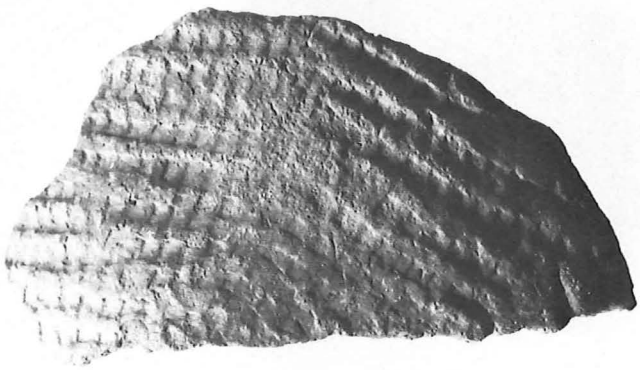
13

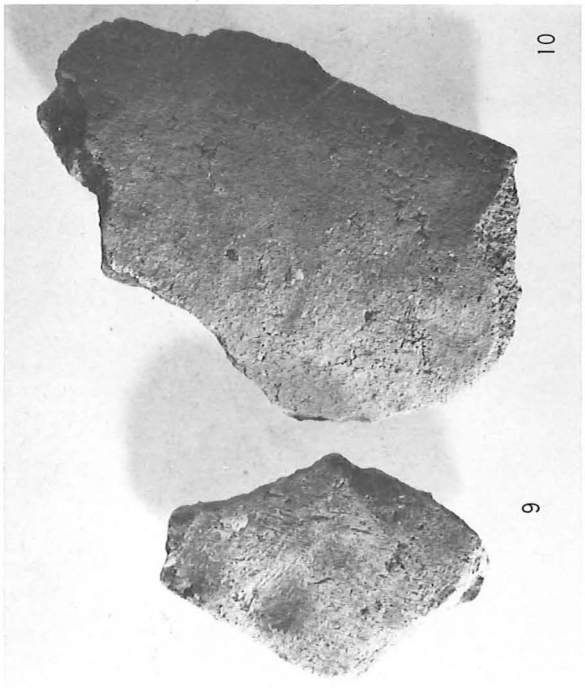
H区出土土器②（1 / 2）

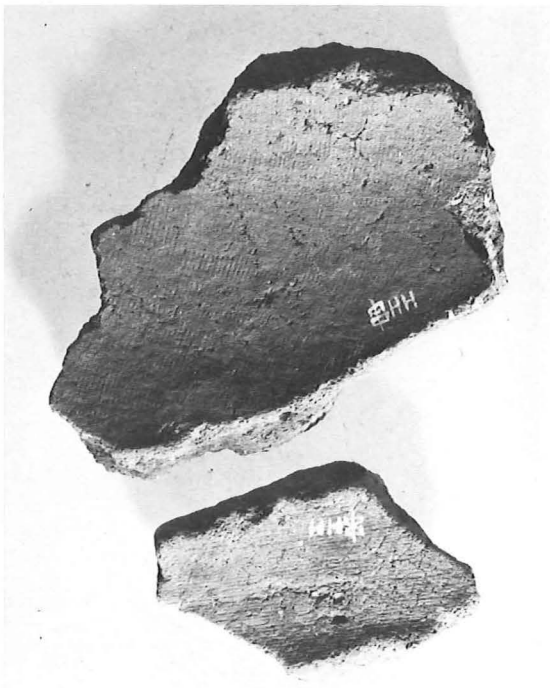


H区出土土器③（1 / 1）

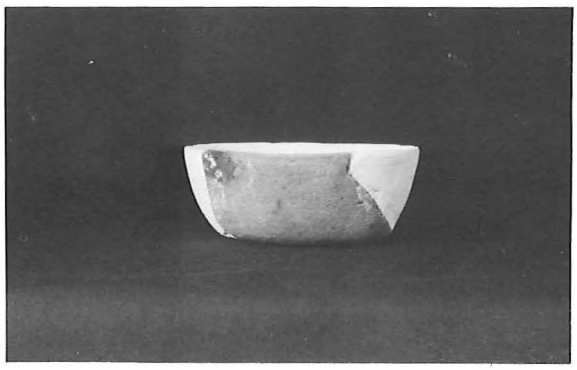






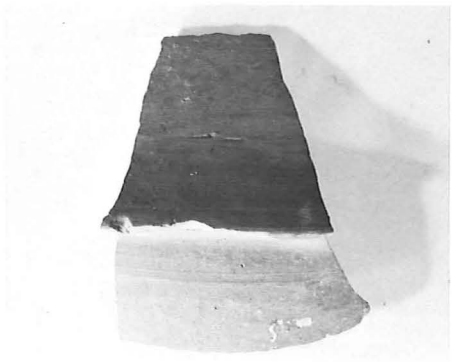


H区出土土器④（1 / 1）



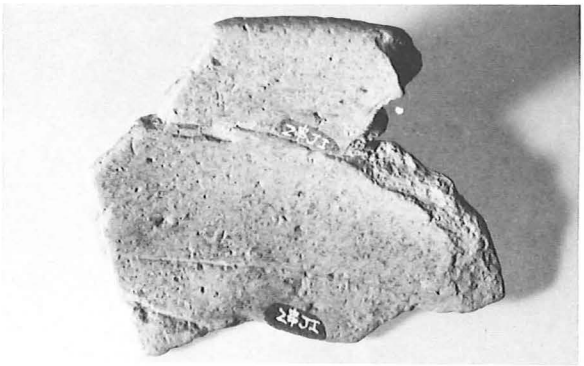
2

3

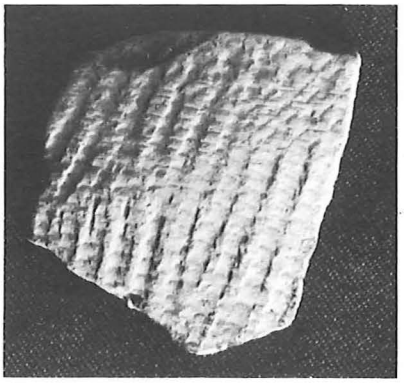


9

10

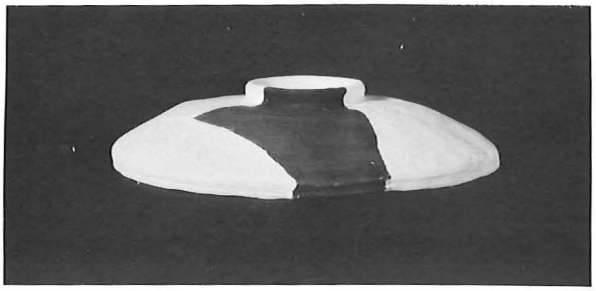


7

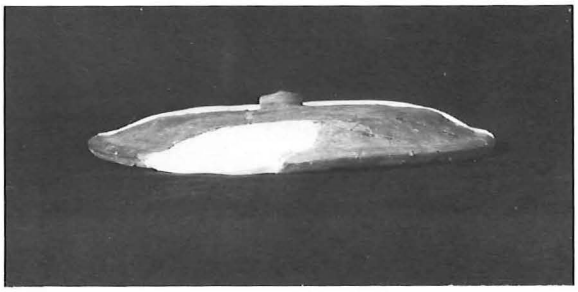


J区出土土器2・3（1／3）9・10（1／2）他（1／1）

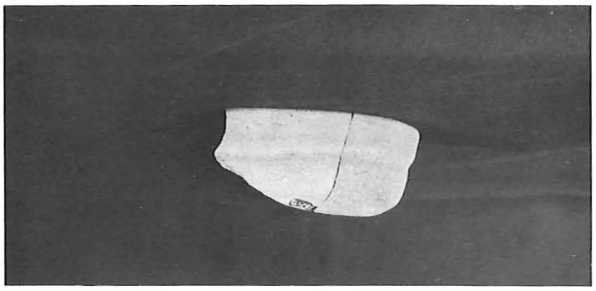
3



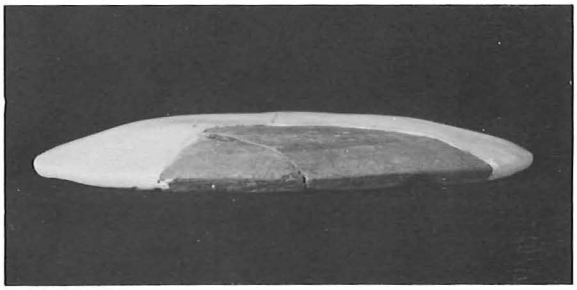
8



4

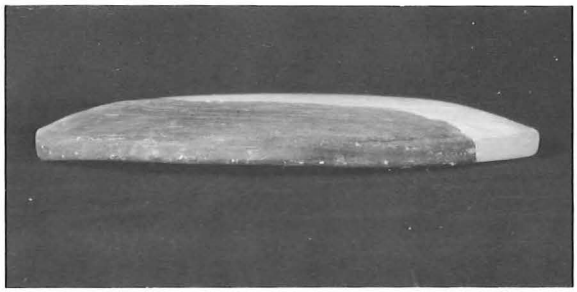


11

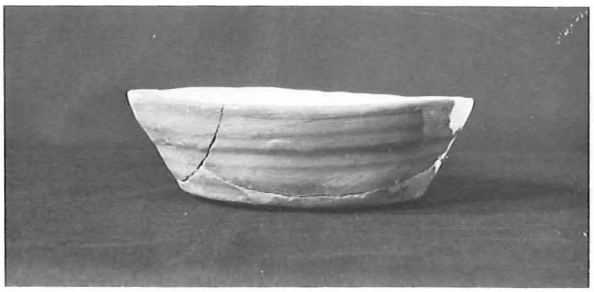


5

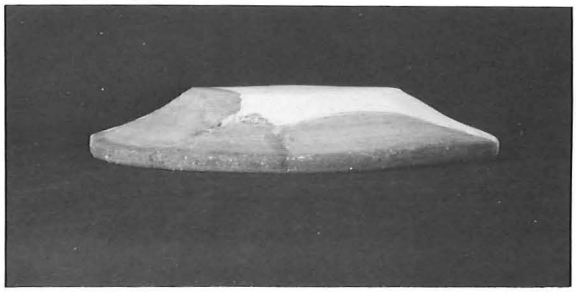
12



6



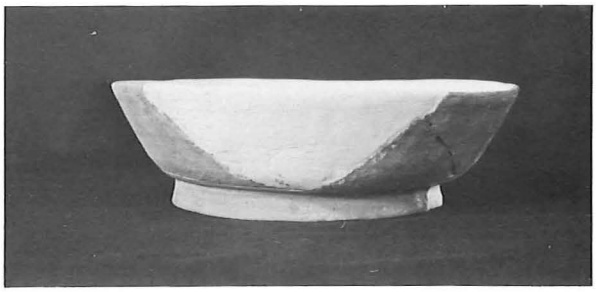
14



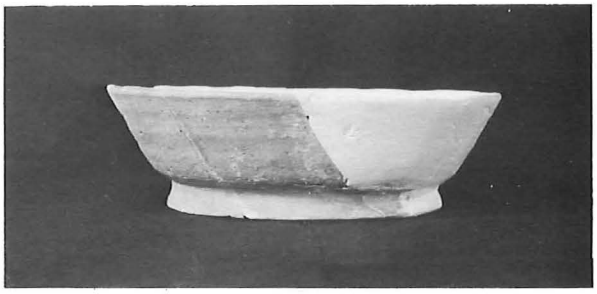
7

L区出土土器① (1 / 3)

15

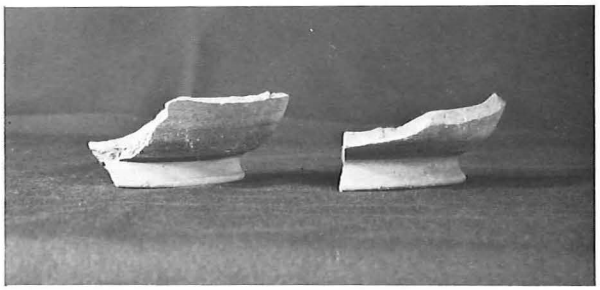


16

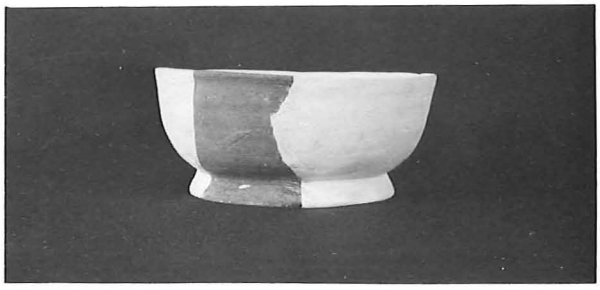


17

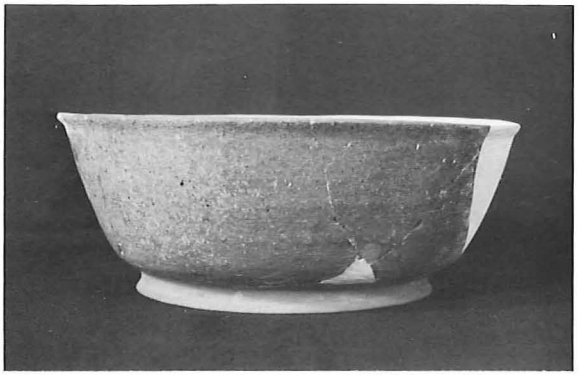
18



19



21

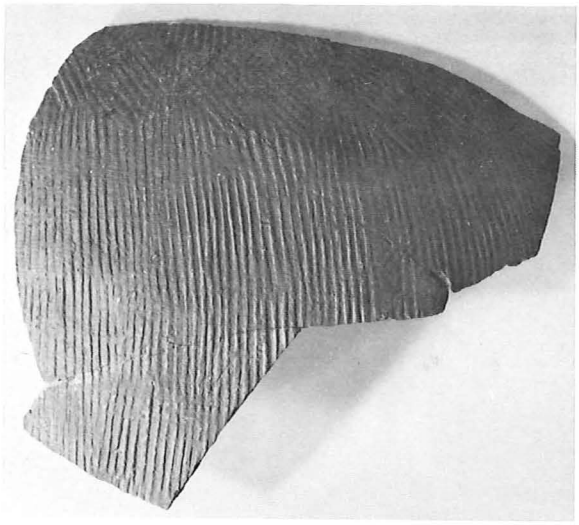


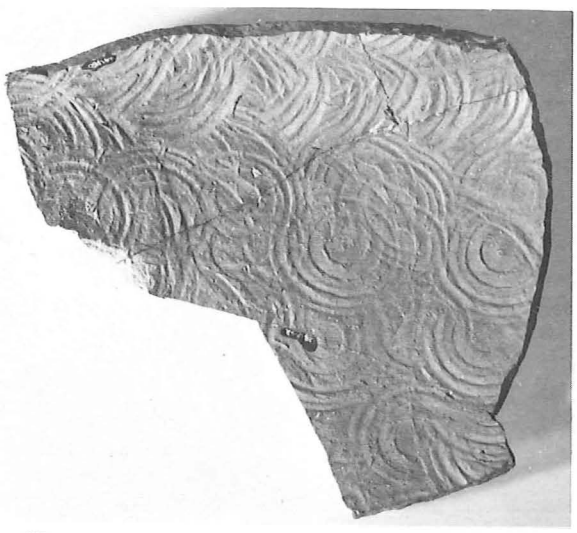
23

24

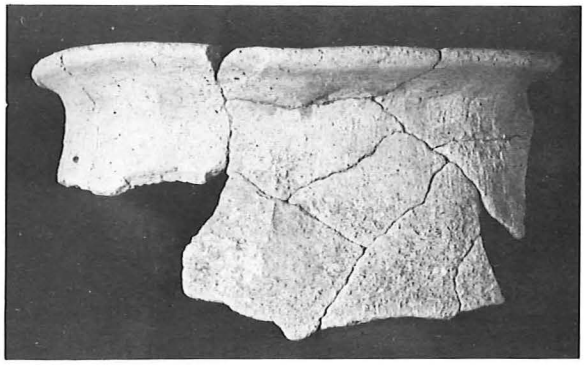
25

L区出土土器② (1 / 3)



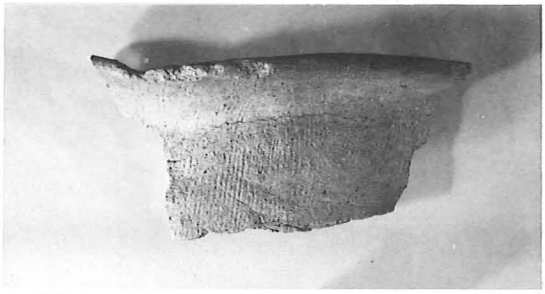


37

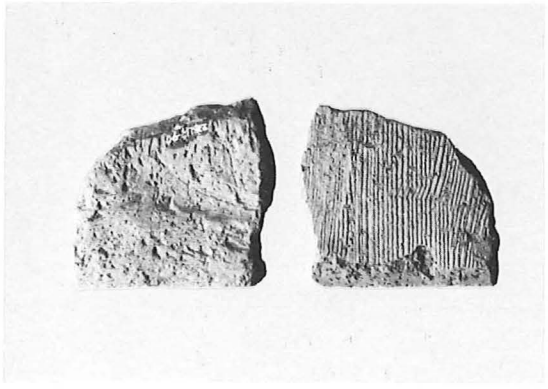


29

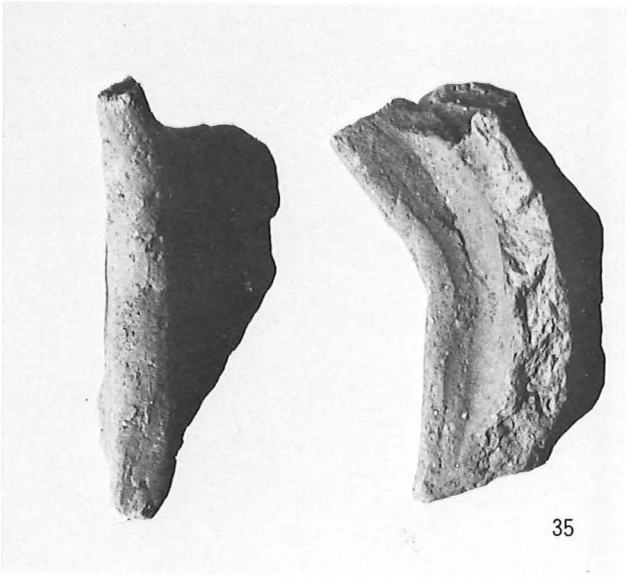
27



28

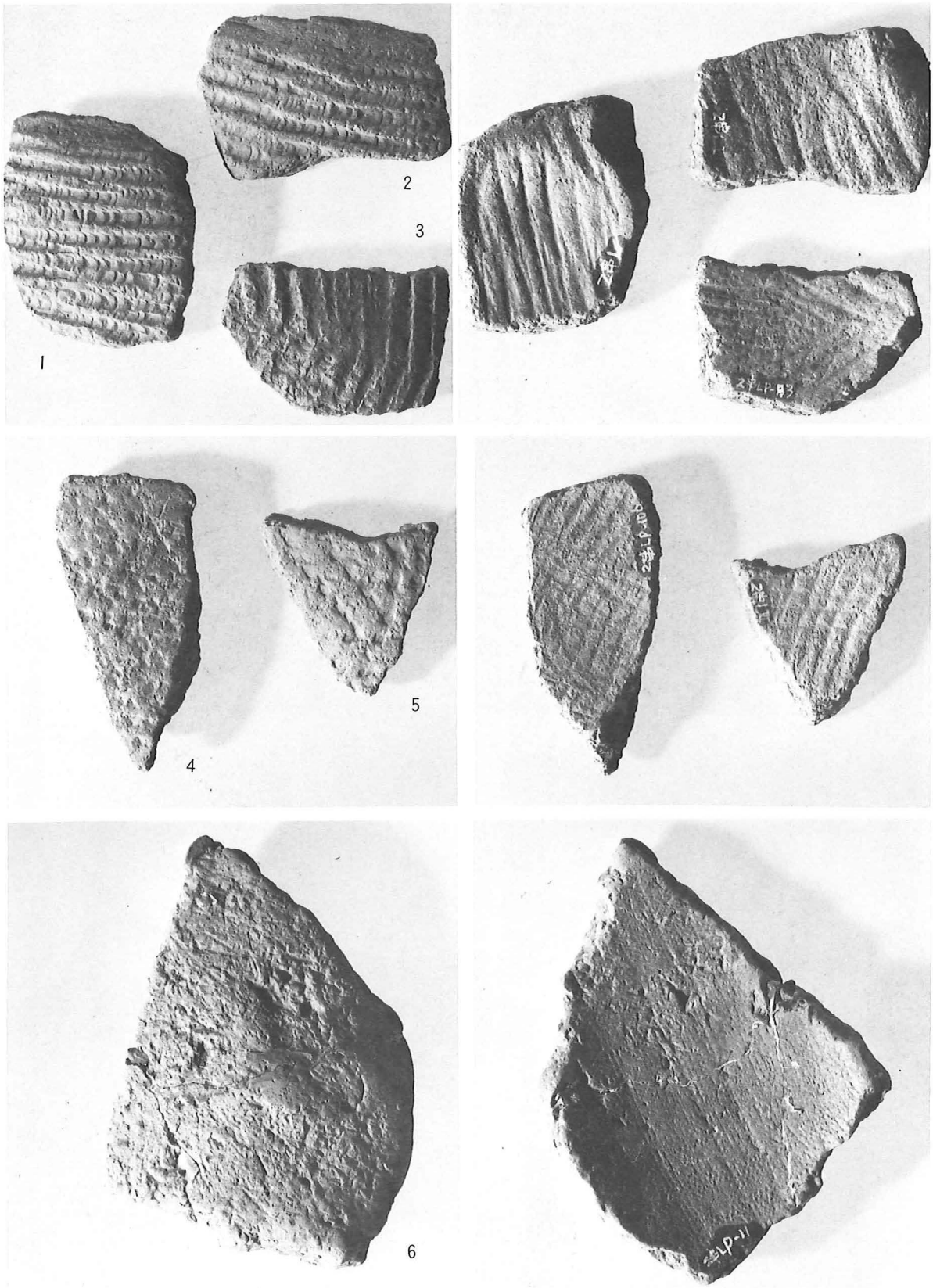


36

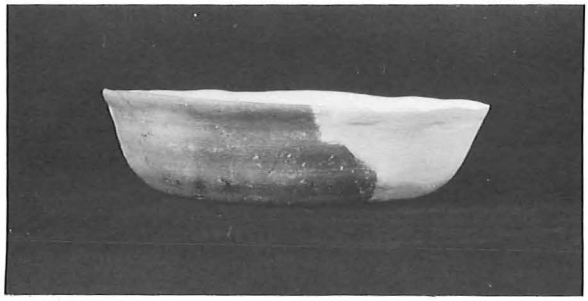


35

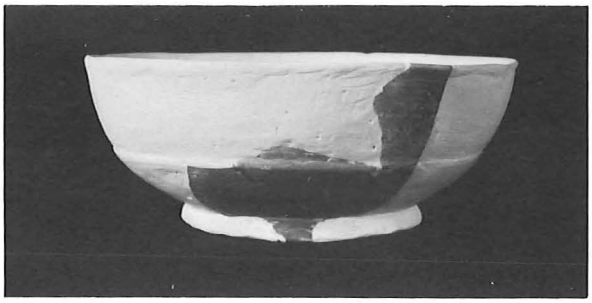
L区出土土器③（1 / 3）27（1 / 2）



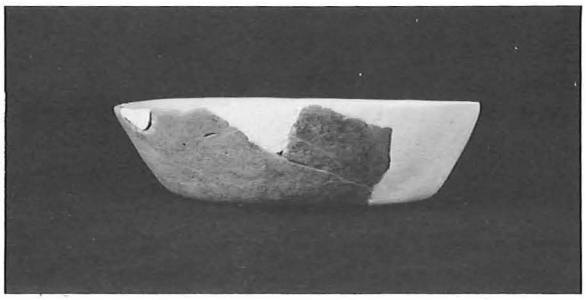
L区出土土器④（1 / 1）



1



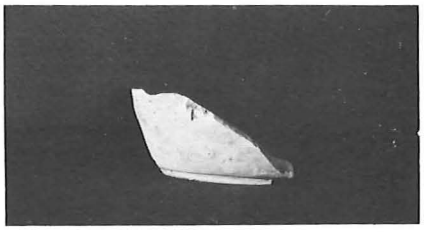
5



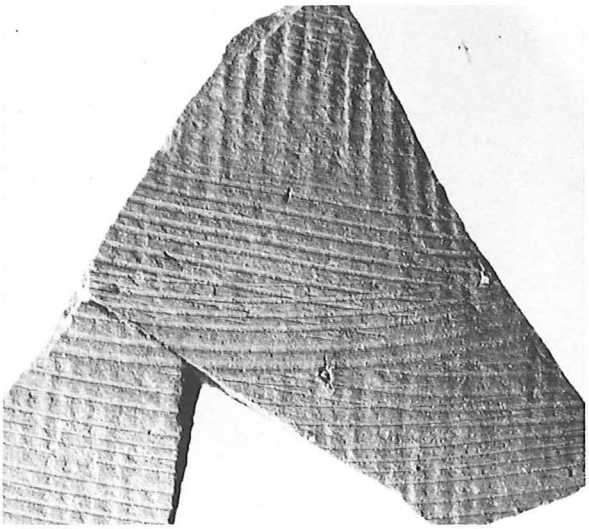
3

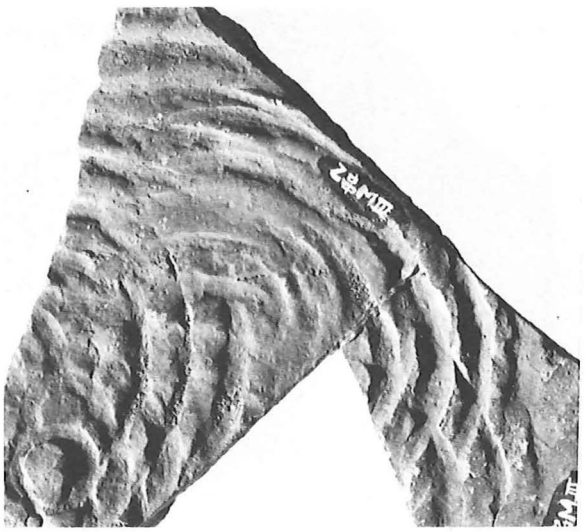
7

4

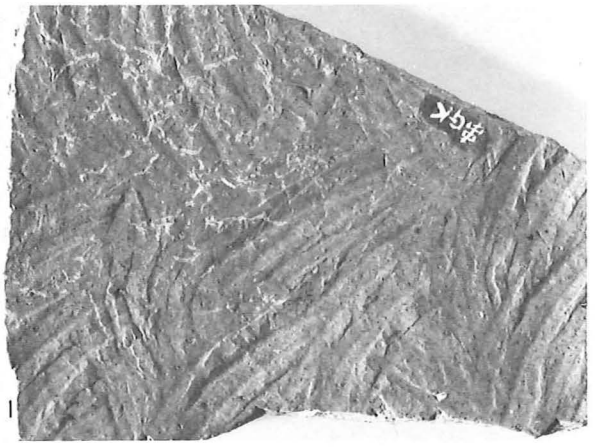


8

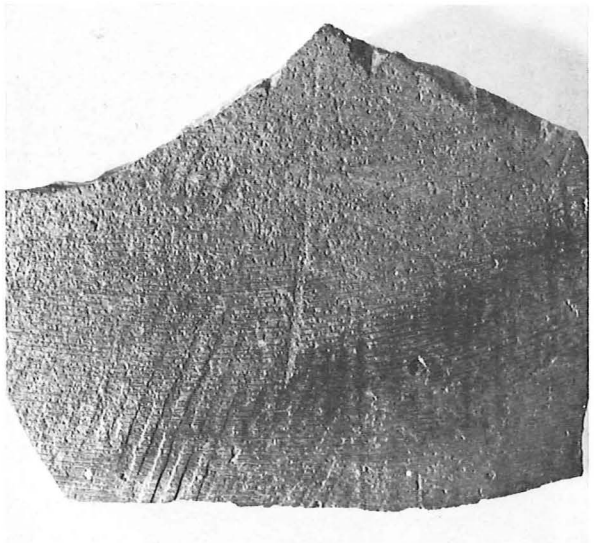


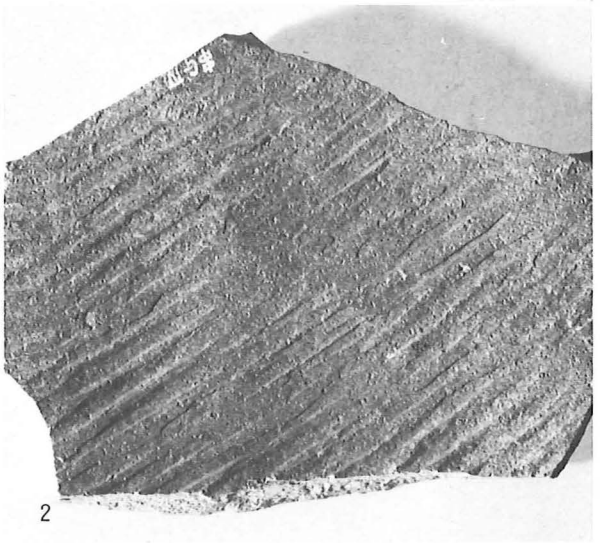


M区出土土器1・3・4・5・7・8（1／3）他（1／1）

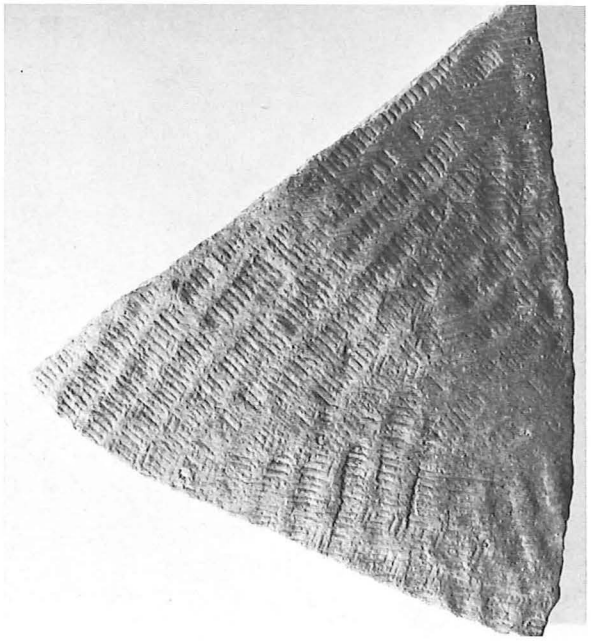


1



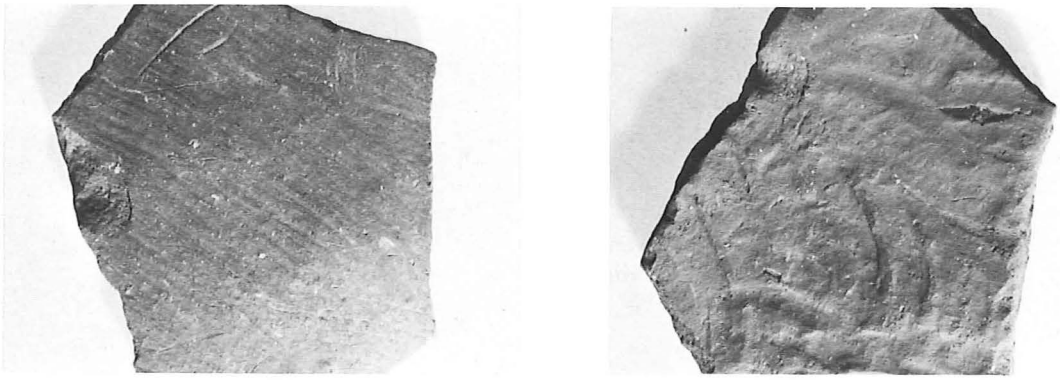


2

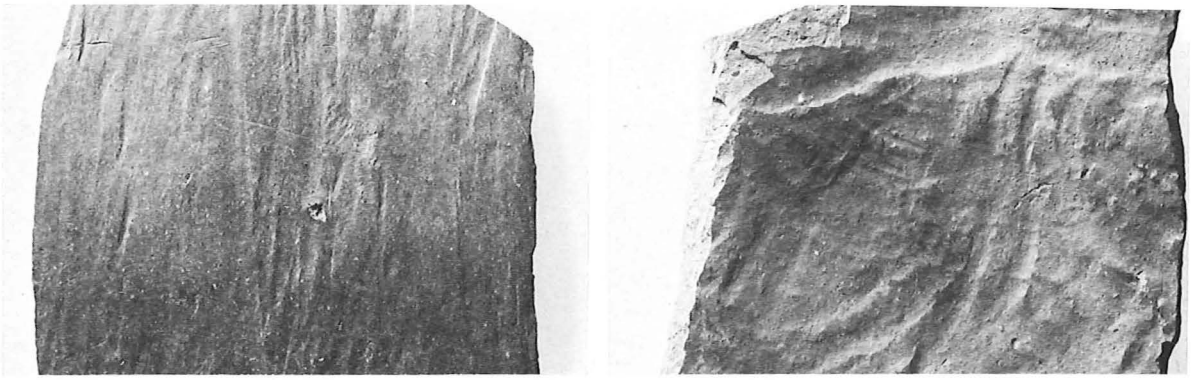


3

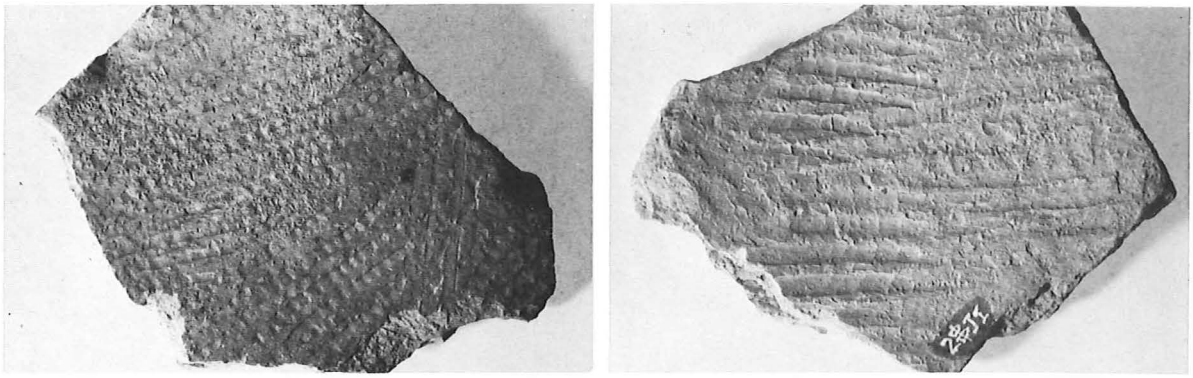
須恵器叩き目文（G区）(1 / 1)



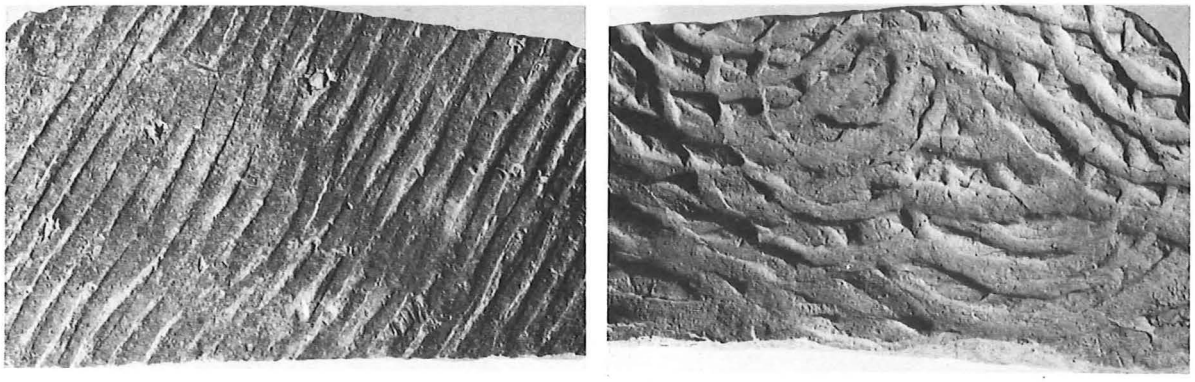
1



2

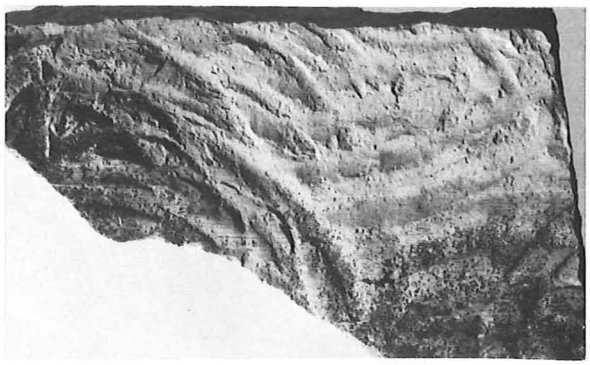


3

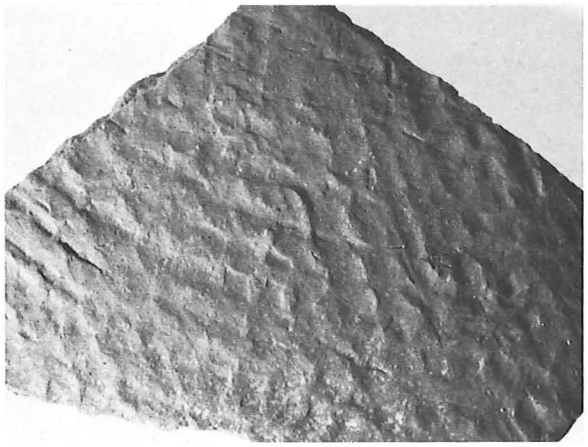


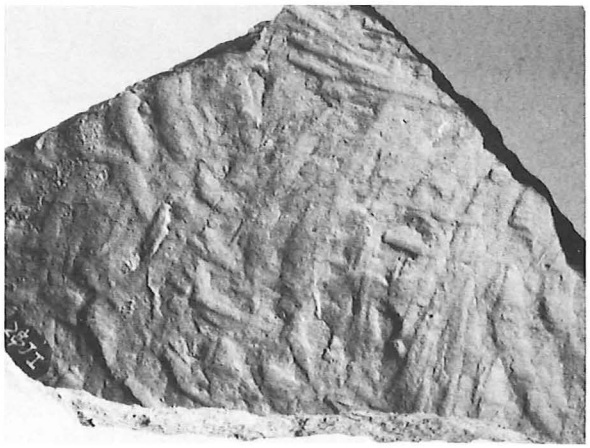
4

須恵器叩き目文（J区①）（1 / 1）

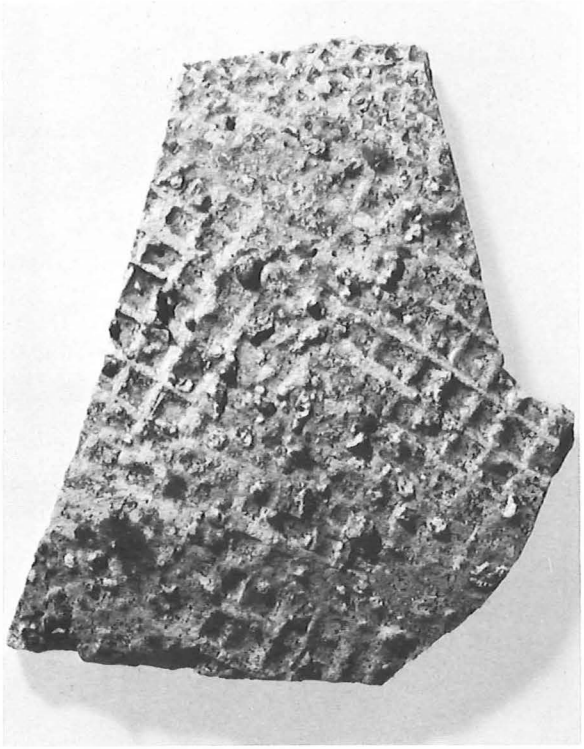


5



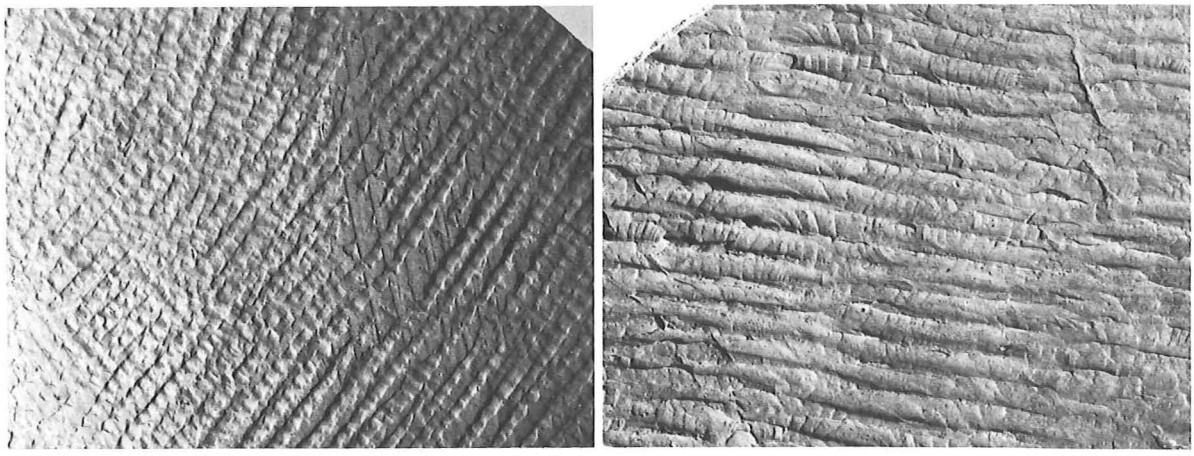


6

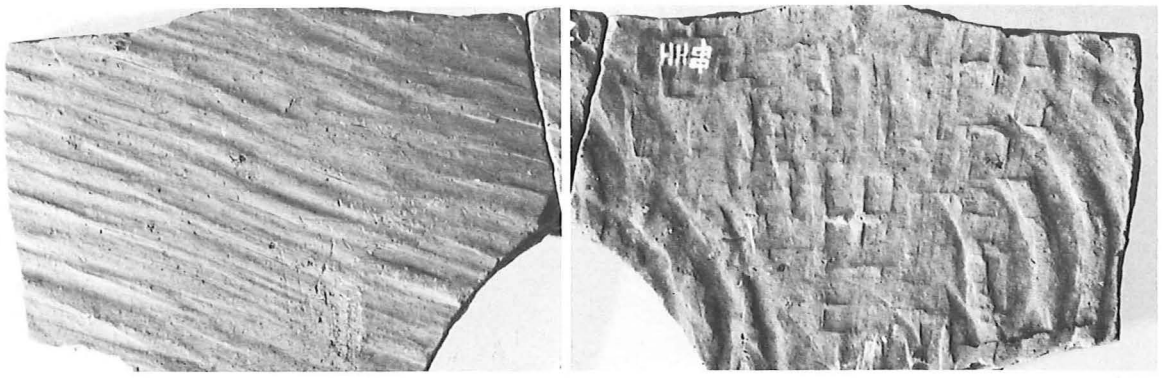


7

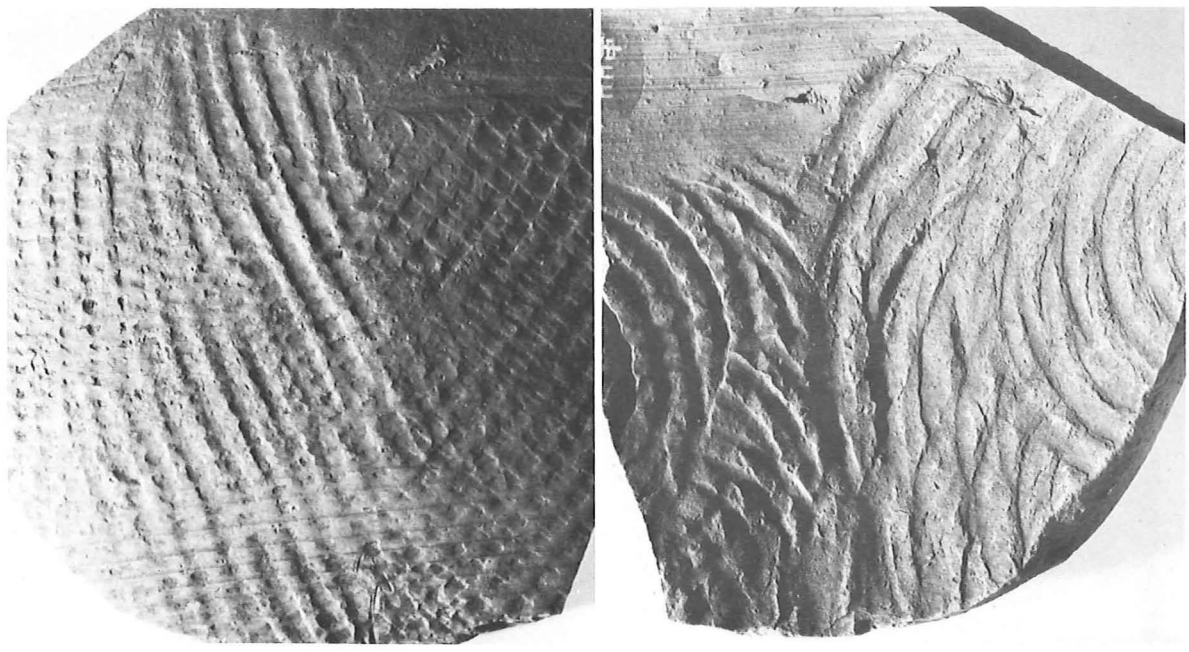
須恵器叩き目文（J区②）（1 / 1）



1

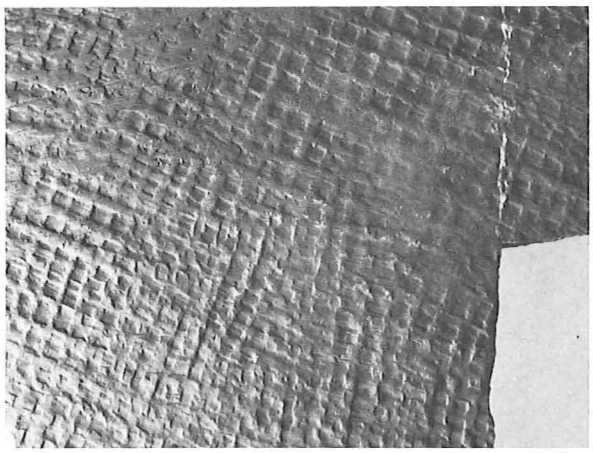


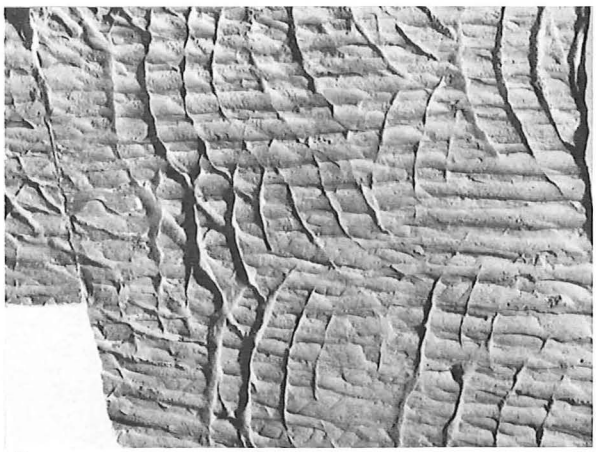
4



5

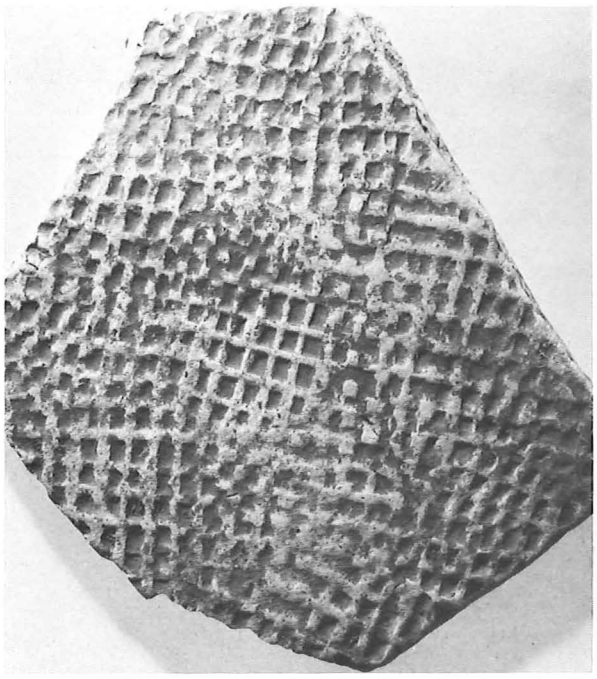
須恵器叩き目文（H区①）（1 / 1）

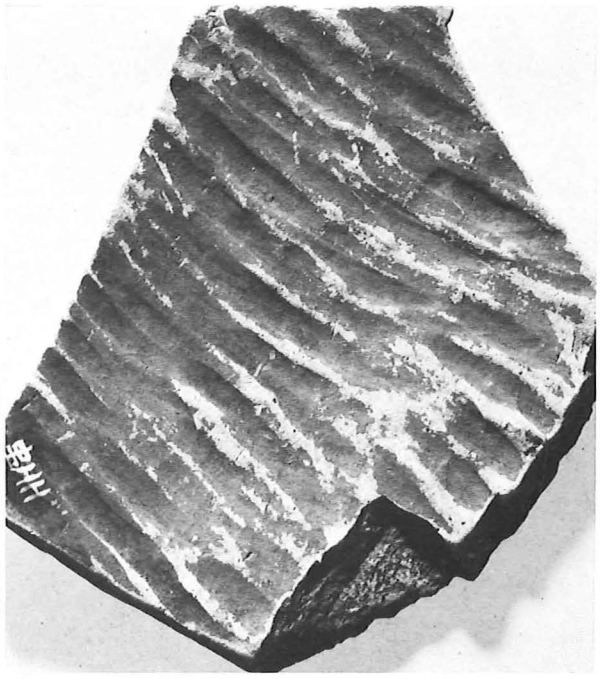




6

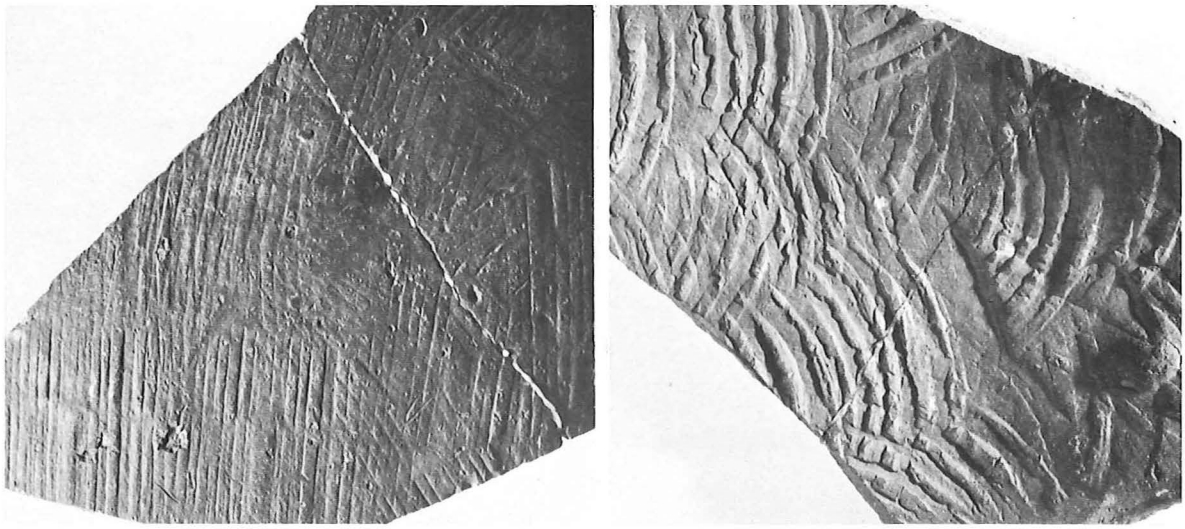
7



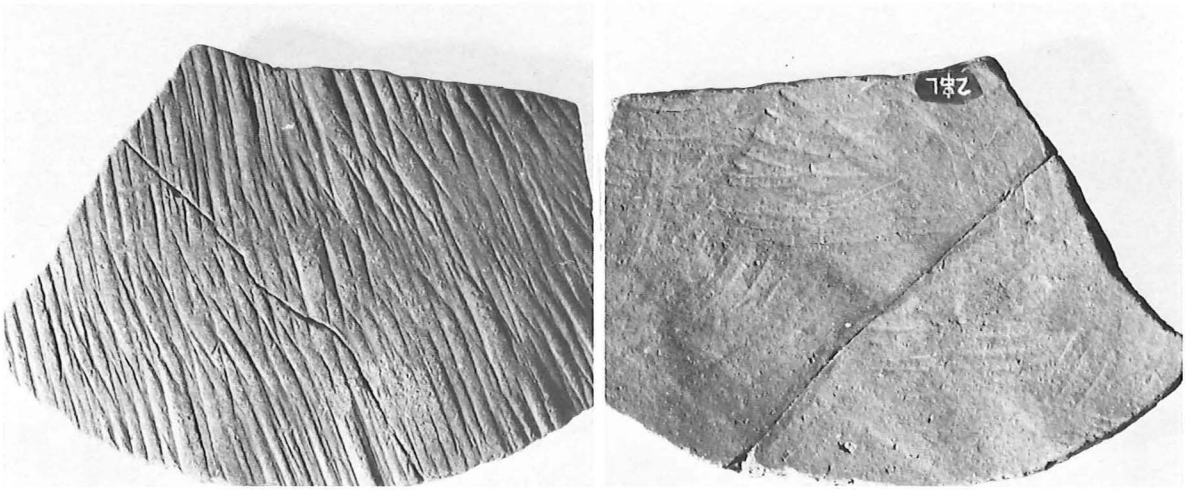


8

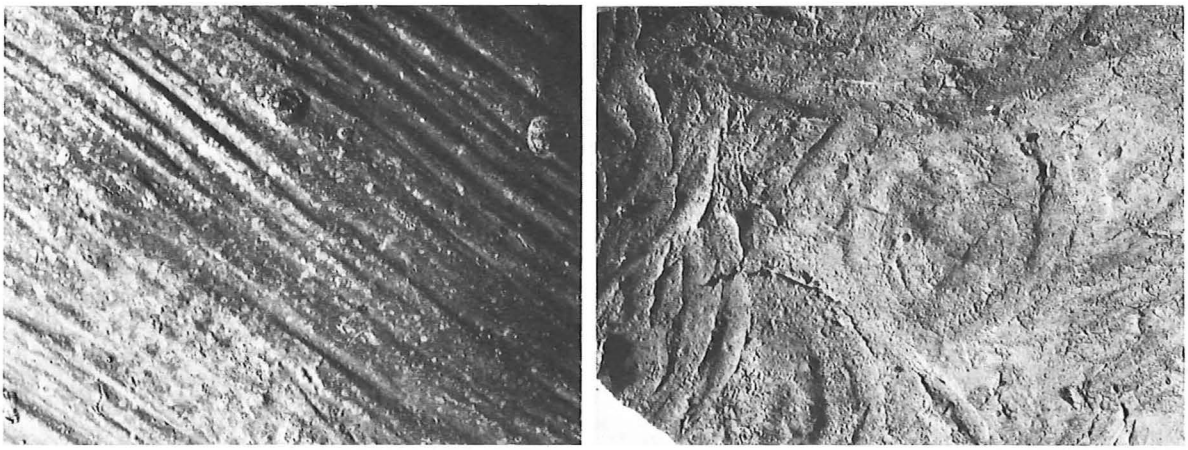
須恵器叩き目文(H区②)(1 / 1)



1

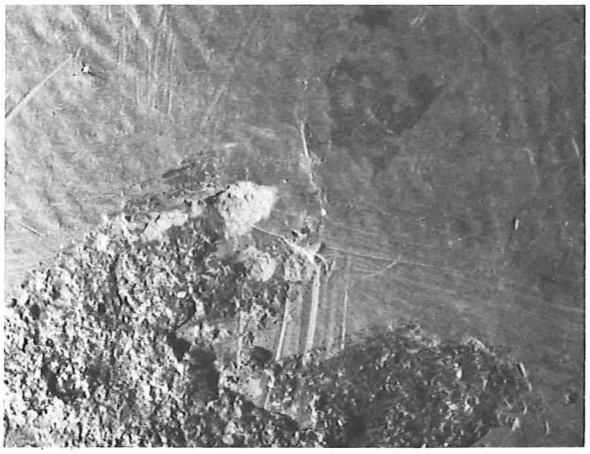


2

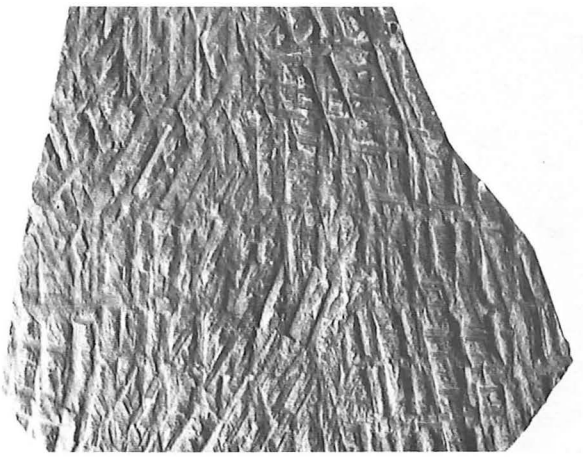


3

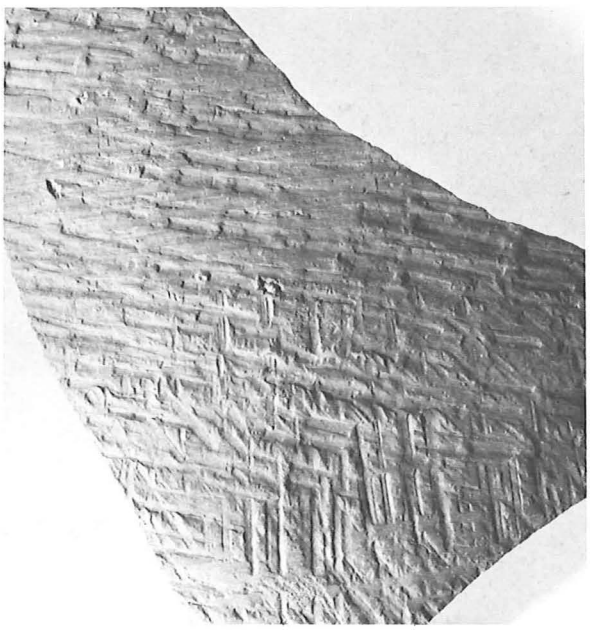
須恵器叩き目文（L区①）（1 / 1）



6

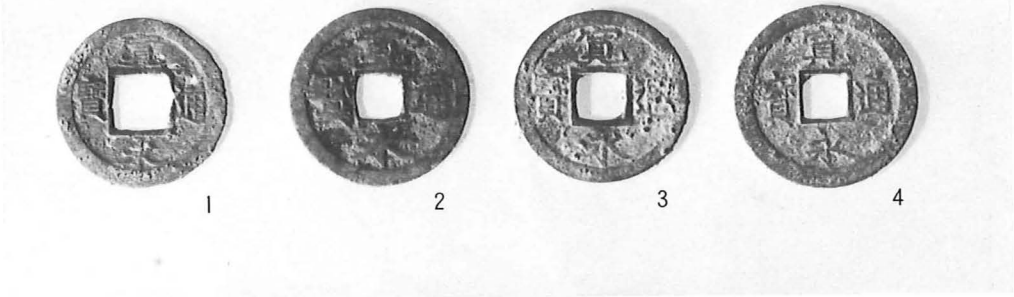


8

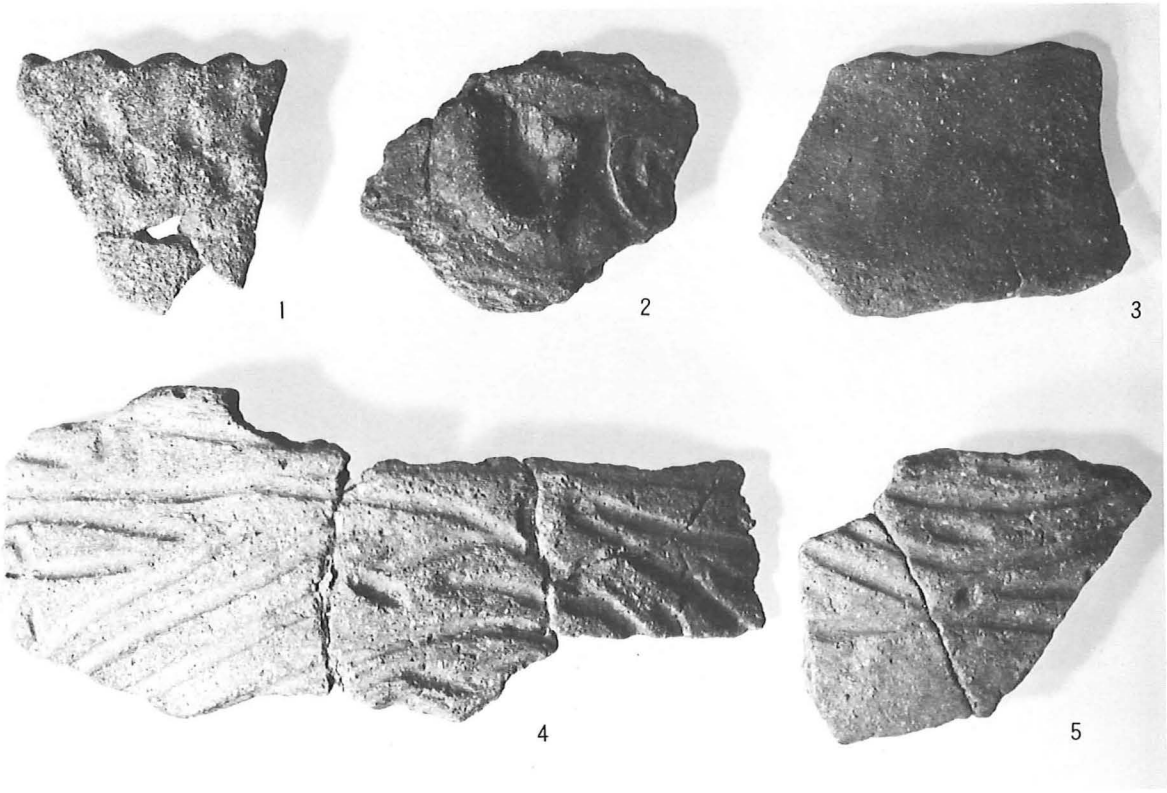


9

須恵器叩き目文（L区②）（1 / 1）

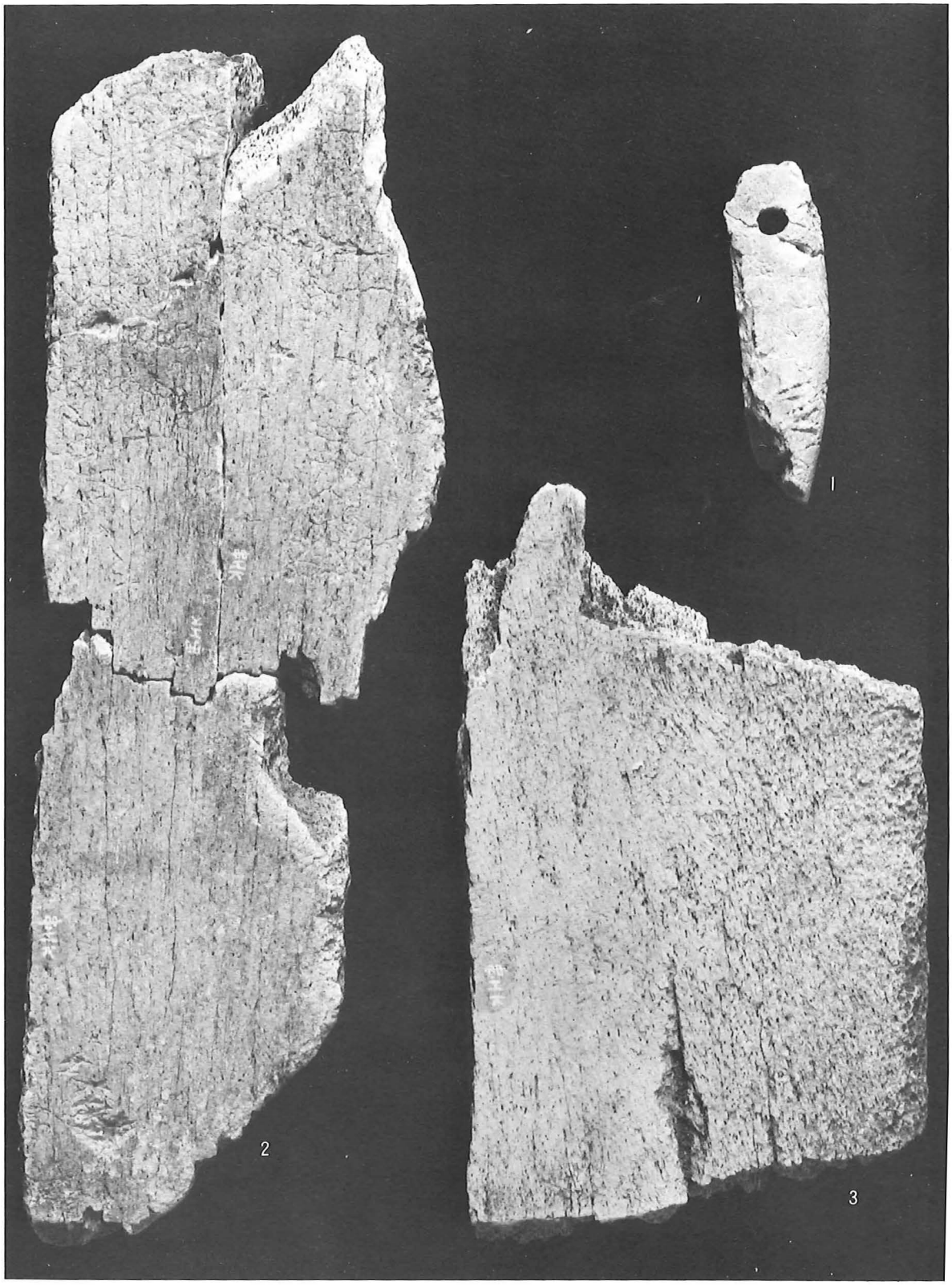


古銭（1 / 1）

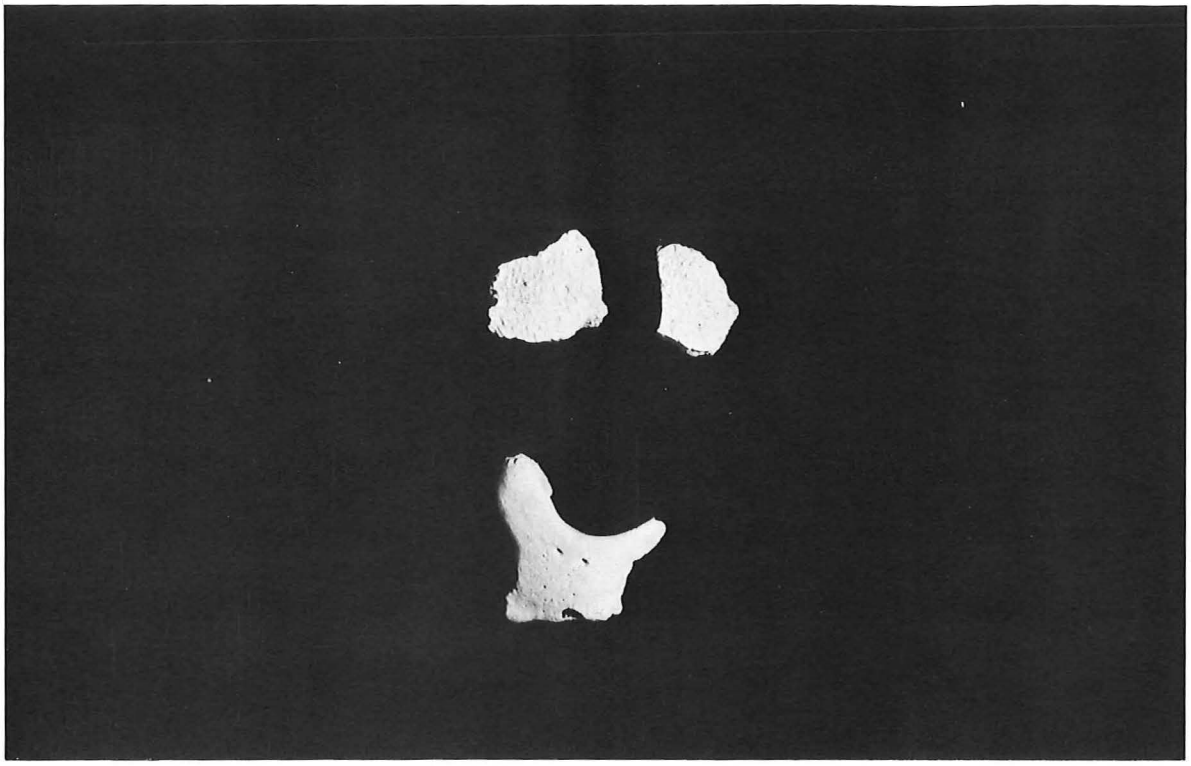


第2地点出土土器（1 / 2）

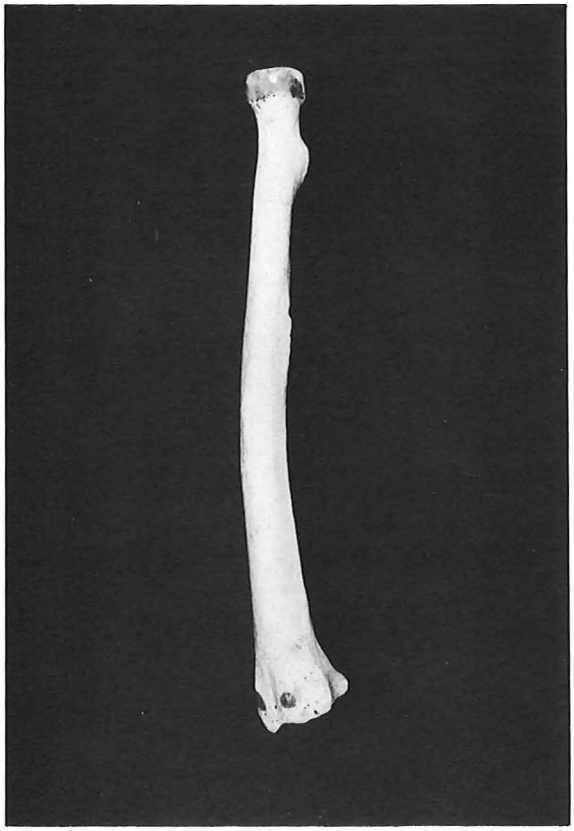
骨角器①（1／2）



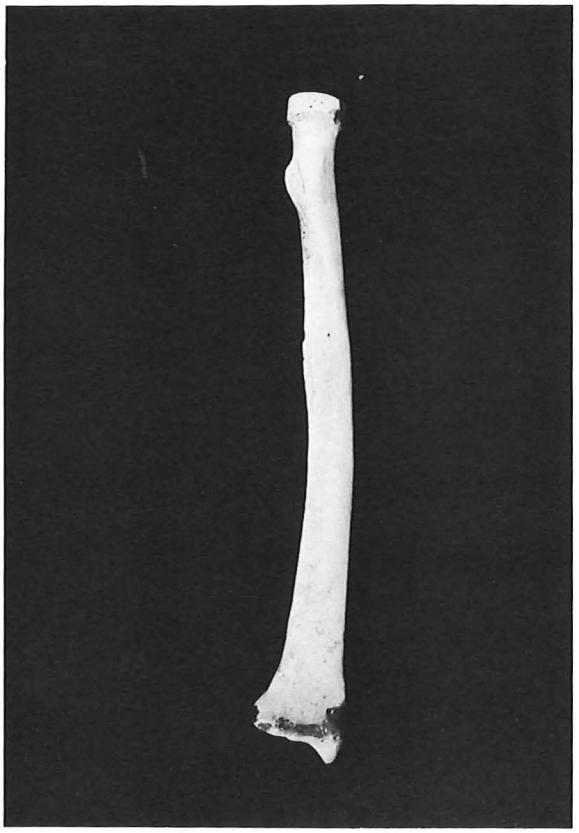
骨角器②（1 / 1）



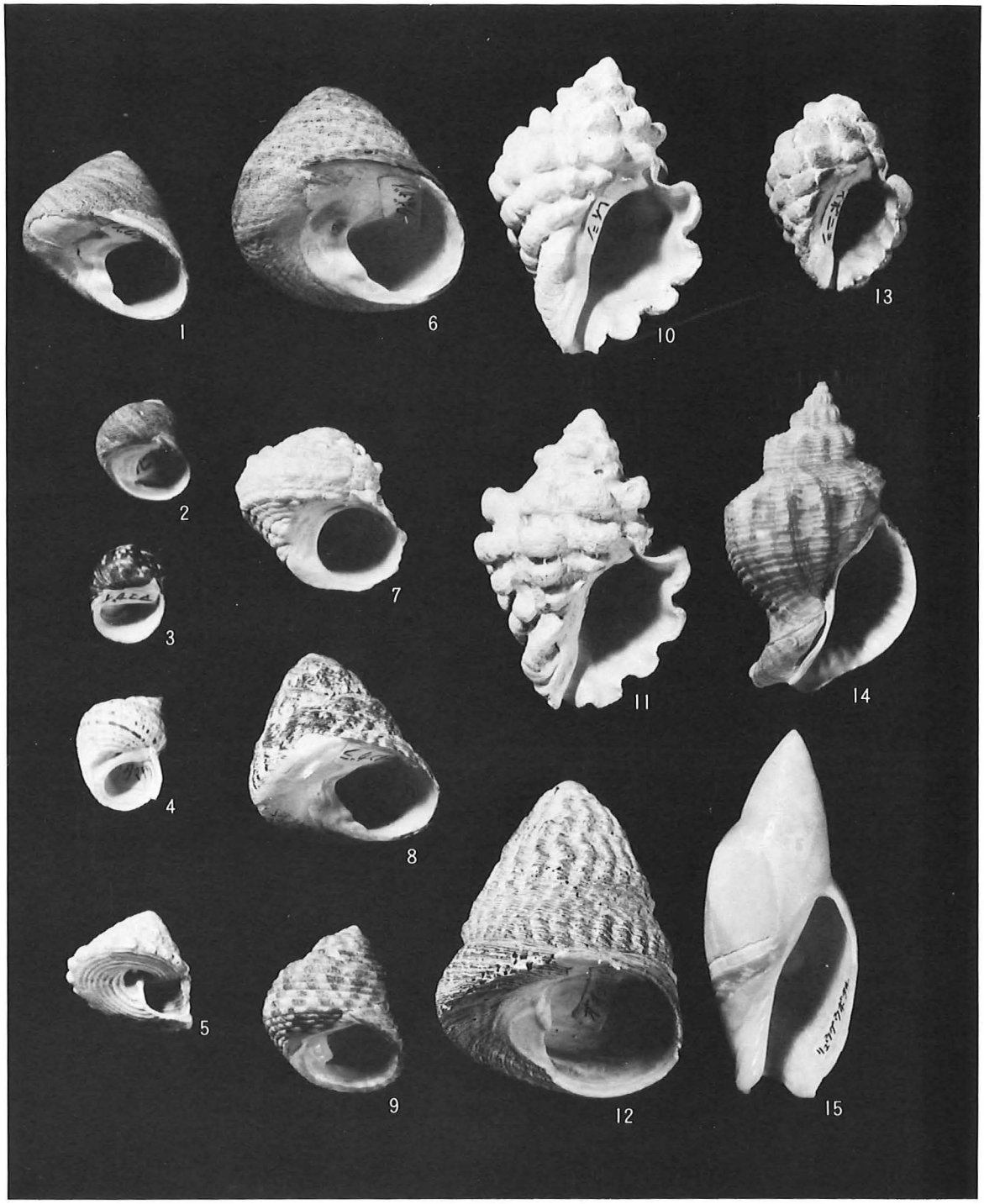
1号人骨（女性。頭蓋骨）



2号人骨（男性，左橈骨，後面観）

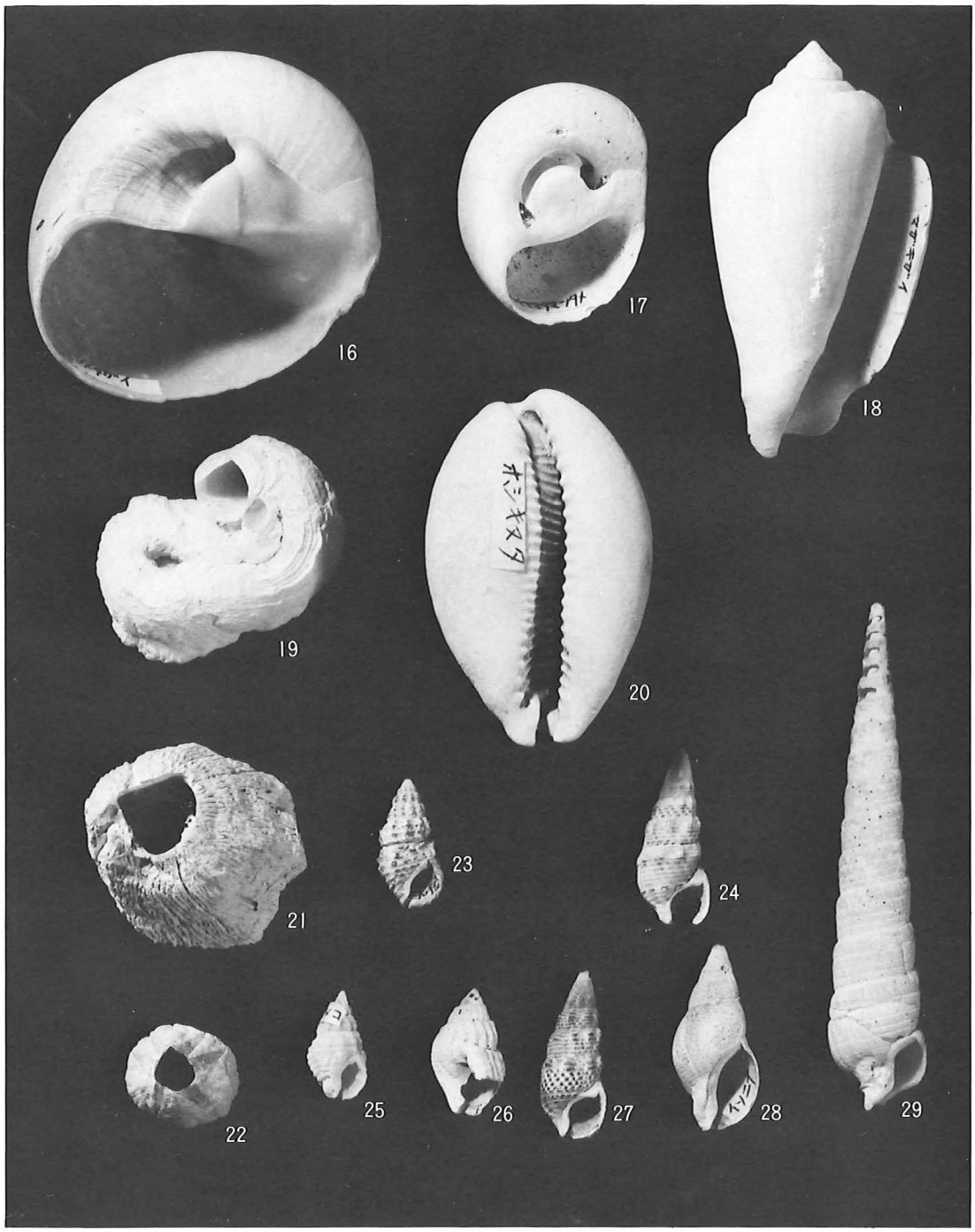


2号人骨（男性，左橈骨，前面観）



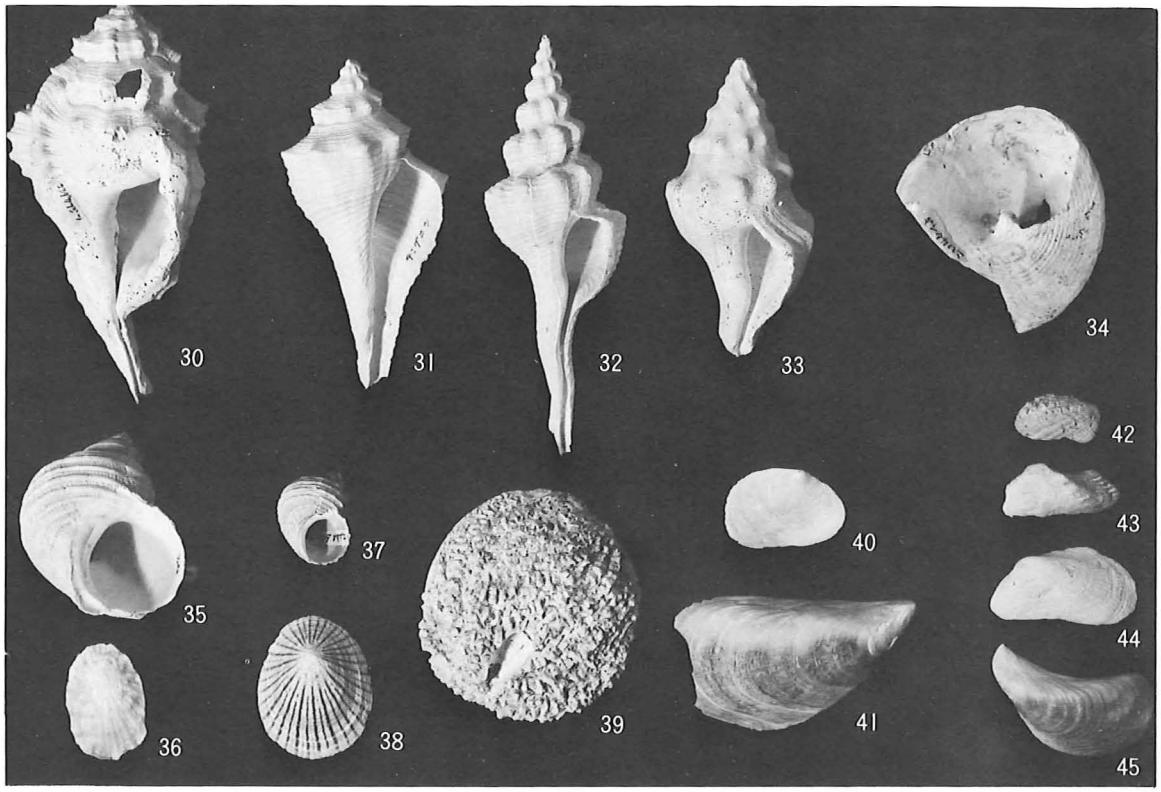
貝類①

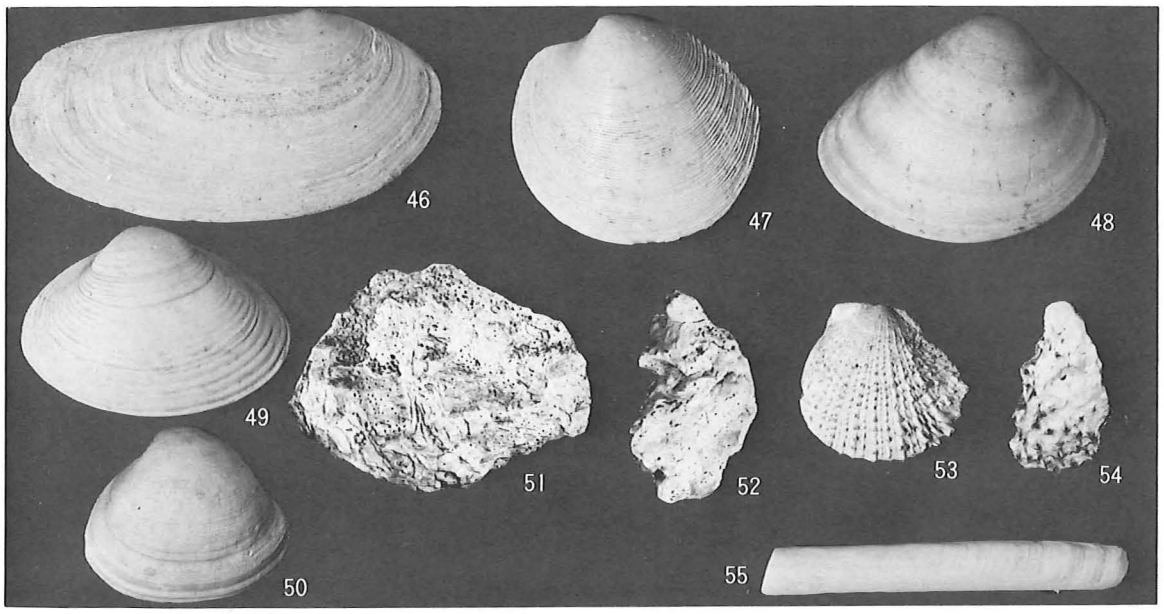
1．クマノコガイ
2．クビレクロッケ
3．アマガイ
4．タマキビ
5．ウラウズガイ
6．クボガイ
7．スガイ
8．コシダカガンガラ
9．イシダタミガイ
10．レイシ
11．レイシ
12．オオコシダカガンガラ
13．イボニシ
14．ミクリガイ
15．リュウグウボタル



貝類②

16. ツメタガイ　17. ウチヤマタマツバキ　18. マガキガイ
19. オオヘビガイ　20. ホシキヌタ
21. オオアカフジツボ　23. カヤノミカニモリ　24. ウミニナ
22. アカフジツボ　25. ヒメムシロ　26. ムシロガイ　27. ウミニナ　28. イソニナ　29. コニクタケ

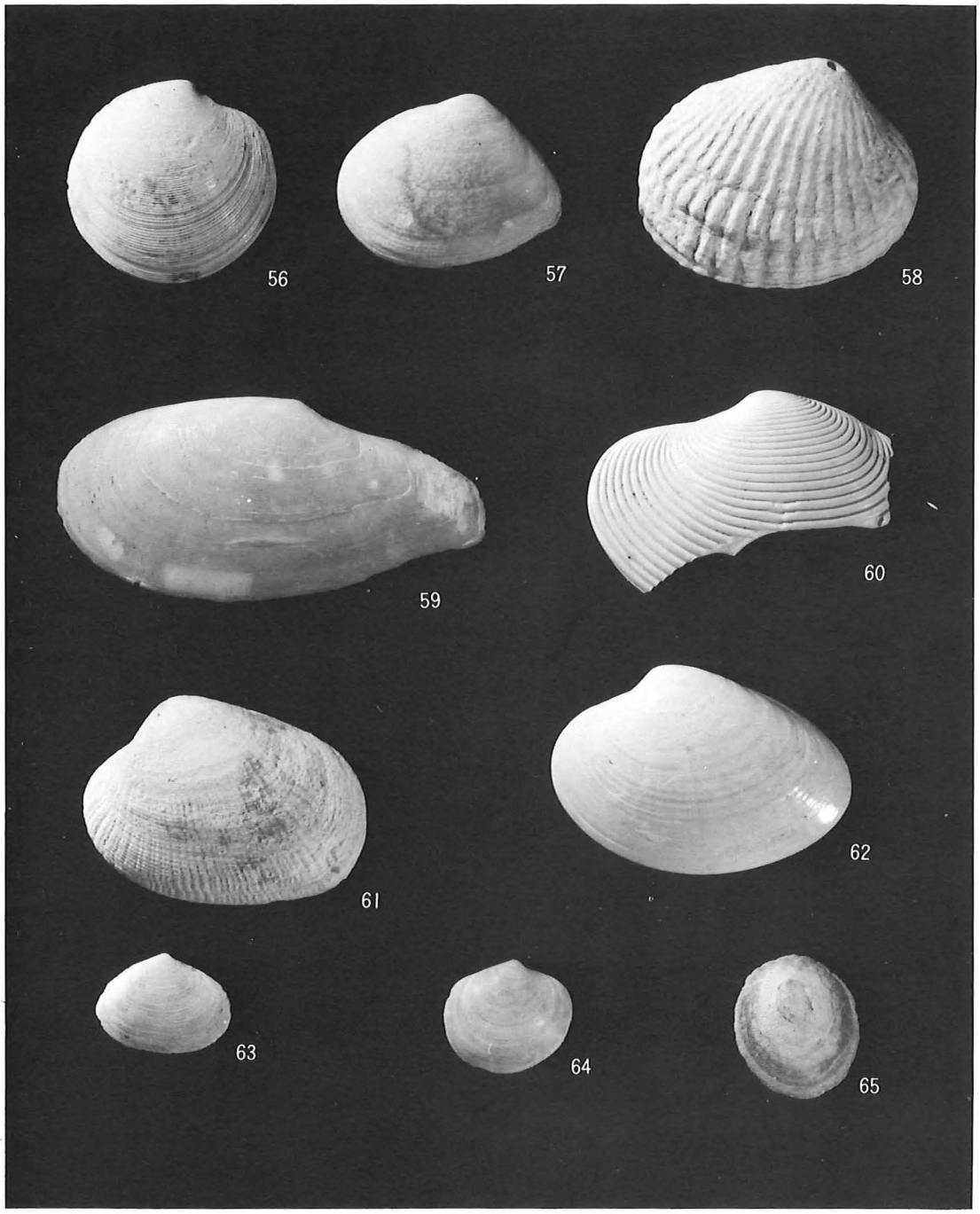




貝類③

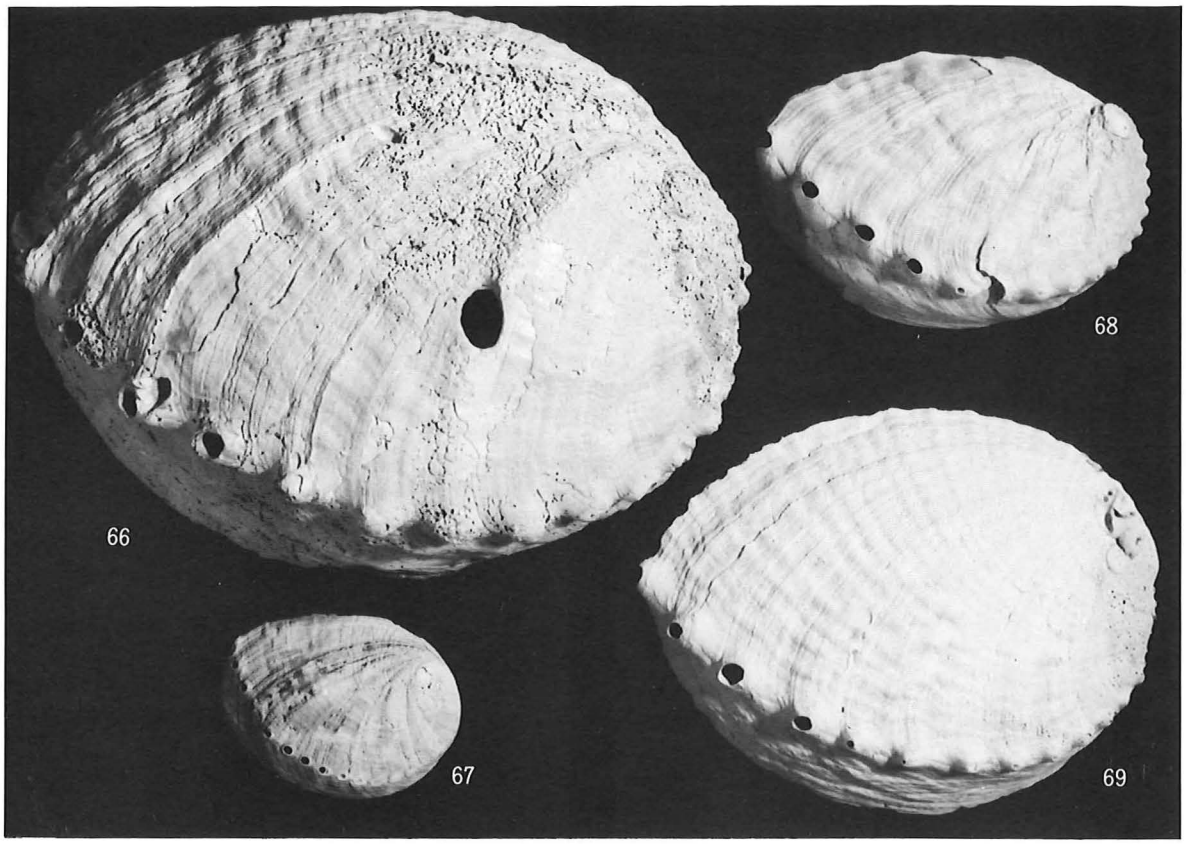
30. コシダカフジツ　31. テングニシ　32. コブナガニシ　33. ミガキボラ　34. ギンタカハマ
35. サザエ　37. コシダカサザエ　40. ヒラフネガイ　42. トマヤガイ
36. ヨメガサ　38. マツバガイ　39. キクザル　41. イガイ　43. ワシノハ
44. カリガネエガイ
45. ムラサキインコ

46. ヒラカモジガイ　47. カガミガイ　48. ハマグリ
49. バカガイ　51. カキツバタ　52. マガキ　53. ウミギク　54. ケガキ
50. シオフキ　55. マテガイ



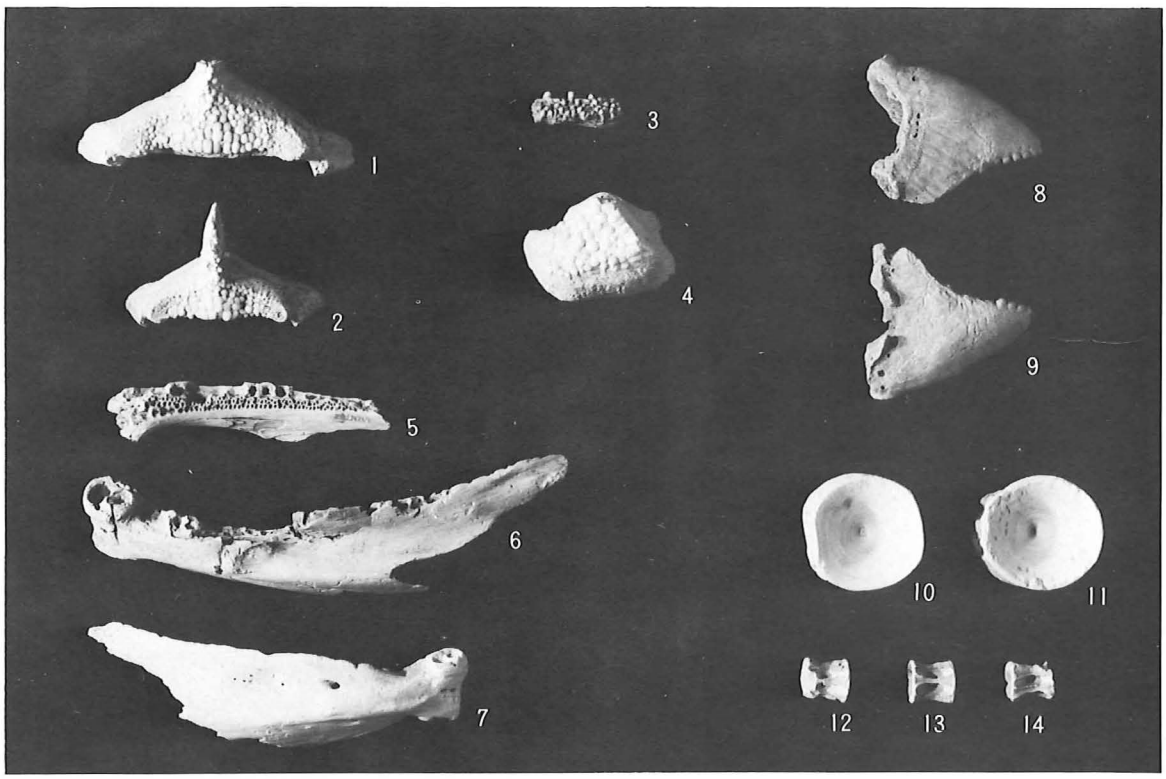
貝類④

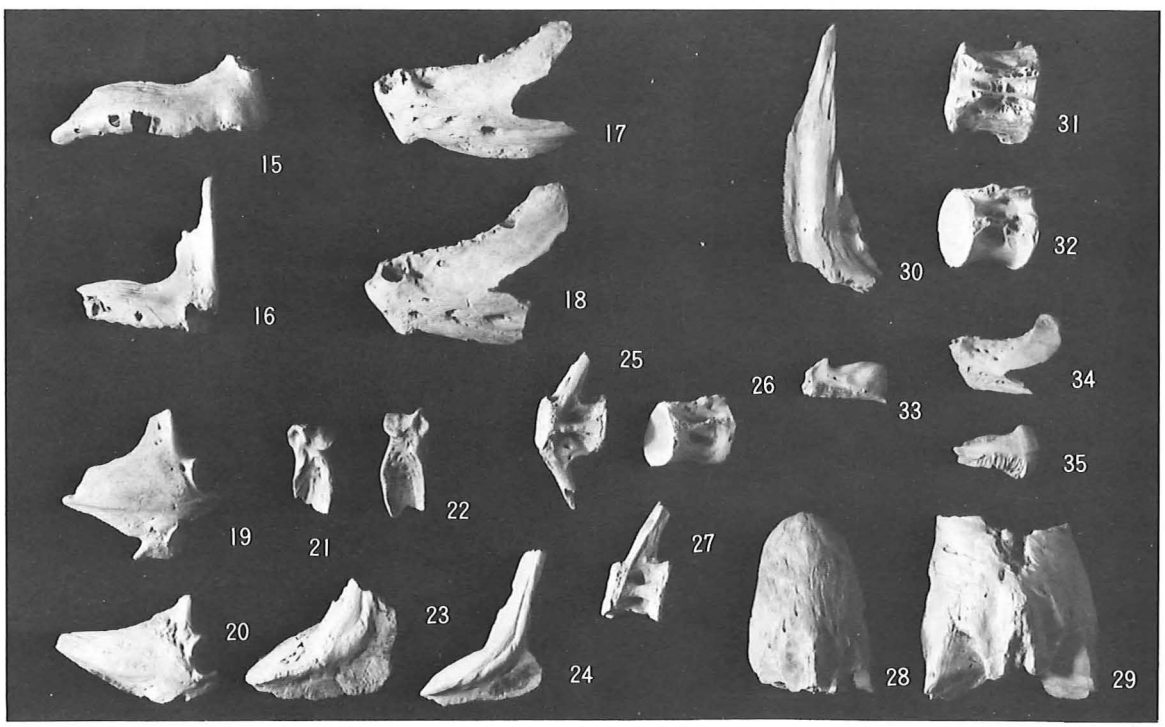
56. ヒメカガミ　57. イチョウシラトリ　58. オニアサリ
59. ダイミヨウガイ　60. サツマアサリ
61. アサリ　62. マツヤマワスレ
63. ヒメシラトリ　64. カブラツキガイ　65. コウダカアオガイ



↓
66. マダカマワビ
67. トコブシ
68. クロアワビ
69. メカイアワビ

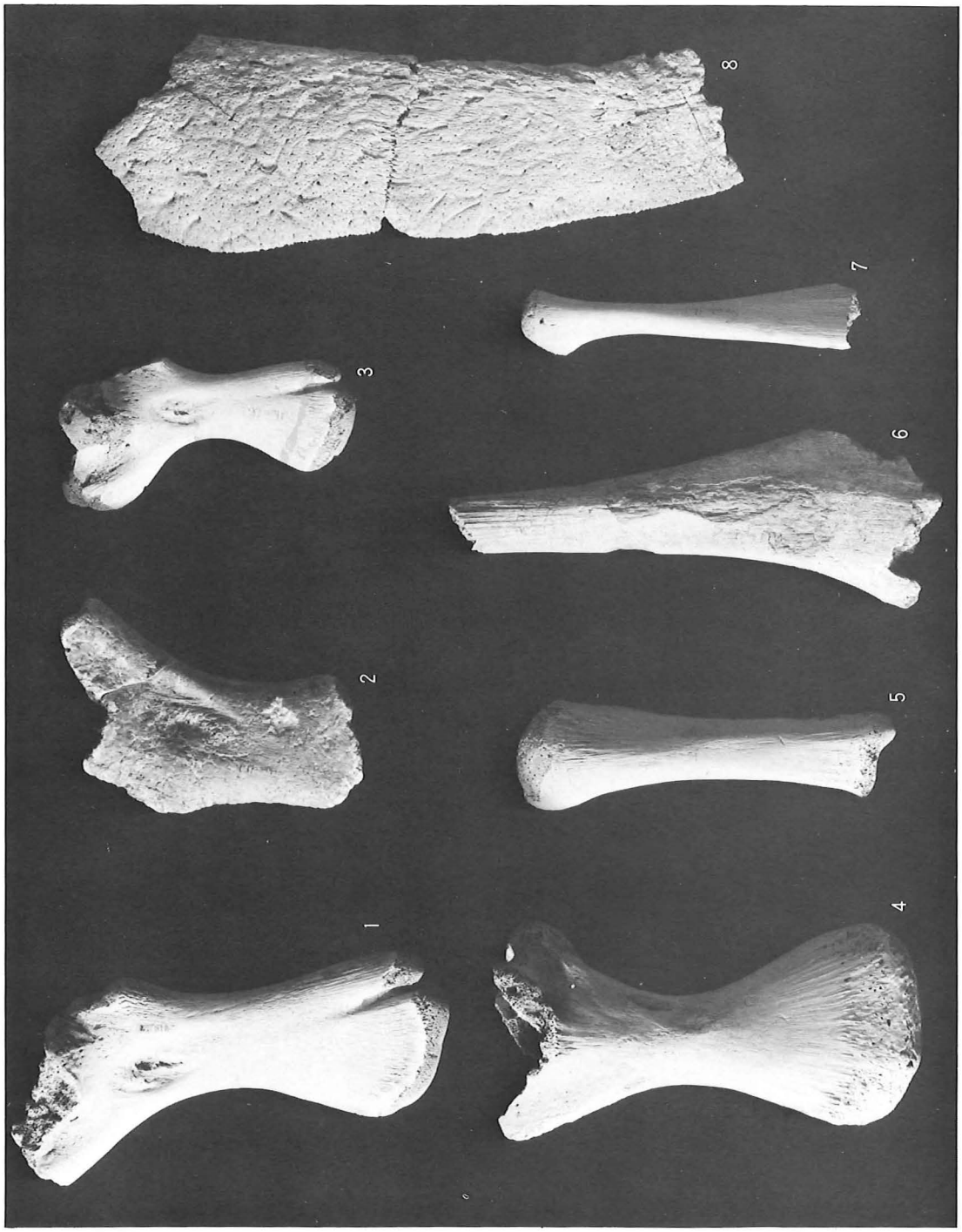
貝類⑤





魚骨①

1.カンダイ下咽頭骨
2. 〃 〃
3. 〃 歯骨
4. 〃 上咽頭骨
5.マハタ下顎骨
6. 〃 〃
7.マハタ下顎骨
8.イシダイ前上顎骨
9. 〃 歯骨
10.サメ類脊椎骨
11. 〃
12. 〃
13.サメ類脊椎骨
14. 〃
15.マダイ前上顎骨
16. 〃 〃
17. 〃 歯骨
18. 〃 〃
19.マダイ関節骨
20. 〃 〃
21. 〃 方骨
22. 〃 〃
23. 〃 前鰓蓋骨
24. 〃 〃
25.マダイ脊椎骨
26. 〃 〃
27. 〃 〃
28. 〃 前頭骨
29. 〃 〃
30.スズキ前鰓蓋骨
31.スズキ脊椎骨
32. 〃 〃
33.クロダイ前上顎骨
34.ヘダイ歯骨
35.フグ類

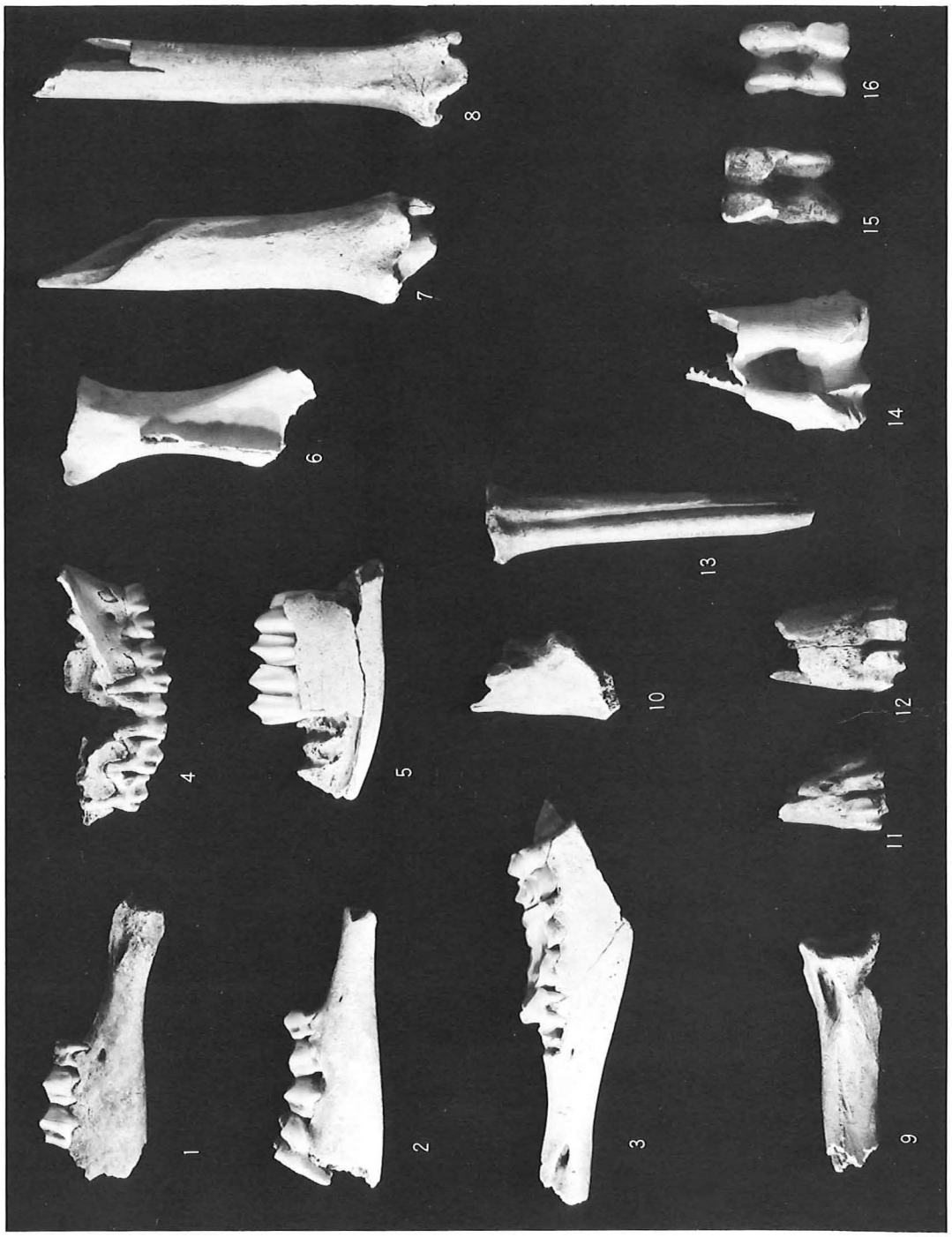


ウミガメ

1．ウミガメ上腕骨　3．ウミガメ上腕骨　5．ウミガメ脛骨　7．ウミガメ肩甲骨
2．〃　〃　4．〃　大腿骨　6．〃　肩甲骨　8．〃　腹甲板

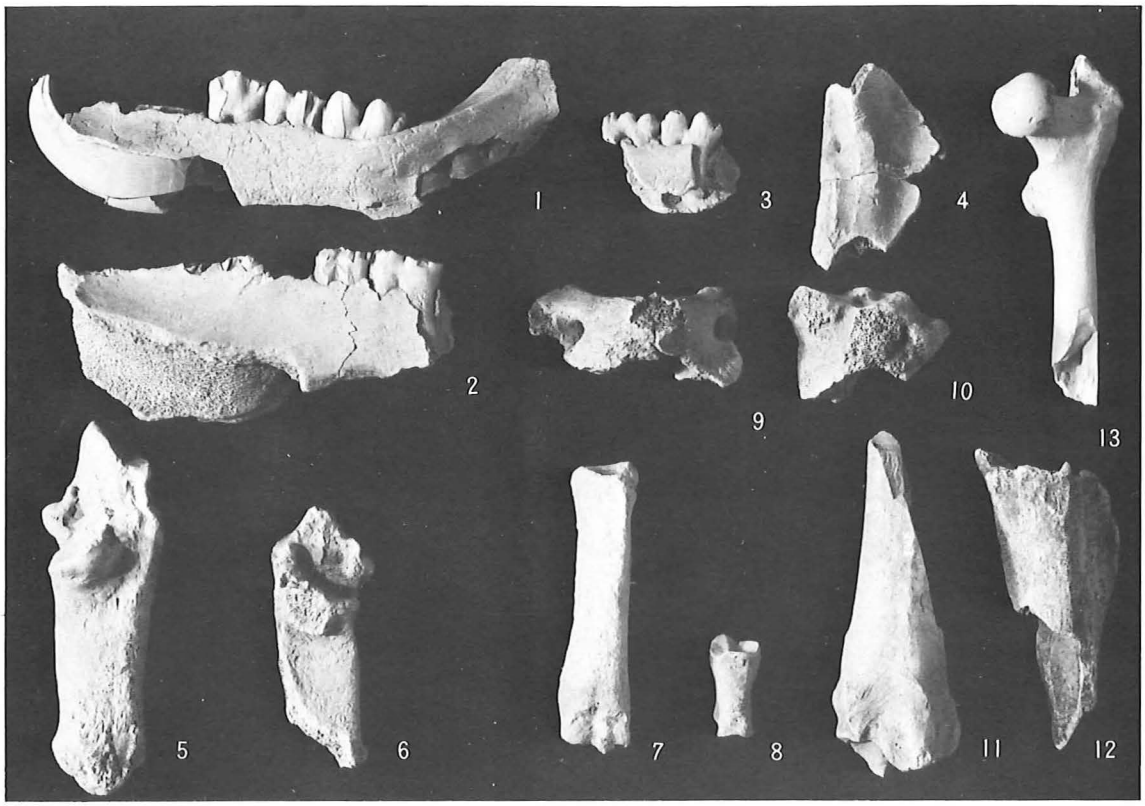
海獣骨②

1．バンドウイルカ下顎骨　2．マイルカ下顎骨　3．イルカ斜脊椎骨　4，5．クジラ類　6．不明



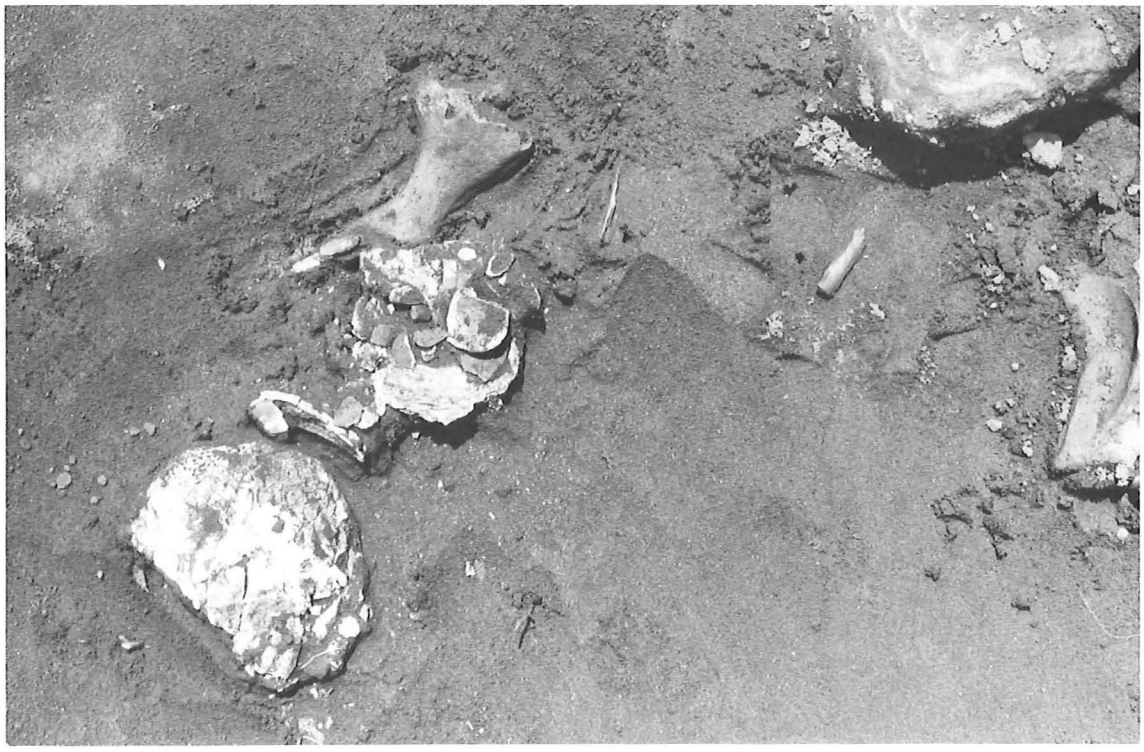
獣骨①

1．シカ下顎骨
2．〃　〃
3．〃　〃
4．〃 上顎骨
5．シカ下顎骨
6．〃 肩甲骨
7．〃 脛骨
8．〃　〃
9．シカ寛骨
10．〃 尺骨
11．〃 中手or中足骨
12．〃　〃
13．シカ中足骨
14．〃 上腕骨
15．〃 距骨
16．イノシシ距骨

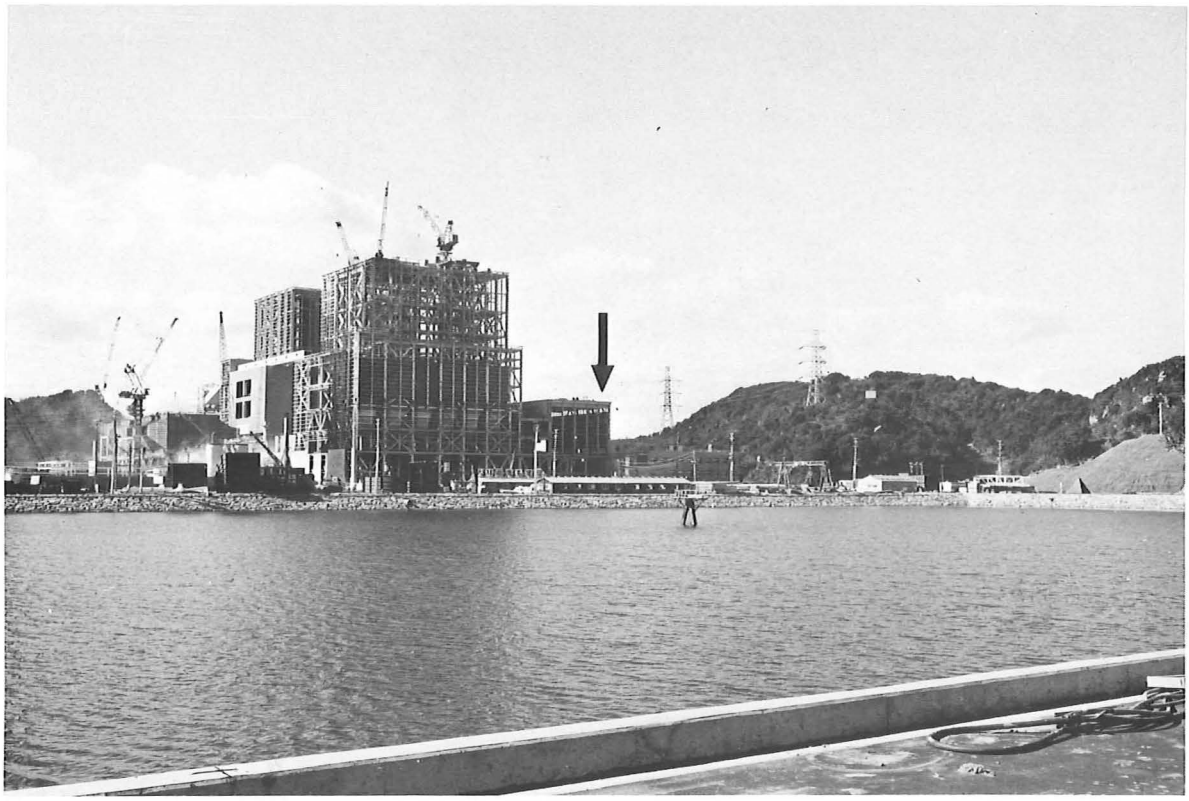


獣骨②

1．イノシシ下顎骨　4．イノシシ肩甲骨　7．イノシシ指骨　10．イノシシ脛骨　13．イヌ大腿骨
2．〃　〃　5．〃　踵骨　8．〃　〃　11．〃　〃
3．〃　〃　6．〃　〃　9．頸椎　12．〃　〃



獣骨出土状況



建設が進む火力発電所（↓が貝塚）

保存された砂丘部（中央部分）

あ と が き

調査を実施したのが昭和51，52年であったから，この報告書作成に着手するまでに３年有余が経過したことになる。調査とその結果報告は一連の作業として可及的速やかに処置されるべき性質のものであろうが，もし弁解が許されるならば，調査員の怠慢はもとより他の道府県と同様，様々な開発との調整や緊急調査に追われた多忙な日々がその障壁であったと言っても過言では無かろう。

この間，発電所建設は着実に進展し，当然ながら，且つてのあふれるばかりの自然と景観はすでに無い。開発と又遺跡の保存，この両者の最大公約数が今回の結末であったのだろうか。

ともあれ，やっと報文の発刊にこぎつけた。串島遺跡の調査と保存に真摯に御尽力をいただいた電源開発株式会社の担当課の方々も，この３年間に大部分が転勤により当地を去られた。一言お礼を申しあげたい。

又，特に当初の分布調査の折，炎暑と草いきれの中を先頭にたって精力的に現地案内をしていただいた吉野隆氏には，調査時の大変な労苦を，更に福島宏氏には本報文作製の煩雑な事務処理をお願いすることになった。御礼の申しあげようもない。

更に，調査時に酷暑の中での現場への往来に際し常時冷水やアイスコーヒー入りの水筒を用意いただいた事務の女性の方の好意や，調査を滞りなく終了させてくれた作業員の方々の頑張りも忘れることができない。

以上の方々の御理解と御協力に対し，末筆ながら衷心より感謝申しあげて稿了としたい。

（高野）

調査に参加した人々

串　島　遺　跡

長崎県文化財調査報告書第51集

昭和55年３月31日

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２―13

印刷　日本紙工印刷株式会社
長崎市興善町２―６